正誤用

茨城県教育財団文化財調査報告第26集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書8

木葉下遺跡II(窯跡)

昭和59年3月

財団法人 茨城県教育財団

受付
59. 7. 10
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第26集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書8

木葉下(あぼっけ)遺跡II(窯跡)

昭和59年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

常磐自動車道の建設は，日本道路公団によって進められていますが，昭和59年３月には千葉県柏市柏インターチェンジから茨城県那珂郡那珂町那珂インターチェンジまでが開通する予定であります。

財団法人茨城県教育財団は，昭和53年度以降，日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，常磐自動車道建設用地及び関連用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その調査の成果につきましては，逐次報告書を刊行してまいりました。

木葉下遺跡は，昭和56年度に第１次発掘調査を実施し，その成果につきましては，昭和58年３月に報告書を刊行し，皆様に御報告いたしました。本書は第２次調査として昭和58年度に発掘調査を実施した成果を収録したものであります。当遺跡は，古代窯業遺跡の所在地として著名であり，周辺へ須恵器・瓦を供給した遺跡として注目を集めております。本書が，研究の資料としてはもとより，教育・文化の向上のため広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である日本道路公団からいただきました御協力に深く感謝申し上げますとともに，茨城県教育委員会，水戸市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より謝意を表します。

昭和59年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，日本道路公団の委託をうけ，財団法人茨城県教育財団が，昭和58年度に発掘調査を実施した茨城県水戸市に所在する木葉下遺跡第２次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　木葉下遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は次のとおりである。

理事長		大金　新一	～昭和58年11月30日
		竹内　藤男	昭和58年12月１日～
副理事長		古橋　　靖	～昭和58年７月14日
		川又友三郎	昭和58年７月15日～
常務理事		綿引　一夫	
事務局長		小林　　洋	
調査課長		寺内　　寛	
企画管理班	班長	今村　信夫	
	主任調査員	加藤　雅美	
	主事	鈴木　三郎	
	〃	海老沢一夫	
	〃	大曽根　徹	
第三班	班長	安蔵　幸重	
	主任調査員	小河　邦男	昭和58年度前期（調査）
	調査員	川井　正一	昭和58年度前期（調査）
整理班	班長	青木　義夫	
	主任調査員	小河　邦男	昭和58年度後期（整理・執筆）
	調査員	川井　正一	昭和58年度後期（整理・執筆）

3　本書は，遺構を小河邦男，遺物を川井正一が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，茨城県窯業指導所技師諏訪幸雄氏に３号窯跡出土未焼成土器の胎土分析・焼成実験を依頼し，また，茨城県立教育研修センター第二研修課長峰須紀夫氏には遺跡内の土層について御指導を得た。

5　本書に使用した記号等については，第３章第１節遺構の記載方法の項を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し感謝の意を表します。

目　　次

序

例　言

第1章　調査経緯……1

第1節　調査に至る経過……1

第2節　調査方法……3

1　地区設定……3

2　層序の検討……3

3　遺構確認……4

4　遺構調査……4

第3節　調査経過……5

第2章　位置と環境……7

第1節　地理的環境……7

第2節　歴史的環境……8

第3章　遺　構……11

第1節　遺構の概要と記載方法……11

1　遺構の概要……11

2　遺構の記載方法……13

第2節　窯跡……16

第3節　その他の遺構……40

第4章　遺　物……44

第1節　遺物の記載方法……44

第2節　窯跡出土遺物……47

第3節　その他の遺構出土遺物……67

第5章　まとめ……163

第1節　遺構について……163

1　須恵器窯の構造について……163

2　須恵器窯の修復と廃棄について……165

3　須恵器窯の構築場所について……168

第2節　遺物について……170
1　未焼成土器について……170
2　ロクロの回転方向……172
3　ヘラ記号について……173
4　焼成形態……174
5　器種構成……176
6　須恵器の分類と窯の変遷……176
7　操業年代の検討……184
終　章　結　び……187
写真図版

挿　図　目　次

第１図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図……　2
第２図　テストピット土層図……　3
第３図　木葉下遺跡位置図および周辺遺跡……　9
第４図　木葉下窯跡Ｅ地点地形・遺構配置図……　12
第５図　１号窯跡実測図……17，18
第６図　７号窯跡実測図……27，28
第７図　８号窯跡実測図……　29
第８図　９号窯跡実測図……　30
第９図　10号窯跡実測図……33，34
第10図　11号窯跡実測図……35，36
第11図　12号窯跡実測図……37，38
第12図　ＳＸ1実測図……41，42
第13図　ＳＸ2実測図……　43
第14図　木葉下窯跡群分布図……　43
第15図　器種別分類凡例……　45
第16図　１号窯跡出土遺物実測図(1)……　68
第17図　１号窯跡出土遺物実測図(2)……　69
第18図　２号窯跡出土遺物実測図(1)……　71
第19図　２号窯跡出土遺物実測図(2)……　72
第20図　３号窯跡出土遺物実測図(1)……　75
第21図　３号窯跡出土遺物実測図(2)……　76
第22図　３号窯跡出土遺物実測図(3)……　77
第23図　３号窯跡出土遺物実測図(4)……　78
第24図　３号窯跡出土遺物実測図(5)……　79
第25図　３号窯跡出土遺物実測図(6)……　80
第26図　４号窯跡出土遺物実測図(1)……　86
第27図　４号窯跡出土遺物実測図(2)……　87
第28図　４号窯跡出土遺物実測図(3)……　88
第29図　４号窯跡出土遺物実測図(4)……　89
第30図　４号窯跡出土遺物実測図(5)……　90
第31図　４号窯跡出土遺物実測図(6)……　91
第32図　４号窯跡出土遺物実測図(7)……　92
第33図　４号窯跡出土遺物実測図(8)……　93
第34図　４号窯跡出土遺物実測図(9)……　94
第35図　５号窯跡出土遺物実測図(1)……102
第36図　５号窯跡出土遺物実測図(2)……103
第37図　５号窯跡出土遺物実測図(3)……104
第38図　５号窯跡出土遺物実測図(4)……105
第39図　６号窯跡出土遺物実測図(1)……111
第40図　６号窯跡出土遺物実測図(2)……112
第41図　６号窯跡出土遺物実測図(3)……113
第42図　６号窯跡出土遺物実測図(4)……114
第43図　６号窯跡出土遺物実測図(5)……115
第44図　６号窯跡出土遺物実測図(6)……116
第45図　６号窯跡出土遺物実測図(7)……117
第46図　６号窯跡出土遺物実測図(8)……118
第47図　６号窯跡出土遺物実測図(9)……119
第48図　６号窯跡出土遺物実測図(10)……120
第49図　７号窯跡出土遺物実測図(1)……129
第50図　７号窯跡出土遺物実測図(2)……130
第51図　７号窯跡出土遺物実測図(3)……131
第52図　７号窯跡出土遺物実測図(4)……132
第53図　８号窯跡出土遺物実測図(1)……137
第54図　８号窯跡出土遺物実測図(2)……138
第55図　西区灰原等出土遺物実測図(1)……142
第56図　西区灰原等出土遺物実測図(2)……143
第57図　９号窯跡出土遺物実測図……146
第58図　10号窯跡出土遺物実測図(1)……147
第59図　10号窯跡出土遺物実測図(2)……148
第60図　11号窯跡出土遺物実測図……150
第61図　12号窯跡出土遺物実測図(1)……152
第62図　12号窯跡出土遺物実測図(2)……153
第63図　12号窯跡出土遺物実測図(3)……154
第64図　東区ステ場等出土遺物実測図(1)……157
第65図　東区ステ場等出土遺物実測図(2)……158
第66図　ＳＸ1出土遺物実測図……160
第67図　ＳＸ2出土遺物実測図……162
第68図　西区窯跡一覧図……163
第69図　出土須恵器器種別割合……170
第70図　４，５，８号窯跡須恵器坏の口径・器高比較‥179
第71図　４，５，８号窯跡須恵器坏の口径・底径比較‥179
第72図　４，５，８号窯跡須恵器の法量比比較‥‥180
第73図　須恵器坏法量比分布図……182
付図１　２号窯跡実測図
付図２　３号窯跡実測図
付図３　４号窯跡実測図
付図４　５号窯跡実測図
付図５　６号窯跡実測図

表　目　次

表1　1号窯跡遺物出土量……47
表2　2号窯跡遺物出土量……48
表3　3号窯跡遺物出土量……49
表4　4号窯跡遺物出土量……51
表5　5号窯跡遺物出土量……54
表6　6号窯跡遺物出土量……56
表7　7号窯跡遺物出土量……59
表8　8号窯跡遺物出土量……61
表9　9号窯跡遺物出土量……62
表10　10号窯跡遺物出土量……63
表11　11号窯跡遺物出土量……64
表12　12号窯跡遺物出土量……65
表13　修復床の厚さ……166
表14　須恵器窯跡一覧表……166
表15　現地表からの深さ……167
表16　3号窯跡出土未焼成土器の焼成データ……171
表17　ロクロ回転方向……172
表18　ヘラ記号の窯跡操業面別分類表……173
表19　床面積比較指数……175
表20　窯跡，操業面別器種構成一覧……177.178

写　真　図　版　目　次

PL1　E地点遠景
PL2　西区全景
PL3　1号窯跡
PL4　2号窯跡
PL5　3号窯跡
PL6　3号窯跡未焼成土器出土状況
PL7　4号窯跡
PL8　5号窯跡
PL9　6号窯跡
PL10　7号窯跡
PL11　4，5，8号窯跡
PL12　10，11号窯跡
PL13　12号窯跡
PL14　工具痕・側壁
PL15　SX1，SX2
PL16　1号窯跡出土遺物
PL17　2号窯跡出土遺物
PL18　2号窯跡出土遺物
PL19　3号窯跡出土遺物
PL20　3号窯跡出土遺物
PL21　3号窯跡出土遺物
PL22　4号窯跡出土遺物
PL23　4号窯跡出土遺物
PL24　4号窯跡出土遺物
PL25　4号窯跡出土遺物
PL26　5号窯跡出土遺物
PL27　5号窯跡出土遺物
PL28　5号窯跡出土遺物
PL29　5号窯跡出土遺物
PL30　6号窯跡出土遺物
PL31　6号窯跡出土遺物
PL32　6号窯跡出土遺物
PL33　6号窯跡出土遺物
PL34　6号窯跡出土遺物
PL35　6号窯跡出土遺物
PL36　7号窯跡出土遺物
PL37　7号窯跡出土遺物
PL38　7号窯跡出土遺物
PL39　8号窯跡出土遺物
PL40　8号窯跡出土遺物
PL41　8号窯跡出土遺物
PL42　西区灰原等出土遺物
PL43　9，10，11号窯跡出土遺物
PL44　12号窯跡出土遺物
PL45　東区ステ場，SX1，SX2出土遺物
PL46　各窯跡出土瓦
PL47　ヘラ記号一覧
PL48　各窯跡出土焼台等

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

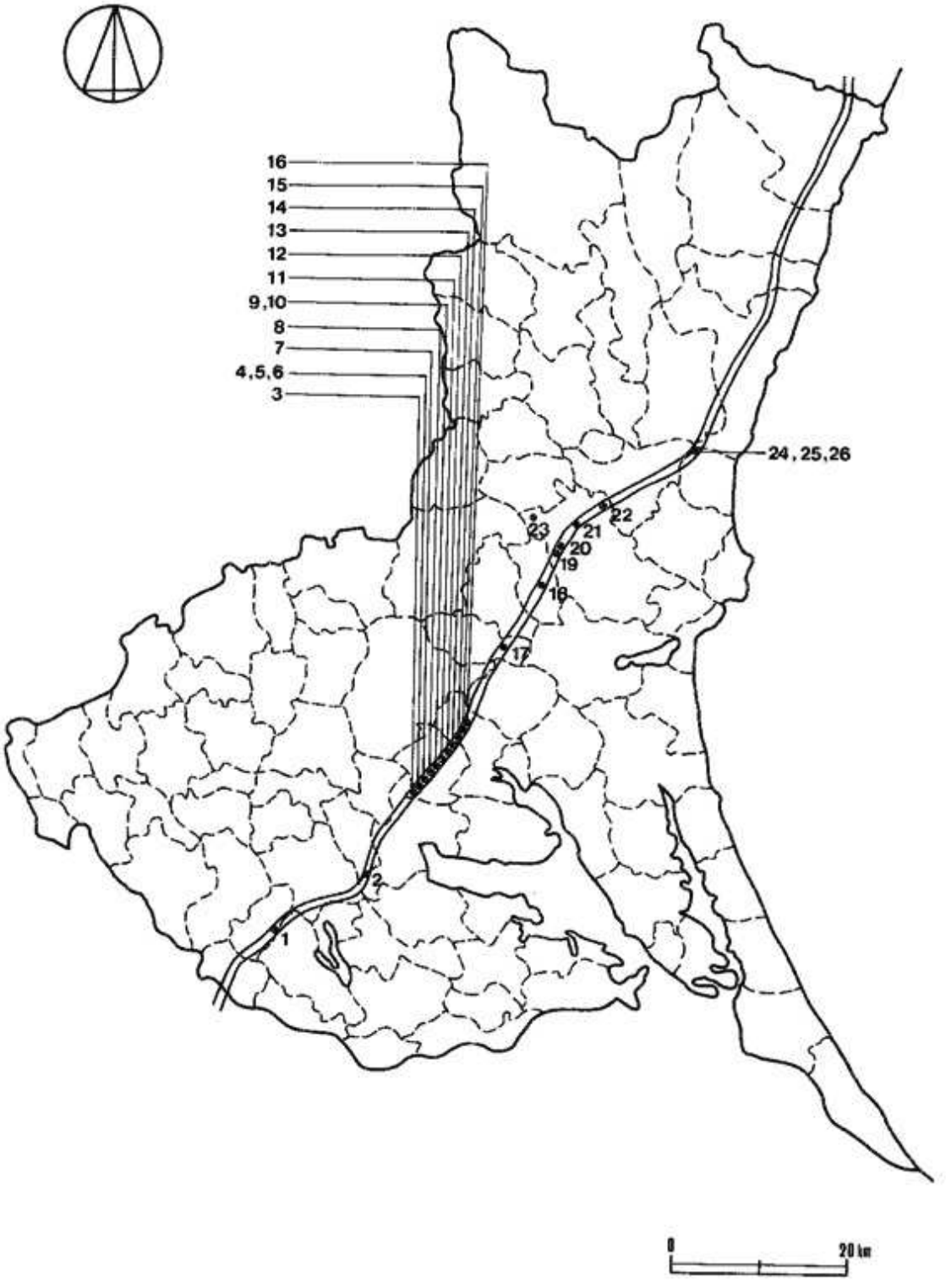
常磐自動車道の建設が昭和41年に計画されるに伴い，ルート内の埋蔵文化財の分布調査が茨城県教育委員会によって実施された。これに基づき昭和52年，茨城県教育委員会は文化財保護の立場から，埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果，現状保存が困難な遺跡について記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，昭和53年4月1日付けで日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し，同年筑波郡谷和原村東檜戸古墳の発掘調査を開始し，逐次ルートに沿って北上し，昭和57年には，那珂郡東海村石神外宿遺跡の発掘調査を実施するに至った。

昭和56年度には，道路建設用盛り土として，水戸市木葉下町，谷津町両地区にまたがる通称高取山（県道石塚・石岡線と市道加倉井・木葉下線に挟まれた高取地区の丘陵，以下「高取山」という。）の土砂を使用するため，当財団は，この土取り用地内に所在する木葉下遺跡A・B・C・Dの4地点の須恵器窯跡群の発掘調査を実施した。土取り工事の進行に伴い，新たに窯跡が発見され，E地点と命名した。このE地点の窯跡も現状保存が困難なため，昭和58年4月から同9月末日にかけて発掘調査を実施することになった。

昭和53年以降本年度までに，当財団が常磐自動車道関係で調査した遺跡は，下記のとおりである。

No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東檜戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
4	上稲吉西原A遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	17	塚原古墳群（2基）	古墳	古墳	昭和54年
5	上稲吉西原B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
6	上稲吉西原C遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安	昭和54・55年
7	中佐谷十百遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	21	南原古墳群（2基）	塚・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	窯跡	奈良・平安	昭和56・58年
11	大塚古墳群（15基）	古墳	古墳	昭和53・54年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	昭和57年
12	松延古墳群（2基）	古墳	古墳	昭和54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年



第１図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図

第２節　調査方法

1　地区設定

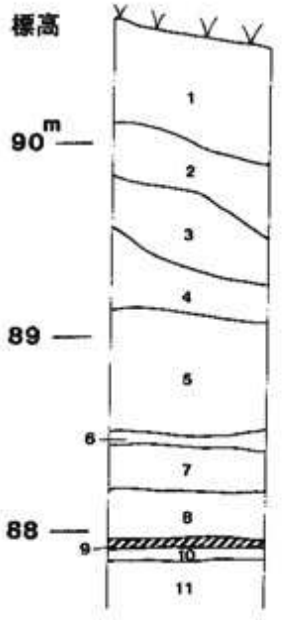
木葉下遺跡E地点は，南へ入り込む小支谷を境にして東と西に調査エリアが分かれているため，支谷の東側を東区，西側を西区とした。

遺跡の位置を明確にするため，日本平面直角座標第Ⅸ系X座標＋45.9km，Y座標＋47.8kmを基準点とし，その基準点を中心に座標北で20m方眼を設定し，その交点の位置に杭（全体図＋印Ⅰ）を打った。基準点（Ⅰ）は，標高（ＴＰ）84.820m，真北偏差－０度19分０秒，磁北偏差－７度19分20秒である。なお，測量杭打ちは社団法人茨城県建設コンサルタントに委託した。

2　層序の検討

高取山のボーリング調査[(1)]によると，南部は地表下 1.8mの深さまでローム層で，その下層にマサ土（風化した花崗岩）が 6.5mほど堆積し，更にその下層が花崗岩となっている。当遺跡の西区丘陵部(標高 95.42m)は，地表下４ｍまでローム層で，その下に細砂層が 7.5mほど厚く堆積している。

６号窯跡奥壁と７号窯跡奥壁とのほぼ中間地点にテストピットを掘り，土層を詳しく観察した図が，第２図である。地表面は，抜根作業で一部削平されているが，テストピットの地点の標高は抜根以前とほとんど同じである。１層は褐色を呈するローム土である。２層はローム土に鹿沼土が混入している。３層は鹿沼土に砂が多量に混入したもので，さらさらしている。４層は橙色を呈している。５層は黄褐色を呈し，シルトを主体としており，黒色粒子を多量に含む。６層はにぶい褐色を呈し，黒色粒子を含む。７層は明黄褐色を呈した粘土質土で砂を多量に含む。８～11層はローム土をごく少量含んだ細砂であり，８層は明黄褐色を呈し，山ぶき色の水平の縞があり，黒色粒子を多量に含む。９層は暗褐色を呈し，黒色粒子(砂鉄)を特別多量に含む。10層は明褐色を呈し，11層は明黄褐色を呈している。細砂層の下層に礫を主体とする層があり，ローム層，細砂層，礫層の厚さは場所によりかなり異なっている。1層から6層までは，関東ローム層に，７層は茨城粘土層に，８～11層は見和層に比定され，８～11層は水の作用で堆積されたものと思われる。須恵器窯跡は，細砂層をくり抜いて作られており，細砂層の薄い所には構築されていない。



第２図　テストピット土層図

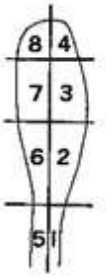
3　遺構確認

遺構確認のため，西区は斜面に沿った標高約87mと約90mのラインに長さ17m，幅1mのトレンチを6本設定し，1mほど掘り込んだ。土の落ち込みや灰層の検出状況等から，北東斜面部には須恵器窯跡が相当あり，遺構の確認面までの深さが，1m以上あることが確認できたので，3号窯跡の北側の表土を重機で除去し，確認調査を進めた。

東区は，上部の土取りにより窯体の一部が露出している須恵器窯跡数基が観察できたので，窯跡と窯跡の間に幅1mのトレンチを設定して，15cmほど掘り込んで遺構の確認調査を行った。

4　遺構調査

窯跡の調査は，遺構確認面で窯跡の中軸線とそれに直角に交わる横軸にセクションラインを2～3本設定し，このセクションラインにより区画された内側を調査区とし右図のように調査区名を記した。調査区を一つおきに最終床面（最後に使用された床面）直上まで掘り込んで，セクション図を作成し，その後，残りの調査区を掘り込んだ。



最終床面から下は，セクションラインにそって，20cm幅のトレンチを設定し，次の床面直上まで掘り込み，土層を上の図に加筆する形で記録していった。

一部の窯跡では，トレンチをⅠ次床面(最初に使用された床面)直上まで掘り下げたり，セクションベルトを残して，1床面ごとに掘り下げたりして調査した場合もある。

Ⅰ次床面までの調査終了後，セクション図で断面形状を記録できなかった部分に対し，エレベーション図を作成した。調査の最後に，焼成時における熱の地山への伝わり方をみるため，20cm幅のトレンチを地山部に掘り込み断面を調査し実測した。

土層は，土質・色相・含有物・粘性等を観察し分類の基準とした。色相を決定するにあたっては，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社発行）を参考にした。

遺物は，床面ごとに平面図に位置と標高（レベル）を記載しながら取り上げた。図面に記載できない遺物は，出土の位置を明記しながら取り上げた。

写真は，土層・遺物出土状況・遺構完掘状況などについて撮影した。

平面図作成は，窯跡の中軸線上に任意の2点をおき，一方の点を基に1m方眼を水糸で設定し，地張り方眼測量で行った。

なお，遺構の遺跡内における位置の把握は，平面直角座標の軸線に基づいて20mごとに方眼割りした各杭から，前述の二つの任意点を計測してとらえた。

第3節　調査経過

木葉下遺跡E地点の調査対象面積は1,600㎡で，調査は昭和58年4月から9月末日までで終了した。以下，発掘調査経過の概要について，半月単位に記述する。

4月前半　6日の調査区域の確認を手始めに，現場事務所設置場所の選定とその用地の借上げ交渉，作業員の募集等を行った。調査計画を作成し，西区の調査を先行し，西区終了後東区を調査することにした。

4月後半　現場事務所の設置や発掘器材の搬入を行い，25日から西区の発掘作業を開始し，遺構確認を実施した。トレンチ発掘の結果，窯跡が西区の北東斜面に3基，西斜面に1基確認された。3号窯跡の表土除去を開始した。

5月前半　9日から3号窯跡を12調査区に分け掘り込み始めたところ，未焼成土器が窯詰めしたままの状態で検出された。貴重な資料なので慎重に調査を進めた。斜面で足場が悪いため，排土の運搬に多くの労力と時間を必要としていたが，道板(みちいた)の上を箕(み)に土を入れたまますべらしたところ，作業能率が向上した。

5月後半　西区の北東斜面を重機で表土除去し，掘り込みの準備を進めた。全体の窯跡数を調べるため，東区をトレンチ発掘したところ，8基の窯跡が確認され，この時点で西区に4基，東区に8基の計12基の須恵器窯跡を確認した。この窯跡数は調査前の予想よりはるかに多いので，その対応策を県教育委員会，日本道路公団と協議した。その結果，東区は調査区域の東側半分を現状保存することになった。24日から2号窯跡の掘り込みを始め，最終床面の遺物取り上げを行った。3号窯跡最終床面の未焼成土器の取り上げを始めたが，ひび割れがひどいので一時中止し，強化剤の使用等を検討し，土器の強化をはかった後取り上げることにした。

6月前半　1日から1号窯跡を6調査区に分けて掘り込みを始め，15日までに窯体部の調査が終了した。2号窯跡窯体部の調査も9日までに終了した。3号窯跡の未焼成土器の強化のためパラロイドB72の吹き付けを行い，この作業を10日までに終了させた。4号窯跡は，表土除去したところ縦に長い落ち込みが見られ，窯跡が2基重複しているように見えた。14日から10調査区に分けて掘り込みを始めた。

6月後半　3号窯跡はⅡ次床面までの遺物を取り上げ，2号窯跡は前庭部の調査を実施した。4号窯跡は，掘り込んだところ重複は見られず，最終床面の遺物取り上げを行った。4号窯跡の北側に溝状の落ち込みを検出し，SX1と命名し，29日からSX1の掘り込みを開始した。雨の日が多く作業が予定より遅れがちであった。

7月前半　3号窯跡窯体部の調査は8日に終了し，SX1は掘り込みを終え，平面図作成にとり

かかった。11日に4号窯跡の灰原部の調査中新たな窯壁を確認し，下に窯跡のあることが判明し，これを5号窯跡と命名した。13日に北東斜面灰原部の攪乱土除去のため，重機を導入して作業を進めていたところ新たに窯跡が現れ，これを6号窯跡と命名した。6号窯跡の南側にも窯跡の存在が考えられたので，そこを重機で表土除去することにした。

7月後半　SX1は19日，平面図を作成し調査を終了した。同日，重機で5号窯跡と6号窯跡の間を表土除去したところ，新たに窯跡を確認したため，位置関係を考えて，この窯跡を6号窯跡と命名し，前記の6号窯跡の名称を7号窯跡に変更した。重機で西区北東斜面の灰原部と考えられる場所の表土を除去したが，灰層を検出できなかった。20日，4号窯跡の調査を終え，引き続き5号窯跡の掘り込みを開始した。20日から6，7号窯跡の最終床面覆土を重機で除去し，調査を始めた。26日に1号窯跡下方の斜面部で，炭窯と思われるような焼土域を検出し，SX2と命名して，30日から掘り込みを始めた。雨天の日もシートで屋根をおおい調査を続行した。

8月前半　7号窯跡は4日に，6号窯は9日に窯体部の調査が終了した。11日に5号窯跡の窯体部の調査が終了したので，前道部を掘り下げたところ，新たに窯跡を検出した。8号窯跡と命名し，掘り込みを始めた。

西区の調査は，8号窯跡の調査終了の見通しがついたので，東区の調査も並行して行うことにし，4日から窯跡の上に積まれた攪乱土を除く作業を開始した。

8月後半　8号窯跡は燃焼部と焼成部の一部が民地と接しているため，焼成部の一部だけを調査し23日に終了した。23日から東区の9，10，11，12号窯跡の調査を開始したが，これらの窯跡は焼成部の半分以上が削平されていたので，調査が予定より早く進んだ。26日から作業員の半数をさいて遺物の洗浄と注記を開始した。

9月前半　2日に，12号窯跡Ⅱ次床面に大形の高盤が未焼成で検出されたので，パラロイドB72を吹き付け取り上げたが，形がくずれてしまった。9日までに東区の調査と遺物の洗浄が終了したので，12日から調査体制を縮少し，補足調査を中心に作業を進めた。

9月後半　遺物の注記と接合，図面点検作業を進めながら，発掘器材などの搬出を並行して行った。24日現地説明会を実施して，現場での全調査を終了し，29日に現場事務所を撤去した。

（小河邦男）

注

(1)『機械ボーリング調査報告書』（常磐自動車道土取場土質調査）建設企画コンサルタント　1977

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

木葉下遺跡は，茨城県水戸市木葉下町364－1ほか4筆に所在する。当遺跡のある水戸市は，県のほぼ中央に位置し，市域は東西19.5km，南北15.4kmで，東に東茨城郡常澄村，勝田市，北に那珂郡那珂町，西に東茨城郡常北町，内原町，笠間市，南に東茨城郡茨城町と接している。面積は145.96km²で，人口は224,412人（昭和59年1月現在）である。国鉄常磐線・水郡線・水戸線，国道6号線などの主要交通機関が集中し，東京までの所要時間は，特急で1時間30分ほどである。水戸市は県庁の所在地であり，政治・経済・文化の中心地となっており，県中央部から県北部にかけて大きな商圏をもっている。また，最近は駅南や市街地周辺の台地に住宅団地の造成が進んでいる。

市の北部は，那珂川が西から東へ貫流し，流域に沿った低地と標高30m内外の那珂台地とからなっている。東部は，那珂川に沿った標高5m内外の低地が広がり，水田地帯を形成している。中央及び南部の台地は，笠間市池野辺に源を発する桜川とその支流である沢渡川と逆川によって四分され，いずれも標高30mほどの平坦な地形となっている。桜川と沢渡川は合流して千波湖低地を形成し，さらに東流して那珂川に注いでいる。西部は，鶏足山塊東端部の一角を占める標高100～200mの丘陵地となっている。この丘陵地を，東茨城郡常北町石塚から石岡市へ至る県道石塚・石岡線が北から南へ貫き，これに沿って木葉下・谷津両集落がある。

また当遺跡は，水戸市北西部の丘陵地にある高取山（標高110.42m）裾部の，木葉下・谷津両集落の中間に位置し，常磐線赤塚駅から北西へ6kmの距離にある。桜川から水戸市と東茨城郡内原町の境界を北へ伸び谷津集落に達する支谷と，那珂川から分かれた藤井川の小支流前沢川から南へ伸びる支谷が高取山を刻んで小支谷を形成し，その小支谷に沿ったA・B・C・Eの4地点に窯跡群が存在する。[1]

今回調査のE地点は，高取山の北部で，舌状に延びた標高約96m，傾斜角約24度の北東斜面部に位置し，南へ入り込む小支谷で二分されている。山の裾部には，市道加倉井・木葉下線に沿って支谷が南から入り込み，そこには谷津田が開かれている。

地目は山林であったが，土取り工事が先行していたため，調査区域である山の斜面部を除いた部分は，すでに削平されていた。

東区は，標高約86mよりも高い部分の土砂は取られ，須恵器窯跡の窯体が露出し，須恵器片が散乱していた。西区では，樹木の抜根が行われ，重機で樹木等を斜面下方へ移動していたので，地表面は一部削平を受けていた。また，北東斜面の標高86m付近には，木材等を運び出すために

斜面にそって幅3m程の工事用道路が作られており，この道路上に，融着した甕や坏などの須恵器が散乱していた。 (小河邦男)

第2節　歴史的環境

木葉下遺跡の所在する，那珂川及びその支流域の水戸市及びその周辺には，先土器時代以降，多くの遺跡が台地縁辺部等に営まれている。それらの遺跡は，木葉下遺跡と何らかの関係を有するものや，時代的に隔たるものなど全く関連性の無い遺跡など様々である。

当遺跡周辺にみられる各時代の様相については，「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6　『茨城県教育財団文化財調査報告』第21集[2]において詳細が述べられているので，ここでは，当遺跡が営まれた奈良・平安時代に属するとみられる窯跡及び集落遺跡について述べてみたい。

水戸市木葉下町一帯の丘陵地帯に須恵器窯跡が存在していることは，古くから知られているが，詳細な分布状況は現在まで把握されておらず，『茨城県遺跡地名表』[3]にも窯跡10基と記載されているだけである。また，昭和50年以前に数か所の窯跡の発掘調査が行われているが，いずれも正報告書の刊行はなく，その詳細については明らかでない。

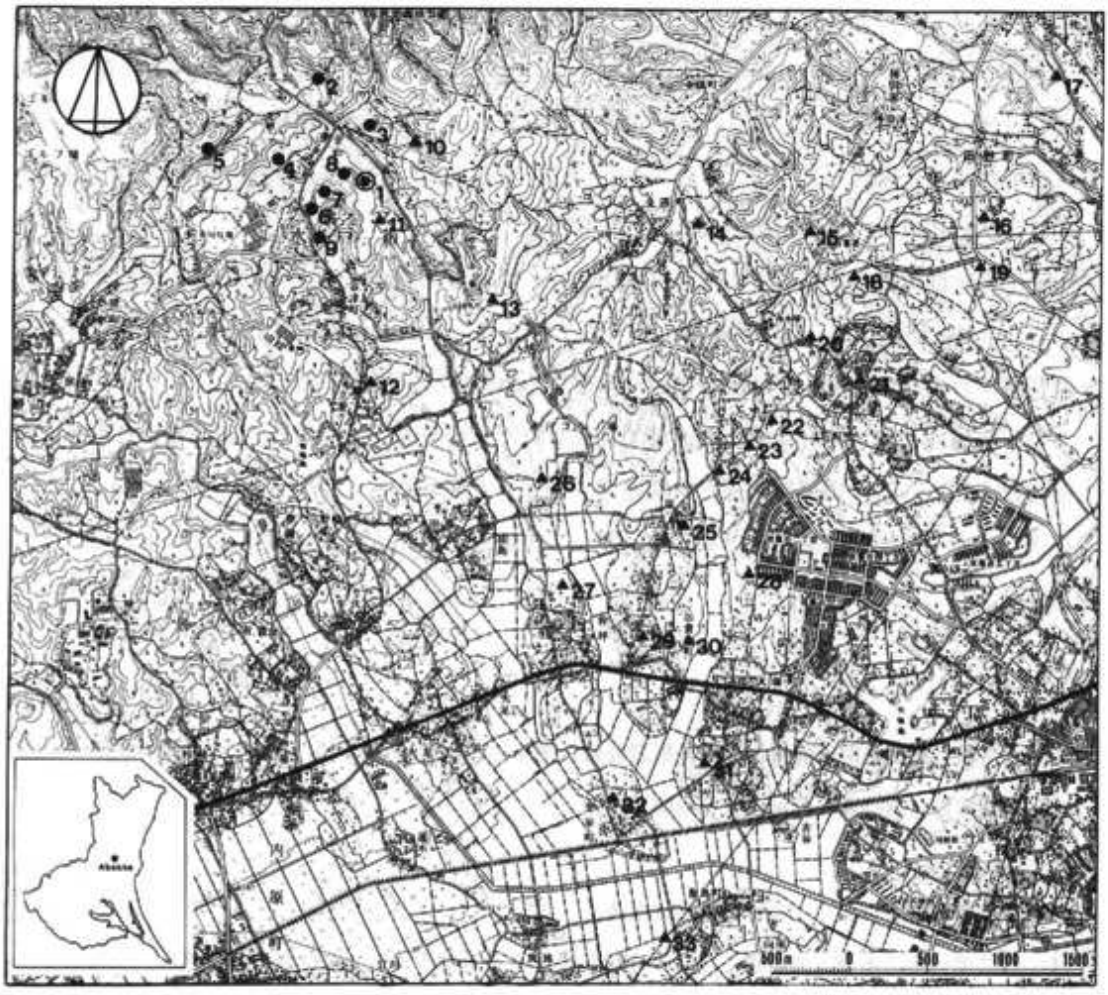
数少ない資料と若干の現地踏査をもとにして，「木葉下窯跡群」[4]の分布状況を概観すると，木葉下窯跡群は，東西・南北とも1.5kmの範囲内に分布し，谷（主谷）によって次の三地区（支群）に分けることができる。

① 北東部にあたる金山地区に存在するもの(仮称金山支群)

南東から北西に走る谷に面する南西斜面にあり，北へ入り込む支谷を境にして，西側に堂(どう)の内茅場(うちかやば)窯跡〈2〉，東側に落合(おちあい)窯跡〈3〉が分布している。両窯跡とも大森信英氏によって報告されているが，[5]基数や操業時期については明らかでない。また，伊東重敏氏によれば，落合窯跡には瓦窯跡の存在も考えられている。[6]

② 南西部にあたる三ケ野地区に存在するもの（仮称三ケ野支群）

北東方へ派生する三つの丘陵斜面にあり，最も東側に位置する丘陵の南東斜面及び北西斜面にあるのが瓶焼土(かめやきど)窯跡（三ケ野(みかの)窯跡ともいわれている）〈4〉で，東から西へ三つ目の丘陵の南東斜面にあるものが大野入(だいのいり)窯跡〈5〉である。前者は，昭和24年（1949）に水戸学生考古学会によって，[7]また昭和38年（1962）には大川清・大森信英氏によって須恵器窯跡1基の発掘調査が実施された。[8]後者は，昭和50年（1975）に伊東重敏氏によって2基の須恵器窯跡の発掘調査が実施されている。両窯跡の基数は明らかでないが，瓶焼土窯跡は9世紀後半，大野入窯跡は8世紀後半頃のものとみられる。



（国土地理院昭和57年発行
二万五千分之一地形図
「石塚」「水戸」「徳蔵」「笠間」による）

番号	遺跡名	時代 縄文	弥生	古墳	律令	番号	遺跡名	時代 縄文	弥生	古墳	律令	番号	遺跡名	時代 縄文	弥生	古墳	律令
1	木葉下遺跡E				○	12	立野遺跡			○		23	峯山古墳群			○	
2	茅場窯跡				○	13	村境遺跡	○			○	24	毛勝谷原遺跡			○	
3	落合窯跡				○	14	富士山遺跡	○	○		○	25	原遺跡			○	
4	瓶焼土窯跡				○	15	後山田遺跡	○		○		26	加倉井古墳群			○	
5	大野入窯跡				○	16	仲根遺跡	○	○	○		27	妙徳寺付近古墳群			○	
6	木葉下遺跡A				○	17	馬場尻遺跡	○		○		28	向井原遺跡	○	○	○	
7	木葉下遺跡B				○	18	前山田遺跡	○		○		29	加倉井町遺跡	○	○	○	
8	木葉下遺跡C				○	19	南原古墳群			○		30	松原遺跡			○	○
9	四又入窯跡				○	20	大久保遺跡			○		31	大塚新地遺跡		○	○	○
10	金山遺跡				○	21	開江宿遺跡			○		32	金谷町遺跡			○	
11	前峯遺跡				○	22	寺山遺跡	○		○		33	飯島町遺跡		○	○	

第3図　木葉下遺跡位置図および周辺遺跡

③　南東部にあたる高取山地区に存在するもの（仮称高取山支群）

放射状に延びる丘陵の主谷及び支谷に面する斜面にあり，当財団が昭和56年に調査したA〈6〉・B〈7〉・C〈8〉地点，[9] 今回報告するE地点〈1〉及び昭和48年に伊東氏によって調査された四又入窯跡[10]〈9〉などからなっている。現在までに約40基の窯跡が確認され，操業時期は8世紀初頭から9世紀初頭頃までとみられる。

木葉下窯跡群周辺にみられる集落遺跡としては，仮称金山遺跡〈10〉・前峯遺跡〈11〉・立野遺跡〈12〉・村境遺跡〈13〉・富士山遺跡〈14〉などがある。[11] これらの遺跡は，丘陵頂部の平坦面や丘陵裾部にわずかに発達した段丘面などに分布し，土師器・須恵器が出土している。

なお，当地域には，落合窯跡の北西部で発見された火葬墓[12]など，須恵器を蔵骨器とした火葬墓も何遺跡か認められ，須恵器生産との関連もうかがわれる。

以上，木葉下町周辺の窯跡及び集落跡について概観してきたが，当地域は古代における一大窯業地であったことがわかる。

（川井正一）

注

(1)　「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6（木葉下遺跡Ⅰ）　『茨城県教育財団文化財調査報告』第21集　茨城県教育財団　1983

(2)　(1)に同じ。

(3)　茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地名表』　1974

(4)　ここでいう「木葉下窯跡群」とは，今回報告する「木葉下遺跡」とは異にし，それらを包括し，水戸市木葉下町一帯に分布する窯跡群を総称するものである。

(5)　大森信英　「茨城県東茨城郡山根村の窯跡群について」　『上代文化』第二十輯　国学院大学考古学会　1951

(6)　伊藤重敏　「水戸地方における古代窯業の研究（そのⅠ－序論－）水戸市木葉下町落合発見の遺構」　『常陸考古学研究所学報』第15集　常陸考古学研究所　1973

(7)　(5)に同じ。

(8)　大川清・大森信英　「水戸市木葉下町三ケ野第2号窯址発掘結果報告書」　水戸市史編さん室　1962

(9)　(1)に同じ。

(10)　(6)に同じ。

(11)　水戸市教育委員会　「水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書」（応急版）　『水戸市文化財調査報告』第1集　1971

(12)　(6)に同じ。

第3章　遺　　構

第1節　遺構の概要と遺構の記載方法

1　遺構の概要

高取山の斜面には須恵器窯跡が数多く存在しており，昭和56年度の調査ではA地点4基，B地点2基，C地点5基の窯跡が調査された。B地点の2基の窯は地下式有段登窯で，他の9基は，地下式無段登窯であり，操業時期は，8世紀前半から8世紀末にかけてと推定されている。(1)

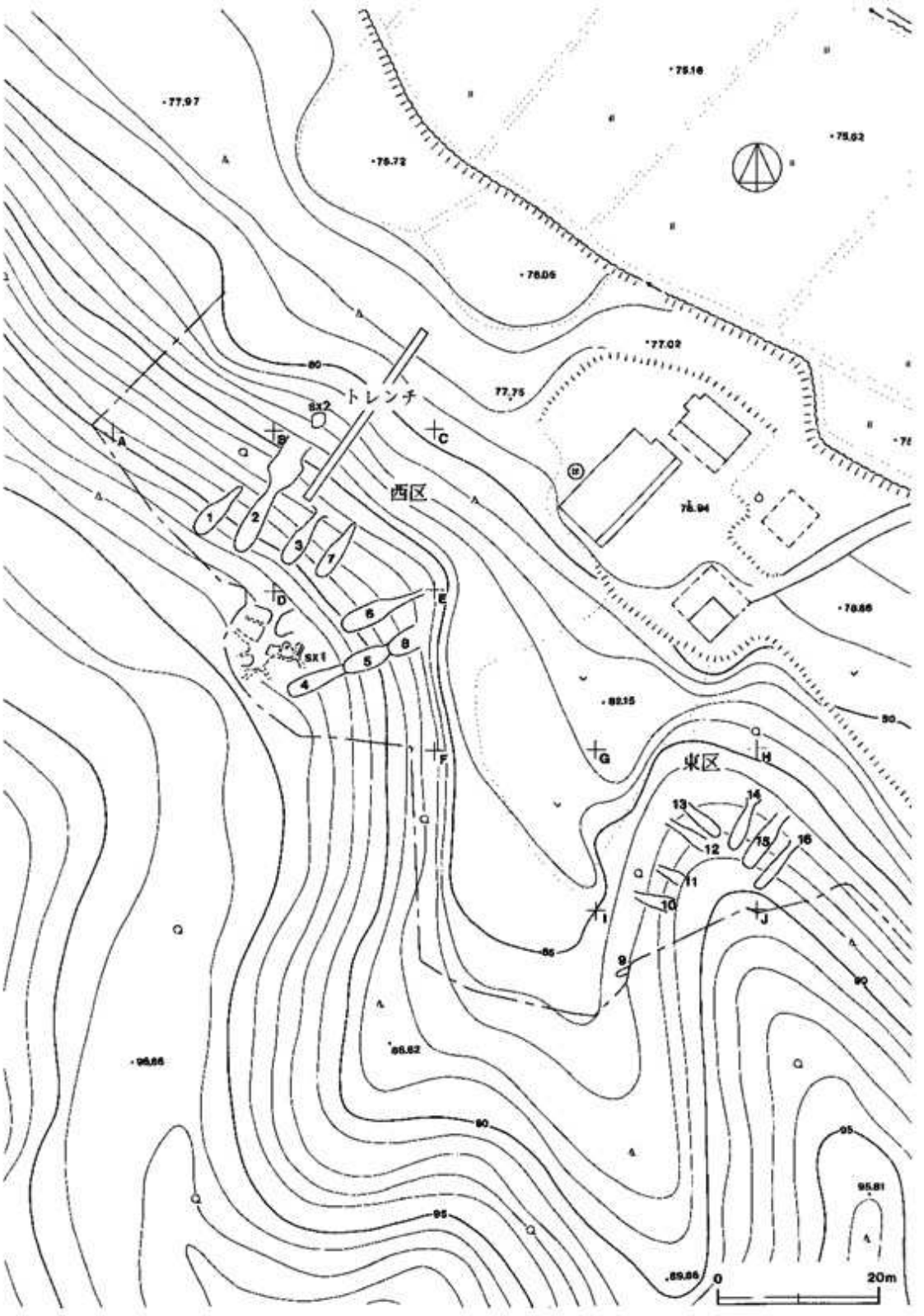
今回調査のE地点は，高取山の北東斜面部の中腹に位置し，南へ入り込む小支谷で二分されているので，この西側を西区，東側を東区と呼称して調査を進めた。調査の結果，西区から須恵器窯跡8基，炭窯状遺構1基，性格不明の遺構1基，東区からは須恵器窯跡8基をそれぞれ検出した。

須恵器窯跡はすべて地下式無段登窯で，等高線に直角方向へ細砂層を掘り抜いて構築されている。窯は通路の働きをする前道部と，燃料を燃やした所の燃焼部，焼成前の須恵器を詰める所の焼成部とから構成されていて，窯の全長は11～13mほどである。前道部はU字状に掘り込まれていて，壁は焼成を受けていない。燃焼部は壁が焼土化していて，焚口から数十センチにわたり赤色に酸化焼成され，それから奥は青灰色に還元焼成されている。また，床面（窯底）はやや下り傾斜から水平となっている。床面が水平から上り傾斜に変わる点を傾斜変換点とし，これから奥を焼成部として調査を進めた。焼成部は壁が青灰色に焼成されており，床面は上り傾斜となっている。窯は何回か修復されており，少ない窯で3枚，多い窯で9枚の床面が残っていた。

西区北東斜面に，3mほどの間隔で横に並んで検出された4基の窯跡は，東から西へ7，3，2，1号窯跡の順で少しずつ高所に構築されていた。これらの窯跡は，燃焼部および焼成部が比較的よく保存されていたが，灰原はいずれも削平されていて検出できなかった。3号窯跡の最終床面からは未焼成土器が出土し，窯詰めの状況を知ることのできるよい資料となった。

西区東斜面に，3基の窯跡が，8，5，4号の順に縦に並んで検出された。4，5，6号窯跡は，保存状態がよく，前道部から焼成部までの窯体の形状をとらえることができ，また5号窯跡焼成部の天井の一部が崩落しないで残っており，焼成部の構造を知るうえで貴重な資料を得ることができた。8号窯跡は焼成部の一部だけの調査であったが，焼成部の最大幅は2.8mほどで，今回調査の窯の中では幅が最大のものであった。

東区は，標高約86m以上の部分が重機で削平されていたため，窯体の半分以上は失われていた。更に，削平された窯体の上に排土が15cmの厚さにかぶせてあり，保存状態は悪かった。特に9号窯跡は，前道部の一部だけで焼成部は，既に削平され残っていなかった。10，11，12，13号窯跡



第４図　木葉下窯跡Ｅ地点地形・遺構配置図

が西斜面部に0.5～3.5mの間隔で横に並んで検出された。9号窯跡は同じ斜面部で，10号窯跡から南西へ7mほど離れ，10号窯跡等と主軸方向を異にして構築されていた。14，15，16号窯跡は北東斜面に1mの間隔で横に並んで検出された。13，14，15，16号窯跡は今回調査をしないため，窯体のプランだけを確認実測した。その後，土を盛って現状保存の措置がとられた。また，9号窯跡と10号窯跡の間に炭化物と須恵器の混じった50cmほどの厚さの堆積層が検出されたが，これは，東区の窯の中からかき出した須恵器等のステ場と考えられる。

窯の操業時期は，8世紀中葉から9世紀初めにかけてであり，東区の窯と西区の窯では時期に相違があまり認められないと考えられる。

SX1は4号窯の北西部に検出された性格不明の遺構である。径30～60cmのトンネル状の掘り込みが何本も延びており，壁や床の一部に赤く焼けた部分がある。覆土内から炭化物や内黒の土師器が出土した。本跡は4号窯跡を掘り込んでおり，4号窯跡よりも新しい時期の遺構と考えられる。

SX2は2号窯跡の北東方向10mの斜面部に検出された。かなり削平されており，形状および規模を正確につかむことはできなかったが，新しい時期の炭窯と推定される。

2　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，下記の要領で統一し，記載した。

(1)　使用記号

SX－窯跡以外の遺構

(2)　遺構実測図中の表示

・窯跡床面ごとの平面図における遺物は，下記の記号を使用し，炭化材は形状を載せた。なお，焼台は二次焼成を受けただけでなく，物を置いた痕跡が残っている遺物に限定した。製品は，上記の焼台とした物以外の遺物とした。

区分＼器種	坏・盤	蓋	甕・壺・鉢	瓦・その他
焼台	●	■	▲	★
製品	○	□	△	☆

・一部の実測図中にスクリーントーンを使用したが，その凡例は図の中で記載した。

・3号窯跡Ⅷ次床面の未焼成土器と焼台の出土状況及び12号窯跡の未焼成土器は，形状を記載した。

(3)　土層の分類

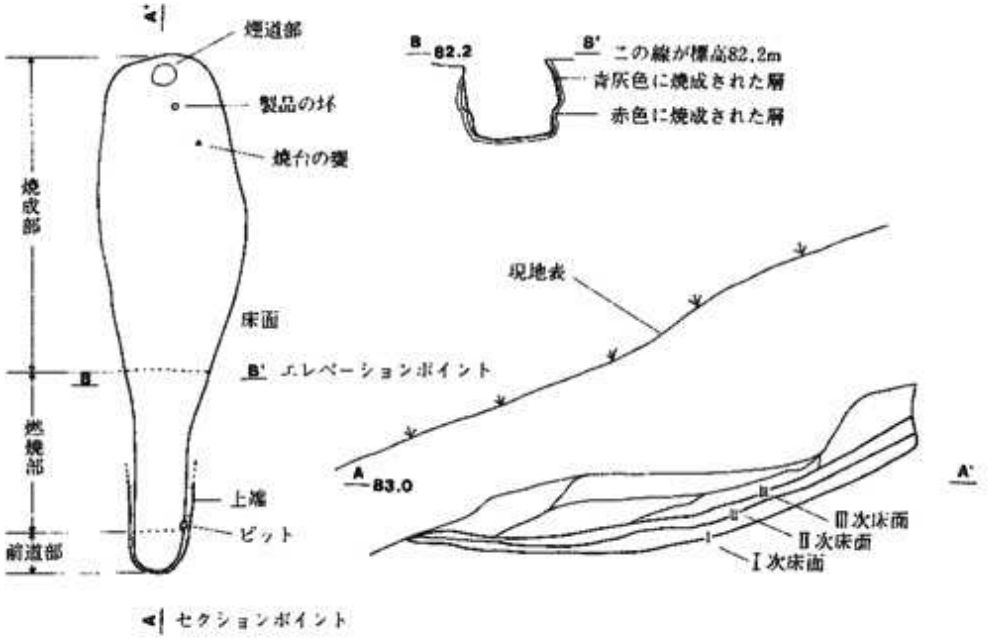
当遺跡から検出された遺構の土層色調は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し，下記のように土色名と含有物を分類した。挿図中の土層は，原

則として番号と記号で表示した。

番号	土色名	色相　明度／彩度	内容	記号	含有物
1	明黄褐色	Hue 10YR 6/8・7/6・6/6・5/6	細砂を主体とする層	a	鹿沼土
2	褐色	Hue 10YR 5/4・5/6　7.5YR 5/3・5/4・5/6	ロームを主体とする層	b	礫
3	暗褐色	Hue 10YR 3/3・3/4　7.5YR 3/3・3/4	ロームを主体とする層	c	炭化物
4	黒褐色	Hue 10YR 5/4・3/3　7.5YR 3/1・3/2　5YR 3/1・3/2		d	焼土
5	黒色	Hue 10YR 1.7/1・2/1　7.5YR 2/1・2/6　N 1.5/0			
6	橙色	Hue 7.5YR 6/8　5YR 6/8	鹿沼土を主体とする層		
7	赤褐色	Hue 5YR 5/8・5/6　7.5YR 5/6・5/8			
8	にぶい灰色	Hue 7.5YR 5/3			
9			ロームと細砂の混じった層		
10			炭化物・窯壁ブロック・灰の混じった層		

記号	内容	記号	内容
A	赤色に焼土化されている層	F	窯壁崩落層
B	青灰色に焼土化されている層	O	オリーブ色に焼土化されている層
C	炭化物堆積層		

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



• 平面図は原則として各床面ごとに遺物の出土状況を併せて掲載した。

• セクション図（土層図）やエレベーション図（断面図）のポイント（位置）は，Ⅰ次床面の平面図に記載した。

• 前道部から焚口付近までは，Ⅰ次床面の平面図に上端（うわば）を記載した。

• セクション図とエレベーション図の基準線の標高は，ＴＰ（東京湾平均潮位を０として標高を決める方法）で表記した。単位はｍである。

• 窯跡の実測図は縮尺1/60の原図を使用し，版組みは縮尺1/60を原則とした。

• SX１は縮尺1/60と1/20の原図を使用し，版組みは縮尺1/60とした。

• 遺構実測図のうち，２～６号窯跡は図版が大きくなったため折り込み付録とした。

• セクション図の中で床面は太い線で，地山が焼土化して層になった部分は細い線で記載した。

• 平面図の中で，２号窯跡のように焚口の手前を省略した図がある。この図のポイントＡは，奥壁方向にメートル単位で移動した。例えばポイントＡを２ｍ移動した点をＡ－２と記載した。

• 方位は座標北を指している。

(5)　須恵器窯跡一覧表の見方について

窯跡番号	位置	主軸方向	長さ（m）				幅（m）			床面枚数	壁の段数	焼成部傾斜角（度）	焼成部比高角（度）	床面の標高（m）			床の厚さ(cm)	
			全長	前道部	燃焼部	焼成部	焚口	傾斜変換点	焼成部最大幅					焚口	傾斜変換点	奥壁	燃焼部	焼成部

• 位置は，二段に記載し，上段に調査区名を，下段に斜面の向いている方向を記載した。

• 主軸方向は，座標北と焚口から奥壁方向への主軸との夾角（きょうかく）で示し，座標北から西方向へ90°という場合は，Ｎ－90°－Ｗと，また座標北から東方向へ45°という場合はＮ－45°－Ｅと記載した。

• 長さはⅠ次床面での計測値（水平距離）である。

• 幅は二段に記載し，上段にⅠ次床面の幅を，下段に最終床面の幅を記載した。

• 壁の段数は二段に記載し，上段に燃焼部の側壁に残っていた段の数を，下段に焼成部の側壁に残っていた段の数を記載した。

• 焼成部傾斜角は二段に記載し，上段にⅠ次床面の傾斜角を，下段に最終床面の傾斜角を記載した。

• 焼成部比高角とは，床面の傾斜変換点と奥壁とを結んだ直線の傾斜角のことで，上段にⅠ次床面，下段に最終床面の傾斜角を記載した。

• 床面の標高は二段に記載し，上段にⅠ次床面，下段に最終床面の標高を記載した。

• 空欄となっているのは計測不能のか所であり，（　）内の数値は残存値である。

第2節　窯　　跡

1号窯跡（第5図）

本窯跡は，西区北東斜面の標高88～92mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－135°－Wである。窯が構築された深さ（現地表[2]からⅠ次床面までの深さで，以下8号窯跡まで同じ）は，焚口で1.8m，傾斜変換点で2.9m，奥壁部で3.5mほどである。全長は7.9mで，そのうち前道部は0.6m，燃焼部は2.4m，焼成部は4.9mである。前道部から燃焼部にかけては，ほぼ同じ幅で掘り込まれ，燃焼部から焼成部にかけて幅を徐々に広げ，焼成部中央付近が最も広い。また焼成部中央から奥壁にかけて徐々に幅が狭くなり，奥壁付近は鈍角に内曲し，台形状を呈する。煙道は奥壁のほぼ中央に直立して作られている。本窯は，2回修復されており，修復時に燃焼部から焼成部にかけて幅がやや広げられ，床も高くなっている。

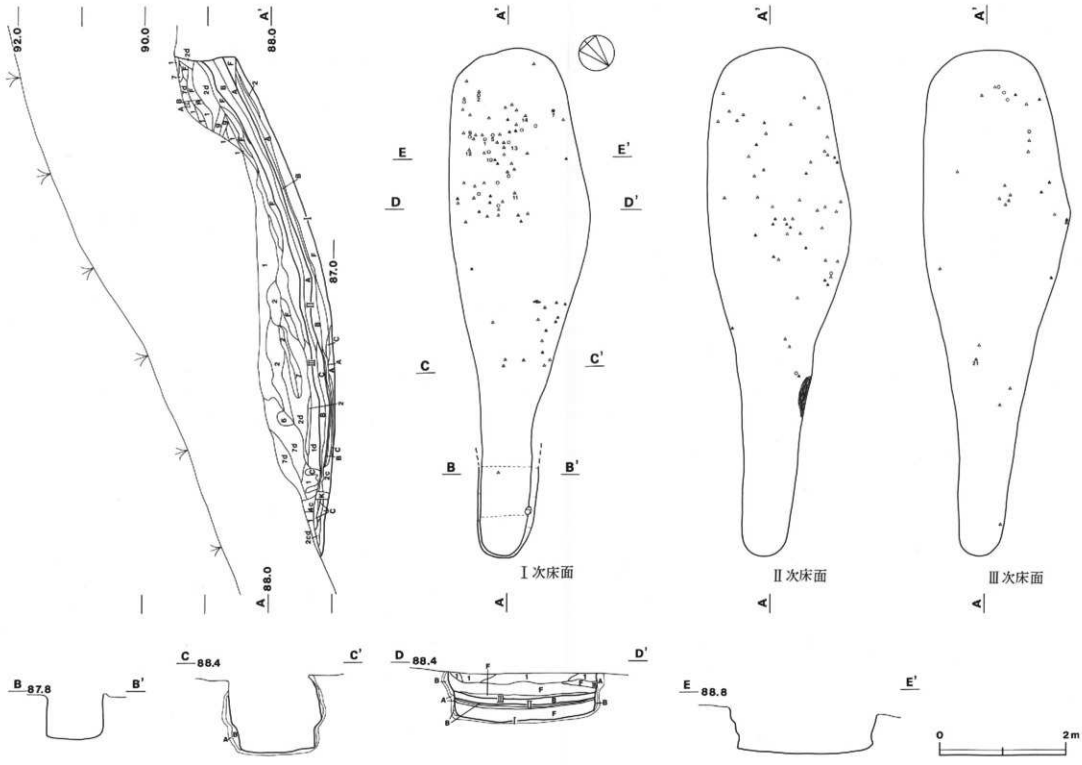
床面は3枚でⅠ次床面の幅は，前道部で0.63～0.75m，燃焼部で0.75～1.28m，焼成部で1.28～2.2mほどである。Ⅱ次床面の燃焼部中央付近では，幅がⅠ次床面より40cmほど広げられている。Ⅰ次床面は，砂層を掘り込んだままで，前道部はやや下り傾斜に，燃焼部はほぼ水平に掘り込んでいる。焼成部は，13～28°の上り傾斜で，奥に行くほど急傾斜となる。

焼成部の床面は修復のたびに天井や壁の崩落土が敷かれ，また燃焼部でも燃え残りの炭化物や焼成部からかき出された排土が敷かれている。各床は9～30cmの厚さを有しており，最終床面はⅠ次床面よりも25～55cmほど高くなっている。各床とも焚口から0.9m奥の地点から奥壁まで青灰色に堅く焼けている。焼成部の中ほどから奥壁にかけてのⅠ次床面の上に4cmほどの厚さでローム土の堆積がみられる。これは，Ⅰ次床面で焼成後，Ⅱ次床面を修復するまでに煙道から流入したものと考えられる。

壁は最終床面でみると，前道部から燃焼部にかけては，ほぼ垂直に立ち上がり，燃焼部から焼成部にかけては，内側に彎曲している。天井は崩落していたが，焚口から0.9m奥の地点から奥壁にかけて天井のものと思われる窯壁が，最終床面に密着して検出された。また，その天井崩落土は砂層が焼けたもので，スサなどを混入していないことなどから，この窯は砂層を掘り抜いて構築されたものと考えられる。

Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の壁には，蛇腹状に段が2段できていいる。1段目はⅡ次床面，2段目はⅢ次床面に対応している。このことから，焼成時の熱の影響で壁が途中で剝落して段ができると，次の床面はこの段の高さまで天井や側壁の崩落土を敷いて修復されたものと考えられる。Ⅰ次床面焼成部の右側壁には円弧形の工具痕が残っており，幅20cmほどの刃先の丸まった工具で奥壁方向へ削っている。

燃焼部は焚口から奥へ0.4mほど赤色に焼け，これから奥は青灰色に焼けている。なお焚口で


Ⅰ次床面
Ⅱ次床面
Ⅲ次床面
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
92.0
90.0
88.0
87.0
88.0
B 87.8
C 88.4
D 88.4
E 88.8
0
2m

第５図　１号窯跡実測図

は奥へ斜めに焼けている。壁の断面は，青灰色に３～５cmの厚さで焼け，その外側は赤色に５～６cmの厚さで焼けている。このことから，この窯で還元焼成が行われていたと考えられる。

焚口の右側壁に直径約10cm，深さ30cmのピット１か所が斜め下方に掘り込まれている。

煙道は奥壁から直立して一部が残存していた。これから推定すると，煙道の内径は50cm前後で円筒形を呈していたと考えられる。壁は青灰色に焼け，その外側も赤色に焼けている。前道部と灰原は確認できなかった。

遺物は，１次床面で，焼成部の中央から奥にかけ甕片が多く出土し，甕片を２枚重ねて焼台としたものが９点ほど出土した。Ⅱ次床面では，甕片を２枚重ねたもの７点，窯壁ブロックの上に甕片を置いて焼台としたものが1点出土した。また焼成部奥の右側壁ぎわに直径10cm，長さ60cmほどのクヌギと思われる炭化材が１本出土した。Ⅲ次床面では，鉢片を３枚重ねた焼台と甕片を３枚重ねた焼台がそれぞれ１点出土した。

２号窯跡（付図－１）

本窯跡は，西区北東斜面の標高87～91.5ｍの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－150°－Wである。窯の構築された深さは，焚口で1.4ｍ，傾斜変換点で3.0ｍ，奥壁で4.0ｍほどである。１号窯跡から南東方向へ約2.5ｍ離れた位置に所在している。全長は8.7ｍで，そのうち燃焼部は2.6ｍ，焼成部は6.1ｍである。焚口の手前に長径約６ｍ，短径約3.5ｍの掘り込みがある。この覆土中からは，須恵器などの遺物は出土しなかったが，微量の炭化粒子が含まれており，窯の前庭部として掘り込まれたものであろうか。焚口から燃焼部にかけてほぼ同じ幅で掘り込まれ，燃焼部から焼成部中央にかけて幅を少しずつ広げ，焼成部中央付近が最も広い。焼成部中央付近から奥壁にかけて徐々に幅が狭くなり，奥壁付近は鈍角に内曲しており，台形状を呈している。奥壁は35cmほど手前に彎曲し，まっすぐ上にのびる煙道につながっている。奥壁の中心部は幅約60cm，高さ約80cm，奥へ約15cm袋状に掘り込まれている。本窯は３回修復されており，修復のたびに燃焼部から焼成部にかけて幅が広げられている。

床面は４枚あり，Ⅰ次床面の幅は，燃焼部で0.75～1.15ｍ，焼成部で1.15～1.6ｍであるが，最終の床面では，燃焼部で1.0～1.6ｍ，焼成部で1.6～2.4ｍと幅が広くなっている。

Ⅰ次床面は，砂層を掘り込んだままで，燃焼部はほぼ水平になっている。焼成部は22°の上り傾斜である。Ⅱ次床面の焼成部は，22cmの厚さから少しずつ奥へ行くほど薄く修復されており，傾斜角も21°ほどでやや緩やかである。ⅢおよびⅣ次床面も13～30cmの厚さで，最終床面はⅠ次床面よりも燃焼部で55～63cm前後，焼成部で45～57cm高くなっている。各床面とも焚口から0.5ｍ奥の所から奥壁にかけて青灰色に焼けており，最終床面の上には，天井のものと思われる窯壁の崩落が見られる。

焼成部の横断面は床面中央部がやや下がっていて，左右の側壁に向けてゆるやかに内彎しており，床面はゆるやかな凹状を呈している。Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の壁には，段が蛇腹状に4段できている。1段目の幅は20cmほどで，燃焼部の幅が広がる手前あたりから段が始まり，焼成部の中央部あたりで消えている。Ⅱ次床面はこの段から数cm上に構築されている。2段目はⅢ次床面に，3段目はⅣ次床面（最終床面）に対応している。4段目も剝落面全体が青灰色に還元焼成されており，最後の操業時に焼成されたと考えられる。また段は奥で3段になっている。焼成部の奥の方では壁の剝落が少なく，幅を広げる必要が少なかったためと考えられる。

最終床面の壁をみると，焚口から燃焼部の幅が広がる手前にかけては，ほぼ垂直に立ち上がり，これから奥は，内側に彎曲している。天井は崩落していたが，最終床面の上の覆土の堆積状況や側壁の状況からみて，燃焼部から奥壁にかけては，砂層を掘り抜いて構築されていたと考えられる。Ⅰ次床面の壁には工具痕が残されており，左側壁と奥壁の左コーナー部には円弧形の跡がある。奥壁の左コーナー部は刃先の丸まったスコップ状工具で上から下へ削られている。また，右側壁には筋状の工具痕がある。

焚口の左側壁に2か所，右側壁に3か所，長径10cm，深さ20cmほどのピットが斜め下方に掘られている。

煙道は最終床面から上へ2.2mの位置まで一部が残存し，壁は青灰色に焼けている。

遺物は，Ⅲ次床面で完形品の坏と蓋が出土しており，坏や蓋を焼成していたと考えられる。また，甕片を2枚重ね焼台としたものが5点出土した。Ⅳ次床面では，焼成部に完形やそれに近い坏や蓋が10点ほど出土し，取り残されたものと考えられるものがあるのに対し，甕片は20点のみ出土した。このことから，この床面では坏や蓋などを焼成したが，焼台を使用しないで焼いたものが多いと考えられる。焚口の右側壁際に長さ35cm太さ10cm内外のクヌギと思われる炭化材が4本縦に並んで検出された。これらは燃料に使用されたものである。

3号窯跡（付図－2）

本窯跡は，西区北東斜面の標高86.5～90.5mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－144°－Wである。窯の構築された深さは，焚口で1.7m，傾斜変換点で2.8m，奥壁で4.0mほどである。2号窯跡から北東方向へ4.5m離れた位置に所在する。全長は6.8mで，そのうち燃焼部は2.0m，焼成部は4.8mである。燃焼部から焼成部までは，幅に変化の少ない細長い形に掘り込まれており，奥壁付近はほぼ直角に内曲し方形状を呈している。2回目の修復で，燃焼部から焼成部にかけて扇状に広げられている。煙道は，奥壁の中央部から30cm手前に彎曲して作られている。焚口の手前の地山は，大きく八の字状にカッティングされて，炭化粒子を含む覆土が広がっ

ていた。本窯は，6回修復されており，その都度燃焼部から焼成部にかけて幅が広げられている。

床面は7枚あり，Ⅰ次床面の幅は，燃焼部で0.8～1.0m，焼成部で1.0～1.45mほどであるが，最終床面は，燃焼部で0.8～1.5m，焼成部で1.5～2.35mと，焚口を除いて幅が広げられている。

Ⅰ次床面は砂層を掘り込んだ状態で，燃焼部はわずかに下り傾斜から水平になり，焼成部は中ほどまで約7°のゆるやかな上り傾斜で，中ほどから奥は20～27°の急な上り傾斜となる。床面は修復のたびに，天井崩落土などが厚い所で26cmの厚さに敷かれて，最終床面はⅠ次床面より36～74cmほど高くなっている。Ⅲ次床面はⅡ次床面焼成部の中ほどあたりから燃焼部までを2～7cmの厚さに砂を敷いて修復され，Ⅴ次床面もⅣ次床面燃焼部の中ほどから焼成部までを17cmの厚さに崩落土などを敷いて修復されている。床面は焚口から1mほど奥の地点から奥壁にかけて青灰色に焼けている。

壁は，燃焼部の焚口付近ではほぼ垂直に立ち上がっている。Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の手前の方の側壁には蛇腹状に段が5段検出されたが，奥部は3段となっている。これらの段は，各床面とほぼ対応している。奥部に段が少ないのは，壁の剝落が少なかったためと考えられる。

焚口の左側壁に直径6cm，深さ7cmほどのピットが数か所，縦に並んで検出された。

煙道は，最終床面から上へ1.9mの位置までが縦に$\frac{1}{3}$ほど残存していた。煙道上部の内径は46cmほどで，壁は約2cmの厚さに青灰色に焼け，その外側は3.5cmの厚さに赤色に焼けている。

遺物は各床面とも，坏と甕が多く出土し，瓦が焼台として29点使用されている。Ⅰ次床面は赤く焼けていただけで，遺物も少ない。Ⅳ次床面では，甕片が焼成部の奥壁まで全体的に出土し，2枚重ねた状態で出土したものも5点ほどあった。出土状況から，甕片の多くは焼台として使用されたものと考えられる。Ⅵ次床面では燃焼部中ほどから焼成部手前にかけて細い木の枝(粗朶)や葉の炭火物が，床面に密着して出土した。未焼成土器を窯詰めする前，窯を乾燥させるために燃やされたものと考えられる。

Ⅶ次床面では，未焼成の土器の甕や壺，坏が窯詰めの状態のまま出土した。所々に甕や壺を配置し，その間に坏を壁際までぎっしり並べていた。胴部の最大径が60cmにおよぶ甕4個，胴部最大径40cmほどの甕6個，胴部最大径が30cmほどの壺2個，坏285個が確認された。その中で，壺1個と坏の一部を形を崩さず取り上げることができた。未焼成土器の中でほぼ原位置を留めて出土した状況が付図－2 Ⅶ次床面－2である。坏は2～3枚重ねられており，大部分は赤く焼かれた砂を薄く敷きその上に直接伏せて置かれてあるが，なかには甕片を床面の低い方に1枚敷いて平らにし，その上に置かれたものもあった。甕や壺は甕片を床面の低い方に4～5枚重ねて焼台とし，大きい甕には四方に焼台を配置し，その上に置かれていた。焼台としては甕片の他に，奥壁際に半分に割れた坏を伏せておいたもの，窯壁ブロックの上に甕片を重ねたものなどがあった。

未焼成土器は窯の傾斜変換点から奥部に詰められており，焼成部を傾斜変換点から奥とする考え方と一致している。未焼成土器と焼台を取り上げたところ，甕，坏，盤，甕が一面に出土した。これがⅦ次床面である。Ⅷ次床面はⅦ次床面の上に5cmほどの厚さに砂を敷きつめ修復されていた。

4号窯跡（付図－3）

本窯跡は，西区東斜面の標高90～94mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－112°－Wである。窯の構築された深さは，焚口で2.8m，傾斜変換点で3.2m，奥壁で2.7mほどである。西区では一番高い地点に位置する。5号窯跡の焼成部上に本窯跡の前道部が構築されていた。5号窯跡が廃棄された後に本窯跡が構築されたものと考えられる。全長は11.6mで，そのうち前道部は5m，燃焼部は1.9m，焼成部は4.7mである。燃焼部から焼成部にかけて少し幅が広がるが，全体的には前道部から焼成部までほぼ同じ幅の細長い形である。奥壁付近は鈍角に内曲し台形状を呈している。奥壁の中央部に奥壁からやや内彎して煙道がつくられている。本窯は6回修復されており，その都度，燃焼部と焼成部が広げられている。

床面は6枚あり，Ⅰ次床面の幅は，前道部で0.8～0.95m，燃焼部で0.95～1.4m，焼成部で1.4～1.6mであるが，最終床面になると，燃焼部で1.25～1.7m，焼成部で1.7～2.0mと幅が広げられている。

Ⅰ次床面の傾きは，前道部から燃焼部まではほぼ水平であり，焼成部は16～25.5°の上り傾斜となり，奥へ行くほど急傾斜になっている。窯は修復のたびに，焼成部では天井や壁の崩落土が敷かれ，燃焼部では燃え残りの炭化物や焼成部からかき出された排土が敷かれている。Ⅱ～Ⅵ次床は，各々0～30cmの厚さを有しており，最終床面はⅠ次床面より42～56cmほど高くなっている。Ⅱ次床面は，焼成部の大部分がⅠ次床面と同じ高さに修復されている。Ⅴ次床面は焼成部の奥の方がⅣ次床面と同じ高さに修復されている。Ⅵ次床面焼成部と燃焼部の境付近から奥へ約1mほどの床面および側壁が溶けてかたまっており，色調は黒色であった。掘り抜かれた砂層中に砂鉄が多量に含まれていて，この砂鉄が操業中通常より高温となったために溶けたものと考えられる。この塊の裏面には，Ⅴ次床面の須恵器片が付着していた。また，白いわら灰と思われるものも付着していた。各床面は，焚口から奥へ0.4mのところから奥壁にかけ青灰色に還元焼成されていた。

壁は，燃焼部でほぼ垂直に立ち上がっており，焼成部でやや内彎している。Ⅰ次床面の上に堆積していた床の構築物を取り除くと，焼成部の側壁に，蛇腹状の段が4段みられ，奥部では3段になっている。床の数より段の数が少ないが，これは焼成時において壁の剝落が少なかったためと考えられる。焼成部の入口部から中ほどにかけて右側壁が13cmほど内側に倒れかかっていた。ずれた断面も青灰色に焼けていることから判断すると，側壁がずれたのは，この窯が操業されて

いた時と考えられる。

煙道は最終床面から上へ1.3mの位置まで一部が残存していた。前道部の覆土中には炭化物や窯壁ブロックが混入していた。前道部の入口部から北方へほぼ直角に灰原が続いており，灰原の覆土からは，炭化物，須恵器が出土した。

遺物は蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，鉢，壺，甕，甑と9器種の須恵器と瓦が出土した。Ⅰ次床面では，坏や甕などの破片が焚口付近に集中した。ⅡおよびⅢ次床面では，蓋，坏，盤，甕が焼成部全域にたくさん出土した。Ⅳ次床面の焼成部中ほどから奥部にかけてはⅤ次床面を修復するとき削られたためか，遺物がほとんど出土しなかった。Ⅴ次床面の焼成部から3個の高台付坏と2個の蓋を交互に重ね焼きしたものが出土した。これは自然釉のために各々が融着し，その後割られて別々にⅤ次床面で焼台として使用されたものと考えられる。

5号窯跡（付図－4）

本窯跡は，西区東斜面の標高85～92mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－113°－Wである。窯の構築された深さは，焚口で2.0m，傾斜変換点で2.9m，奥壁で3.7mほどである。廃棄された8号窯跡焼成部の上に，本窯跡の前道部，燃焼部が構築され，本窯跡が廃棄され陥没した上に4号窯跡が作られている。3窯跡とも主軸方向はほぼ同じである。全長は13mで，そのうち前道部は5.3m，燃焼部は2.1m，焼成部は5.6mである。前道部から燃焼部にかけてほぼ同じ幅で掘り込まれ，焼成部の手前付近で30～40cmにわたりくびれており，最小幅の1mとなっている。焼成部は幅に変化の少ない細長い形であるが，修復されるたびに幅が広げられ，徐々に長楕円形状を呈するようになる。奥壁付近は鈍角に内曲して台形状を呈している。本窯は8回修復して使用されている。

床面は9枚あり，Ⅰ次床面の幅は前道部で2.0～2.4m，燃焼部で1.0～2.0m，焼成部で1.1～1.75mであるが，最終床面では前道部で1.5mと幅が狭くなったのに対し，燃焼部で1.45～1.5m，焼成部で1.5～2.6mと幅が広がっている。

Ⅰ次床面の傾きは，前道部がやや下り傾斜で，燃焼部がほぼ水平である。焼成部は10～27°の上り傾斜で，奥へ行くほど急傾斜となる。最終床面の焼成部の傾斜角は10～20°で，床が修復される度に傾斜は緩やかになっている。床は窯の修復のたびに2～38cmの厚さに崩落土などを敷きつめて修復され，最終床面はⅠ次床面よりも50～118cmほど高くなっている。Ⅳ次床面の焼成部付近は削平されたためか，検出できなかった。Ⅴ次床面の焼成部の中ほどから奥にかけても削平されたためか検出できなかった。またⅦ次床面の焼成部の中ほどから奥にかけても不明瞭であった。焼成部の底面は，砂層を掘り抜いたままで，焚口から奥へ1.4mの地点から奥壁にかけて，薄く青灰色に焼け，その外側も5～7cmの厚さで赤く焼けている。

焼成部の中ほどから奥の天井が残存しており，焼成部の側壁から天井にかけての構造をとらえることができた。焼成部の中ほど付近の断面形状は付図－4セクション図Dの通りで，側壁から天井部は緩やかなカーブのアーチ形をしている。焼成部中ほど付近の最終床面から天井までの高さは，中心が一番高くて約0.9mである。壁の焼けぐあいは側壁よりも天井の方が強い傾向にある。Ⅰ次床面の上に堆積した8枚の床を取り除くと，側壁には，蛇腹状に段が6段あってほぼ床面と対応している。Ⅰ次床面の右側壁に奥壁方向への円弧状の工具痕が残されていた。

燃焼部のくびれた部分の壁は，5～10cmの厚さで青灰色に焼け，その外側は7～13cmの厚さで赤色に焼けていて，他の壁よりも熱を強く受けていた。

煙道が天井から上の位置に，高さ15cmほどが検出された。内径は約50cmで，壁は青灰色に薄い厚さで焼け，その外側は7cmほどの厚さで赤く焼けている。煙道は奥壁から20cmほど手前の位置にあるが，天井が崩落していたので，奥壁から続く形状は不明である。

燃焼部の壁は，左側壁で40cm，右側壁で17cmほどオーバーハングしているが，これは8号窯跡の焼成部が崩れ，陥没してできた溝を利用して燃焼部としたものと考えられる。焚口から1.3mほど手前の前道部右側壁の一部が赤く焼土化していたが，これはかき出されたおき火により焼かれたものであろう。

遺物はⅠ次床面で焼成部手前付近に蓋，坏，甕，鉢が少量出土した。Ⅱ次床面では，焼成部の中ほどから手前にかけて蓋，坏，甕が出土しており，甕は焼台に使用されたものが多い。坏の中には完形品が1個出土した。Ⅲ次床面では，燃焼部から焼成部にかけて多量に坏や甕の破片が出土した。Ⅳ次床面は燃焼部にのみ確認できた床で，遺物は出土しなかった。Ⅴ次床面では，焼成部の中ほどから手前にかけて甕片がまばらに出土した。Ⅵ次床面では，坏と甕の破片が焼成部全域にまばらに出土した。Ⅶ次床面では，遺物は多くないが，焼成部の燃焼部近くに完形の坏4個が口縁を上にし，壺1個体がつぶれて出土している。また燃焼部に炭化材が多量に出土した。Ⅷ次床面では完形の坏が数個と甕片がまばらに出土し，Ⅸ次床面では坏と甕の破片が，焼成部の中央付近に集中して出土した。

6号窯跡（付図－5）

本窯跡は，西区東斜面の標高86.5～90.5mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－113°－Wである。構築された深さは焚口で2.1m，傾斜変換点で3.0m，奥壁で3.4mである。5号窯跡の北西方向2.5m離れた位置に所在する。全長11.3mで，そのうち前道部は3.3m，燃焼部は2.2m，焼成部は5.8mである。前道部は山の斜面部に溝状に掘り込まれている。燃焼部から焼成部にかけては幅が徐々に広がっており，焼成部は細長く，奥壁付近は鈍角に内曲し，台形状を呈している。奥壁は緩やかに内彎して天井へ続き，奥壁から30cmほど手前のところに煙道が掘り抜か

れている。本窯は6回修復されており修復ごとに，幅が少しずつ広げられている。

床面は7枚あり，Ⅰ次床面の幅は前道部で0.75～1.0m，燃焼部で1.0～1.4m，焼成部で1.4～2.15mほどであるが，最終床面では，燃焼部で1.1～1.85m，焼成部で1.85～2.5mと燃焼部から焼成部にかけて幅が広げられている。

Ⅰ次床面の傾きは，前道部から燃焼部の中ほどにかけて15°の下り傾斜で，そこから傾斜変換点までほぼ水平である。焼成部は10～30°の上り傾斜で，奥へ行くほど急傾斜である。最終床面は，10～23°と緩やかになる。床は修復のたびに，前道部では窯からかき出された炭化物や灰など，燃焼部では炭化物など，焼成部では崩落土などで構築されている。床は0～38cmの厚さを有しており，最終床面はⅠ次床面よりも30～110cmほど高くなっている。

Ⅰ次床面焼成部の中ほどから奥は十分に熱を受けなかったためか，床面に薄く炭化物が残り，その下は赤色に焼けている。焼成部の中ほどから手前は青灰色によく焼けているが，付図－5Ⅰ次床面－1のように所々斑点状の黒色又は褐色の所が見られる。これは焼台や大形の甕などが置かれていて，直接に熱を受けなかったためと考えられる。Ⅱ次床面は焼成部の壁際部分を，明瞭に検出できなかった。最終床面は焼成部の手前付近が4cmほどの厚さに修復されているが，他はほとんどⅤ次床面とほぼ同じ高さに修復されている。

燃焼部の壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高1.6mほどの壁は焼土化している。焚口は床面と対応するように，三角形又は帯状に赤く焼けている。床面が新しくなるにつれて，焼土化した帯の前端は奥へと少しずつ移動している。

Ⅰ次床面の上に堆積した床の構築物を取り除くと，焼成部の壁には蛇腹状に段が5段できていて，奥の方では3段となっている。焼成部奥壁から1.4m手前で天井崩落を明確に示している土層が付図－5セクション図Fである。これから天井までの高さを推定すると，約70cmである。

Ⅰ次床面の焼成部左右の側壁，奥壁に円弧状の工具痕がよく残っていた。側壁の工具痕は，奥の方へ削っているのが大部分で，一部に反対方向へ削っているものもある。奥壁のコーナー部は，横に両方向から削っている。

煙道は最終床面から上へ1.6mの位置まで残存していた。煙道は円筒形を呈しており，上部での内径は50cmである。

遺物は，Ⅰ次床面で甕片が多く出土しているが，その多くは，2～3枚重ねて焼台として使用されていたと考えられる。窯壁ブロックの上に甕片を重ねて焼台としたものが数点，甕片2枚とその上に瓦を3枚重ねた焼台も1点出土した。Ⅱ次床面では，焼成部の中ほどから手前にかけて坏や甕がまとまって出土しているが，原位置を留めているものは少ない。天井や壁の崩落およびⅢ次床面修復時にかなり下方に移動したものと思われる。軒丸瓦が1点，焼成部の奥の方で出土し，他に瓦が17点出土した。焼成部中ほどから手前に甕片の裏に付着した茅と思われる中空の炭

化物や灰が出土した。この炭化物は空焚きに使用されたものであろうか。Ⅳ次床面では，焼成部の奥の側壁際に3枚重ねの坏が口縁を上にして出土し，焼成部下方からは3枚重ねの坏が口縁を下にして出土した。前道部の底面付近から未焼成土器と思われる粘土が出土した。窯詰め時に破損したものと推定される。

7号窯跡（第6図）

本窯跡は，西区北東斜面の標高86～89.5mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－145°－Wである。窯の構築された深さは，焚口で1.9m，傾斜変換点で2.5m，奥壁で3.1mである。3号窯跡から南東方向へ3.5m離れた位置に所在する。全長は7.7mで，そのうち前道部は1.1m，燃焼部は2.3m，焼成部は4.3mである。前道部から燃焼部にかけてほぼ同じ幅で掘り込まれ，燃焼部から焼成部にかけて少しずつ幅を広げ，焼成部中央付近が最も広い。焼成部中央から奥壁にかけてやや幅が狭くなり，奥壁付近は鈍角に内曲し，台形状を呈している。奥壁はやや内彎しながら直立している煙道につながっている。奥壁を正面から見ると三角形を呈している。本窯は，6回修復されており，修復時に燃焼部から焼成部にかけて幅が広げられている。

床面は7枚で，Ⅰ次床面の幅は，前道部で0.65m，燃焼部で0.65～1.1m，焼成部で1.1～1.55mであるが，最終床面は，燃焼部で0.9～1.6m，焼成部で1.6～2.0mと幅が広くなる。

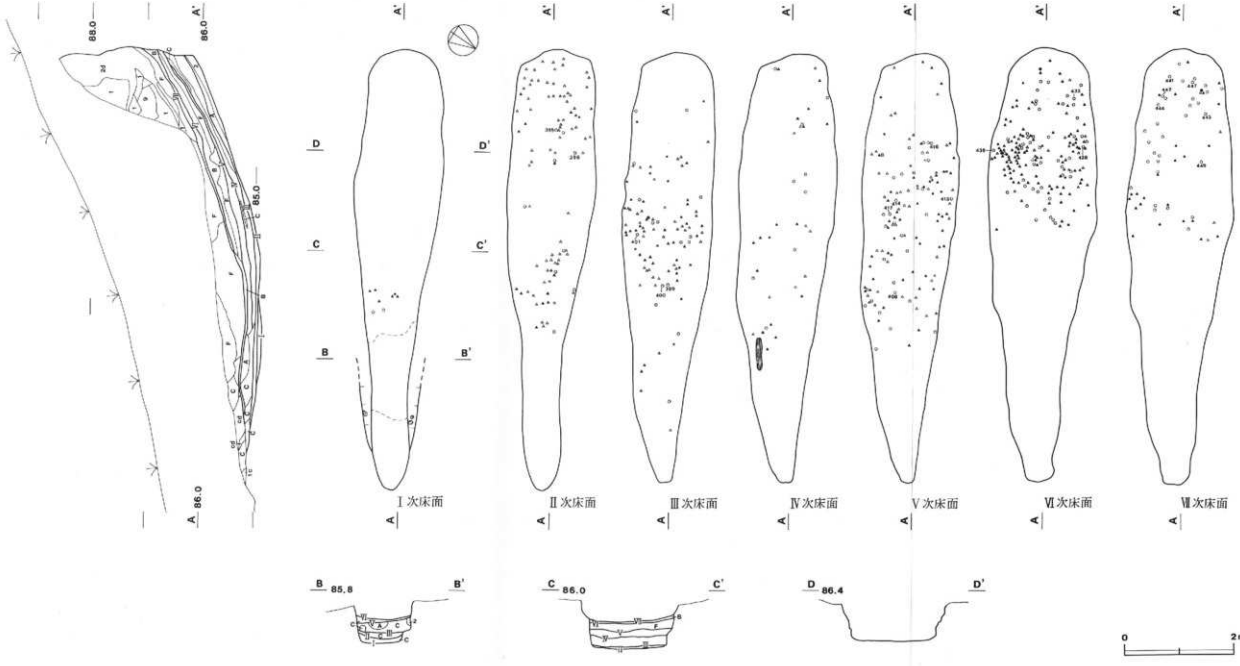
Ⅰ次床面は，砂層を掘り込んだままで，前道部から燃焼部にかけてほぼ水平となっている。焼成部は10～22°の上り傾斜で，奥へ行くほど急傾斜となっているが，最終床面は19～26°と床面が新しくなるにともない傾斜が急になる。窯は修復のたびに天井崩落土などを3～26cmの厚さに敷きつめ，最終床面はⅠ次床面より16～76cm高くなっている。Ⅱ次床面は焼成部の大部分をⅠ次床面とほぼ同じ高さに修復している。Ⅶ次床面（最終床面）の燃焼部はⅥ次床面とほぼ同じ高さに修復されている。Ⅰ次床面は焚口から奥へ0.3mの所から奥壁にかけて青灰色に焼けており，特に傾斜変換点から奥の方が厚く焼けている。

Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の壁には蛇腹状に段が4段できている。この段は床面に対応しているが，段が床面の数より少ないのは壁の剝落が少なかったためと考えられる。

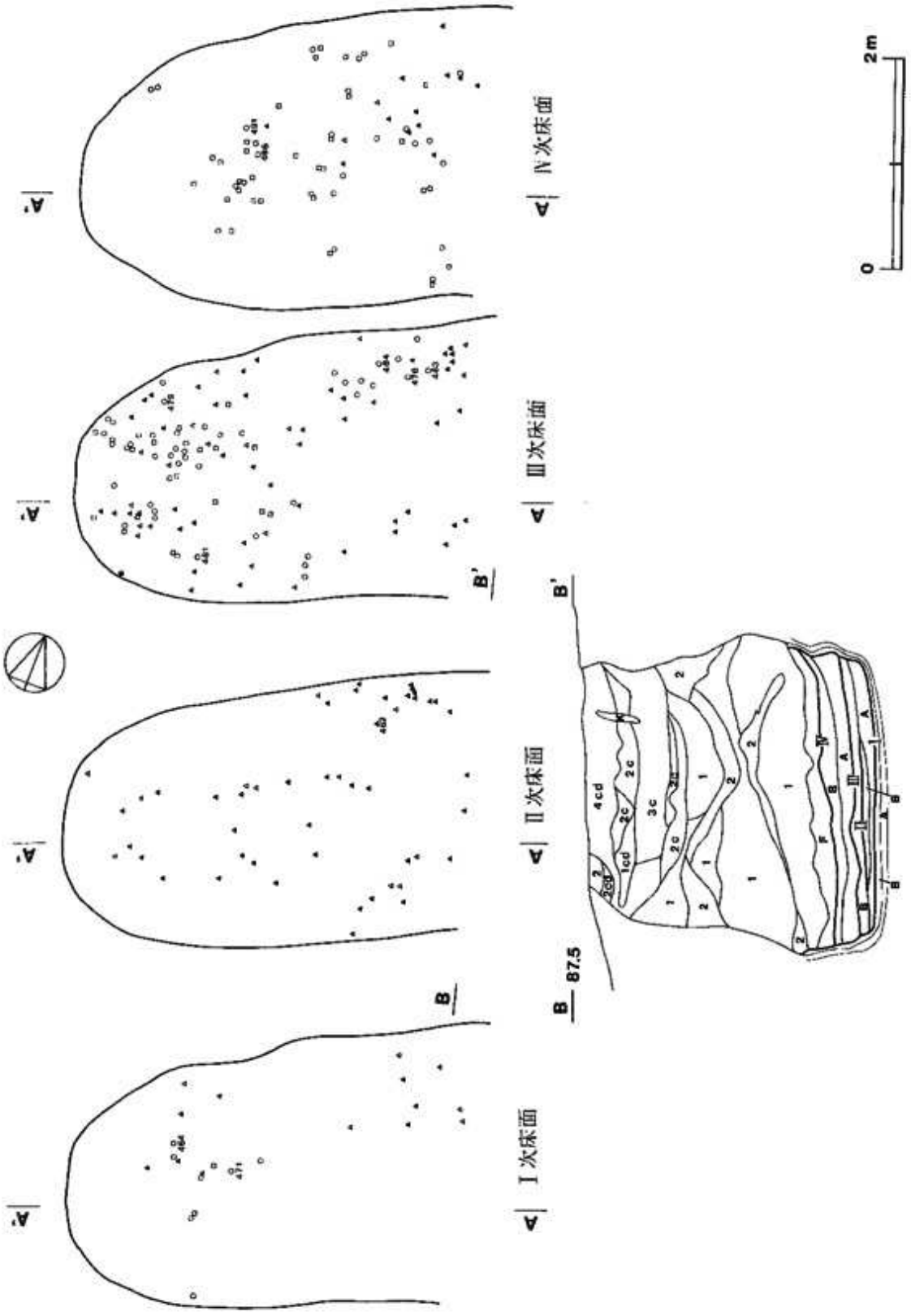
焚口の左右の側壁には，直径8cm，深さ15cmほどのピットが3か所検出された。

最終床面から2mほど上の位置まで煙道の一部が残存していた。煙道の上部での内径は約50cmで，壁は青灰色に焼けている。

遺物は，Ⅰ次床面では蓋や坏，甕が十数点出土しただけである。Ⅳ次床面では坏と甕が焼成部全体にまばらに出土した。この中で，焼成部奥の右側壁際から出土した甕片に，籾（もみ）とわら灰の付着したものが見られた。灰は床面に接する側に付着していて，この他にも付近でわら灰が検出された。



第6図　7号窯跡実測図



第7図　8号窯跡実測図

8号窯跡（第7図）

本窯跡は，西区東斜面の標高87～89mの地に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－116°－Wである。窯の構築された深さは，Ⅰ次床面の奥壁で3.6mほどである。本窯跡は，5号窯跡の前道部，燃焼部の下に構築されており，5号窯が構築される以前に廃棄されていた。窯体の前半分は調査区域外のため，奥壁から4.2mまでの焼成部のみの調査となった。本窯の修復は3回まで確認されており，修復時に幅が少しずつ広げられている。

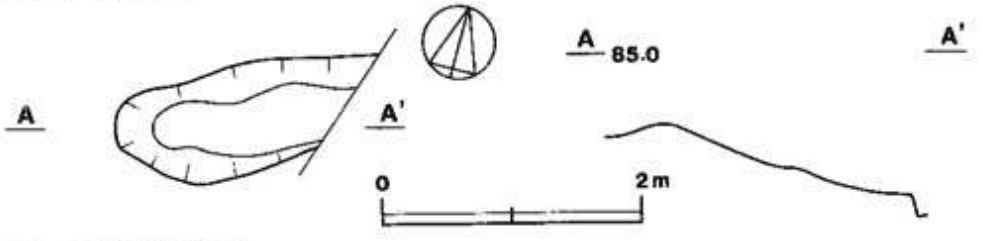
床面は4枚あり，Ⅰ次床面焼成部の最大幅は2.5mであるが，最終床面になると2.8mとなり，30cmほど幅が広げられている。

Ⅰ次床面は砂層を掘り込んで整形されているが，他の床は天井や壁の崩落土などを0～28cmの厚さに敷いて修復され，最終床面はⅠ次床面より50cmほど高くなっている。Ⅰ次床面は10～20°の上り傾斜で奥へ行くほど急傾斜となっており，最終床面も13～20°ほどの上り傾斜である。Ⅲ次床面の奥の方はⅡ次床面とほぼ同じ高さに修復され，手前の方は部分的に10cmほどの厚さに砂を敷き修復されている。Ⅳ次床面の奥壁付近は5号窯跡構築時に掘り込まれた。各床面は青灰色に焼けており，その外側は赤色に焼けている。ⅢおよびⅣ次床面では，青灰色と赤色の間に薄く黄色に焼けた層がある。

Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の壁に段が2段できている。1段目はⅡおよびⅢ次床面と対応し，2段目はⅣ次床面と対応している。天井は完全に崩落していて，壁の保存状態もよくないが，内側へ彎曲する痕跡を残している。奥壁には円弧状の工具痕が残っている。そのなかで，左コーナー部には，横方向に削った工具痕が縦に4段ある。壁も床面と同様に，青灰色に焼けており，この外側は赤色に焼けている。1段目から上は，青灰色と赤色の間に薄く，黄色に焼けた層がある。

遺物は，Ⅰ次床面で甕片を2枚重ねにした焼台が2点出土している。Ⅱ次床面では，少量ではあるが焼台に使用されていない蓋と坏が出土しており，蓋や坏が焼成されていたと考えられる。Ⅲ次床面では，多量の蓋や坏，甕が出土しており，甕片は重ねられたものも多く，焼台として使用されていたと考えられる。蓋や坏には完形品もあり，この床面で焼成されたものと考えられる。

9号窯跡（第8図）



第8図　9号窯跡実測図

本窯跡は，東区北西斜面の標高86.5mから高所へ構築された窯で，前道部の一部を除き他は削平されていた。前道部の残存長は1.8mで，幅は0.8mである。横断面形はゆるいU字状を呈している。燃焼部および焼成部は北東方向に延びていたと考えられる。覆土は炭化粒子を特に多量に含む単一層である。須恵器片もごく少量ながら出土した。

10号窯跡（第9図）

本窯跡は，東区北西斜面の標高86.5mから高所へ構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－107°－Eである。窯の構築された深さは，削平を受ける前の地表から1次床面の焚口で2m，傾斜変換点で3mほどである。前道部から焼成部の手前付近までを残して削平されており，残存部は5.65mで，そのうち前道部は1.45m，燃焼部は2.2mで，焼成部は2.0mほどが残存していた。最終床面では燃焼部までが残存していただけである。前道部から焼成部手前にかけて少しずつ幅を広げながら掘り込まれている。本窯は7回修復されているが，幅はあまり変化していない。

床面は8枚あり，残存する1次床面の幅は前道部で0.5～0.85m，燃焼部で0.85～1.65m，焼成部の最大幅は1.75mである。最終床面では前道部で0.9～1.1m，燃焼部で1.1～1.65mで，焼成部は残存していない。

1次床面の燃焼部の中ほどから焼成部の手前にかけては，砂層を掘り込んだあと，下にローム土混じりの細砂を，その上に細砂を厚いところでは，20cmほど敷いて修復している。焼成部は10°ほどの上り傾斜となっている。Ⅳ次床面から上の床面は水平な部分がなく，傾斜変換点を求めることができない。燃焼部のⅠ次床面から上の床は炭化物を主体とする層と窯壁ブロックを主体とする層で修復されている。各床は5～8cmの厚さを有しており，最終床面はⅠ次床面よりも40cmほど高くなっている。ⅠからⅢ次床面までは焼成部の長さが2mほど残存するが，ⅣおよびⅤ次床面は0.3mほどしか残存しない。Ⅵ次床面から最終床面までは燃焼部のみ残存している。各床面とも青灰色に堅く焼かれていた。また，各床とも薄くて硬くしまっていた。これは重機で踏み固められたためと考えられる。

壁は前道部がゆるいU字状で，燃焼部はほぼ垂直に立ち上がっている。Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，焼成部の壁には段が2段ほど残っていた。壁は1cmほどの厚さに青灰色に焼け，その外側は5cmほどの厚さに赤色に焼けている。

焚口付近に直径6cm，深さ6cmほどのピットが2か所検出された。

遺物は，Ⅲ次床面の焼成部から，3枚重ねにして焼台とした甕片をはじめ，蓋や坏，甕などの破片が比較的まとまって出土した。他の床面からは，須恵器がごく少量しか出土しなかった。これは，焼成部の大部分が失われていたことによる。

11号窯跡（第10図）

本窯跡は，東区北西斜面の標高87mから高所へ構築された地下式無段登窯で，主軸方向N－117°－Eである。窯の深さは，削平される前の地表からⅠ次床面の焚口で1.9m，傾斜変換点で2.5mである。

燃焼部から焼成部の手前までを残して，大半が削平されていて，残存部が3.8m，そのうち燃焼部は1.4mである。焼成部はⅠ次床面で2.4mが残存していたが，最終床面は，1.3mほどしか残存しなかった。焚口から燃焼部にかけては70cmほどの幅で掘り込まれ，焼成部はラッパ状に幅を広げている。本窯は5回修復されているが，幅はあまり変化していない。

床面は6枚あり，Ⅰ次床面の幅は燃焼部で0.6～0.8m，焼成部での最大幅は1.4mである。最終床面では，燃焼部はほとんど変わりなく，焼成部での最大幅は1.5mとやや広げられた程度である。

Ⅰ次床面の焼成部に，幅が0.4mで長さが1.35mの長方形をしたピットが6cmの深さに掘り込まれていた。このピットの覆土は焼土粒子や炭化粒子混じりの褐色土である。Ⅰ次床面焼成後，掘り込まれているが，Ⅱ次床面を修復する時は埋めもどされており，用途は不明である。Ⅰ次床面の傾斜角は，燃焼部ではほぼ水平である。焼成部では7°ほどの上り傾斜であるが，最終床面は，燃焼部から焼成部にかけては10°ほどの上り傾斜となる。焼成部には上に崩落土などを敷き，燃焼部は炭化物，窯壁ブロック混じりの土などを敷いて修復している。各床とも4～13cmの厚さを有していて，最終床面はⅠ次床面より40cmほど高くなっている。Ⅰ次床面はさらさらとしているが，Ⅱ次床面は堅くごつごつとしている。

Ⅰ次床面の上に堆積している床構築物を取り除くと，焼成部の壁には段が1段できている。この段はⅤ次床面に対応している。燃焼部の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

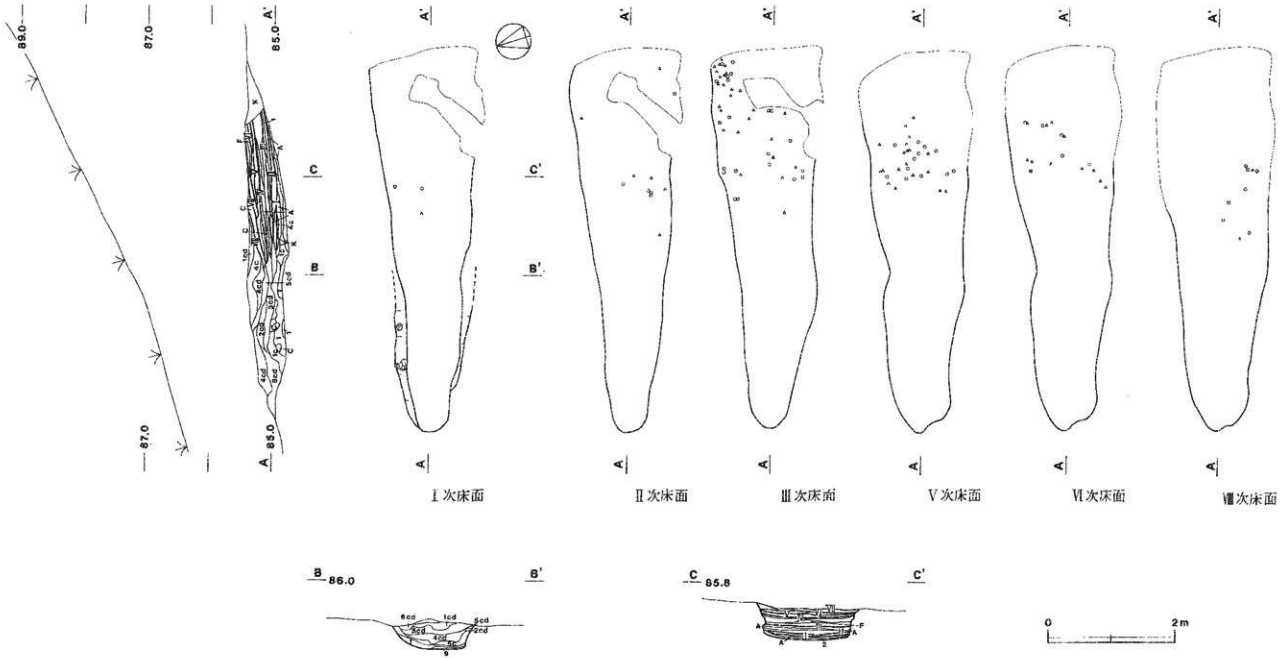
焚口から手前は地山が削平されており，形状等は不明である。

遺物は最終床面で坏や盤，甕などがまばらに出土したが，他の床面では甕片などがごく少量出土しただけである。

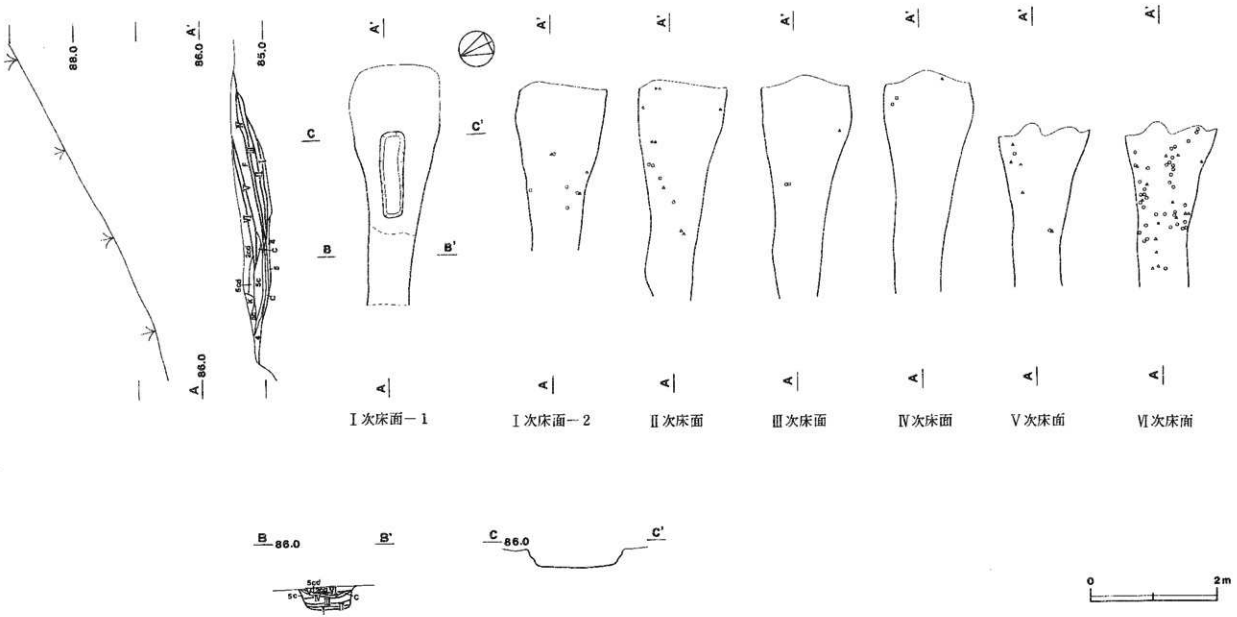
12号窯跡（第11図）

本窯跡は，東区北西斜面の標高86.7mより高い位置に構築された地下式無段登窯で，主軸方向はN－123°－Eである。窯の深さは削平される前の地表から，Ⅰ次床面の焚口で2.5m，傾斜変換点で3.0mである。前道部から焼成部の一部までを残して，削平されていた。残存部の長さは6mで，焼成部の大部分は削平されていた。焚口から燃焼部までは，ほぼ同じ幅で掘り込まれ，焼成部はわずかに幅が広げられている。本窯は8回修復されており，焼成部は修復ごとに徐々に幅が広げられている。

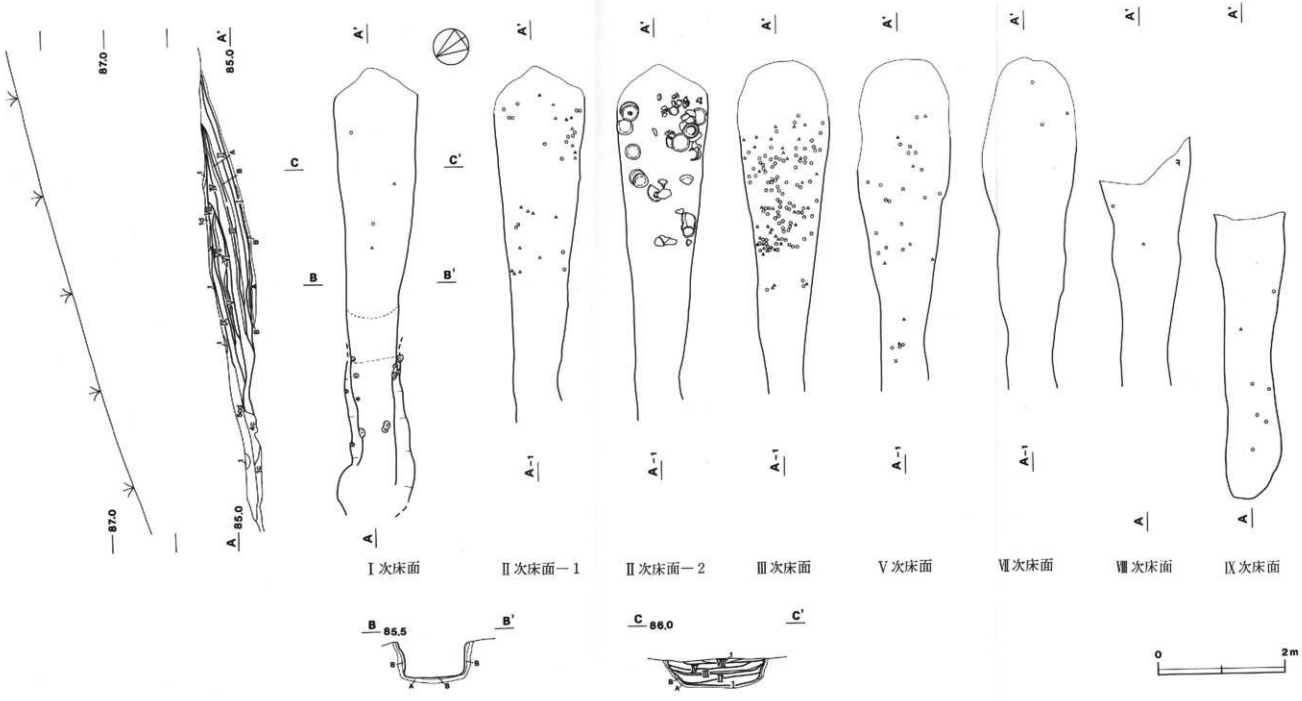
床面は9枚あり，Ⅰ次床面での幅は，前道部で0.6～0.7m，燃焼部で0.7～0.95m，焼成部で



第9図　10号窯跡実測図



第10図　11号窯跡実測図



第11図　12号窯跡実測図

の現存最大幅は1.3mである。

Ⅰ次床面は砂層を掘り込んで構築され，燃焼部はほぼ水平で，焼成部は12°ほどの上り傾斜となる。Ⅲ次床面から上の床面は，燃焼部から焼成部にかけ12°ほどの上り傾斜で，傾斜変換点を求めることはできない。燃焼部および焼成部は，崩落土を5～15cmの厚さに敷いて修復されており，最終床面はⅠ次床面より50cmほど高くなっている。Ⅳ次床面は堅く焼きしまっている。Ⅵ次床面はさらさらとした砂で，この上に崩落土が敷かれている。Ⅶ次床面は砂で，青灰色に焼かれて堅くしまっている。この上に薄く炭化物層があり，その上に砂が敷かれⅧ次床面が構築されている。Ⅷ次床面も堅くしまっている。

前道部の横断面は椀状で，焚口から手前へ下り傾斜となっている。燃焼部の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

焼成部の横断面は，床面の中央部がやや下がっており，左右の側壁に向け緩やかに内彎している。床面は緩やかな凹状を呈している。壁もやや内彎している。Ⅰ次床面の上に堆積した床構築物を取り除くと，側壁に段が1段みられ，これはⅢ次床面に対応している。燃焼部および焼成部の壁は青灰色に4cmの厚さで焼け，この外側は6cmの厚さで赤く焼けている。また，窯底部も燃焼部の中ほどから奥にかけて青灰色に焼けている。

焚口の壁および壁際に直径が5～10cmで，深さが15cmほどのピットが6か所検出された。

遺物は，Ⅰ次床面で坏，盤，高盤，甕の小片がごく少量出土した。Ⅱ次床面では，天井崩落土に埋まった状況で第11図のように未焼成の盤および高盤が10点ほど出土した。これらは口縁を下にして置かれ，土器の表面には煤のような黒い物質が付着していた。窯詰め後，あぶりの段階で天井崩落がおこり，そのまま埋まり，Ⅲ次床面を修復したものと考えられる。Ⅱ次床面では，燃焼部から焼成部にかけて蓋，坏，盤，甕などの小片が出土し，特に坏が多く出土した。盤は伏せた状態で出土した。

13，14，15，16号窯跡

これらの窯跡は調査対象区域外であったが，東区の窯と同じ丘陵斜面に位置し窯体部が露出するまでに削平されていたので，現状での平面図を作成し散乱していた遺物を取り上げた。13号窯跡は北西斜面に，12号窯跡と並んで検出され，14，15，16号窯跡は北東斜面に1mほどの間隔で横に並んで検出された。4基の窯跡の計測値は右表の通りである。4基の窯跡はいずれも東区，西区で調査した窯の形状とほぼ同形であり，16号窯跡のⅠ次床面の露出した状況から判断していずれも地下式登窯である。4基の窯跡は，損傷されないように盛り土をして保存の処置をした。

窯跡名	主軸方向	全長	最大幅
13	N-130°-E	6m	1.6m
14	N-156°-W	6	1.7
15	N-144°-W	7.5	2.1
16	N-139°-W	6.7	1.3

第3節　その他の遺構

SX 1

本跡は，西区東斜面の標高92～94.5mの地に構築されており，本跡から上部の丘陵は削平されているが，当遺跡では最高位に位置する遺構である。本跡の南東側に4号窯跡が位置し，本跡の一部は，4号窯跡焼成部の中ほどから奥壁にかけてⅣ，Ⅴ次床面を掘り込んでいる。

本跡は10×8mの範囲に，三叉状に交差する溝2条と，複雑に曲がって，枝分かれした大小のトンネル状遺構4条ほどで構成されている。本跡の周囲は削平されてしまっていて，規模は不明である。

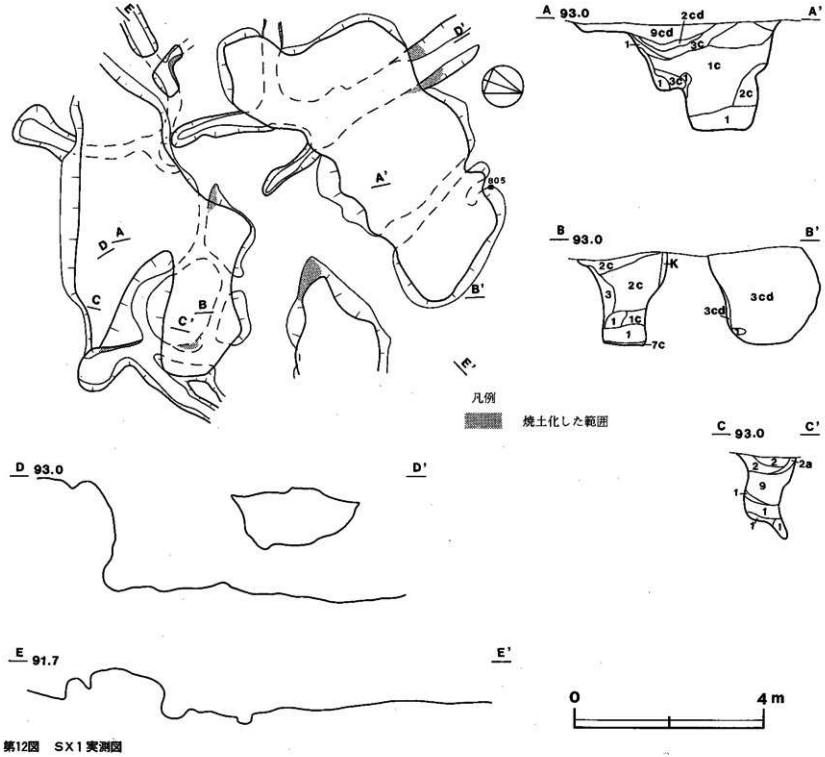
南西方向へ延びる1号溝は，底面の幅0.9～1.3m，壁高2.4mほどである。1号溝は開口部から南西へ6mほどのところで，底面が90cmほど高くなり，更に2mほどのところからは土取りのため削平されていた。底面は凸凹で，しまりがなく，奥へやや下り傾斜となっている。この溝の開口部から2.6mほどの地点で，東方向へ延びる2号溝が枝分かれしているが，この溝も3mほどから先は削平されていた。2号溝は，1号溝と交差する付近の壁が赤く焼土化しているが，焼け具合は強いものではない。この溝は，底面の幅0.7～1.2m，壁高1.9mほどで，底面は凸凹で，東方向にやや下り傾斜している。これらの溝の覆土は地山の砂層を主体とした土層で，堆積状況から判断すると，1，2号溝も本来トンネルであったのではないかと考えられる。覆土中から炭化物，内黒の土師器片が少量出土した。

トンネル状遺構は断面形が不定形で，小さいものは内径約0.1m，大きいものは内径0.9mほどであり，これらのトンネルの壁にも部分的に赤く焼土化している所が6か所ほど検出された。これらのトンネル内からは遺物の出土がほとんどなかったが，ただ1個ほぼ完形の内黒の土師器の椀が，本跡の北部に位置する内径20cm，長さ80cmほどのトンネルの開口部付近の壁際から出土した。

本跡は，火を使用した跡が残されており，人為的に掘られた遺構ではあるが，資料が少ないことと，遺構の一部分を調査したにすぎないことにより，この性格を把握することができなかった。時期は，本跡が4号窯跡を掘り込んでいることから，4号窯跡の廃棄以後であり，出土遺物の内黒の土師器からは10世紀初頭と考えられる。

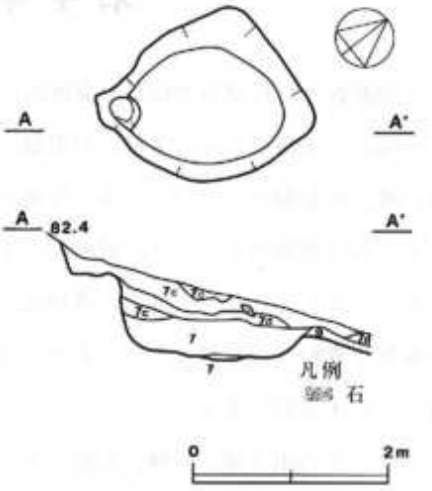
SX 2

本跡は，西区北東斜面裾部の標高82～83mの地に，等高線に対し直角方向に構築されており，主軸方向はN－140°－Wである。2号窯跡の下方10mほどの距離に位置し，本跡の下方7mほどの距離の平坦地を40cmほど掘ると水がわき出てくる。本跡は壁の大部分が削平されており，規模，


A 93.0
A'
2cd
9cd
3c
1c
2c
1
B 93.0
B'
2c
K
2c
3
1c
1
7c
3cd
3cd
C 93.0
C'
2
2
2a
9
1
1
1
1
D 93.0
D'
E 91.7
E'
A'
B'
D'
E'
A
B
C
D
C'
905
凡例
焼土化した範囲
0
4 m

第12図　SX1実測図

形状を正確に把握できなかったが，現状では長径2.3m，短径1.8mほどの長円形を呈している。壁高は30〜70cmほどで壁は外反しながら立ち上がっている。底面は，奥壁に向かってやや上り傾斜である。奥壁の手前直径20cmの円形状の部分が10cmほど一段高くなっている。覆土中には焼土粒子が多量含まれており，また炭化物が部分的ではあるが層状に堆積していた。また，二次焼成を受けた多量の礫や丸瓦，須恵器片，スサの炭化物が覆土中から出土した。



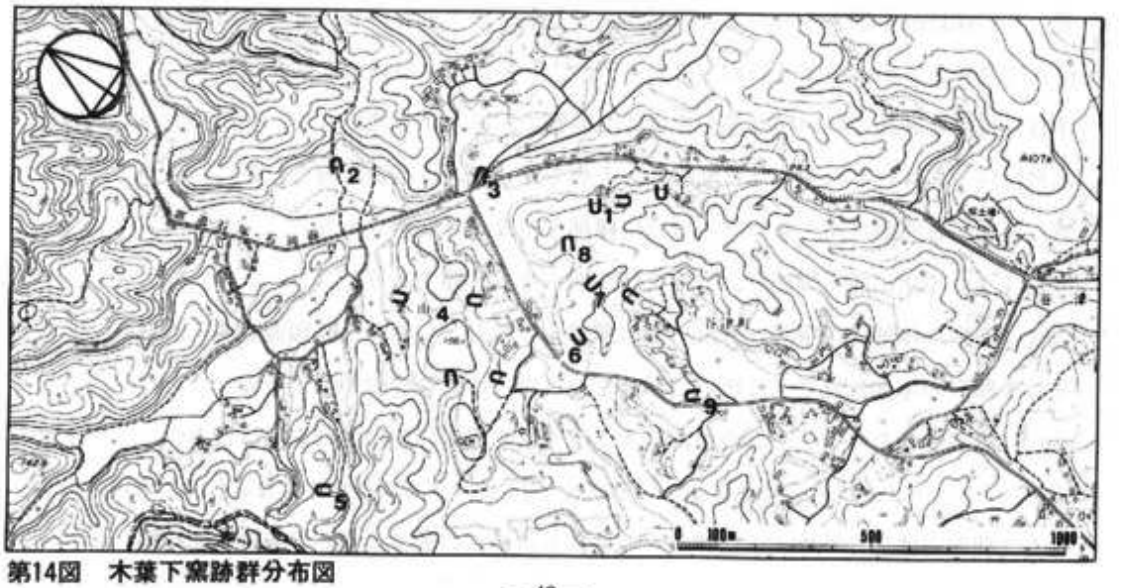
第13図　ＳＸ２実測図

近年までこの近辺では炭焼きや窯で草や篠を焼いて灰を作ることが行われており，炭焼きをしていた人の話によると，「形状は炭窯に似ており，丸瓦を利用して炭窯の煙突を構築していた。また，礫やスサなども炭窯を構築する材料として使用していた。規模は炭窯に比べ小さいので，草などを焼いた窯とも考えられる。」とのことであった。以上のことから本跡は，炭窯又は草等を焼いた窯ではないかと考えられる。　（小河邦男）

注

(1)「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6（木葉下遺跡Ⅰ）『茨城県教育財団文化財調査報告』第21集　財団法人茨城県教育財団　1983

(2) 調査時に地表が削平された所もあるので，地表の標高は常磐自動車道土取場測量平面図（1：1000）を基に復元した。



第14図　木葉下窯跡群分布図

第4章　遺　　物

今回調査したE地点の12基の窯体内，灰原及びステ場等から，遺物収納用コンテナ（54.5×34×9cm）で145箱という多量の須恵器，瓦が検出できた。須恵器は，蓋，坏，盤，高盤，壺，甕，鉢，甑，円面硯などで，その多くは窯と操業面がほぼ明確で，一括遺物として扱えるものである。これらの須恵器のなかには，軒丸瓦，平瓦，丸瓦などの瓦と共に焼台として使用されたものがみられる。また，これら大部分の遺物は，生産直後に廃棄されたものとみられ，遺物の分析にあたり良好な資料となり得るものである。須恵器，瓦以外には，SX 1から坏，高台付坏，椀，甕，鉢などの土師器が出土している。

以下，その出土量，器種，形態などについて各窯，各操業面ごとに記していくこととする。

第1節　遺物の記載方法

(1) 遺物は，須恵器を1～600番台，瓦を700番台，土師器を800番台，石製品を900番台とし，1号窯跡からSX 2まで通し番号とした。観察表，挿図，写真図版及び遺構実測図における出土遺物に付した番号は同一番号とした。なお，未焼成土器の坏，甕などは，頭にNを冠し，1から通し番号とした。

(2) 土器は，原則として⅓の縮尺に統一したが，大形の甕，瓦（軒丸瓦は除く），石製品については⅙の縮尺とし，番号に（　）を付した。

(3) 須恵器の器種名は，次のとおりである。

坏蓋；口径14cm前後で，浅く丸い天井部につまみが付くもの。

蓋　；口径17cmを超えるもので，頂部が丸く笠形を呈するものと，平らの頂部のものがある。

坏A；丸底あるいは平底と斜め上にまっすぐのびる体部，口縁部からなるもの。

坏B；扁平な底部に短い口縁部をそなえた形態で，坏Aより浅いもの。（第15図－1）

高台付坏；坏Aに高台をつけた形態で，大形で深いものは高台付椀とした。

盤　；扁平な底部に高台をつけ，短い口縁部をそなえた形態である。

高盤；ラッパ状に開く脚部と，平坦な坏部からなる形態である。

壺A；卵形の体部に口縁部が外反する口頸部をつけた，いわゆる長頸壺である。

壺B；卵形の体部に直立する短い口縁部をつけた，いわゆる短頸壺である。

壺C；肩の張ったイチジク形の体部に大きく外反する広口の口頸部をつけたもの。

壺D；わずかに丸味をもって立ち上がる体部と，短く直立する口縁部からなるもの。（第15図－2）

甕A；卵形の体部に外反する口頸部をつけたもので，口頸部に波状文を施している。

甕B；甕Aと同形で，口頸部に波状文を施さないもので，甕Aより小形のものが多い。

甕C；やや肩の張った広口短頸の形態で，肩部に把手を付けたものと付けないものがある。(第15図－3)

鉢A；外反する短い口頸部と上位で肩の張る体部からなるもの。（第15図－4）

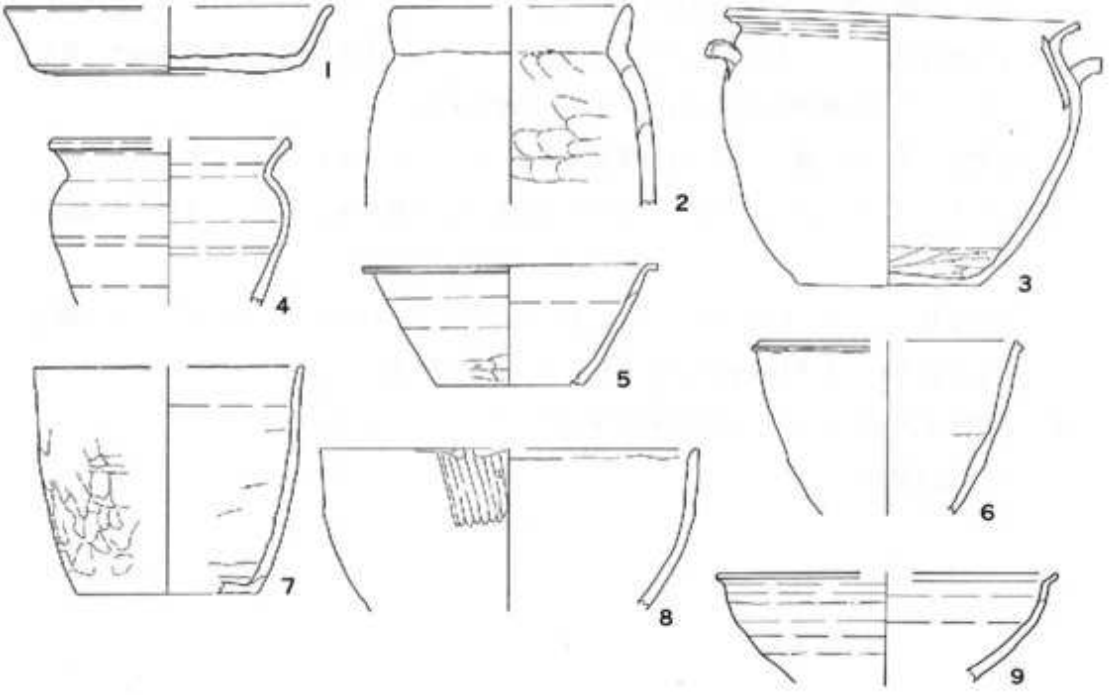
鉢B；平底で大きく外傾する体部と，短く水平にのびる口縁部からなるもの。（第15図－5）

鉢C；長い口縁部が軽く内彎して開くもの。（第15図－6）

鉢D；平底で，長い口縁部がほぼ直立するもの。（第15図－7）

鉢E；鉢C，鉢Dより大形で，外傾して立ち上がった後，口縁部が直立するもの。(第15図－8)

鉢F；尖底ないし丸底から内彎して立ち上がり，強く外反する口縁部からなるもの。(第15図－9)



第15図　器種別分類凡例

(4) 坏Aは，形態，調整から次のように分類した。

分類	形　　態	分類	底　部　調　整
Ⅰ	丸底で，底部と体部の境に稜をなすもの。	A	回転ヘラ削り
Ⅱ	平底で，底部と体部の間に成形時の面を有するもの。	B	一方向の手持ちヘラ削り
Ⅲ	平底で，底部と体部の間に二次的な面を有するもの。	C	不定方向の手持ちヘラ削り
Ⅳ	平底で，底部と体部の境に稜をなすもの。	D	ナデ
Ⅴ	平底で，底部と体部の境に稜をなさないもの。	E	無調整

(5) 出土遺物観察表に関する表現は次のとおりである。

法量

A 口径・外堤径　B 器高　C 底径・基底径　D 高台径

E 高台高　F 口縁高　G つまみ径　H つまみ高

（ ）を付したものは推定値　〔 〕を付したものは現存高

手法の特徴の覧において，水挽き整形の後に（左回り）としたものは，ロクロの回転方向が左回りのものを指し，記載のないものは右回りのものである。なお，底部の切り離しは，回転糸切りと明記したもの以外は，確認でき得る限り回転ヘラ切りである。

胎土・色調・焼成の覧は，前記の順に上中下三段に記し，色調で内面の色調が外面の色調と異なる場合は，（ ）を付して記した。色調については，小山正忠，竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を用いて色相を観察した。

備考覧のⅠ・Ⅱ・Ⅲ……は，各操業面を指し，Ⅰ＋Ⅱなどは１次床面とⅡ次床面の間で接合できたものである。百分率で表したものは完存率で，記載の無いものは，完存率を推定できないものである。

瓦の記載で，手法の特徴の覧において布目痕の後に（○×○条）としたものは，１cm四方内にみられる縦方向の糸と横方向の糸の条数を示したものである。

(6) 遺物の実測図において，内黒土器は次のスクリーントーンで示した。

第2節　窯跡出土遺物

1号窯跡（第16・17図）

窯内Ⅰ次床面からは，蓋，坏，壺，甕，鉢が，Ⅱ次床面からは坏，壺，甕，鉢，甑が，Ⅲ次床面からは坏，蓋，甕，鉢がそれぞれ出土した。出土量は，表1のとおりである。それ以外に，焼台として使用された坏，甕，鉢があり，甕が最も多い。

表1　1号窯跡遺物出土量

（　）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	壺	甕	鉢	甑	個数	総数
Ⅰ次	製品	1（1.4）	9（13.0）	2（2.9）	54（78.3）	3（4.3）		69	90
	焼台		2		19			21	
Ⅱ次	製品		3（7.7）	3（7.7）	31（79.5）	1（2.6）	1（2.6）	39	52
	焼台				13			13	
Ⅲ次	製品		4（9.8）	7（17.1）	24（58.5）	6（14.6）		41	56
	焼台		5		7	3		15	
個数		1	23	12	148	13	1	198	

Ⅰ次操業（1～14，494）

坏は，ⅣA類の2，3，5，8とⅣE類の4，ⅣC類の7が各1点ずつである。法量は，口径13.7cm，器高4.5cm，底径9cm前後の一群と，やや小形で浅めの一群とに分けられる。後者は，二次焼成を受け，焼台として使用されたものとみられる。前者は，底径指数66前後，器高指数31～35と比較的まとまりをみせている。ロクロ回転方向は，5のみが左回りで，他は右回りである。

坏蓋は1点のみで，扁平な擬宝珠形のつまみを有するものである。

甕は，確認できるものは甕Bで，多くは体部破片である。鉢は，鉢Bである。

Ⅱ次操業（15，16）

Ⅱ次床面からは，ほとんどが細片で，図示できるものは，壺Cと甑の2点のみである。しかし，坏破片も若干出土しているので，坏，壺，甕などが焼成されたものとみられる。

Ⅲ次操業（17～22）

坏は，Ⅰ次操業時のものと同じⅣA類に属する18，20とⅡA類の17，19である。法量は口径13cm，器高4.8cm，底径8.5cm前後で，底径指数62～66，器高指数32～38とⅠ次操業時のものより底径が小さく，器高がやや高くなる。20は，ロクロ回転方向が左回りであり，焼台として使用されたものと考えられることから，当操業時の製品でない可能性がある。

壺は，壺Bがみられるが，ほとんどが体部破片である。甕は，甕Aと甕Bとがあり，甕Bの体部調整は，いずれも斜位の平行叩き調整である。鉢は，いずれも鉢Bである。

壺，甕，鉢は，そのほとんどが二次焼成を受け，焼台に使用されたものが多いとみられる。

2号窯跡（第18・19図）

窯内Ⅰ次及びⅡ次床面からは，蓋，坏，壺，甕が，Ⅲ次床面からは，蓋，坏，盤，壺，甕，鉢が，Ⅳ次床面からは蓋，坏，盤，甕が，それぞれ出土している。出土量は表2のとおりであり，Ⅲ次床面から盤が出土していること，総破片数はⅢ次床面が最も多いにかかわらず，坏及び蓋の量が新しくなるにつれて増加していることなどが特徴的である。

表2　2号窯跡遺物出土量　　（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	盤	壺	甕	個数	総数
Ⅰ次	製品	2（4.1）	5（10.2）		7（14.3）	35（71.4）	49	64
	焼台	1	1			13	15	
Ⅱ次	製品	1（2.7）	4（10.8）		4（10.8）	28（75.7）	37	58
	焼台					21	21	
Ⅲ次	製品	7（6.7）	19（18.3）	1（1.0）	5（4.8）	72（69.2）	104	157
	焼台	1		1		51	53	
Ⅳ次	製品	16（42.1）	20（52.6）			2（53.0）	38	57
	焼台			1		18	19	
個数		28	49	3	16	240	336	

Ⅰ次操業（23～26）

図示できる資料は乏しく，坏は24，25の2点だけである。共にⅤA類であるが，法量に差が認められる。25は，ロクロ回転方向が左回りである。坏蓋は，天井部が浅く丸く，中央部が突出し外周がくぼむつまみを有する23だけである。

壺は，壺Cの29以外は明らかでない。甕は，甕Aと甕Bがあるが，ほとんどが体部破片である。

Ⅱ次操業（27～29）

Ⅰ次操業と同様に，図示できる資料に乏しい。28の坏は，ⅡA類でロクロ回転方向が左回りである。当操業では，坏蓋，坏，壺，甕の焼成が行われたものとみられる。

Ⅲ次操業（30～38）

坏は，ⅠA類の35，36と，小形でⅡA類の33，34の両者が存在する。このうち，34～36は，体部の水挽き痕は小さな凹凸を呈し，凹部は細い沈線状を呈している。[31] ⅠA類の底径指数は75前後，ⅡA類の底径指数は70前後で，Ⅰ次及びⅡ次床面から出土している坏よりも底径指数が高くなっている。

坏蓋は，Ⅰ次床面出土のものと法量，形態ともにほぼ同じ30～32である。

盤は製品とみられるものは1片だけの出土であるが，当操業時に焼成がなされた可能性が強い。

甕は，37，38の甕Aと甕Bであるが，ほとんどが二次焼成を受け，焼台として使用されたものが大半である。

Ⅳ次操業（39～52）

坏は，46のみが小形でⅡA類であるのに対し，他の48～52はⅠA類である。48～52は，口径13.4cm，器高4cm，底径10.6cmと，ほぼ同一規格である。底径指数は79前後とⅢ次床面出土のⅠA

類よりも高くなっている。

坏蓋は，法量のうえではⅢ次床面出土のものとほとんど差はないが，天井部中位に回転ヘラ削り調整による稜が認められ，頂部と外周部を分けていること，41～43のように口径部付近で軽く外反するものが存在することなどに差が認められる。つまみの上端部が，やや丸味を帯びていることも違いの一つである。41～43は，成形時は左回りのロクロを使用し，天井部のヘラ削りは右回りのロクロを使用している。

甕は，ほとんどが体部破片である。

3号窯跡（第20～25図）

窯内Ⅰ次床面からは蓋，坏，壺，甕が，Ⅱ次床面からは坏，壺，甕，瓦が，Ⅲ次床面からは，坏，甕，円面硯，瓦が，Ⅳ次床面からは坏，甕，瓦が，Ⅴ次床面からは坏，壺，甕，瓦が，Ⅵ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，甕，鉢，瓦が，Ⅶ次床面からは蓋，坏，盤，甕，瓦がそれぞれ出土している。各床面からの出土量は，表3のとおりであり，Ⅲ次床面から円面硯が出土していること，Ⅵ次床面以降に盤を伴うこと，Ⅱ次床面以降瓦が出土していることが特徴的である。なおⅦ次床面は，基本的に焼成が行われていないものとみられ，未焼成の坏，甕と，焼台として使用される予定であった坏，甕などが出土している。

表3　3号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	壺	甕	その他	瓦	個数	総数
Ⅰ次	製品		2（9.1）				20（90.9）			22	31
	焼台	1				3	5			9	
Ⅱ次	製品		1（1.7）				58（98.3）			59	81
	焼台		2			4	13		3	22	
Ⅲ次	製品		11（24.4）				33（73.3）	円面硯1（2.2）		45	58
	焼台		1				10		2	13	
Ⅳ次	製品		12（25.0）				36（75.0）			48	114
	焼台		5				54		7	66	
Ⅴ次	製品		22（75.9）				7（24.1）			29	54
	焼台		2			1	19		3	25	
Ⅵ次	製品	1（0.6）	52（31.7）				110（67.1）	鉢1（0.6）		164	188
	焼台		3	1	1		13		6	24	
Ⅶ次	製品		13（44.8）				16（55.2）			29	54
	焼台	1	4		1		18		1	25	
Ⅷ次	製品		285以上（95.6）			2（0.7）	10（3.4）	蓋1（0.3）		298	692
	焼台	8	209	5	3		157	鉢 5	7	394	
個数		11	624	6	5	10	579	8	29	1,272	

Ⅰ次操業

当操業時に伴う遺物は，坏，甕が出土しているが，いずれも小片で図示できるものはない。

Ⅱ次操業（53）

坏は少量で，いずれも破片である。53はⅡA類とみられる。甕は比較的多く出土しているが，

大部分は体部破片で，確認できるものは甕A，甕Bである。なお，焼台として平瓦1点，丸瓦2点が出土している。いずれも，凹面には布目圧痕があり，凸面は斜格子叩きが施されている。

Ⅲ次操業（54，55）

坏，甕，円面硯が出土しているが，図示できるものは2点だけである。54はやや大形で類例の少ないものである。55の円面硯は，Ⅳ次床面及び灰原出土の破片と接合している。甕は甕Aと甕Bが認められる。なお，焼台のなかには，平瓦，丸瓦各1点が含まれている。凹面は両者共に布目圧痕がみられるが，平瓦の凸面は縄目叩き，丸瓦の凸面は斜格子叩きが施されている。

Ⅳ次操業（56）

坏，甕が出土しているが，図示できるものは56の1点だけである。56は坏Bで，ロクロ回転方向は左回りである。甕は，甕A，甕Bがみられる。焼台のなかには，平瓦7点が含まれている。凹面は，いずれも布目圧痕がみられるが，凸面は，1点が縄目叩きで，他は斜格子叩きが施されている。7点のうち5点の凹面には小札痕がみられる。

Ⅴ次操業（57～62）

坏Aは，ⅣA類のものとⅣC類のものがある。前者は58，59で，後者は60がそれぞれ該当する。57，58，60は，ロクロ回転方向が左回りである。坏には坏Bが含まれているが，小片である。

甕は，61，62の甕Aだけであり，破片数も少ない。

焼台は，甕の破片と平瓦の破片で，平瓦は，凸面が縄目叩きのもの2点，斜格子叩きのもの1点である。

Ⅵ次操業（63～72）

坏は，いずれも坏Aで，ⅡA類の63，65，66，ⅣA類の64，67，ⅠA類の68，69で，63～65，67～69は，ロクロ回転方向が左回りである。なお，69は焼台として使用されている。

蓋は，口縁部破片が1点出土しているだけである。盤は，口縁部破片が1点出土しているが，焼台とみられる。

鉢は，鉢Dの破片が1点出土している。甕は，確認できるものは甕A，甕Bで，大部分は体部破片である。

焼台は，前述の坏，甕の破片及び平瓦破片6点である。347ほか3点は凸面縄目叩き，349ほか1点は凸面斜格子叩きである。

Ⅶ次操業（73～80）

坏は，大部分が坏Aで，坏Bの破片1点を含んでいる。坏Aは，ⅡA類が75，ⅣA類が74，ⅣB類が76と，各1点ずつ出土している。74と75は，ロクロ回転方向は左回りである。

蓋は73，盤は78の各1点だけで，いずれもロクロ回転方向は左回りである。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，大部分は，体部破片で焼台として使用されている。

Ⅶ次操業（81～105，N 1～N14）

Ⅶ次操業としたが，窯詰めをした段階の焼成前に天井部が崩落し，実際には操業として把えられないものである。

製品としては，坏285個以上と壺，甕が12点未焼成の状態で出土している。それらの中から実測可能な14点を掲載した。坏は，いずれも坏Aで，Ⅱ類に属するものであるが，底部の調整は明らかでない。甕は，甕Aと甕Bがみられる。

製品以外の81～105は，いずれも焼台として使用される予定であったものとみられる。

坏は，坏Aと坏Bがあり，坏Aは，ⅡA類とⅣA類で，前者に85，86，90，91，92，後者に87，88，89が該当する。これらの坏は，大部分がⅥ次床面から出土している坏よりも底径指数が大である。蓋は，81のほか若干出土している。

高台付坏で図示できるものは96の1点，盤は，97～99までの3点で，いずれも高台径が小さく，短く垂下するものである。

甕は，甕A，甕D，鉢は，鉢A，鉢B，鉢D，鉢Eが存在するが，いずれも量的には少ない。

このように，焼台に坏が多く甕類が少ないことは，他の窯跡や他の床面と比べて特異な現象である。

4号窯跡（第26～34図）

窯内Ⅰ次床面からⅣ次床面までは，蓋，坏，高台付坏，盤，甕が共に出土し，他に，Ⅰ次床面からは高盤，Ⅲ次床面からは鉢，甑，Ⅳ次床面からは壺，鉢，Ⅴ，Ⅵ次床面からは鉢がそれぞれ出土している。出土量は表4のとおりであり，Ⅱ，Ⅲ次床面からは蓋及び坏が多く，Ⅴ次床面からの坏も比較的多いことが特徴的である。また，Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ次床面，灰原からは，焼台として使用された瓦が出土している。

表4　4号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	高盤	壺	甕	鉢	甑	瓦	個数	総数
Ⅰ次	製品	14(11.2)	79(63.2)	4(3.2)	10(8.0)	1(0.8)		17(13.6)				125	144
	焼台	1			2			15			1	19	
Ⅱ次	製品	101(11.7)	713(82.5)	6(0.7)	10(1.2)			33(3.8)		1(0.1)		864	886
	焼台				1			21				22	
Ⅲ次	製品	119(8.2)	1,242(86.0)	6(0.4)	18(1.2)			51(3.5)	2(0.2)	6(0.3)		1,444	1,474
	焼台			2				26			2	30	
Ⅳ次	製品	10(19.2)	21(40.4)	5(9.6)	5(9.6)		2(3.8)	7(13.5)	2(3.8)			52	56
	焼台	1	1								2	4	
Ⅴ次	製品	15(4.9)	255(82.8)	3(1.0)	1(0.3)			34(11.0)				308	321
	焼台	1			2				1		9	13	
Ⅵ次	製品	12(9.0)	83(62.4)	3(2.3)	9(6.8)			25(18.8)	1(0.8)			133	184
	焼台		1		2			16			32	51	
灰原	製品	41(10.2)	202(50.4)		15(3.7)		7(1.7)	133(33.2)	3(0.7)			401	438
	焼台		1					34			2	37	
計	数	315	2,598	29	75	1	9	412	9	7	48	3,503	

Ⅰ次操業（106～121）

坏は，坏Aのみで，ⅡA類の 115，116，ⅣA類の113，114で，ⅡA類の２点は，ロクロ回転方向が左回りである。底径指数は60～66，器高指数はⅡA類が26で，ⅣA類は33～36と高い。

蓋は，いずれも口径が20cm前後で，擬宝珠形のつまみが付くもので，坏の蓋とは考えられず，118，119などの大形の高台付坏の蓋とみられる。

高台付坏は，前述した118，119 のように口径17cm前後の大形のものと，117のように口径15cm前後のものとがある。

甕は，甕Bがみられるが，大部分は体部破片である。

Ⅱ次操業（122～136）

坏は，坏Aで，ⅡA類の123，124と，本来高台が付くもので，生乾きの状態で高台を剝がし，手持ちヘラ削りを施している特異なものとが出土している。123，124は，ロクロ回転方向が左回りである。

蓋は，口径が15cm，17cm，20cm前後の三者に分けられ，後二者は，擬宝珠形のつまみが付くが，前者は扁平で上部がくぼむつまみが付く。口径17cmのものは天井項部と外周部との境に軽い稜を有し，口径20cm前後のものは天井部が丸い。

盤は，口径21cm前後で，体部は外反し，高台は外側へ強くふんばるものである。

甕は，甕A，甕Bが出土しているが，甕Aで図示できるものはない。

Ⅲ次操業（137～170）

蓋は，口径が12cm，15cm，17cm前後のもの及び20cm以上のものとに分かれるが，つまみは，いずれも擬宝珠形のものが付く。

坏は，坏Aのみで，ⅡA類の144～146，149，150，153，ⅡC類の155，ⅡD類の147，148，ⅣA類の154，ⅣC類の157，ⅣD類の152，156と，形態上からは２種類であるが，底部調整は多様である。14点のうち150，156，157を除く11点は，ロクロ回転方向が左回りで，左回りの占める割合が多い。口径は13～14cmのものと11cm前後のものとに分かれ，前者は，底径指数が55～60と，Ⅰ次，Ⅱ次床面出土の坏より小さくなっている。小形品の後者は，底径指数63～65で，前者より高い。

高台付坏は，口径12.5cmの164，口径14～15cmの163，161，162，160，口径18cm前後の159，158の３種類に分かれる。後二者は，外側へふんばるしっかりした高台が付くが，前者は，体部との境に小さな高台が付くものである。

甕は，甕Aがみられるが，大部分は体部破片である。

鉢は，鉢B，鉢Fがみられる。

Ⅳ次操業（171～174）

坏蓋は，171のほか数点がみられ，焼台として使用されたとみられるものもあり，Ⅲ次床面から出土している口径12cm前後で擬宝珠形のつまみが付くものと同形態である。

坏は，図示できるものは172の１点だけで，これも蓋と同様に焼台として使用されたものである。Ⅲ次床面から出土している144，149等と同形態で，149と同じヘラ記号がみられることなどから蓋とともにⅢ次操業の製品の二次利用と考えられる。

甕は，甕Ａがみられる。

Ⅴ次操業（175～192）

蓋は，いずれも擬宝珠形のつまみが付くが，口径12～13cmの177，178と，17～18cm前後の175，176とに分かれる。明らかに焼台とみられる176以外のものも二次焼成を受けているが，Ⅲ次操業に伴う製品の蓋と比べ，擬宝珠形のつまみが全体に丸味を帯びている点が異なる。

坏は，ⅡＡ類の183～185，ⅣＣ類の181，182とに分かれる。いずれもロクロ回転方向は左回りで，Ⅲ次操業の製品と類似している。

高台付坏は，口径11.5cm前後のものと口径15cm前後のものがある。前者は，口径12～13cmの蓋と重ね焼されている。

盤は，体部が直線的に立ち上がり，体部と底部との境は鋭い稜をなさないものである。

甕は，甕Ａ，甕Ｂがみられる。

鉢は，鉢Ａ，鉢Ｂがみられるが，図示できるのは鉢Ａの192だけである。

Ⅵ次操業（193～203）

蓋は，いずれも擬宝珠形のつまみを有し，口径12.6cmの195と，口径17～18cmの196，197とに分かれる。194は天井部が深いが，193は浅く丸い。

坏は，ⅡＡ類の199，ⅡＣ類の200と，ⅢＡ類の196，197とが存在する。いずれもⅤ次床面出土の坏と大差はなく，底径指数，器高指数ともにほぼ同一範囲内である。196，197は，ロクロ回転方向が左回りである。

盤は，口径16cmのものと20cm前後のものとがあり，体部は直線的に立ち上がりⅤ次床面出土のものと同形態である。

甕は，いずれも体部破片である。

鉢は，鉢Ａ，鉢Ｂがみられるが，図示できるのは鉢Ａの203だけである。

灰原（204～210）

灰原からは甕，坏などが出土しているが，図示できるものは７点である。

坏204はⅣＡ類である。甕は短頸壺で，壺蓋も出土している。甕は，確認できるものは甕Ｂで，鉢は，鉢Ｂである。

5号窯跡（第35～38図）

窯内Ⅰ～Ⅸ次床面まで蓋，坏及び甕がともに出土しているほか，壺はⅠ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ次床面から，鉢はⅡ次床面を除く各床面から，甑はⅢ，Ⅷ，Ⅸ次床面からそれぞれ出土している。出土量は，表5のとおりであり，坏と甕がやや多い程度で，全体的には少ない。そのなかでⅠ～Ⅶ次床面に比してⅧ，Ⅸ次床面出土の壺，鉢がやや多いこと，Ⅳ次床面からの遺物が皆無であることが特徴的である。

表5　5号窯跡遺物出土量　　（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	壺	甕	鉢	甑	個数	総数
Ⅰ次	製品	5 (11.6)	9 (20.9)			29 (67.4)			43	58
	焼台				1	13	1		15	
Ⅱ次	製品	3 (4.9)	31 (50.8)			27 (44.3)			61	76
	焼台					15			15	
Ⅲ次	製品	7 (7.0)	26 (26.0)			65 (65.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	100	123
	焼台					23			23	
Ⅴ次	製品	1 (2.8)	10 (27.8)			24 (66.7)	1 (2.8)		36	40
	焼台					4			4	
Ⅵ次	製品	2 (2.4)	39 (45.9)			41 (48.2)	3 (3.5)		85	91
	焼台					6			6	
Ⅶ次	製品	4 (7.5)	35 (66.0)		2 (3.8)	11 (20.8)	1 (1.9)		53	60
	焼台	1	1			5			7	
Ⅷ次	製品	6 (6.7)	25 (28.1)		4 (4.5)	48 (53.9)	5 (5.6)	1 (1.1)	89	92
	焼台				1	1	1		3	
Ⅸ次	製品	2 (2.4)	14 (16.9)		6 (7.2)	54 (65.1)	6 (7.2)	1 (1.2)	83	92
	焼台				4	5			9	
前道部	製品	2 (3.8)	12 (23.1)	2 (3.8)	1 (1.9)	33 (63.5)	2 (3.8)		52	61
	焼台		1			8			9	
個数		33	203	2	19	412	21	3	693	

Ⅰ次操業（211～218）

坏蓋は，図示できるものは211だけで，扁平で上部がくぼむつまみが付くものである。

坏は，ⅠA類の212，ⅣA類の213，ⅤA類の214で，焼けひずみのある213を除けば，底径指数は80～82と高い。214は，ロクロ回転方向が左回りである。

甕は，甕Aと甕B，鉢は鉢Bがみられる。

Ⅱ次操業（219～225）

坏蓋は，図示できるものは扁平で環状のつまみが付く219だけである。

坏は，220～224まで基本的にⅣA類で，223を除く3点は，中央部に静止ヘラナデが加えられている。これはヘラ削り時に中央部に残った粘土を除去するもので，一種の仕上げナデと考えられる。底径指数は，66～73とⅠ次床面出土の坏と比して低い。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるものは，225の甕Bだけである。

Ⅲ次操業（226～237）

坏蓋は，いずれも小片で，図示できるものはない。

坏は，本来ⅡA類とみられる226と，ⅣA類の227，228～235がみられる。前者は，小さな凹凸の水挽き痕を残し，ロクロ回転方向が左回りである。後者は，口径11.4～12.4cmと小形品で，ロクロ回転方向は右回りである。228を除いて二次焼成を受けている。両者共ほとんど青灰色を呈している。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるものは底部片の236だけである。

鉢は，237の鉢Aがみられる。

Ⅴ次操業（238，239）

全体的に遺物が少なく，図示できるものは，坏2点だけで，238，239共にⅣA類であるが，239は，ロクロ回転方向が左回りである。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが図示できるものはない。

Ⅵ次操業（240～245）

坏は，口径13～13.8cmのものと，口径10～11cmのものとに分かれる。前者は，形態的にはⅣA類の240，242とⅣC類の241とに分かれ，後者は，243，244共にⅣA類である。法量的にはⅤ次床面出土の坏と変化はない。

甕は，245の甕Bが認められるだけで，他は体部破片である。

Ⅶ次操業（246～257）

坏蓋は，扁平で上部がくぼむつまみが付くものであるが，二次焼成を受け焼台の可能性がある。

坏は，多種多様で，ⅥA類の247，249，251，253，ⅤC類の250，ⅣC類の252に分かれる。ⅣA，ⅤC類には，口径15cm前後の大形品が認められ，底径指数は，62～69とⅥ次床面出土の坏より低くなる。なお，247を除く6点は，ロクロ回転方向が左回りで，247，248，249は，水挽き時の回転方向と底部ヘラ削り時の回転方向が異なっている。

壺は，短頸壺と蓋がみられる。壺蓋は，坏ⅣA類の底部につまみを付けた形態である。

甕は，256の甕Bだけで，鉢は，257の鉢Bだけである。

Ⅷ次操業（258～268）

坏蓋は，小片のみで，図示できるものはない。

坏は，ⅣA類の258，264と，ⅣD類の259～263とに分かれる。前者は，普遍的にみられる258と，やや小形で浅い264がみられる。後者は，雑な切り離し痕を残し，底部は凹凸が激しく，全体に雑な作りである。底径指数は，前者が70～75であるのに対して後者は59～63と低く，器高指数も前者が28～32であるのに対して後者は33～40と高い。なお，264を除く6点は，ロクロ回転方向が左回りで，258は，ヘラ削り時の回転方向が右回りである。258は，Ⅷ次操業にともなう製品と考えられる。

壺類は，ⅣA類の坏の底部に扁平で上部がくぼむつまみが付く形態の蓋265が図示できるだけ

である。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるものはない。

鉢は，267の鉢Bと268の鉢Dがみられる。

Ⅸ次操業（269～278）

坏は，図示できるものは2点だけで，269はⅣB類，270はⅠA類で，両者共に口径10～11cmと小形品である。270は，ロクロ回転方向が左回りである。

壺は，271の壺Dがみられるだけである。甕は，272，273の甕Bと甕Aがみられるが，甕Aで図示できるものはない。

鉢は，274～276の鉢Bがみられる。277は甑とみられ，278の把手が付くものと考えられる。

前道部（279～285）

坏は，ⅣA類の280，281，ⅣC類の282とに分かれる。279はロクロ回転方向が左回りである。他にⅣE類の坏が1点みられる。

壺は，ⅣA類の坏底部につまみが付く形態の蓋 283のほかに短頸壺が認められる。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるのは 284の甕Bだけで，他に甕A 3点，甕B 1点がみられる。

鉢は，鉢Dで，285のほかに1点みられる。

6号窯跡（第39～48図）

窯内Ⅰ～Ⅵ次床面から，坏，甕が共に出土しているほか，蓋はⅢ次床面を除いた各床面から，高台付坏及び盤はⅢ，Ⅳ次床面から，壺はⅠ，Ⅴ次床面から，甑はⅠ，Ⅲ次床面から，鉢はⅥ次床面からそれぞれ出土している。出土量は，表6のとおりであり，坏，甕が主体を占めること，高台付坏，盤がⅢ次及びⅣ次床面からだけ出土していることが特徴的である。なおⅤ次床面を除く各床面からは，焼台として使用された瓦が出土している。

表6　6号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	壺	甕	鉢	甑	瓦	個数	総数
Ⅰ次	製品	2（1.1）	85(48.6)			6（3.4）	80(45.7)		2（1.1）		175	298
	焼台						101			22	123	
Ⅱ次	製品	14（8.9）	96(60.8)				48(30.4)				158	195
	焼台	1					19			17	37	
Ⅲ次	製品		37(36.6)	1（1.0）	4（4.0）		58(57.4)		1（1.0）		101	121
	焼台						11			9	20	
Ⅳ次	製品	1（3.6）	14(50.0)	2（7.1）	1（3.6）		10(35.7)				28	59
	焼台				1		27	1		2	31	
Ⅴ次	製品	1（1.7）	27(45.0)			11(18.3)	21(35.0)				60	72
	焼台		5			2	5				12	
Ⅵ次	製品	7（4.2）	69(41.8)				87(52.7)	2（1.2）			165	230
	焼台						63			2	65	
前道部	製品	5（3.9）	80(63.0)	3（2.4）			39(30.7)				127	127
	焼台											
個数		31	413	6	6	19	569	3	3	52	1,102	

Ⅰ次操業（286～317）

坏蓋は，小形で扁平な286，287だけで，前者は扁平な擬宝珠形，後者は扁平なボタン状のつまみが付く。

坏は，多量にみられるが，口径は13～14cm前後とまとまっている。ⅡA類は，288，290，291，296～302，315の11点のほか6点，ⅣA類は289，292～295，303～314の17点のほか2点，ⅣC類は316のほか1点である。315は小形品でロクロ回転方向は左回りである。これ以外に図示できないものでⅠA類が1点みられる。これらのうち，－印のヘラ記号がⅣA類の5点，×印のヘラ記号が図示できないものも含めて，ⅡA類に3点，ⅣA類に3点みられる。ⅡA類，ⅣA類ともに底径指数67～75，器高指数26～34とほぼ一致している。

甕は，317の甕Aがみられるが，大部分は体部破片である。

瓦は，平瓦19点，丸瓦2点，熨斗瓦1点で，凸面は平瓦に縄目叩きが3点みられるほかは，斜格子叩きが施されている。

Ⅱ次操業（318～342）

坏蓋は，いずれも破片で図示できるものはない。

坏は，ⅡA類の323，327，328，330，331，ⅡD類の324，325，329，ⅣA類の326，332，333，ⅤA類の318～322に分けられる。ⅣA類の坏は，図示したもの以外に1点ある。ⅤA類は，いずれも重ね焼の状態で出土している。これらのうち，324～328の5点は，ロクロ回転方向が左回りで，－印のヘラ記号が認められる。法量は，小形品の332，333を除けば，各類共に口径13cm前後，器高4～4.9cmとほぼ画一的で，底径指数は60～66とⅠ次床面出土の坏より低く，器高指数は28～36とⅠ次床面出土の坏よりやや高い。

蓋は，334，335とも口径20cmを越える大形品で，盤の蓋とみられる。335は，天井部が焼けひずみによるものか，扁平で，内面外周付近にかえりのついた特異なものである。

甕は，336～339と他に1点の甕A，340，341の甕Bがみられる。甕Bの破片は，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ次操業時に焼台として使用されている。

瓦は，軒丸瓦，熨斗瓦各1点，平瓦12点，丸瓦3点で，軒丸瓦は素縁単弁八葉花文中心周環一重式で，丸瓦は玉縁付である。平瓦の凸面は，縄目叩き3点，斜格子叩き8点，ナデ，ヘラ削り各1点で，丸瓦はいずれも斜格子叩きである。

Ⅲ次操業（343～358）

坏は，ⅡA類の343～346，ⅡC類の347～351，ⅡD類の352に分けられる。ⅡC類は，Ⅱ次床面まではみられなかったもので，底部に不定方向の手持ちヘラ削り調整が加えられた坏は，当床面から出土した坏に多くみられる特徴である。ⅡC類，ⅣD類の坏は，ロクロ回転方向が，いずれも左回りである。

盤は，353～355の３点みられるが，353は大形品，354は小形で深いもの，355は小形品とバラエティーに富んでいる。高台は，いずれも外側へふんばるもので，体部との境は明瞭な稜をなさない。

甕は，356の甕Ａ，357の甕Ｂ，358の甕Ｃがみられるほか，体部の大破片が比較的多い。

瓦は，平瓦７点，丸瓦２点で，平瓦の凸面は，縄目叩き３点，斜格子叩き３点，ナデ１点で，丸瓦は，いずれも斜格子叩きである。

Ⅳ次操業（359～365）

坏は，ⅣＡ類の362，ⅤＡ類の359と，それ以外にロクロ回転方向が左回りの360，361がある。これらは，いずれも二次焼成を受け，359はⅡ次床面，360，361はⅢ次床面出土の坏と形態等が類似していることから，当操業時に伴う製品でない可能性がある。

363の盤，364の甕Ａ，365の鉢Ｃは，いずれも焼台として使用されたもので，当操業時に伴う製品は，明確にできなかった。鉢は，鉢Ｃのほかに鉢Ａがみられるが図示できるものはない。

瓦は，平瓦，丸瓦各１点で，平瓦の凸面は斜格子叩き，丸瓦の凸面は縄目叩きである。

Ⅴ次操業（366～370）

坏は，ⅡＡ類の367，369，ⅡＤ類の368，Ⅳ類の366とに分かれる。ⅡＡ類は，口径11cmのものと14.5cmのものに細分でき，14.5cmのものは他に１点ある。ⅡＡ，ⅡＤ類ともにロクロ回転方向は，左回りである。

Ⅵ次操業（371～387）

坏蓋は，371～373ともに天井部が浅く丸く，扁平なつまみが付くもので，他に同形態の蓋が１点みられる。口径は，いずれも12.6～13.9cmの間を示している。

坏は，ⅣＡ類の379～381，383，ⅤＡ類の374～376，ⅤＢ類の377，ⅤＣ類の378などがみられる。これらの坏は，小形の383を除いてはロクロ回転方向が左回りで，そのうちⅣＡ類の坏は，ヘラ削りの回転方向が成形時の回転方向と異なり右回りである。

甕は，386の甕Ａ，387の甕Ｂがみられるほか，体部の大破片が比較的多い。

瓦は，平瓦２点で，凸面はいずれも斜格子叩きである。

前道部（388～394）

坏は，ⅡＣ類の391，ⅣＡ類の392，393，ⅤＡ類の388，ⅤＣ類の389，390がみられる。底部に不定方向の手持ちヘラ削り調整が加えられている389～391は，ロクロ回転方向が左回りである。

甕は，394の甕Ｂがみられる。

7号窯跡（第49～52図）

窯内Ⅰ～Ⅶ次床面からは，坏，甕が共通して出土しているほか，Ⅱ，Ⅲ次床面を除いた各床面から蓋が，Ⅵ，Ⅶ次床面から高台付坏が，Ⅴ～Ⅶ次床面から盤が，それぞれ出土している。出土量は，表7のとおりで，量的にはⅤ次床面が最も多く，Ⅰ次床面は極端に少ない。また，高台付坏は，Ⅵ次床面以降，盤はⅤ次床面以降それぞれみられることなどが特徴的である。なお，Ⅲ次床面以降，焼台として使用された瓦の出土がみられる。

表7　7号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	壺	甕	鉢	瓦	個数	総数
Ⅰ次	製品	1 (14.3)	6 (85.7)							7	12
	焼台						5			5	
Ⅱ次	製品		11 (27.5)				29 (72.5)			40	47
	焼台						7			7	
Ⅲ次	製品		11 (19.0)				46 (79.3)	1 (1.7)		58	70
	焼台						10	1	1	12	
Ⅳ次	製品	1 (1.9)	14 (25.9)				39 (72.2)			54	77
	焼台						16		7	23	
Ⅴ次	製品	6 (3.8)	45 (28.7)		1 (0.6)		105 (66.9)			157	195
	焼台				3		28	3	4	38	
Ⅵ次	製品	1 (0.9)	36 (31.0)	1 (0.9)	9 (7.8)	1 (0.9)	67 (57.8)	1 (0.9)		116	119
	焼台				1		1		1	3	
Ⅶ次	製品	5 (3.8)	61 (46.2)	3 (2.3)	2 (1.5)		60 (45.5)	1 (0.8)		132	148
	焼台						15		1	16	
個数		14	184	4	16	1	428	7	14	668	

Ⅰ次操業

蓋，坏の小片が少量みられる程度で，図示できるものはない。甕は，いずれも焼台として使用されている。

Ⅱ次操業（395～398）

坏は，395，396共にⅡA類で，ロクロ回転方向は左回りである。

甕は，図示できるものは甕Aとみられる397と甕Cの398の2点である。

Ⅲ次操業（399～404）

坏は，ⅡC類の400，401，ⅣC類の399とに分けられる。3点とも底部には不定方向の手持ちヘラ削り調整が加えられている。400はロクロ回転方向が左回りである。

甕は，甕Aがみられるが，図示できるものは402の底部だけである。

鉢は鉢Dの403，鉢Eの404であり，404は口径41cmと大形品である。

瓦は平瓦片で，凸面には縄目叩きが施されている。

Ⅳ次操業（405～407）

坏は，ⅡA類の406，ⅣB類の405で，両者共にロクロ回転方向が左回りである。

蓋は，Ⅳ類の坏の底部に扁平で擬宝珠形のつまみが付いた形態で，短頸壺の蓋とみられる。

甕は，甕Aがみられるが，図示できるものはない。

瓦は，いずれも平瓦で，凸面に縄目叩きが施されているものが2点，斜格子叩きが施されているものが5点みられる。凹面には，すべて布目痕がみられる。

Ⅴ次操業（408～423）

坏蓋は，408だけで，扁平で上部がくぼむつまみが付くものである。

坏は，ⅡC類の413，ⅣA類の409，412，ⅤA類の410，411に分けられる。413を除いた4点は，ロクロ回転方向が左回りである。

盤は，口径が18cm前後の415～417と，21cmの414とがみられるが，いずれも，高台は中央寄りにあり，短く垂下するものである。ロクロ回転方向は，すべて左回りである。4点のうち3点は，ほぼ中央をとおるように半分に割れている。

甕は，418，419のほかに甕Aが7点，甕Bが1点みられるが，いずれも焼台として使用されているものである。

鉢は，421～423の鉢Bがみられるが，甕同様に焼台として使用されているものである。

Ⅵ次操業（424～440）

坏は，坏Aと坏Bが存在する。坏Aは，口径が13cm前後と均一で，ⅡA類の424，ⅣA類の425～428とに分けられる。ほぼ半分に割れているものが多い。ⅣA類の底径指数は，69～72とほぼまとまりをみせる。坏Bは，429，430の2点で，429はロクロ回転方向が左回りである。

盤は，高台がやや外側へふんばる431～434と，短く垂下する435～437とに分けられる。後者は他に2点みられ，435を除いた4点は，ロクロ回転方向が左回りである。なお，中央から約半分に割れているものが多い。

壺は，長頸壺の体部下半とみられる438だけである。

甕は，平底の439，丸底の440の2点以外に，甕A，甕Bがみられる。

鉢は，鉢Bである。

Ⅶ次操業（441～451）

坏は，449を除けば口径13cm前後と画一的で形態等からⅡA類の441～444，448，ⅣA類の445～447，449及びほか1点に分けられる。ⅣA類の446，447は，成形時のロクロ回転方向は左回りで，底部調整時のそれは右回りである。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるものは甕Aの450だけである。

鉢は，鉢Aの451だけである。

8号窯跡（第53・54図）

窯内Ⅰ～Ⅳ次の各床面からは，蓋，坏，甕が，Ⅰ，Ⅲ次床面からは壺が出土している。出土量は，表8のとおりで，蓋，坏の出土量が，新しくなるにつれて増加することが特徴的である。

表8　8号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	壺	甕	個数	総数
Ⅰ次	製品	14 (20.3)	23 (33.3)	1 (1.4)	31 (44.9)	69	95
	焼台				26	26	
Ⅱ次	製品	36 (45.0)	36 (45.0)		8 (10.0)	80	90
	焼台				10	10	
Ⅲ次	製品	91 (41.4)	101 (45.9)	1 (0.5)	27 (12.3)	220	271
	焼台				51	51	
Ⅳ次	製品	82 (37.6)	116 (53.2)		20 (9.2)	218	227
	焼台				9	9	
個数		223	276	2	182	683	

Ⅰ次操業（452～462）

坏蓋は，ロクロ回転方向が左回りで，口径15.2cm前後の452，453と，ロクロ回転方向が右回りで，口径14.5cm前後の454，455に分けられる。つまみは，いずれも扁平であるが，後者のつまみがやや腰高である。

坏は，456～459の4点共にⅠA類で，口径14cm，器高4.5cmと画一的である。459を除いた3点は，ロクロ回転方向が左回りである。

壺は，460の壺Dだけである。

甕は，461ほか2点の甕A，462ほか1点の甕Bがみられるが，大部分は体部破片である。

Ⅱ次操業（463～472）

坏蓋は，口径15cm，つまみは，扁平で上部が深くくぼみ，ロクロ回転方向が左回りの463，464と，口径14.5cm前後，つまみは扁平で上部のくぼみが浅く，ロクロ回転方向が右回りの465～467とに分けられる。

坏は，468～471の4点共に口径14.2cm前後で，ⅠA類である。成形時のロクロ回転方向は右回りであるが，底部調整時の回転方向は左回りである。471を除いた3点は，小さな凹凸の水挽き痕を残している。底径指数は，77～81と高い。

甕は，図示できるものは472の底部破片だけで，他はいずれも体部破片である。

Ⅲ次操業（473～485）

坏蓋は，473～475の3点で，口径14.7cm前後で，扁平で上部がくぼむつまみが付くものである。473，474は，ロクロ回転方向が左回りである。

坏は，476～482の7点共に口径14.5cm，器高4.5cm前後のⅠA類である。このうち476～478の3点は，ロクロ回転方向が左回りで，477，478，481は，小さな凹凸の水挽き痕が残る。底径指数は，72～82とⅡ次床面出土の坏より低いものもみられる。

椀としたものは，坏の形態をしているが大形のもので，483，484共に口径16.5cm前後である。

壺は，図示することができない短頸壺が1点みられる。

甕は，甕Aと甕Bがみられるが，図示できるものは485の甕Bだけである。

Ⅳ次操業（486～493）

坏蓋は，486，487の2点で，口径15cm，扁平で上部がくぼむつまみが付くもので，両者共にロクロ回転方向が左回りである。

坏は，ⅠA類の488～490，ⅤA類の491～493に分けられる。前者は，口径14cm前後で，小さな凹凸の水挽き痕を残すもので，底径指数は77である。後者は，口径13.4cmと前者よりやや小ぶりで，底径指数は59～64と低い。ⅤA類の491，492は，ロクロ回転方向が左回りである。

9号窯跡（第57図，521～527）

当窯跡は，前道部だけしか確認できなかったため，操業回数等は明らかでない。坏がやや多いほかは，蓋，高台付坏，盤，甕が少量出土しているだけで，本来の器種構成も明らかでない。出土量は，表9のとおりである。

表9　9号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	甕	個数	総数
前道部	製品	11（7.4）	85（57.4）	2（1.4）	24（16.2）	26（17.6）	148	149
	焼台					1	1	
個数		11	85	2	24	27	149	

坏は，口径が12.4cmでⅡD類521とⅣD類の522とに分けられる。高台付坏は，523，524共に大ぶりのもので，外側へふんばるやや高目の高台が付くものである。

盤は，525～527共に口径23cm前後のもので，体部は外反し，外側へふんばる高台が付くものである。527は，ロクロ回転方向が左回りである。

甕は，図示できるものがなく，いずれも体部破片である。

10号窯跡（第58・59図）

焼成部の大部分は失われているが，窯内Ⅰ次床面からは盤，甕，Ⅱ次床面からは蓋，坏，盤，甕，鉢，Ⅲ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，甕，Ⅳ次床面からは坏，Ⅴ次床面からは坏，高盤，甕，Ⅵ次床面からは蓋，坏，甕，Ⅶ次床面からは蓋，盤，甕，Ⅷ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，壺，甕がそれぞれ出土している。出土量は，表10のとおりで，Ⅰ，Ⅳ，Ⅶ次床面からの出土量は少なく，最終のⅧ次床面からは多量に出土していることなどが特徴的である。

表10　10号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	高　盤	壺	甕	その他	個数	総数
Ⅰ　次	製品				1 (33.3)			2 (66.7)		3	3
	焼台										
Ⅱ　次	製品	8 (25.6)	9 (28.1)		1 (3.1)			13(40.6)	鉢1 (3.1)	32	37
	焼台							3	瓦　2	5	
Ⅲ　次	製品	9 (12.0)	10(13.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.3)		53(70.7)		75	78
	焼台							2	瓦　1	3	
Ⅳ　次	製品		3 (100)							3	3
	焼台										
Ⅴ　次	製品		12(46.2)			1 (3.8)		13(50.0)		26	27
	焼台							1		1	
Ⅵ　次	製品	2 (10.0)	6 (30.0)					12(60.0)		20	23
	焼台							3		3	
Ⅶ　次	製品	2 (50.0)			1 (25.0)			1 (25.0)		4	4
	焼台										
Ⅷ　次	製品	12(7.9)	63(41.4)	10(6.6)	5 (3.3)		2 (1.3)	60(39.5)		152	153
	焼台							1		1	
個　数		33	103	11	9	2	2	164	4	328	

Ⅰ次操業

盤，甕の破片が出土しているが，いずれも小片で，図示できるものはない。

Ⅱ次操業（528～531）

蓋は，口径13.5cmの坏蓋528と，口径22.9cmの盤蓋と考えられる529とがみられる。

坏は，ⅤC類の530がみられるだけである。

甕は，甕Aがみられるが図示できるものはない。鉢は，531の鉢Cがみられる。

Ⅲ次操業（532～537）

坏蓋は，図示できるものは532だけで，やや腰高のつまみが付くものである。

坏は，ⅣD類の533だけで，小さな凹凸の水挽き痕を残している。

盤は，535と，高盤の536があり，535は，短く垂下する高台が付くものである。

甕は，537の甕B以外に甕Aもみられるが，図示できるものはない。

Ⅳ次操業

坏片がみられるが，小片で，図示できるものはない。

Ⅴ次操業（538～541）

坏は，ⅠA類の538，ⅡA類の539がみられる。

甕は，図示できるものは540の甕Bと541の底部破片以外に甕Aがみられる。

Ⅵ次操業

坏，蓋，甕がみられるが，いずれも小片で図示できるものはない。

Ⅶ次操業

蓋，盤，甕がみられるが，いずれも小片で図示できるものはない。

Ⅶ次操業（542～548）

坏は，坏Aと坏Bがある。坏Aは，ⅡA類の542と，ⅡC類の543～545に分けられる。そのうち，543，545は，ロクロ回転方向が左回りである。坏Bの546は，やや大ぶりなものである。

甕は，甕Bだけで，547，548以外に1点みられる。

11号窯跡（第60図）

焼成部の大部分が失われているが，窯内1，Ⅱ次床面からは坏，高盤，甕，Ⅲ次床面からは盤，高盤，甕，Ⅳ次床面からは蓋，高台付坏，盤，高盤，甕，Ⅴ次床面からは盤，甕，Ⅵ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕がそれぞれ出土している。出土量は，表11のとおりで，最終時のⅥ次床面から最も多く出土しているが全体的に出土量が少ないこと，Ⅴ次床面を除いて高盤がみられることなどが特徴的である。なお，Ⅱ，Ⅳ次床面から，焼台として使用された瓦の出土がみられる。

表11　11号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	高盤	壺	甕	瓦	個数	総数
Ⅰ次	製品		1 (16.7)			4 (66.7)		1 (16.7)		6	6
	焼台										
Ⅱ次	製品		2 (16.7)			6 (50.0)		4 (33.3)		12	16
	焼台							3	1	4	
Ⅲ次	製品				1 (50.0)	1 (50.0)				2	3
	焼台							1		1	
Ⅳ次	製品	2 (20.0)		3 (30.0)	1 (10.0)	2 (20.0)		2 (20.0)		10	13
	焼台							2	1	3	
Ⅴ次	製品				1 (33.3)			2 (66.7)		3	8
	焼台							5		5	
Ⅵ次	製品	2 (3.6)	29(51.8)	4 (7.1)	7 (12.5)	1 (1.8)	3 (5.4)	10(17.9)		56	65
	焼台							9		9	
個数		4	32	7	10	14	3	39	2	111	

Ⅰ次操業

坏，高盤，甕がみられるが，いずれも小片で，図示できるものはない。

Ⅱ次操業

Ⅰ次床面と同じように坏，高盤，甕がみられるが，図示できるものはない。焼台として使用された平瓦がみられる。

Ⅲ次操業（549，550）

549の盤は，底部と体部との境に明瞭な稜をなさず，高台は，やや外側へふんばるものである。

甕は，550の甕Aがみられ，これは焼台として使用されたものである。

Ⅳ次操業（551～554）

坏蓋は551，高台付坏は552，盤は553，壺蓋は554の各1点である。高台付坏は，外側へ強くふ

んばる高台が付くものである。壺蓋は，やや腰高のつまみが付くものである。

焼台として使用された平瓦１点がみられる。

Ⅴ次操業

盤，甕がみられるが，図示できるものはない。

Ⅵ次操業（555～563）

坏は，555，556共に口径が11～12.8cmと小形でⅣA類である。

高台付坏は，557，558共に口径15.5cm前後で，外側へ強くふんばる高台が付く。Ⅲ次床面出土の549と同形態である。

壺は，560の長頸壺と，高台の付いた561，562である。561，562は，短頸壺の底部とみられ，底部切り離しが，回転糸切りにより，注目すべきものである。他に同形態のものとみられる回転糸切り痕を残す底部が１点みられる。

甕は，563の甕Ｂ以外に，甕Ａ，甕Ｂが各１点ずつみられる。

12号窯跡（第61～63図）

焼成部の大半は失われているが，窯内Ⅰ次床面からは坏，盤，高盤，甕，Ⅱ次床面からは蓋，坏，盤，高盤，甕，Ⅲ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕，Ⅳ次床面からは坏，盤，壺，甕，Ⅴ次床面からは蓋，坏，盤，高盤，甕，Ⅶ次床面からは盤，Ⅷ次床面からは蓋，坏，高台付坏，甕，Ⅸ次床面からは蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，甕がそれぞれ出土し，Ⅵ次床面からの遺物はない。出土量は，表12のとおりである。全体的に出土量の少ないなかで，Ⅲ次及びⅨ次床面からの坏の出土量が多いことが特徴的である。なお，Ⅰ，Ⅱ次床面から生焼けの盤，高盤が出土している。

表12　12号窯跡遺物出土量

（ ）内はパーセント

操業面	区分	蓋	坏	高台付坏	盤	高盤	壺	甕	個数	総数
Ⅰ次	製品		1 (33.3)		1 (33.3)	1 (33.3)			3	6
	焼台				1			2	3	
Ⅱ次	製品				14 (73.7)	5 (26.3)			19	48
	焼台	1	8		2			18	29	
Ⅲ次	製品	14 (7.9)	124 (69.7)	3 (1.7)	9 (5.1)	1 (0.6)		27 (15.2)	178	198
	焼台				1		3	16	20	
Ⅳ次	製品		4 (50.0)		2 (25.0)		1 (12.5)	1 (12.5)	8	10
	焼台							2	2	
Ⅴ次	製品	9 (24.3)	19 (51.4)		4 (10.8)	1 (2.7)		4 (10.8)	37	38
	焼台							1	1	
Ⅵ次	製品									
	焼台									
Ⅶ次	製品				1 (100)				1	1
	焼台									
Ⅷ次	製品	2 (28.6)	3 (42.9)	1 (14.3)				1 (14.3)	7	7
	焼台									
Ⅸ次	製品	15 (13.9)	51 (47.2)	7 (6.5)	6 (5.6)	1 (0.9)		28 (25.9)	108	109
	焼台							1	1	
前道部	製品	1 (11.1)	2 (22.2)		3 (33.3)		1 (11.1)	2 (22.2)	9	9
	焼台									
個数		42	212	11	44	9	5	103	426	

Ⅰ次操業（564）

図示できるのは，盤１点だけで，Ⅱ次操業時に焼台として使用されている。それ以外に，生焼けの盤，高盤脚が各１点みられる。

Ⅱ次操業（565～568，N15～N20）

坏蓋，坏は，いずれも小片で，図示できるものはない。

盤は，生焼けのN15～N17と，焼台として使用されたとみられる565がある。高盤は，生焼けのN18～N20で，盤の上に伏せた状態で出土している。なお，ほかに盤11点，高盤１点の生焼け土器が出土している。

甕は，566～568共に甕Bで，566はⅢ次，568はⅡ次操業時に焼台として使用されている。

Ⅲ次操業（569～586）

坏蓋は，569の１点だけで，天井部は扁平である。ロクロ回転方向は左回りである。

坏は，口径13～14cm前後でⅣA類の570，571，ⅣC類の572，573，口径11cm前後でⅣD類の574，575に分けられる。ⅣD類は，他に１点みられる。ⅣA類の２点は，ロクロ回転方向が左回りである。

高台付坏は，576～578の３点で，口径が18.6cm，16.0cm，14.3cmとそれぞれ異なる。高台はやや外側にふんばるもので，577，578は，ロクロ回転方向が左回りである。

盤は，579～582の４点で，口径は20～23cmである。高台は，高くしっかりしたもの，短く小さいものなど，それぞれ異なる。

壺は，高台の付いた583，584の２点のほか１点で，いずれも焼台として使用されたものとみられる。

甕は，585，586及び他23点の甕Bと甕Aがみられるが，甕Aで図示できるものはない。甕は焼台として使用されたものが多い。

Ⅳ次操業

坏，盤，壺，甕の小片が少量みられるだけで，図示できるものはない。

Ⅴ次操業（587～589）

坏蓋は，口径15.6cmの587，口径12.2cmの588の２点で，後者は，やや腰高のつまみが付く。

坏は，いずれも小片で，図示できるものはない。

盤は，図示できるものは外側へややふんばる高台がつく589だけである。

Ⅵ次操業

出土遺物は，皆無である。

Ⅶ次操業

盤の小片が１点出土しているだけで，図示できるものはない。

Ⅷ次操業

坏蓋，坏，高台付坏，甕が少量みられるが，図示できるものはない。

Ⅸ次操業（590～593）

蓋は，590ほか1点で，口径が18～21cmの大形のものである。

坏は，図示できるものは591の1点で，ⅣC類である。592の高台付椀は，口径21.9cmと大形のものである。甕は，593だけが図示できるものである。

第3節　その他の遺構出土遺物

SX1（第66図）

SX1及びその付近から出土している遺物はいずれも土師器で，坏(801～803)，椀(805，806)，高台付坏（807～811），壺（812），甕（813，814），平鉢（815）などである。このうち，801～805，807～811は内面黒色処理されたものである。坏はいずれも内彎しながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反するものであるが，口径に9.2～13cmと差が認められる。高台付坏は，高台が外側へ強くふんばるものである。

これらの遺物は，坏や高台付坏の形態などから，10世紀初頭頃のものとみられる。

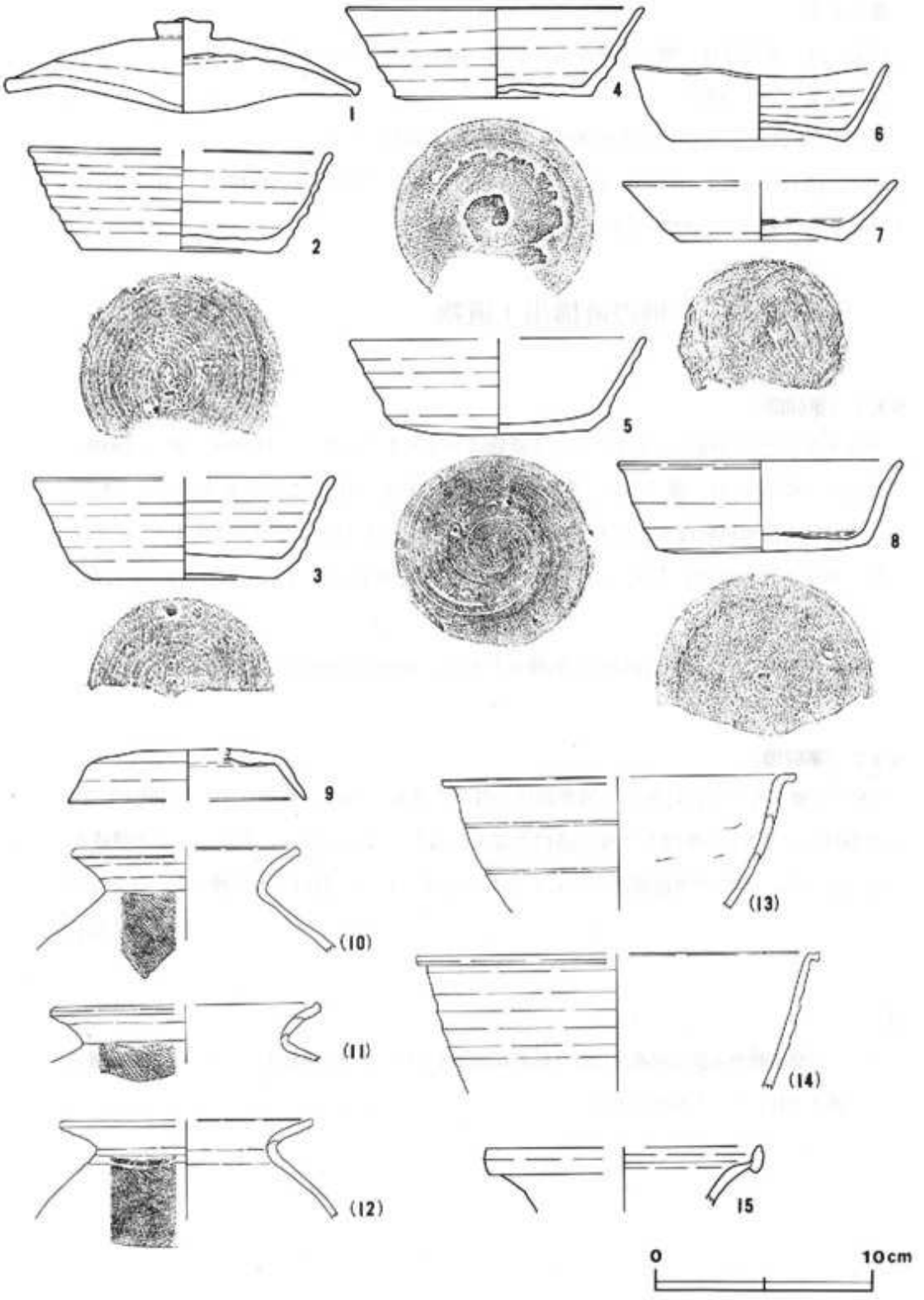
SX2（第67図）

SX2の覆土及びその付近から須恵器坏（613），丸瓦（734），石臼（901）が出土している。須恵器坏は，SX2が埋没してゆく過程で混入したものとみられる。丸瓦は，二次焼成を受けていることから，本跡の煙道部に用いられたものとみられる。石臼は，粉挽き臼の下臼である。

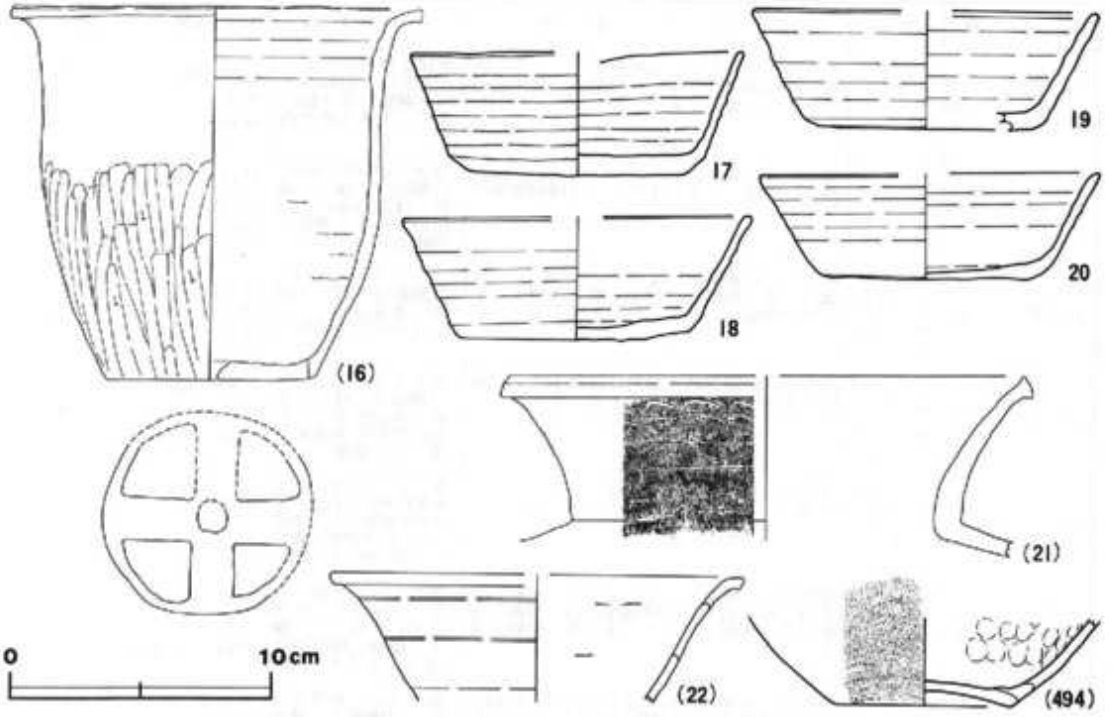
（川井正一）

注

(1)　「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6（木葉下遺跡Ⅰ）において，根本康弘氏が「篦ナデB」としたものである。



第16図　1号窯跡出土遺物実測図(1)

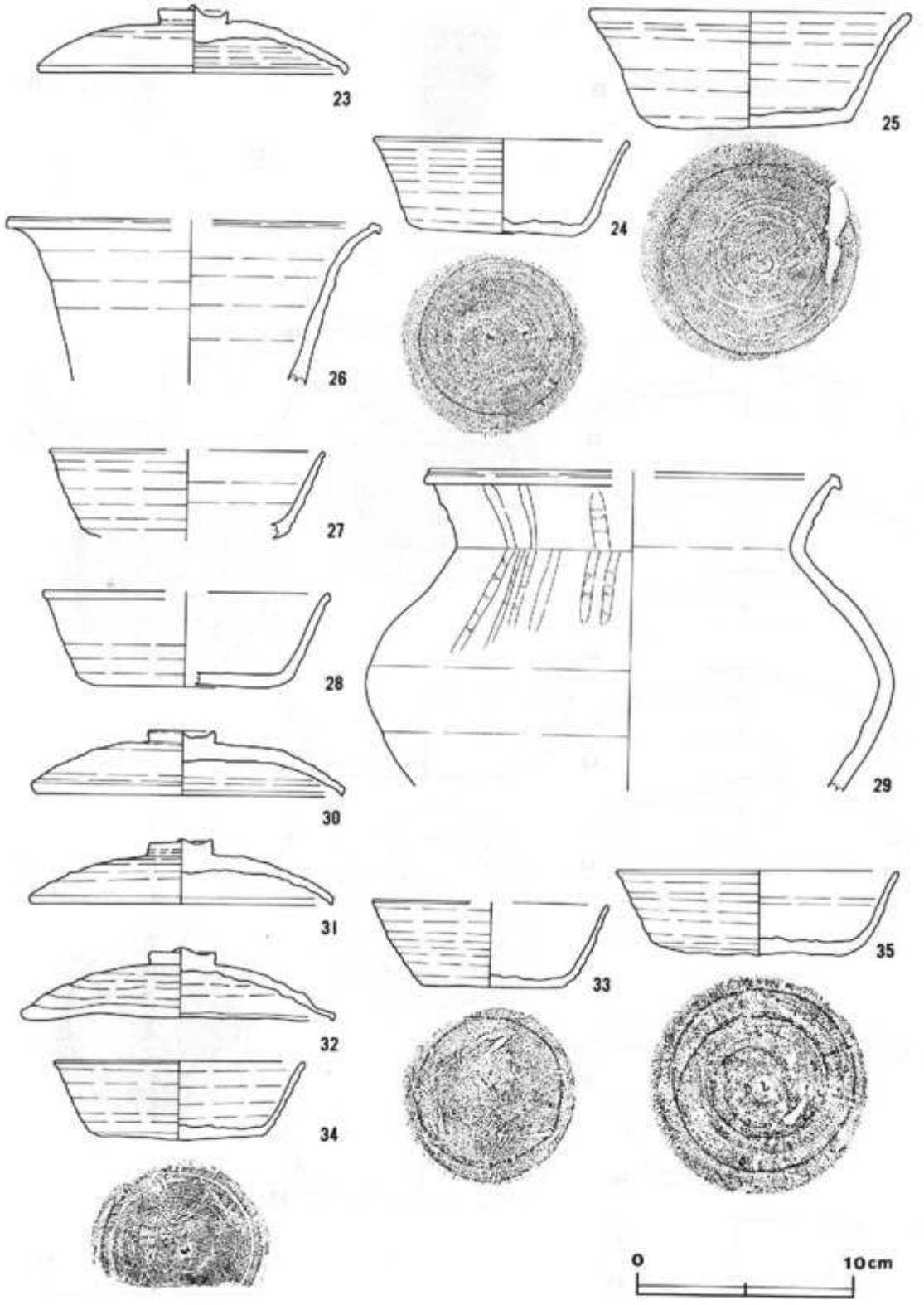


第17図　1号窯跡出土遺物実測図(2)

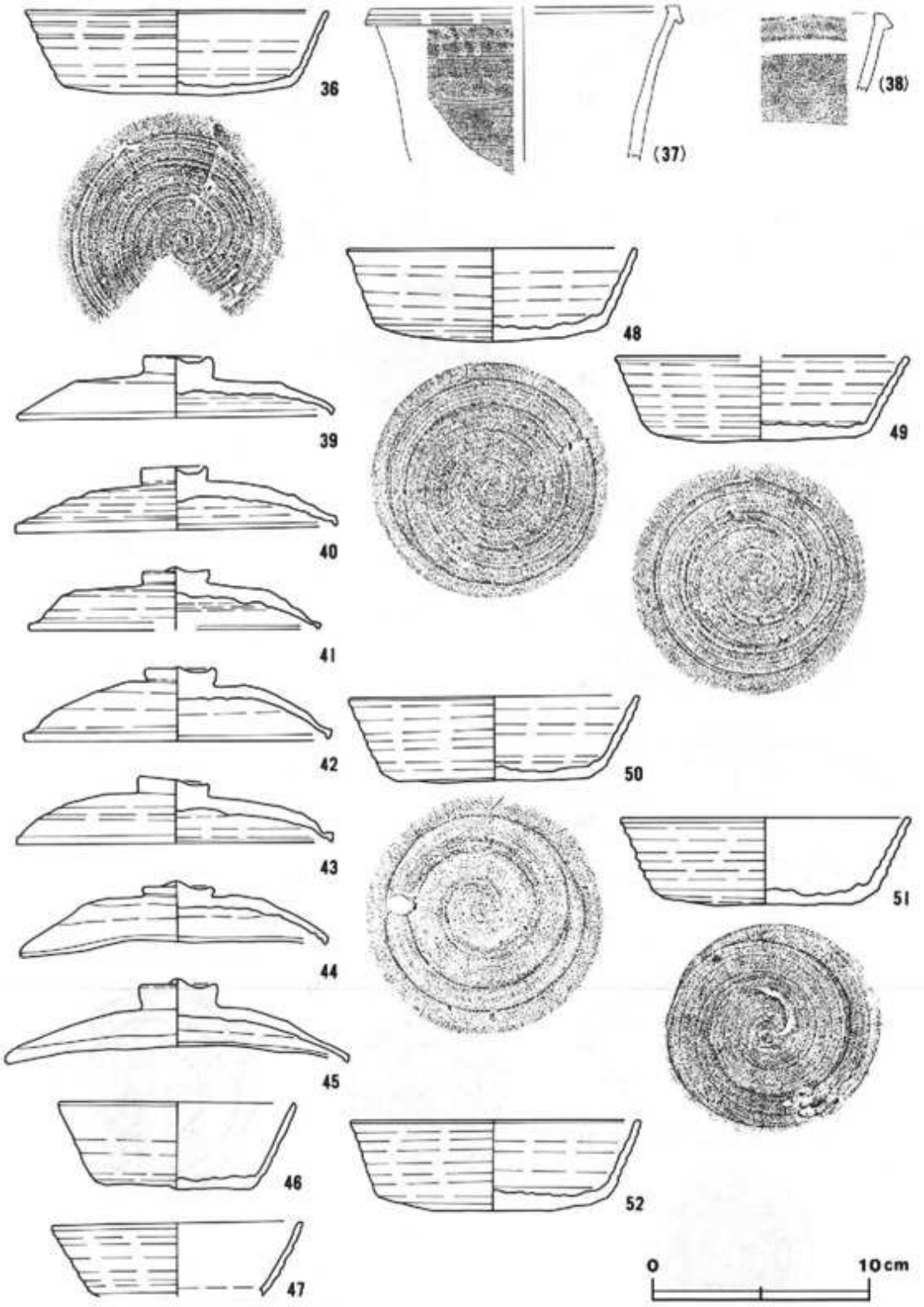
1号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏蓋	A 16.2 B 4.45 G 2.6 H 1.0	天井部は丸味をもち，扁平な擬宝珠状のつまみを有する。口縁部は，にぶく屈曲し，断面三角形を呈する。端部は，にぶい。	水挽き整形。 天井部は，¾程回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(重ね焼痕二次焼成)	I 98%
2	坏A	A (13.9) B 4.7 C 9.3	体部は，わずかに内彎しつつ立ち上がり，口縁部端部は丸い。 底部は，平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良	I 70%
3	坏A	A (15.0) B 4.7 C 9.3	体部は，下端部に幅狭の面を有し，上部は直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや丸い。底部は，平底である。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I 45%
4	坏A	A 13.7 B 4.25 C 9.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部はやや丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。内面の底部と体部の境は，明瞭な屈曲点を形成。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ切り後，無調整。全体に薄手作りで，体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	I 70%
5	坏A	A (13.6) B 4.5 C 9.0	体部は，下端部に幅狭の面を有し，上部は直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸味をもつ。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	I 70%
6	坏A	A 11.8 B 3.5 C 8.1	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は，ややとがる。底部は，本来平底である。	水挽き整形。 底部調整は不明。全体的に薄手作りである。	礫・砂粒・細砂 暗オリーブ灰色 良好(二次焼成)	I 100%
7	坏A	A (12.6) B 2.8 C (7.6)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底である。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I 焼台 40%
8	坏A	A 13.0 B 4.3 C 9.85	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部は，わずかに外反する。底部は，平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好	I 焼台 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	壺 蓋	A (10.8) B〔 2.4〕	天井部は，わずかに九味をもち，にぶく屈曲して口縁部に至る。口縁部は，開きながら下降し，端部は丸い。	水挽き整形。 天井部は，回転ヘラ削り調整。天井部内面に，水挽き痕を残す。	砂粒・細砂 灰色 良好	I 25%
10	甕 B	A (20.4) B〔 9.4〕	体部から口頸部は，くの字状を呈し，口頸部は，外反して立ち上がる。口縁部端部は内傾する。	巻き上げ，叩き成形。口頸部は，横ナデ調整。体部外面は，斜位の平行叩き調整。内面は，指によるナデ。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I
11	甕 B	A (24.4) B〔 5.4〕	体部から口頸部は，くの字状を呈し，口頸部は，強く外傾し，端部で軽く内彎する。口縁部端部は，断面三角形を呈する。	巻き上げ，叩き成形。口頸部は，横ナデ調整。体部外面は，斜位の平行叩き調整。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	I
12	甕 B	A (23.2) B〔 9.3〕	体部から口頸部は，鋭角に屈曲する。口縁部は強く外傾し，端部は垂直な面をなす。	巻き上げ，叩き成形。口頸部は，横ナデ調整。体部外面は，斜位の平行叩き調整の後，ナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I 焼台
494	甕	B〔 6.8〕 C 13.5	底部は，やや上げ底である。 体部は，大きく外傾して立ち上がる。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，斜位の平行叩き調整で，下端部はヘラ削り調整。底部は，不定方向のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I
13	鉢 B	A (32.8) B〔12.4〕	体部は，内彎しつつ立ち上がり，口縁部は水平に張り出す。口縁部端部は，平滑な面をなす。体部上半に，二条の浅い凹線が巡る。	巻き上げ，水挽き成形。口縁部から体部上半にかけては，横ナデ調整。体部中位は，指によるナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I 20%
14	鉢 B	A (37.2) B〔12.6〕	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部に強く屈曲する。口縁部端部は，上下にわずかに広がり，垂直な面をなす。	巻き上げ，水挽き成形。口縁部は，横ナデ調整。	砂粒多・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I
15	壺 C	A (12.6) B〔 3.2〕	頸部から外反して立ち上がり，口縁部は，段をなして上下に広がる。口縁部端部は丸い。	巻き上げ，水挽き成形。内・外面ともに横ナデ調整。口縁部に粘土紐痕を残す。薄手作りである。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II
16	甑	A 31.0 B 29.0 C 16.0	体部は，急な角度でやや内彎しつつ立ち上がり，口縁部は，強く外側へ屈曲し端部に至る。底部は，中央に小円孔，周囲に蜂状の孔が四つ穿たれている。	巻き上げ，叩き成形。口縁部から体部上半は横ナデで，中位に平行叩き目が部分的に残る。下半は，縦方向のヘラ削り。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好	II
17	坏 A	A (12.7) B 4.8 C 8.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は角ばっている。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ削り調整。体部内・外面の，水挽き痕はやや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	III 45%
18	坏 A	A (13.3) B 4.8 C 8.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の，水挽き痕はやや弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	III 50%
19	坏 A	A (13.1) B 4.6 C〔 8.3〕	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 暗オリーブ灰色 良好(二次焼成)	III 25%
20	坏 A	A (13.0) B 4.8 C 8.1	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部はややとがる。底部は平底で，体部との境は明瞭な稜をみせない。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部は，丁寧な作りで，水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	III 焼台 40%
21	甕 A	A (39.0) B〔11.3〕	口頸部は，外反して立ち上がり，口縁部端部は下端が突出し，内傾する。口頸部には四条の浅い凹線と，6本一条の波状文が二段施されている。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部上半は，横ナデ調整。下半は，指によるナデ調整。	礫・砂粒・細砂 極暗赤褐色 良好(二次焼成)	III
22	鉢 B	A (31.6) B〔9.85〕	体部は，ほぼ垂直に立ち上がり，口縁部は軽く屈曲する。口縁部端部は外傾する。体部上半に，二条の浅い凹線が巡る。	巻き上げ，水挽き成形。 口縁部は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	III 焼台



第18図　2号窯跡出土遺物実測図(1)

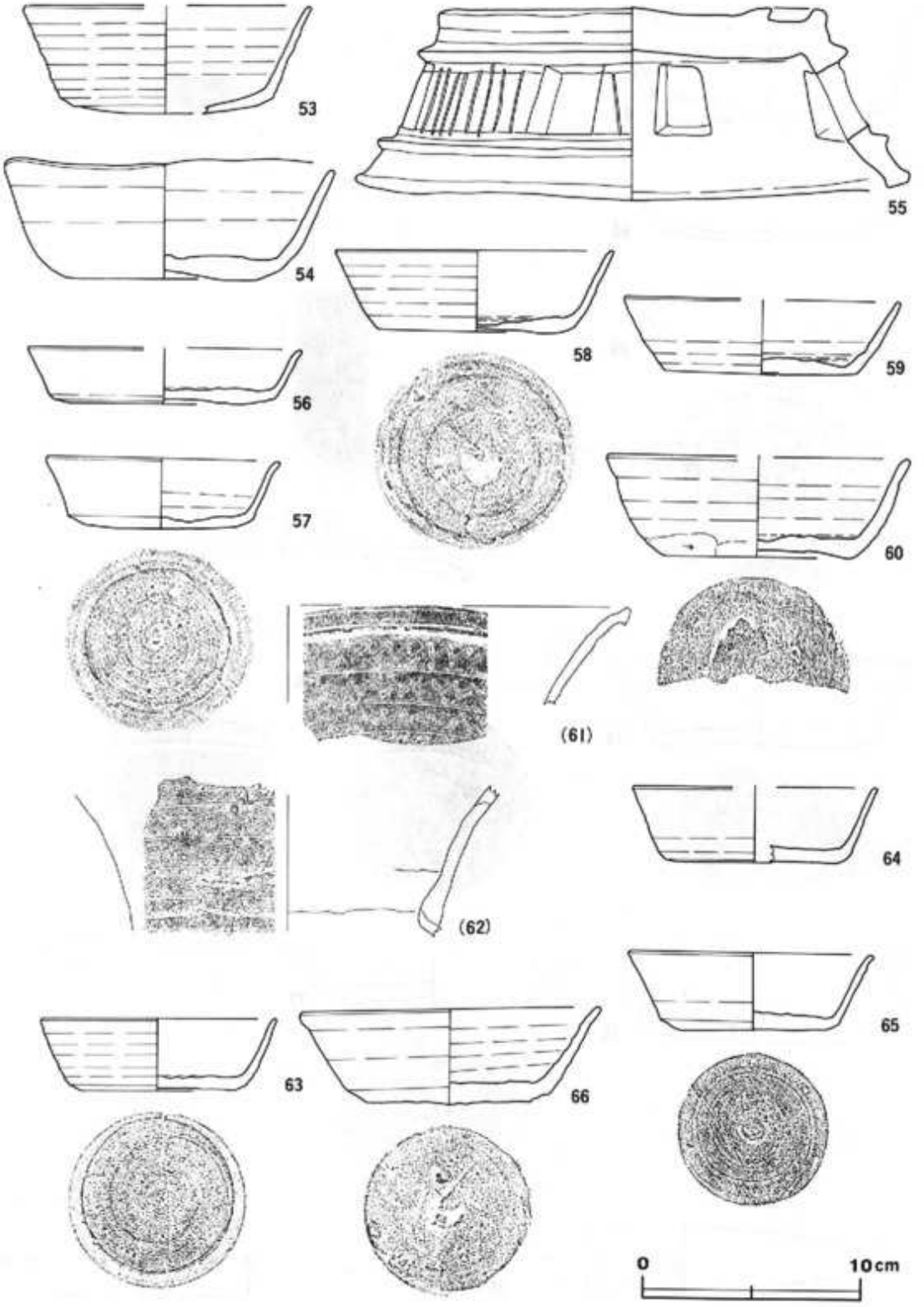


第19図　2号窯跡出土遺物実測図(2)

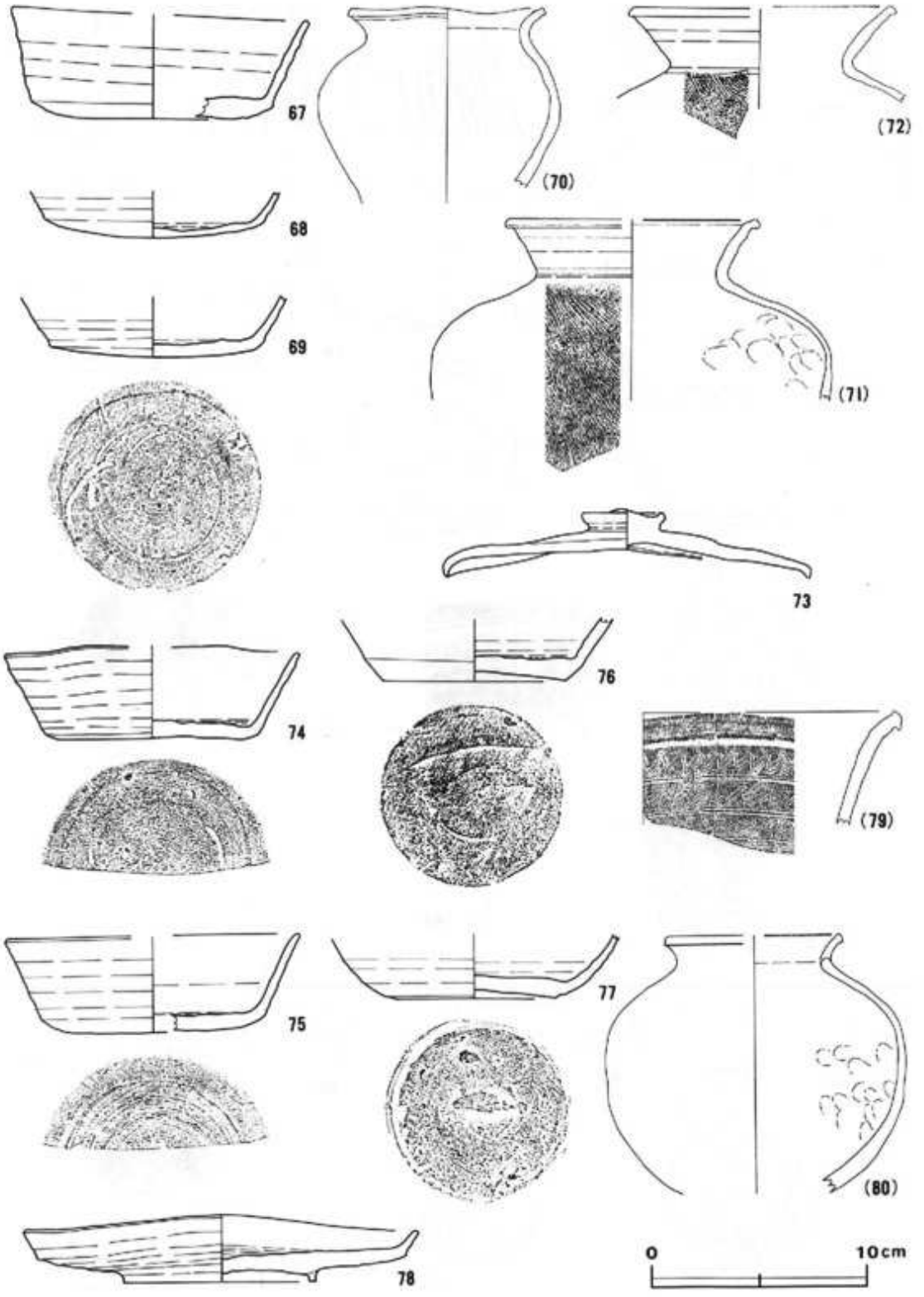
2号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
23	坏 蓋	A 14.2 B 3.2 G 3.1 H 0.9	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，垂下する。端部は鋭い。つまみは，中央部を残して上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ 70%
24	坏 A	A 11.8 B 4.8 C 7.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は，内傾する。底部は，平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅰ＋Ⅳ 90%
25	坏 A	A 15.0 B 5.4 C 9.0	大形の坏で，体部は直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。口縁部は，横ナデ調整。体部内面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 やや不良	Ⅰ＋Ⅱ 90%
26	壺 C	A (16.6) B〔 7.5〕	口頸部は，直線的に立ち上がり，端部近くで軽く外反する。端部は，上下に突出し，断面三角形を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口縁部は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅰ
27	坏 A	A (12.6) B〔 4.0〕 C (8.0)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。体部と底部の境に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 ロクロ回転不明。体部外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 50%
28	坏 A	A (13.2) B 4.45 C (8.25)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部付近で，軽く屈曲する。端部は，丸い。底部は，平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 30%
29	壺 C	A (19.0) B〔15.0〕 F 3.7	口頸部は，わずかに外反して立ち上がる。口縁部端部は，下方に突出し，断面三角形を呈す。肩部は，なだらかで，体部最大径は，上位にある。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部は，横ナデ調整。口頸部から頸部にかけて，突帯状のものがみられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(焼けひずみ)	Ⅱ＋Ⅲ
30	坏 蓋	A 14.3 B 3.0 G 3.1 H 0.6	天井部は，平坦な頂部から，なだらかに下降する。口縁部は，短く垂下する。端部は断面三角形を呈する。つまみは，扁平で，上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。口縁部は，横ナデ調整。	礫・砂粒 灰色 良好(重ね焼き痕)	Ⅲ 100%
31	坏 蓋	A 14.0 B 2.1 G 2.1 H 0.8	天井部は，浅く丸く，口縁部は，短く垂直に下り，端部は断面三角形を呈す。つまみは扁平で，中央がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8cmにわたり，回転ヘラ削り調整。口縁部は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 80%
32	坏 蓋	A 14.6 B 3.3 G 2.1 H 0.8	天井部は，浅く丸く，周辺部で軽く段をなす。口縁部は，短く垂下し，端部は断面三角形を呈する。つまみは，扁平で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり，回転ヘラ削り調整。口縁部は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅲ＋Ⅳ 焼台 98%
33	坏 A	A (11.0) B 4.0 C 7.0	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は，丸い。底部は，平底で，体部との境に幅狭の面を有する部分がある。	水挽き整形。 底部から体部下端部にかけて，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 良好	Ⅲ＋Ⅳ 60%
34	坏 A	A 11.6 B 4.6 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は，丸い。底部は，平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 70%
35	坏 A	A 13.0 B 4.0 C 9.8	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部中央は平坦であるが，外周部は丸く，体部との境は丸味をもつ。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅲ 100%
36	坏 A	A 13.9 B 3.9 C 10.6	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は丸味をもつ。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 60%
37	甕 A	A (28.4) B〔14.0〕	口頸部は，わずかに外反して立ち上がる。口縁部端部は，上下に突出し，断面三角形を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部上位には，5本一条の平行線と，6本一条の波状文が施されている。	砂粒・細砂 黒灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ

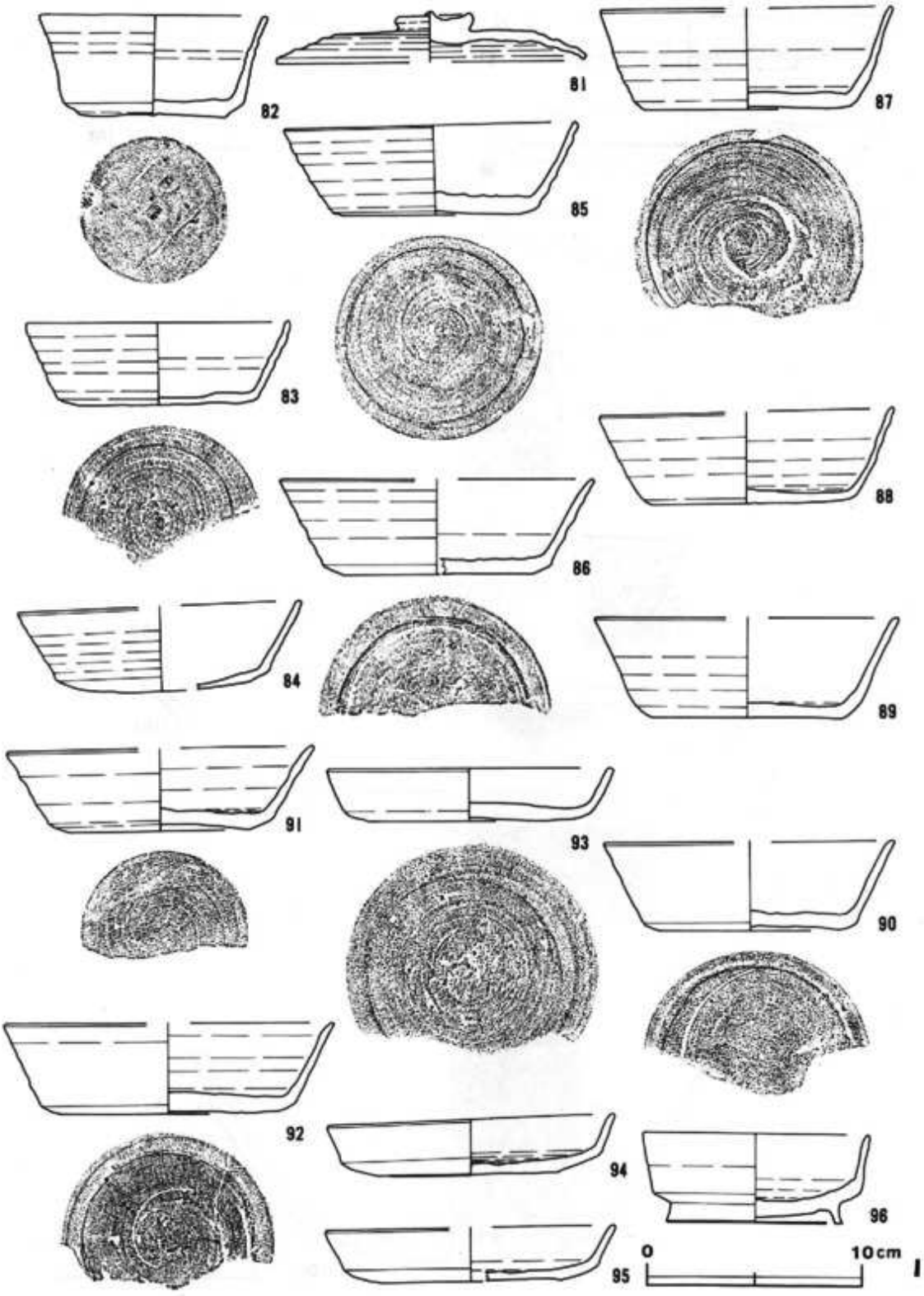
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
38	甕 A		口頸部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は，上下に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部上位に，5本一条の平行線と5本一条の波状文が1段に施されている。	細砂 オリーブ灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ
39	坏 蓋	A 14.6 B 2.9 G 3.0 H 0.9	天井部は，浅く扁平で，なだらかに下降する。口縁部は，短く垂下し，端部は鋭い。つまみは扁平で，上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部には，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。天井部内面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好(重ね焼成)	Ⅳ 80%
40	坏 蓋	A 14.8 B 3.0 G 3.1 H 0.8	天井部は，浅く丸い。口縁部は，短く垂下し，端部は丸い。つまみは扁平で，上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり，回転ヘラ削り調整。水挽き痕は弱く，丁寧な作り。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 80%
41	坏 蓋	A (14.6) B 2.9 G 3.0 H 0.9	天井部は，平坦な頂部からゆるやかに下降し，軽く段をなす。口縁部は，短く垂下し，端部は丸い。つまみは，扁平で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8.5cmにわたり，右回転を利用したヘラ削り調整。天井部内面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼成)	Ⅳ 80%
42	坏 蓋	A 14.0 B 3.4 G 3.4 H 0.7	天井部は，浅く丸く，周辺部で軽く段をなす。口縁部は短く内傾し，断面三角形状を呈する。つまみは，扁平で，上部は中央部を残してくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8cmにわたり，右回転を利用したヘラ削り調整。水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼成)	Ⅳ 90%
43	坏 蓋	A 14.6 B 3.2 G 3.2 H 0.7	天井部は，浅く丸く，周辺部で軽く段をなす。口縁部は，短く垂下し，断面三角形状を呈する。つまみは，扁平で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり，右回転を利用したヘラ削り調整。水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼成)	Ⅳ 90%
44	坏 蓋	A 14.5 B 3.2 G 3.3 H 0.7	天井部は，平坦な頂部からゆるやかに下降する。口縁部は，わずかに垂下する。つまみは，扁平で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，回転ヘラ削り調整。水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 オリーブ灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 100%
45	坏 蓋	A 16.3 B 3.8 G 3.6 H 1.4	天井部は，浅く丸い。口縁部は，短く垂下し，端部は丸い。つまみは，やや縦高で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，回転ヘラ削り調整の後，ナデ調整。	砂粒・細砂 灰色(暗灰色) 良好(二次焼成)	Ⅳ 90%
46	坏 A	A 10.8 B 4.1 C 6.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の水挽き痕は，強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 100%
47	坏 A	A 11.6 B〔3.5〕	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。	水挽き整形。 体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 50%
48	坏 A	A 13.4 B 4.4 C 10.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底風で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部及び底部内面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 100%
49	坏 A	A 13.4 B 4.0 C 10.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部内・外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 70%
50	坏 A	A 13.4 B 4.0 C 10.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部は平坦で，外周部は丸味をもつ。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 100%
51	坏 A	A 13.4 B 4.0 C 10.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部は平坦で，外周部は丸味をもつ。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部内・外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 100%
52	坏 A	A 13.4 B 4.2 C 10.7	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底風で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 80%



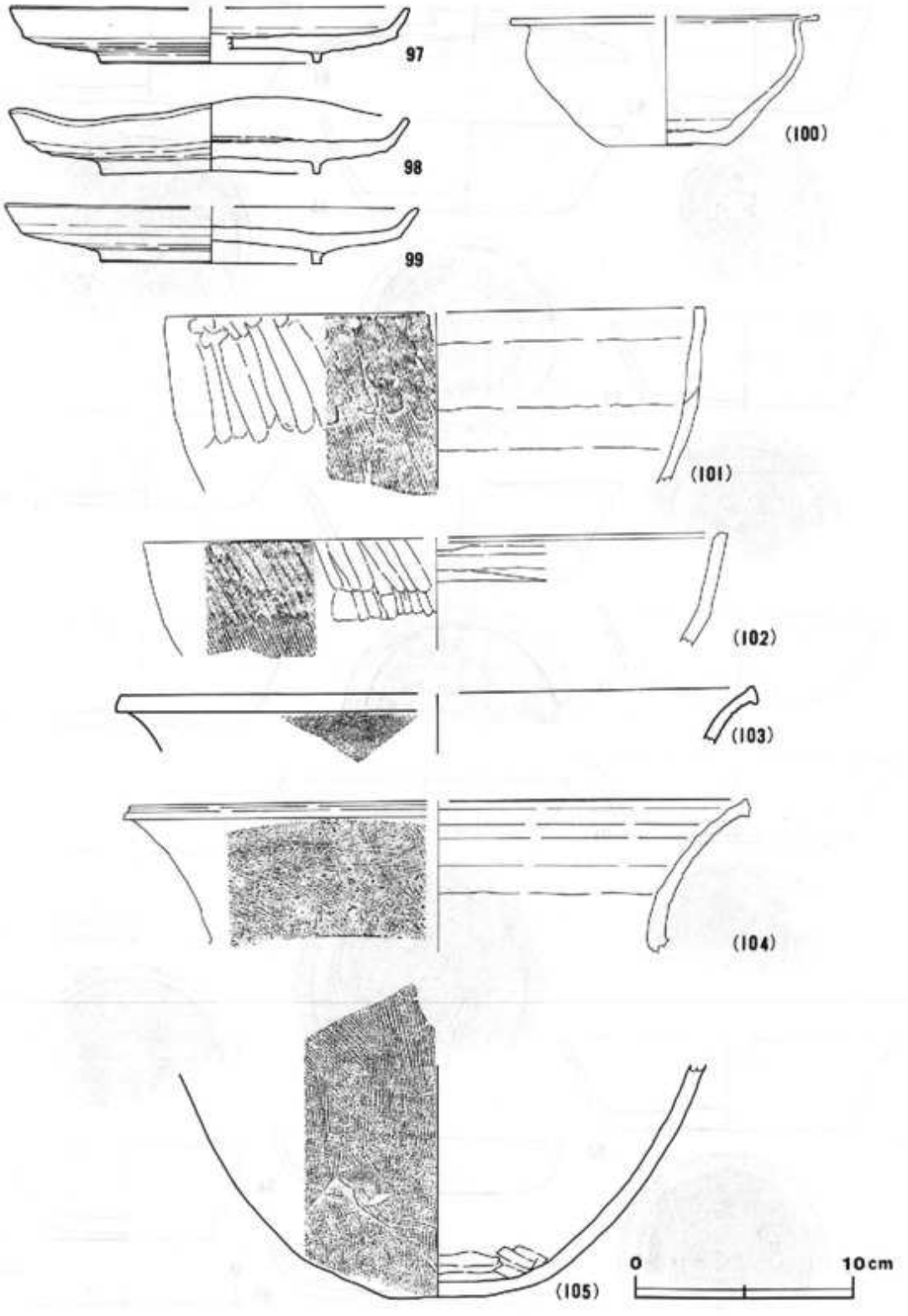
第20図　3号窯跡出土遺物実測図(1)



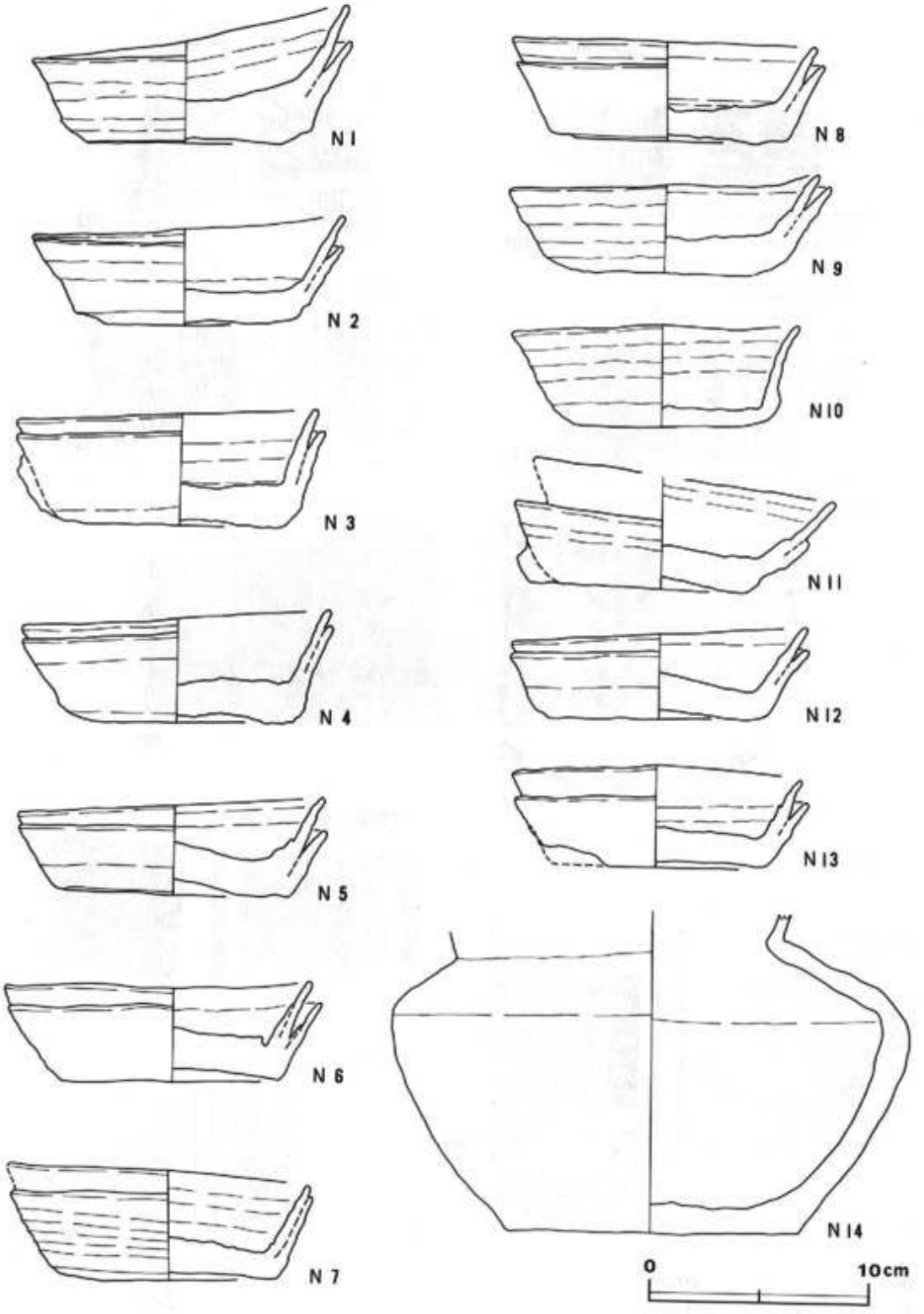
第21図　3号窯跡出土遺物実測図(2)



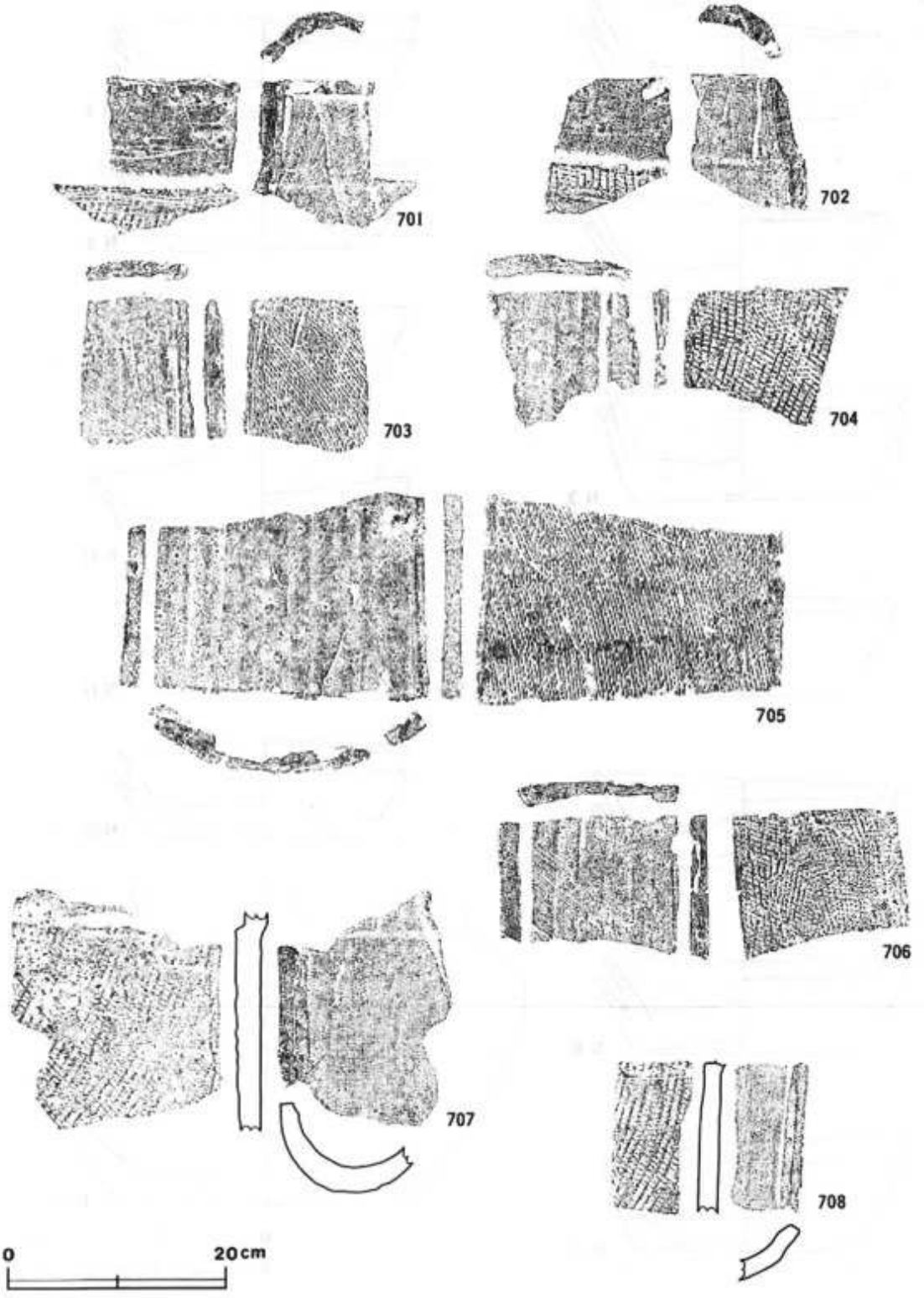
第22図　3号窯跡出土遺物実測図(3)



第23図　3号窯跡出土遺物実測図(4)



第24図　3号窯跡出土遺物実測図(5)



第25図　3号窯跡出土遺物実測図(6)

3号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
53	坏 A	A (13.1) B 5.0 C (9.9)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底風で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅱ 10%
54	坏 A	A 15.1 B 5.3 C 8.6	大形の坏で，体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部が上げ底状を呈するが丸底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラナデ調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色・灰白色 良好(一部不良)	Ⅲ 100%
55	圏足円面硯	A (18.0) B 8.9 C (25.6)	外縁の内側にU字形海を巡らし，その内側に径12.8cmの陸をもつ。脚部は，外反しながら下降し，外縁側面と脚部に，断面三角形の突帯が巡る。	硯部と脚部とは，一体の作りである。脚部には，6か所のヘラ切りによる方形の透し孔とその間に，8～9本の凹線がある。	礫多・砂粒 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ＋灰原 40%
56	坏 B	A 12.5 B 2.6 C 10.4	体部は，短く直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 暗赤灰色 良好	Ⅳ 70%
57	坏 A	A 10.4 B 3.2 C 6.9	体部は直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部はやや鋭い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱く，端正な作りである。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅴ 90%
58	坏 A	A 12.7 B 3.8 C 9.2	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 100%
59	坏 A	A (12.6) B 3.5 C (9.0)	体部は，やや内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，全面回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅴ 50%
60	坏 A	A (13.8) B 4.65 C (8.6)	体部は，内彎しつつ立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は，焼きひずみによるものか，若干上げ底気味である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，中心部のみ手持ちヘラ削り調整。体部下端部は，手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 青灰色 普通(二次焼成)	Ⅴ 50%
61	甕 A	A (62.6)	口頸部は，外反しながら立ち上がる。口縁部は，上下に突出し，先端はやや鋭い。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，3本一条の波状文と浅い凹線が，交互に四段巡る。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ
62	甕 A	B (14.0)	頸部破片。頸部は，直線的に立ち上がり，上部で軽く外反する。4本一条の波状文と浅い凹線が，四段施文されている。	巻き上げ，水挽き成形。頸部基部外面は，ヘラナデ調整。基部内面は，指ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好	Ⅴ＋Ⅵ 54と同一個体か
63	坏 A	A 10.7 B 3.35 C 7.1	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ＋Ⅶ 焼台 80%
64	坏 A	A (11.1) B 3.5 C (7.4)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ 50%
65	坏 A	A 11.1 B 3.6 C 6.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は，丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ＋Ⅶ 焼台 90%
66	坏 A	A 13.8 B 4.4 C 7.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は，丸い。底部は平底で，体部との境に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，中心部を除いて回転ヘラ削り調整。体部内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 不良	Ⅵ 100%
67	坏 A	A 13.8 B 4.9 C 11.3	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平坦である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅵ＋Ⅶ 60%

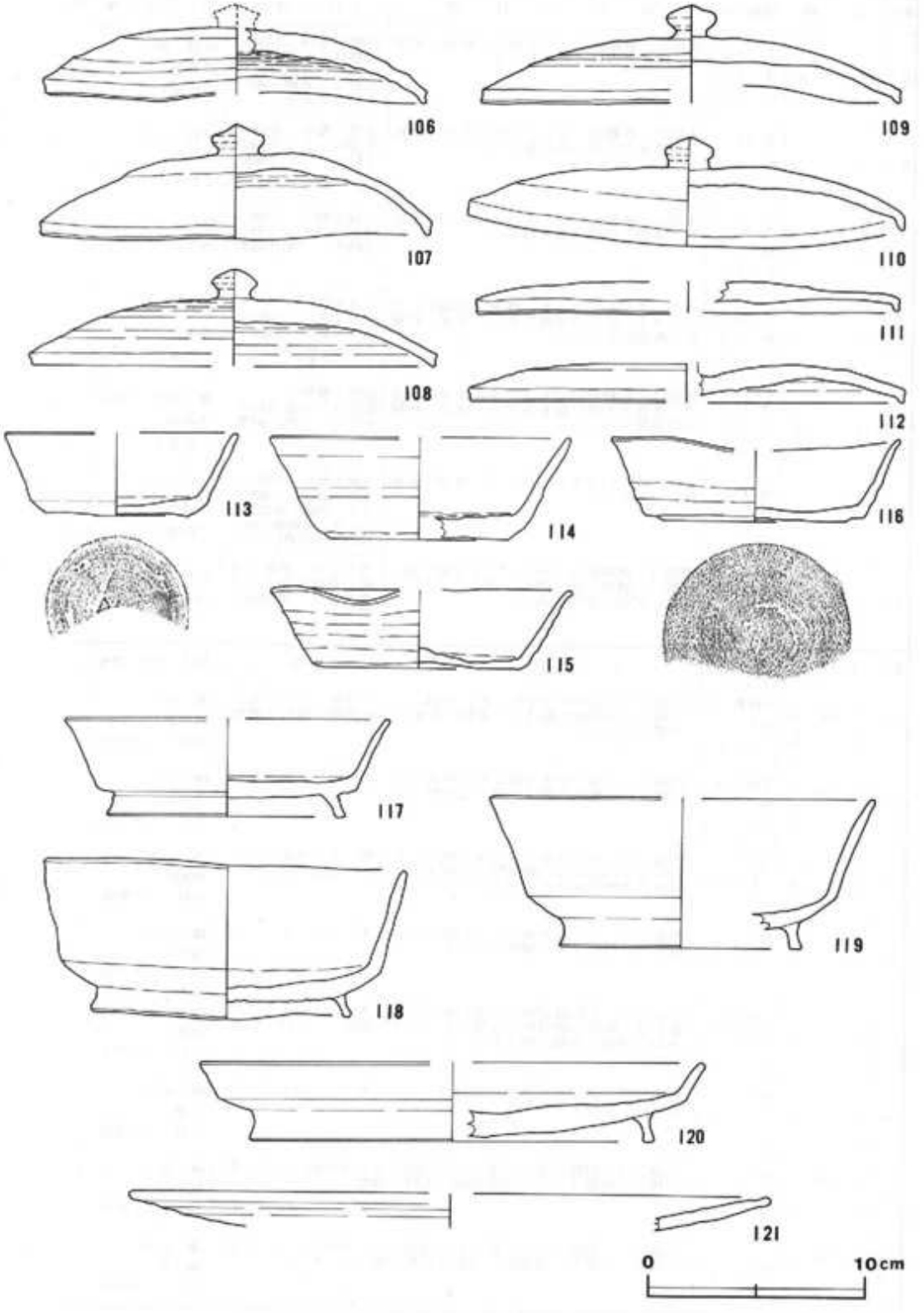
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
68	坏 A	B〔 2.2〕 C 10.2	体部下半以下の破片で，体部は，直線的に立ち上がるものとみられる。底部は丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転を利用したヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸をなす。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅵ 40%
69	坏 A	B〔 2.9〕 C 9.5	体部下半以下の破片で，体部は，直線的に立ち上がるものとみられる。底部は丸底風で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸をなす。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅵ 焼台 60%
70	甕 B	A 17.7 B〔18.2〕	口頸部は，短く外反して端部に至る。端部は，角ばり内傾する。体部は，肩部を有さず，中位に最大径をもつ。	巻き上げ，水挽き成形。口縁部から体部上半は，横ナデ。体部下半は，外面が横位のヘラ削り，内面は指ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ＋Ⅶ 60%
71	甕 B	A (23.1) B〔17.0〕	口頸部は，外傾して立ち上がり，端部付近で更に屈曲する。端部は内傾する。体部は，強く張る肩部を有し，上位に最大径をもつ。	巻き上げ，叩き成形。口頸部は，横ナデ調整。頸部基部は，横位のヘラナデ調整。体部は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ
72	甕 B	A (23.5) B〔 9.1〕	口頸部は，わずかに外彎して立ち上がる。端部は，上下にやや広がり，内傾する。口頸部から体部は，くの字状を呈する。	巻き上げ，叩き成形。口頸部は，横ナデ調整。頸部基部は，回転ヘラナデ調整。体部は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰色(暗オリーブ色) 良好	Ⅵ＋Ⅶ 焼台
73	坏 蓋	A 17.1 B 2.6 G 3.7	天井部は，浅く扁平である。口縁部は，短く垂下し，端部はややとがる。つまみは扁平で，上部は，中央部を残してくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅶ 焼台 100%
74	坏 A	A (13.6) B 4.2 C (10.0)	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整とみられる。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗紫灰色 良好	Ⅶ 焼台 50%
75	坏 A	A (13.5) B 4.5 C (8.4)	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。体部は平底で，体部との境に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ 焼台 40%
76	坏 A	B〔 2.9〕 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がるものとみられる。底部は，平底で，体部との境は鋭い稜をなす。内面の体部基部は，明瞭な屈曲点をなす。	水挽き整形。 底部は，一方向の静止ヘラ削り調整。体部下端部は，右回りの手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰褐色 普通	Ⅶ 焼台 40%
77	坏 A	B〔3.05〕 C 7.9	体部は，内彎気味に立ち上がる。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。底部に，瓦の斜格子叩き目が付着している。	水挽き整形。 底部は，軽いナデ調整で，切り離し痕を残す。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ 焼台 40%
78	鉢	A 18.3 B 3.2 D 9.0 E 0.55	体部は短く，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸味をもち，短く垂下する高台が付く。高台端部は，角張っている。	水挽き整形。(左回り) 口縁部及び高台部付近は，横ナデ調整。底部外周部の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ 焼台 100%
79	甕 A	A (46.8) B〔10.6〕	口頸部は，直線的に立ち上がり，端部付近で軽く外反する。端部は，上下に突出し，断面三角形状をなす。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，4本一条の波状文と，1－2本一条の浅い凹線が，四段以上施されている。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 良好	Ⅶ 焼台
80	甕 B	A (16.0) B〔24.0〕	口頸部は短く，外反して立ち上がり，端部は外下方にやや突出し，内傾する。体部は，最大径が中位にあり，ほぼ球形を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部は，横ナデ調整。体部外面はナデ調整。体部内面には，指による押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅶ 焼台 30%
81	坏 蓋	A (14.4) B 2.3 G 3.6 H 0.9	天井部は，浅く扁平である。口縁部は，わずかに内彎し，端部は丸い。つまみは扁平で，上部は，中央を残してくぼむ。	水挽き整形。 天井部は径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。天井部内・外面の水挽き痕は，強い。	砂粒・細砂 浅黄橙色 不良	Ⅶ 焼台 40%
82	坏 A	A (10.7) B 4.7 C 7.0	体部は，中位で軽く外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。体部内面の基部は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。 底部は，一方向の静止ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰オリーブ色 良好	Ⅶ 焼台 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
83	坏 A	A (12.4) B 3.8 C (9.4)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 焼台 50%
84	坏 A	A (13.2) B 3.8 C (9.8)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸で，やや強い。	砂粒・細砂 褐灰色 良好	Ⅷ 焼台 40%
85	坏 A	A (13.6) B 4.2 C 9.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱く，底部内面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 緑灰色 良好	Ⅷ 焼台 50%
86	坏 A	A (14.6) B 4.5 C (10.8)	体部は，やや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は，ややとがる。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 焼台 40%
87	坏 A	A (13.6) B 4.8 C (9.7)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 淡黄色 不良	Ⅷ 焼台 40%
88	坏 A	A (13.7) B 4.35 C 9.3	体部は薄く，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅷ 焼台 40%
89	坏 A	A (14.4) B 4.7 C 8.8	体部は，中位で軽く外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平底である。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面は，平滑である。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅷ 焼台 40%
90	坏 A	A (13.5) B 4.2 C (10.0)	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。外周部には，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部内・外面は，平滑である。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 焼台 50%
91	坏 A	A (14.2) B 3.9 C (8.4)	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。体部との境に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，左回転利用のヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 普通	Ⅷ 焼台 50%
92	坏 A	A (15.3) B 4.3 C (8.1)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍の厚みをもつ。体部との境に幅狭の面を有す。	水挽き整形。 底部は，左回転利用のヘラ削り調整。体部内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色(明褐灰色) やや不良	Ⅷ 焼台 50%
93	坏 B	A 13.2 B 2.5 C 10.7	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底気味で，体部との境は丸く不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅷ 焼台 80%
94	坏 B	A 13.3 B 2.7 C 12.3	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平坦な中央部と，やや傾斜をもつ外周部とに分かれ，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。底部内面を除いて水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 良好	Ⅷ 焼台 50%
95	坏 B	A (13.4) B 2.55 C (11.9)	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平坦な中央部と，やや傾斜をもつ外周部とに分かれ，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅷ 焼台 50%
96	高台付坏	A 10.5 B 4.2 D 8.2 E 1.0	体部は，直立気味に立ち上がる。口縁部端部は角張る。底部は丸く，やや外側にふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整後，高台貼り付け。体部内・外面は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好	Ⅷ 焼台 90%
97	鉢	A (18.2) B 2.55 D (10.2) E 0.45	体部は短く，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平坦で，短く垂下する高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 口縁部及び高台部付近は，横ナデ調整。底部外周部の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅷ 焼台 50%

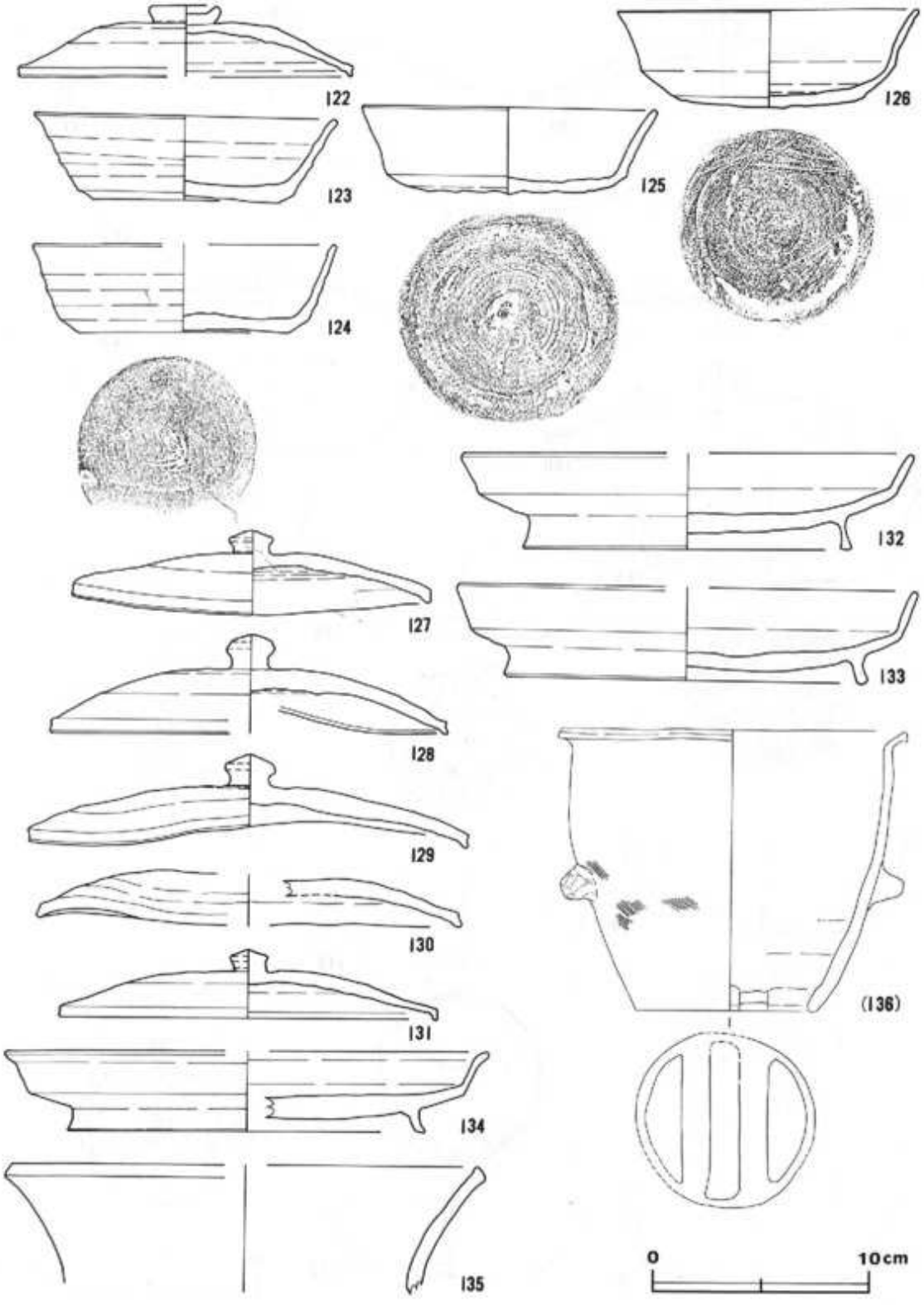
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
98	盤	A 18.2 B 3.0 D 10.1 E 0.6	体部は短く，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平坦で，短く垂下する高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 口縁部及び高台部付近は，横ナデ調整。底部外周部の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色(赤灰色) 良好	Ⅷ 焼台 60%
99	盤	A (18.9) B 2.6 D (10.2) E 0.5	体部は短く，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平坦で，短く垂下する高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 口縁部及び高台部付近は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅷ 焼台 20%
100	鉢 B	A (28.3) B 11.7 C 11.1	口頸部は，器厚を増しながら水平にのび，端部は丸い。体部は，上位に最大径を有し，下位は，器厚を増しながら底部に至る。底部は平底である。	巻き上げ，水挽き成形。体部外面中位から内面にかけては，横ナデ調整。体部下位及び底部は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色(灰白色) 不良	Ⅷ 焼台 30%
101	鉢 E	A (49.6) B〔16.3〕	体部は，やや内彎気味に立ち上がる。口縁部はほぼ直立し，端部は水平である。内・外端部は，鋭い。	巻き上げ，水挽き成形。体部は，斜位の平行叩き調整で，口縁部及び端部は，ヘラ削り調整。体部内面は，横位の指ナデ。	礫・砂粒 灰色 普通(二次焼成)	Ⅷ 焼台
102	鉢 E	A (54.0) B〔10.3〕	体部は，外傾した後軽く内彎する。口縁部端部は水平で，内・外端部は，鋭い。	巻き上げ，水挽き成形。体部は，平行叩き調整で，口縁部はヘラナデ，端部はヘラ削り調整。内面は，横位の指ナデ。	礫・砂粒 灰白色 良好	Ⅷ 焼台
103	甕 A	A (58.0)	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，上下に突出し内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，4本一条の波状文と，3本一条の浅い回線が施されている。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 良好	Ⅷ 焼台
104	甕 A	A 57.0 F 12.7	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，上下に突出し内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，斜位の平行叩きの後，5本一条の波状文と平行回線が，施されている。	礫・砂粒・細砂 黒褐色(灰白色) 良好	Ⅷ 焼台
105	甕 A	B〔21.0〕	体部下半だけで，底部は丸底である。	巻き上げ，叩き成形。体部及び底部外面は，平行叩き調整。底部内面は，指によるナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅷ 焼台
N1	坏 A	A 14.2 B 4.1 C 9.0	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。体部に断層状の亀裂がみられる。	水挽き整形。(右回り) 底部は，切り離し痕を残すが，調整痕不明。水挽き痕が，明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 550g
N2	坏 A	A 14.1 B 3.7 C 8.5	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。体部は，ゆがんでいる。	水挽き整形。(不明) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。水挽き痕が，明瞭である。	礫・砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ ヘラ記号
N3	坏 A	A 14.0 B 4.5 C (9.1)	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。底部は，器面がほとんど残存しないが，平底で体部との境に面を有するものとみられる。	水挽き整形。(左回り) 水挽き痕が，明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 475g
N4	坏 A	A 14.0 B 4.1 C (8.8)	体部は，直線的に立ち上がる。底部は，欠失部が多いが，平底で体部との境に面を有するものとみられる。体部に，断層状の亀裂がみられる。	水挽き整形。 水挽き痕が，明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 425g
N5	坏 A	A 14.0 B 3.1 C 9.0	全体に押しつぶされているが，体部は直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。水挽き痕が，明瞭である。内面の体部基部に，径1cm前後の粘土粒が4か所付着している。	礫・砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 440g
N6	坏 A	A 13.9 B 3.5 C 10.1	全体に押しつぶされているが，体部は器厚を減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，本来は体部との境に面を有していたものとみられる。	水挽き整形。 水挽き痕が，明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 450g
N7	坏 A	A 13.8 B 3.9 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。体部に断層状の亀裂がみられる。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。小さな凹凸の水挽き痕が，明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ ヘラ記号 410g

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
K8	坏 A	A 13.8 B 3.6 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削りとみられる。水挽き痕は，不明瞭である。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ ヘラ記号カ 470g
N9	坏 A	A 14.2 B 4.0 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ ヘラ記号
N10	坏 A	A (13.0) B 5.0 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。(不明) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 浅黄色	Ⅷ ヘラ記号
N11	坏 A	A (13.8) B 4.1 C (8.5)	大きくゆがんでいるが，体部は直線的に立ち上がる。底部は平底である。体部に層状の亀裂がみられる。	水挽き整形。 水挽き痕は，明瞭である。内面の体部基部に，径1cm前後の粘土粒が5か所付着している。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 400g (焼成実験)
N12	坏 A	A 13.5 B 3.1 C 8.4	体部は，直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。体部に層状の亀裂がみられる。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ ヘラ記号 380g (焼成実験)
N13	坏 A	A 13.5 B 3.1	全体に押しつぶされているが，体部は直線的に立ち上がる。	水挽き整形。(不明) 水挽き痕は，不明瞭である。内面の体部基部に，径1cm前後の粘土粒が6か所付着している。	砂粒・細砂 浅黄色 2枚重ね	Ⅷ 400g (焼成実験)
N14	壺 C	B (14.6) C 13.4	頸部は，直線的に立ち上がるが上部欠損。体部は，肩部が強く張り，最大径は上位にある。底部は平底である。	巻き上げ，水挽き成形。器面がほとんど残存せず，調整痕不明。	砂粒・細砂 浅黄色	Ⅷ 2,100g

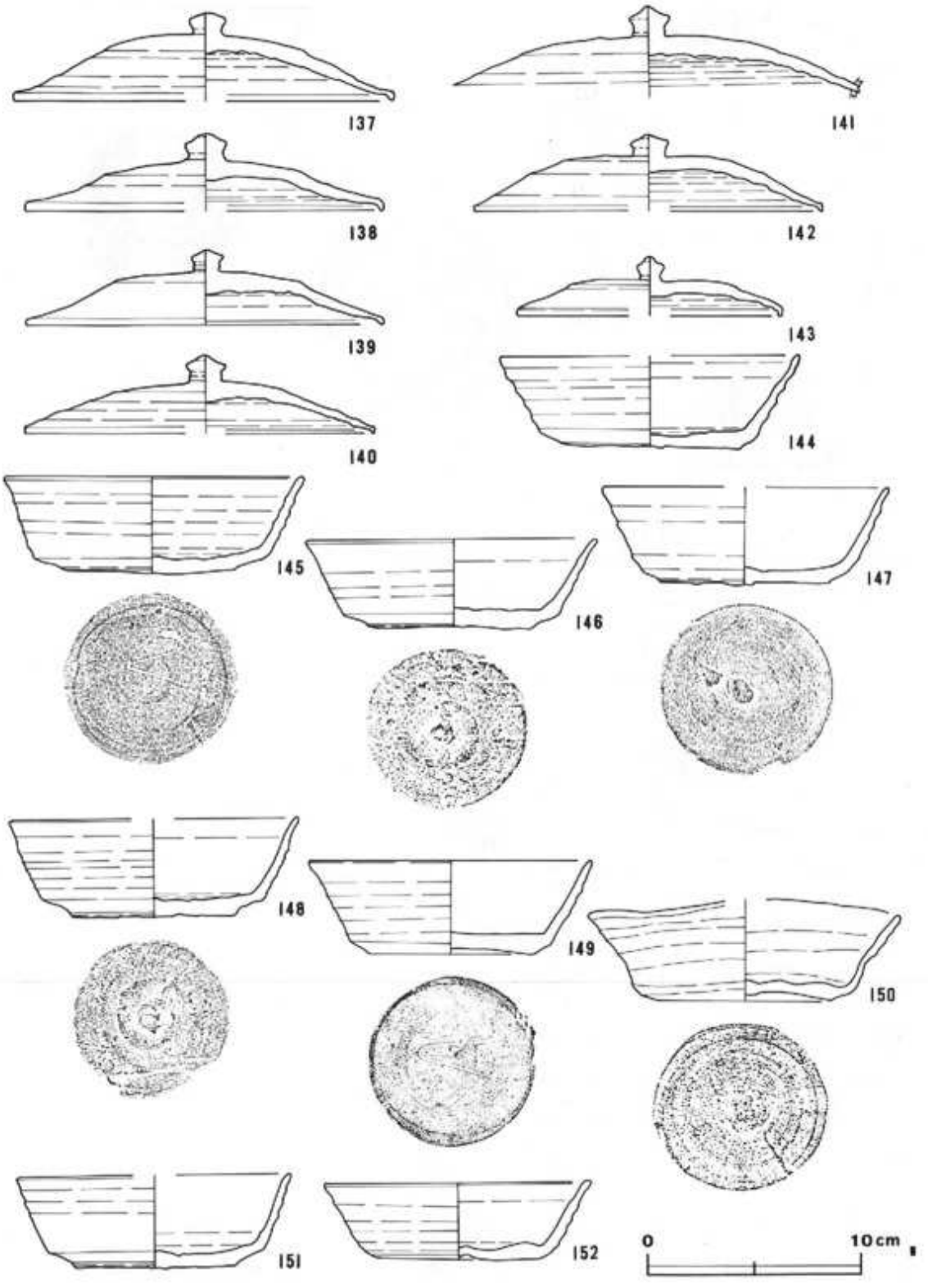
番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
701	玉縁付丸瓦	玉縁長 9.0 厚さ 1.0~1.5	凸面には，格子叩きが施され，凹面には，布目痕（9×9条）が残る。玉縁部凸面はナデ調整。側面は，凹面側に面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黒灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台
702	玉縁付丸瓦	玉縁長 8.0 厚さ 1.5~2.1	凸面には，格子叩きが施され，凹面には，布目痕（9×9条）が残る。玉縁部凸面は，横ナデ調整。	礫・砂粒 黒灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台カ
703	平瓦	厚さ 1.5~2.0	凹面には，糸切り痕と小札痕が残り，布目痕（9×9条）がみられる。凸面には，縄目叩きが施されている。側面の凹面側に面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台
704	平瓦	厚さ 1.0~2.3	凹面には，小札痕が残り，布目痕（9×9条）がみられる。凸面には，斜格子叩き調整が施されている。	礫・砂粒 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台
705	平瓦	広幅 25.5 厚さ 2.4	凹面には，小札痕が残り，布目痕（9×8条）がみられる。凸面には，短位の縄目叩きが施されている。側面には，凹・凸両面側に面取り調整が施されている。	礫・砂粒 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台
706	平瓦	厚さ 1.2~2.3	凹面には，小札痕が残り，布目痕（9×8条）がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。	礫・砂粒 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台
707	玉縁付丸瓦	厚さ 1.5~2.1	凸面には，斜格子叩きが施され，凹面には，布目痕（8×8条）が残る。側面は，凸・凹両面側に面取り調整。	礫・砂粒 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅷ 焼台
708	玉縁付丸瓦	厚さ 1.5	凸面には，斜格子叩きが施され，凹面には，布目痕（8×9条）が残る。側面は，凹面側に面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黄灰色 良好(二次焼成)	Ⅷ 焼台



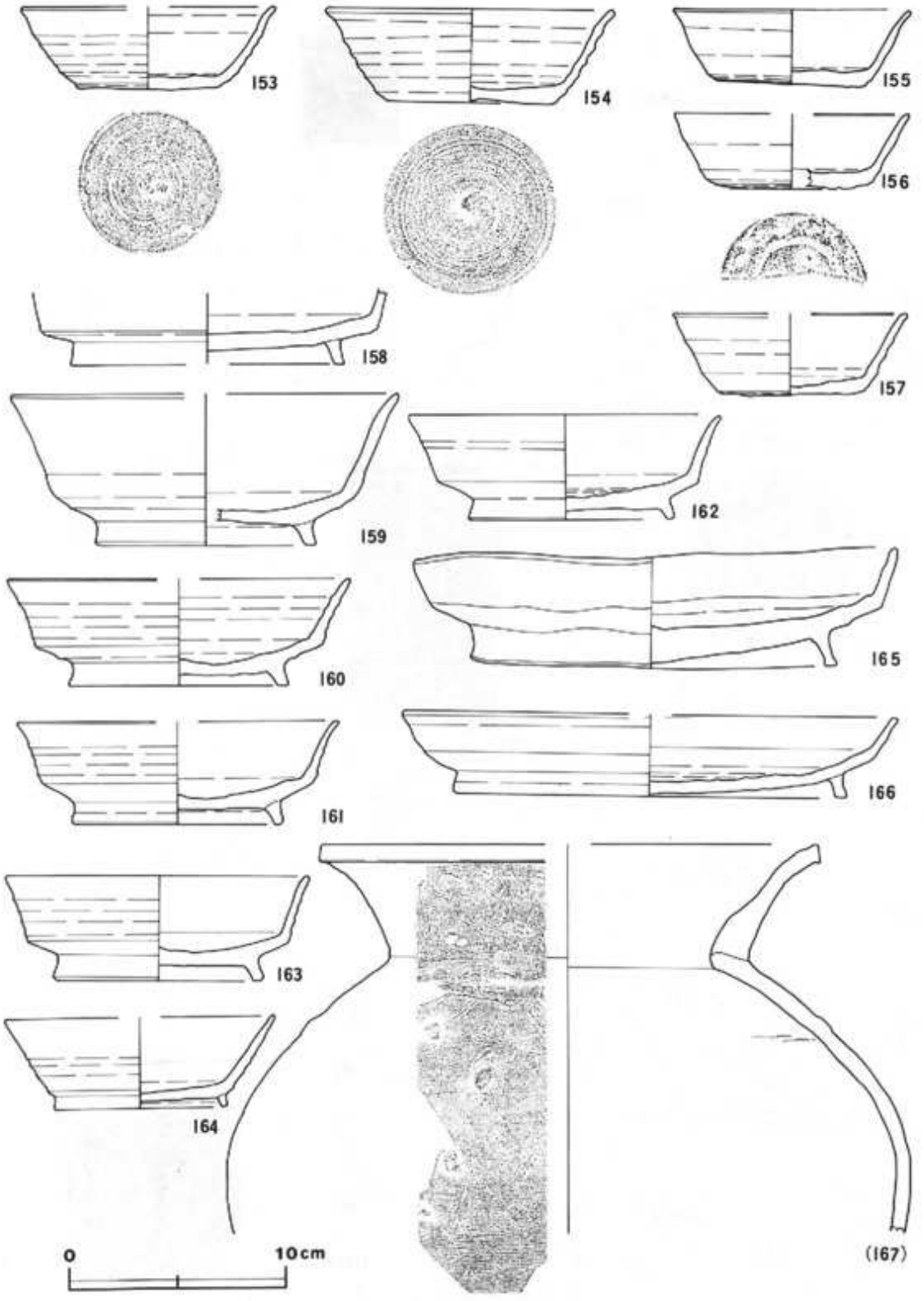
第26図　4号窯跡出土遺物実測図(1)



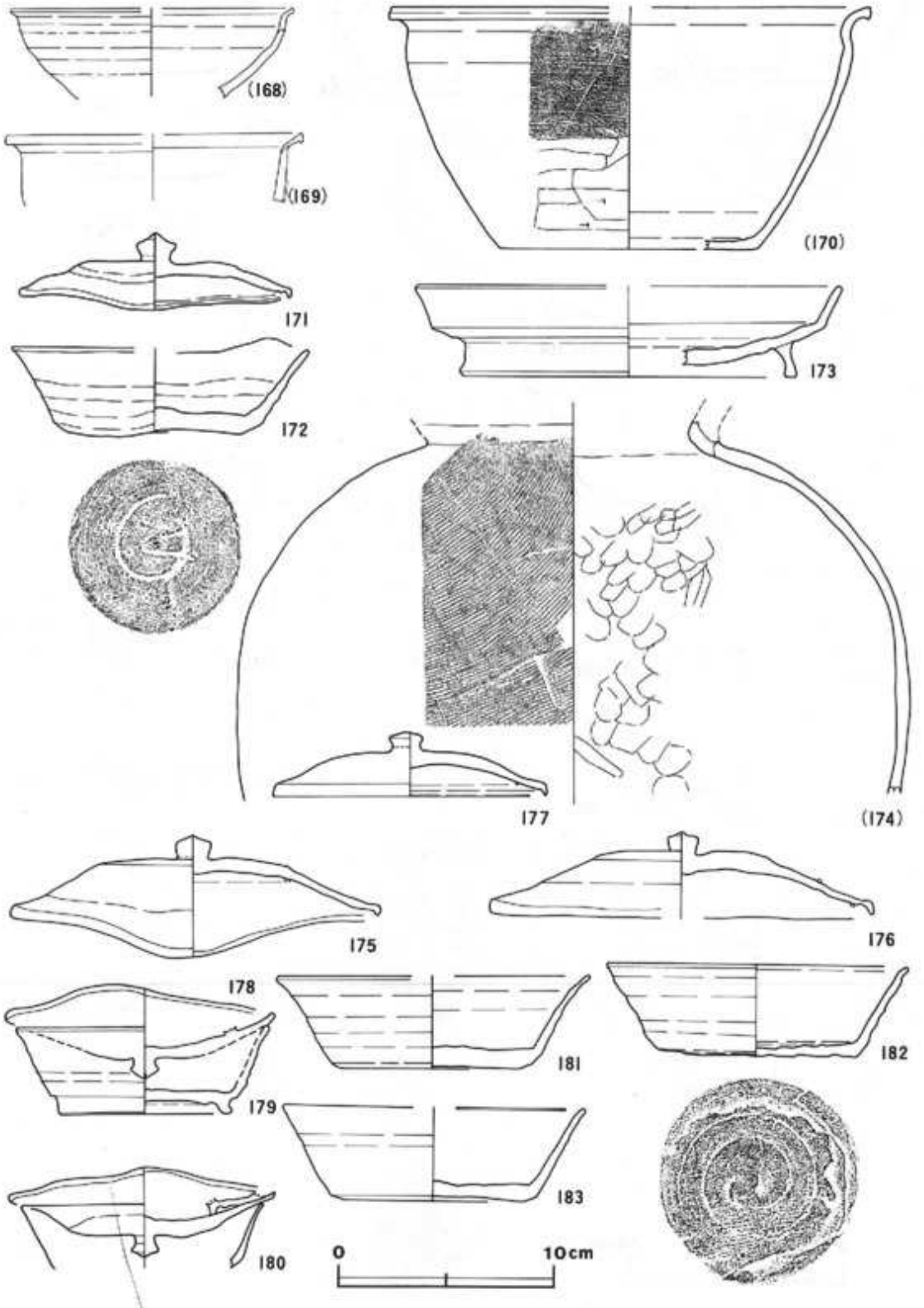
第27図　4号窯跡出土遺物実測図(2)



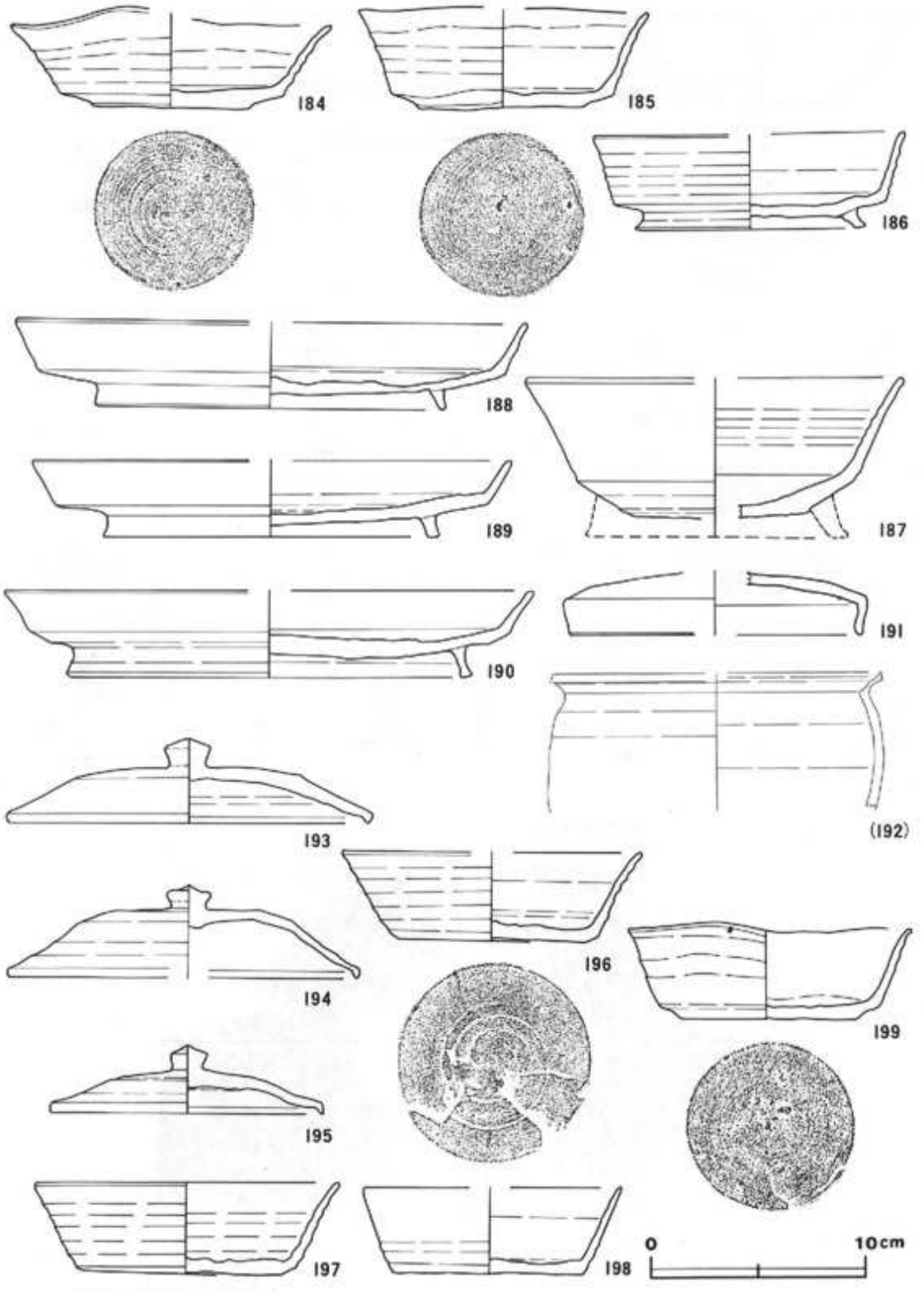
第28図　4号窯跡出土遺物実測図(3)



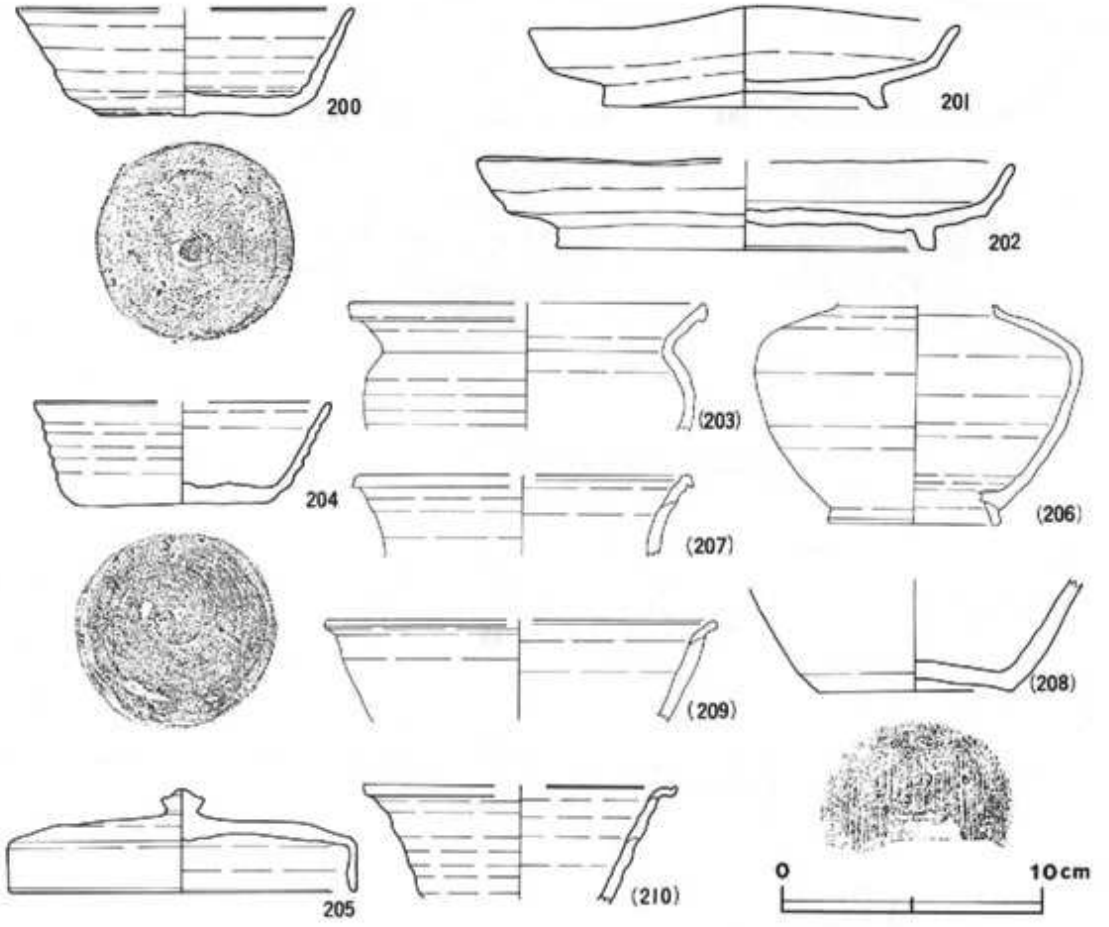
第29図　4号窯跡出土遺物実測図(4)

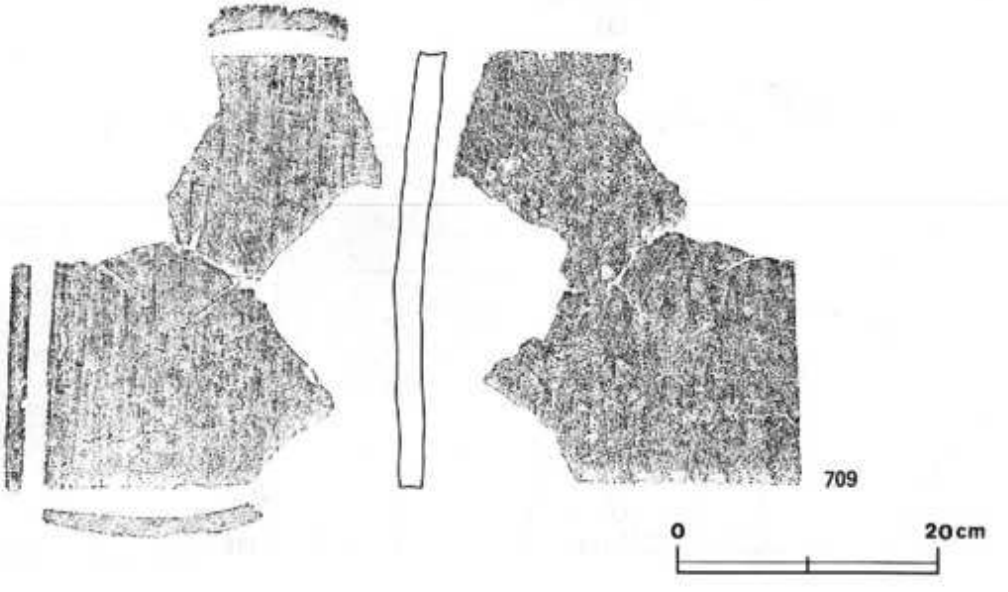


第30図　4号窯跡出土遺物実測図(5)

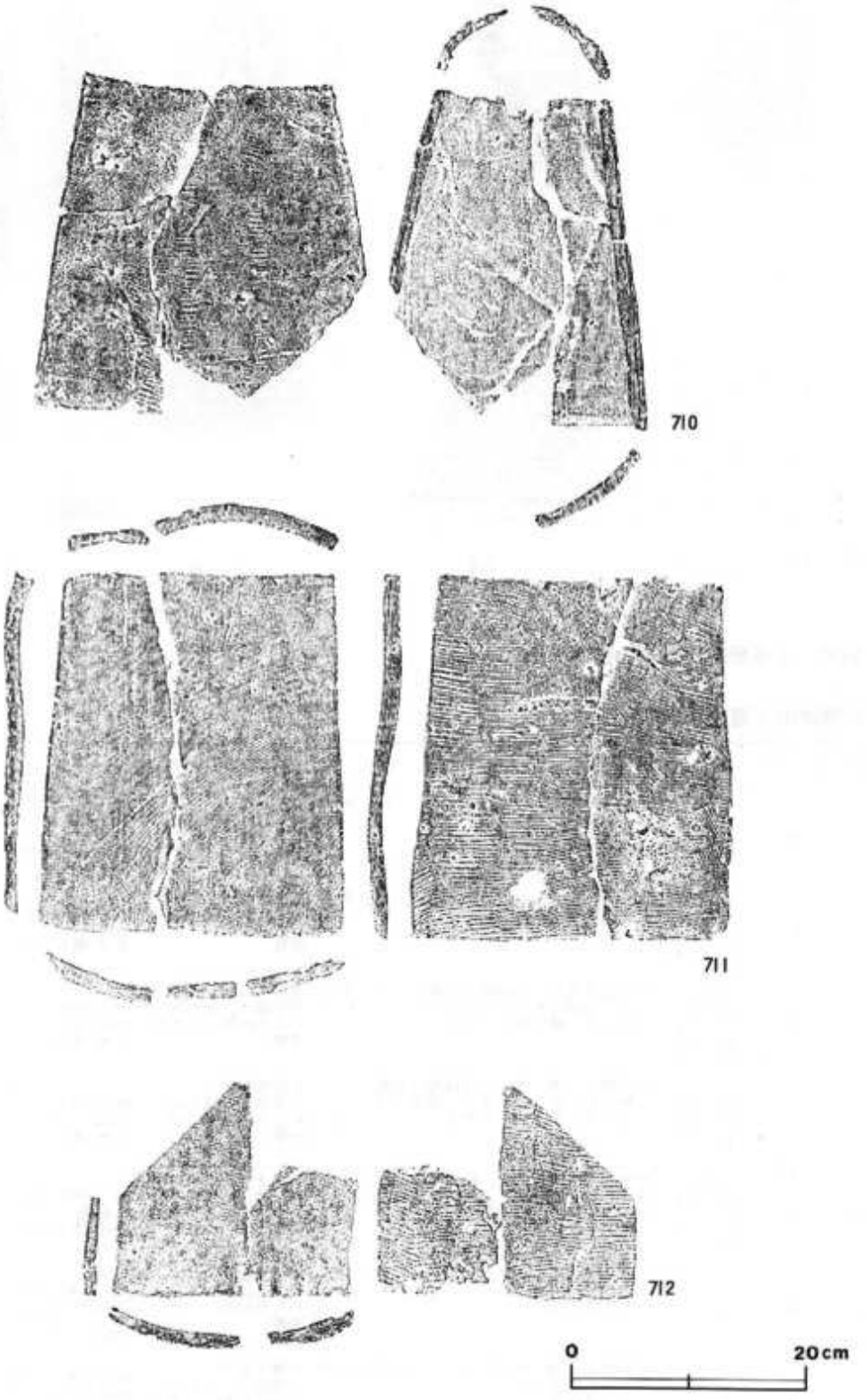


第31図　4号窯跡出土遺物実測図(6)

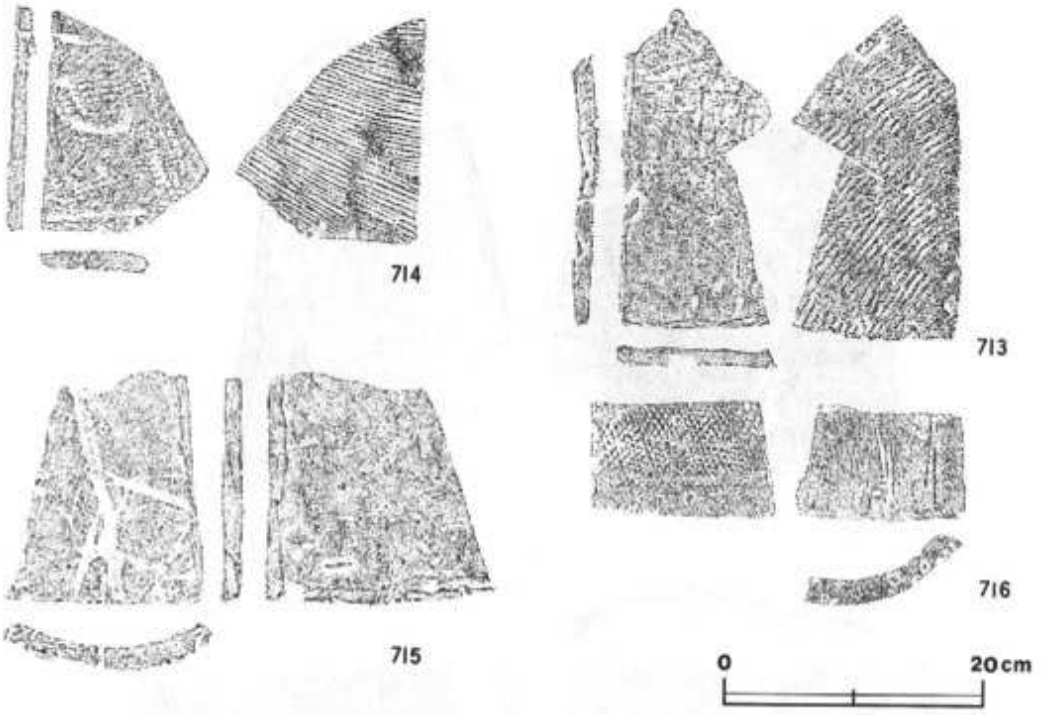




第32図　4号窯跡出土遺物実測図(7)



第33図　4号窯跡出土遺物実測図(8)



第34図　4号窯跡出土遺物実測図(9)

4号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
106	蓋	A 17.6 B (4.3)	天井部は丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径15cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 明褐灰色 普通(重ね焼痕)	I 60%
107	蓋	A 17.8 B 5.2 G 2.4 H 1.45	天井部は丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 普通(重ね焼痕)	I＋II 75%
108	蓋	A (18.7) B 4.5 G 2.1 H 1.5	天井部は丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径12cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 明褐灰色 普通(重ね焼痕)	I 45%
109	蓋	A 19.3 B 4.55 G 2.35 H 1.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，やや外反して短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径11cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(重ね焼痕)	I＋III 60%
110	蓋	A 20.2 B 4.6 G 2.2 H 1.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径16cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 普通(重ね焼痕)	I＋II 80%
111	蓋	A (19.4)	天井部は，浅く扁平である。口縁部は屈曲し，短く垂下する。 つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径11cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰褐色（にぶい褐色） 普通	I 50%
112	蓋	A (20.2)	天井部は，浅く扁平である。口縁部は屈曲し，短く垂下する。 つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径14cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色（にぶい橙色） 普通	I 50%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
113	坏 A	A (10.6) B 3.85 C 6.6	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。 底部は平底である。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 普通	Ⅰ 50%
114	坏 A	A (13.8) B 4.9 C (8.2)	体部は，中位で軽く外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。 底部は平底である。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 良好(二次焼成)	Ⅰ 30%
115	坏 A	A (14.0) B 3.7 C (9.2)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，雑な回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 赤灰色 普通(二次焼成)	Ⅰ 40%
116	坏 A	A (13.9) B 3.6 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。同一形態の坏，他に3個。	砂粒・細砂 赤灰色 普通(重ね焼痕)	Ⅰ 60%
117	高台付坏	A (14.8) B 4.6 C (11.9) D (11.0)	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。高台端部は，ほぼ水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 灰褐色 普通(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ 40%
118	高台付坏	A 16.9 B 7.1 C 14.8 D 12.0	大形品で，体部は直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸く，外側へふんばる高台が付く。高台端部は，ほぼ水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 普通(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 80%
119	高台付坏	A (17.5) B 7.0 C (14.3) D (11.2)	大形品で，体部はやや外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，丸底で，若干外側へふんばる高台が付く。体部との境は丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 普通(二次焼成)	Ⅰ 20%
120	盤	A (23.1) B 3.7 D (18.8) E 1.4	体部は，やや外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸く，中央部が肥厚する。高台は，やや外側にふんばり，端部は水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内面の底部中央は，指によるナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 普通(重ね焼痕)	Ⅰ 50%
121	高盤	A (29.5)	口縁部付近のみの破片である。 底部から大きく開き，口縁部に至る。口縁部端部は丸い。	水挽き整形。 底部内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(重ね焼痕)	Ⅰ
122	坏蓋	A (15.4) B 3.3 G 3.25 H 0.8	天井部は，浅く丸い。口縁部は，屈曲し，短く垂下する。 つまみは，扁平で中央部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅱ 25%
123	坏 A	A 13.9 B 3.95 C 8.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰褐色 普通(重ね焼痕)	Ⅱ 90%
124	坏 A	A (13.9) B 4.2 C (9.8)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 赤灰色 普通	Ⅱ 40%
125	坏 A	A 13.6 B 4.05 C 9.7	体部は，わずかに外反気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部はやや丸底風で，体部との境は不明瞭である。本来は高台が付く器形。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。外周部は高台を剝がし，手持ちヘラ削り調整が施されている。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通	Ⅱ 98%
126	坏 A	A 13.9 B 4.6 C 9.0	体部は，外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は丸底で，体部との境は不明瞭である。本来は，高台が付く器形である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。外周部は，高台を剝がし，手持ちヘラ削り調整が施されている。	礫・砂粒・細砂 橙色 普通	Ⅱ 100%
127	蓋	A 16.6 B 3.7 G 2.05 H 1.1	天井部は，浅く扁平である。口縁部は，屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい橙色 普通(重ね焼痕)	Ⅱ 90%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
128	蓋	A (18.4) B 4.6 G 2.3 H 1.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，外反して下る。端部は丸い。 つまみは，丸味を持った擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径14cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 明褐灰色 普通(重ね焼痕)	Ⅱ 40%
129	蓋	A 20.7 B 3.85 C 2.3 D 1.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，やや外反して下る。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径17cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 普通（重ね焼痕 二次焼成）	Ⅱ 70%
130	蓋	A 19.7 B (2.55)	天井部は，浅く扁平である。口縁部は，短く外傾し，端部は丸い。 つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径14cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい黄色（褐灰色） 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ
131	蓋	A (17.5) B 3.2 G 1.75 H 1.0	天井部は，浅く扁平である。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形である。	水挽き整形。 天井部は，径11cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 浅黄橙色 不良	Ⅱ＋Ⅲ 40%
132	盤	A (20.9) B 4.5 D (15.3) E 1.6	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は丸く，わずかに外側にふんばるやや長い高台が付く。端部は水平で，内外に広がる。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 普通(重ね焼痕)	Ⅱ 30%
133	盤	A (21.2) B 4.4 D (17.0) E 1.35	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部はやや丸く，外側へふんばる高台が付く。端部は丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(重ね焼痕)	Ⅱ 25%
134	盤	A (22.3) B 3.8 D (16.6) E 1.1	体部は，直線的に立ち上がり，上位で外反する。口縁部端部は丸い。底部はやや丸く，外側へふんばる高台が付く。端部は外傾する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 浅黄色(赤褐色) 普通(重ね焼痕)	Ⅱ 焼台 40%
135	甕 B	A (21.6) F 5.5	口頸部は，やや外反しながら立ち上がる。端部は内傾する。	水挽き整形。 口頸部外面には，斜位の条線がみられるが，自然釉付着のため調整痕不明。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ
136	瓶	A 30.2 B 26.3 C 16.6	口頸部は，短く強く外傾する。端部は上下にやや広がる。体部は，内彎しながら立ち上がり，中位にこぶ状の把手が一対付く。底部は二本のブリッジ。	巻き上げ，水挽き成形。 体部は斜位の平行叩き調整の後，横ナデ，体部下端部はヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 明褐灰色 不良(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 70%
137	蓋	A (17.4) B 4.2 G 1.7 H 1.0	天井部は，頂部が丸く，外周部はゆるやかに下降する。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は，やや鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。 天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	細砂（精良） 灰白色 不良	Ⅲ 50%
138	蓋	A (16.8) B 3.7 G 2.0 H 1.2	天井部は，浅く中位で軽い段をなす。口縁部はにぶく屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。 天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 淡橙色 不良	Ⅲ 60%
139	蓋	A 16.8 B 3.5 G 1.5 H 1.0	天井部は，浅く中位に軽い稜をなす。口縁部は屈曲し，やや外傾して下る。端部はやや鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。 天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい橙色 不良	Ⅲ 70%
140	蓋	A (16.4) B 3.7 G 1.9 H 1.2	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部はやや鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 にぶい橙色 不良	Ⅲ 70%
141	蓋	A 20以上 G 1.9 H 1.4	天井部は，浅く丸い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径12cmにわたり回転ヘラ削り調整。 天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ 40%
142	蓋	A (16.4) B 3.6 G 1.8 H 1.0	天井部は，丸い。口縁部はにぶく屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，回転ヘラ削りの後，横ナデ調整。 天井部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰赤色 普通(二次焼成)	Ⅲ 40%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
143	蓋	A 12.4 B 2.8 G 1.2 H 1.1	天井部は，浅く中位で軽い段をなす。口縁部は屈曲し，短く外反する。端部は丸い。つまみは，蕾宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，全面自然釉が付着し調整痕不明。	砂粒・細砂 淡黄色(暗灰色) 良好(二次焼成)	Ⅲ 80%
144	坏 A	A (14.0) B 4.3 C 8.4	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境に，大きく外反する幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 50%
145	坏 A	A 14.0 B 4.5 C 8.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は鋭い。底部は平底で，体部との境に，大きく開く幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部と底部の境は，強い屈曲点を形成している。	砂粒・細砂 淡黄橙色 不良	Ⅲ ヘラ記号 100%
146	坏 A	A 13.6 B 4.1 C 7.6	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に大きく外反する幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り後，外周部のみ軽いナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 60%
147	坏 A	A (13.4) B 4.2 C 8.0	体部は，器厚を減じながら，わずかに内彎しつつ立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残し，外周部のみ軽いナデ。内面の体部と底部の境は，強く屈曲する。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 60%
148	坏 A	A 13.4 B 4.6 C 7.6	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に大きく外反する幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残し，外周部のみ軽いナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 60%
149	坏 A	A 13.3 B 4.45 C 7.9	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。内面の体部と底部との境は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい橙色 普通 (酸化焔焼成)	Ⅲ 97%
150	坏 A	A (14.6) B 4.6 C 8.0	体部は，中位で外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 普通	Ⅲ 50%
151	坏 A	A (12.8) B 4.4 C 7.6	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ切り痕を残すが，自然釉付着のため再調整不明。水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 普通 (酸化焔焼成，二次焼成)	Ⅲ 50%
152	坏 A	A 12.4 B 3.6 C 7.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は丸い。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ切り後，軽いヘラナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 60%
153	坏 A	A (11.8) B 3.8 C 6.6	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部と底部との境には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 淡橙色 不良	Ⅲ 50%
154	坏 A	A 13.4 B 4.4 C 8.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 暗赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ 70%
155	坏 A	A 11.0 B 3.5 C 7.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を減じ軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部内・外面は平滑である。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ 90%
156	坏 A	A (11.0) B 3.5 C (7.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ切り後，軽いナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	細砂 暗赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ 40%
157	坏 A	A (10.8) B 3.8 C (6.8)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部は軽く外反する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部下端部は，回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰褐色 普通(二次焼成)	Ⅲ 30%

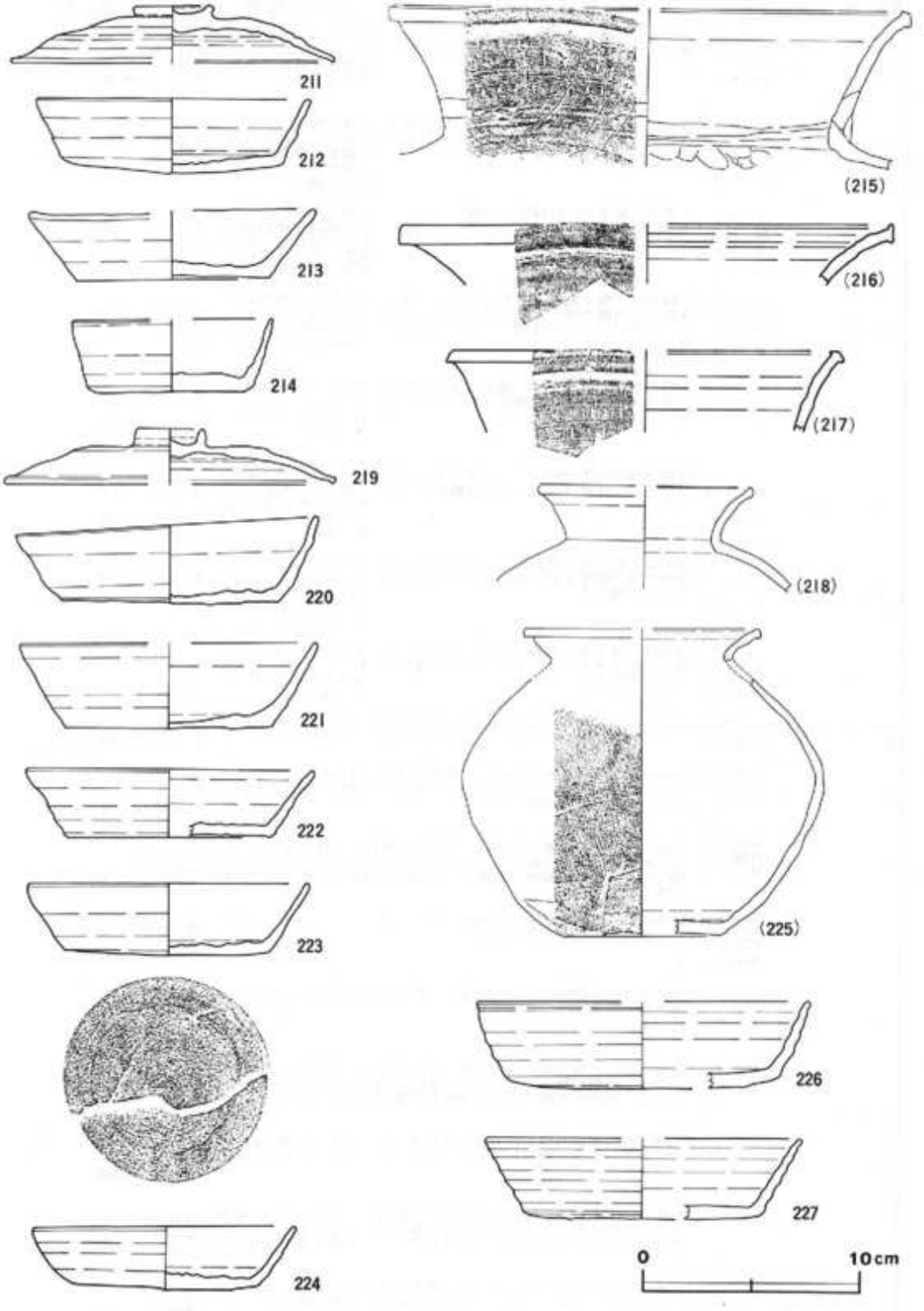
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
158	高台付坏	B〔3.3〕 C 15.6 D 12.6 E 1.1	体部は，直線的に立ち上がるものとみられる。底部はやや丸く，外側へふんばる高台が付く。端部は水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 20%
159	高台付坏	A (17.8) B 7.1 D (10.2) E 1.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部はやや丸く，外側に若干ふんばる高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部内・外面は平滑。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 焼台カ 30%
160	高台付坏	A (15.8) B 5.0 D 9.2 E 1.1	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。底部はやや丸く，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 不良	Ⅲ 60%
161	高台付坏	A (15.0) B 4.8 D 9.6 E 1.1	体部は，外反しながら立ち上がる。口縁部端部はやや鋭い。底部はやや丸く，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整後，高台貼り付け。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通	Ⅲ 50%
162	高台付坏	A 14.4 B 5.0 D 9.4 E 1.0	体部は，器厚を減じながら外反して立ち上がる。底部は，やや丸く，短く外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 不良(二次焼成)	Ⅲ 60%
163	高台付坏	A (14.0) B 4.95 D 9.8 E 1.15	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。底部はやや丸く，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は丸い。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	Ⅲ 60%
164	高台付坏	A (12.5) B 4.3 D (8.0) E 0.5	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部はやや鋭い。底部は平底で，外周部に，短く断面三角形の高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台 25%
165	盤	A 22.2 B 5.2 D 17.1 E 1.7	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は丸く，外側へふんばる高台が付く。端部は，内外に広がり水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 不良(二次焼成)	Ⅲ 90%
166	盤	A 22.8 B 3.9 D 19.0 E 1.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は丸く，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 40%
167	甕 A	A (45.8) B〔36.1〕 F 10.8	口頸部は，器高を減じながら外反して立ち上がる。端部はやや内傾する。体部は，肩部がなだらかである。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，3本一条の波状文が二段に施されているが，不明瞭な部分が多い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ
168	鉢 F	A (26.3) B〔8.5〕	体部は，内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口頸部付近で外反する。口縁部端部は内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。 口縁部は，横ナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗青灰色 良好	Ⅲ
169	甑	A (27.4)	体部は，やや開き気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口縁部端部は上下に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面とも横ナデ調整。	砂粒・細砂 極暗赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ
170	鉢 B	A (45.0) B 22.5 C (24.0)	口頸部は，大きく外反する。端部は，やや外下方に突出する。体部は，内彎気味に立ち上がる。底部は平底である。	巻き上げ，水挽き成形。 底部は，一方向のヘラ削り調整。体部は，斜位の平行叩き調整の後，横ナデ。下端部はヘラ削り。	砂粒・細砂 灰赤色 不良(二次焼成)	Ⅲ 40%
171	坏 蓋	A 12.6 B 3.6 G 1.8	天井部は，浅く扁平で，中位に軽い段をなす。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。	水挽き整形。 内・外面共に自然釉が付着し，調整痕不明。	砂粒・細砂 オリーブ黒色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台 90%
172	坏 A	A (12.7) B 4.0 C 8.0	体部は，器厚を減じながら，わずかに外反しながら立ち上がる。底部は平底で，体部の2倍以上の厚みを有する。体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅳ 焼台 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
173	鍔	A (19.6) B 4.3 D (15.6) E 1.7	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は丸く，やや長くわずかに外側にふんばる高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台を貼り付けている。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 暗赤灰色 普通	Ⅳ 25%
174	甕 A		口頸部，底部は不明。 体部は，肩部が張らず，球形状を呈するものとみられる。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩き調整。体部内面は，指による押え。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ＋Ⅴ
175	坏蓋	A 17.2 B 3.8 G 1.1 H 1.6	天井部は，頂部が平坦で，外周部はなだらかに下降する。口縁部は，屈曲し，短く垂下する。端部は，やや鋭い。 つまみは，小さな擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8cmにわたり回転ヘラ削り調整。水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 褐色 普通（重ね焼成 二次焼成）	Ⅴ 70%
176	坏蓋	A (17.6) B 4.0 G 1.4 H 1.1	天井部は，頂部が平坦で，外周部はなだらかに下降する。口縁部は屈曲し，やや外反する。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。	砂粒・細砂 暗褐色(明褐色) 良好（重ね焼成 二次焼成）	Ⅴ 焼台 70%
177	坏蓋	A 12.8 B 3.0 G 1.5 H 0.9	天井部は，浅く丸く，中位で軽く外反する。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部外面は，自然釉が付着しているため調整痕不明。	砂粒・細砂 オリーブ色 （赤灰色） 良好(二次焼成)	Ⅴ 70%
178	坏蓋	A 12.3 B 3.1 G 1.4 H 1.0	小形で，天井部は，浅く丸い。口縁部は，屈曲し，わずかに垂下する。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	177と同形態，同手法で，179の上に逆さにして重ねられ，さらに高台付坏を乗せ，重ね焼したものが融着している。	砂粒・細砂 暗赤褐色 良好(重ね焼)	Ⅴ 90%
179	高台付坏	A 11.5 B 4.1 D 8.0 E 0.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に短く外側へややふんばる高台が付く。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。口縁部に，178が融着している。	砂粒・細砂 暗赤褐色 良好（重ね焼 二次焼成）	Ⅴ 90%
180	坏蓋	A 12.5 B 3.0 G 1.25 H 1.0	天井部は，頂部が平坦で，外周部はやや外反しながら下降する。口縁部はにぶく屈曲し，やや外反する。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部内面には，179の破片，外面には，高台付坏の破片が融着している。	砂粒・細砂 暗赤灰色 良好（重ね焼 二次焼成）	Ⅴ 80%
181	坏 A	A (14.4) B 4.3 C 8.8	体部は，器厚を減じながら外反して立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部の2倍以上の厚みをもつ。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の軽いヘラナデ調整。内面の体部と底面の境は明瞭に屈曲する。	砂粒・細砂 極暗赤褐色 良好(重ね焼)	Ⅴ 60%
182	坏 A	A 14.0 B 4.3 C 9.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部で軽く外反する。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，一方向の軽いヘラナデ調整。部分的に木目状圧痕がみられる。	砂粒・細砂 灰色 やや不良 （二次焼成）	Ⅴ 80%
183	坏 A	A (14.0) B 4.4 C 8.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。内面の体部と底部との境は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 極暗赤褐色 良好	Ⅴ 50%
184	坏 A	A (14.8) B 4.5 C 7.4	体部は，外反しながら立ち上がる。底部は平底で厚く，体部との境に，大きく開く幅狭の面を有する。内面の体部と底部の境は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 良好	Ⅴ ヘラ記号 70%
185	坏 A	A (13.5) B 4.6 C 8.0	体部は，外反しながら立ち上がる。底部は平底で，体部との境に，大きく開く幅狭の面を有する。内面の体部と底部の境は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅴ ヘラ記号 60%
186	高台付坏	A (14.6) B 4.5 C 12.7 D 10.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，外側へ強くふんばる高台が付く。高台端部は，水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 赤黒色(青灰色) 良好(二次焼成)	Ⅴ 50%
187	高台付椀	A (17.5) B [6.6] C 12.9	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平坦な中央部と，外傾する外周部とに分かれ，外周部に高台が付くが欠損。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰オリーブ色 普通(二次焼成)	Ⅴ＋Ⅵ 40%

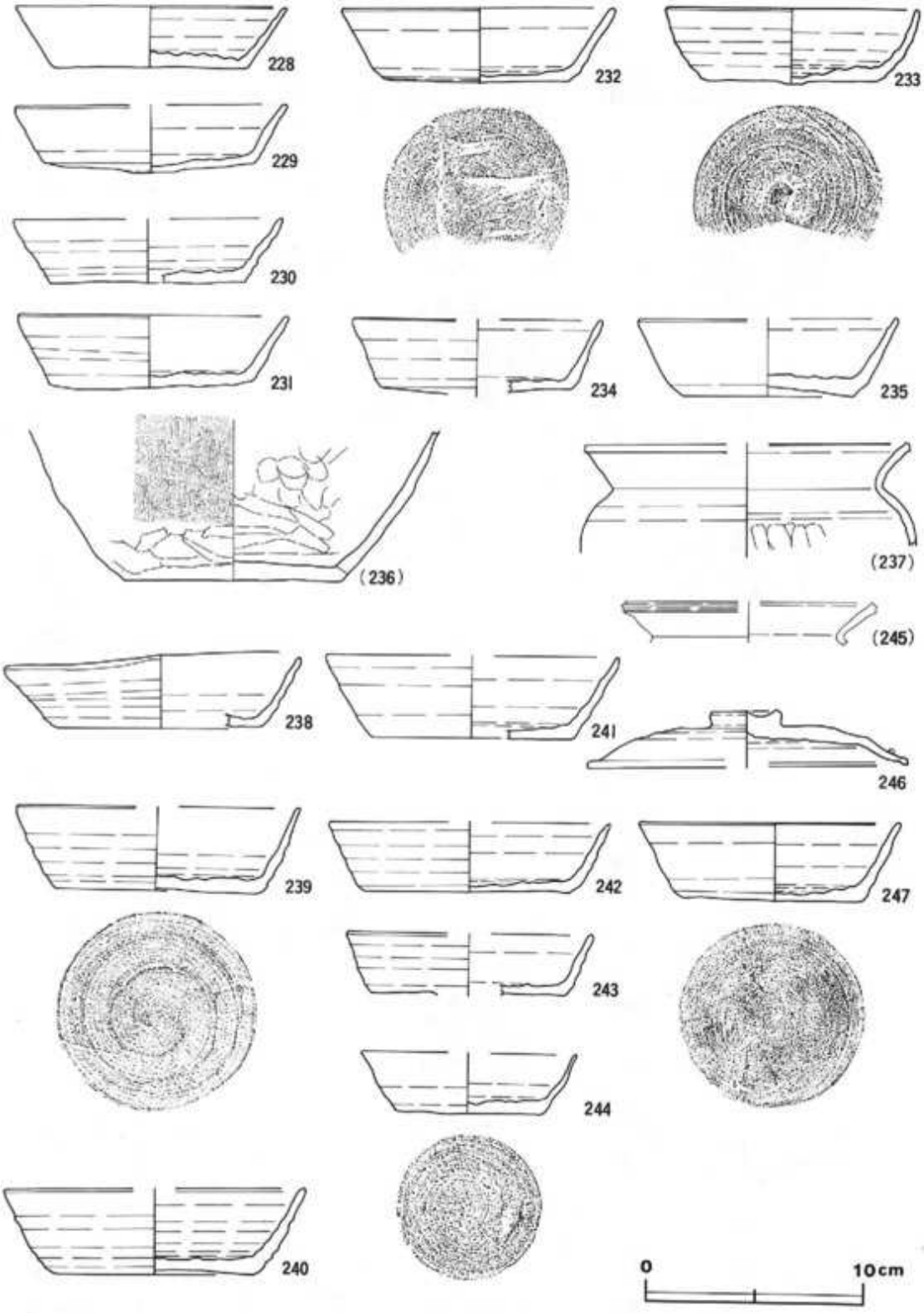
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
188	盤	A (24.0) B 4.0 D 16.4 E 0.9	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平坦で，外傾へ若干ふんばる高台が付く。高台端部は，やや丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 橙色 不良	V 30%
189	盤	A 22.3 B 3.6 D 15.7 E 1.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，短く厚く外側へふんばる高台が付く。高台端部は，水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色(青灰色) 良好(二次焼成)	V 焼台 30%
190	盤	A (24.8) B 4.0 D (19.0) E 1.5	体部は，わずかに外反しながら立ち上がる。底部は，ほぼ平底で，やや長く外側へふんばる高台が付く。高台端部は，ほぼ水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色(青灰色) 良好(二次焼成)	V 焼台 30%
191	蓋	A (13.6) B [2.9]	天井部は，やや丸く，強く屈曲して口縁部に至る。口縁部は，わずかに内傾し，端部付近で軽く外反する。	水挽き整形。(左回り) 天井部外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。	砂粒・細砂 浅黄色 (暗赤褐色) 良好(二次焼成)	V 40%
192	鉢 A	A (30.6) B [13.0]	口頸部は，強く外反し，端部は，上方に突出する。体部は，肩部を有さず，なだらかに下る。	巻き上げ，水挽き成形。 外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 極暗赤褐色 良好(二次焼成)	V 焼台
193	蓋	A 16.8 B 4.0 G 2.1 H 1.4	天井部は，平坦な頂部から，なだらかに下降する。口縁部は屈曲し短く垂下する。断面は三角形状を呈する。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 オリーブ灰色 普通	VI 95%
194	蓋	A (18.2) B 4.3 G 2.0 H 1.2	天井部は深く，平坦な頂部からなだらかに下降する。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部はやや鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	VI 30%
195	坏 蓋	A (12.6) B 3.2 G 1.65 H 1.2	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は鋭い。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径7cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	VI 40%
196	坏 A	A 14.0 B 4.2 C 8.8	体部は，外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に二次的に形成された幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好(二次焼成)	VI 95%
197	坏 A	A (14.0) B 4.3 C 9.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に二次的に形成された幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 緑灰色 良好(二次焼成)	VI 70%
198	坏 A	A (13.0) B 4.0 C 8.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部はやや鋭い。底部はやや厚い平底で，体部との境に二次的に形成された幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部及び体部外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。	砂粒・細砂 浅黄色(青灰色) 良好(二次焼成)	VI 50%
199	坏 A	A 13.6 B 4.2 C 7.8	体部は，わずかに器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部と底部との境には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	VI 70%
200	坏 A	A (13.6) B 4.2 C 7.6	体部は，わずかに器厚を減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内面の体部基部には強い押えがみられる。	砂粒・細砂 灰色(暗赤褐色) 良好(二次焼成)	VI ヘラ記号 焼台 60%
201	盤	A (16.4) B 3.0 D 11.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	VI 焼台 70%
202	盤	A (19.6) B 3.4 D (14.6) E 0.9	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する高台が付く。高台端部は外傾する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	VI 焼台 30%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
203	鉢 A	A (27.2) B [10.0]	口頸部は外傾し，端部は上下に突出する。体部は，肩部を有さず，なだらかな丸味をもつ。	巻き上げ，水挽き成形。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ
204	坏 A	A (11.3) B 4.0 C 7.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の2倍以上の厚みを有する。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，小さな回凸で強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	灰原 70%
205	壺 蓋	A 13.3 B 4.0 C 1.6 H 1.0	天井部は扁平で，口縁部は屈曲し，垂下する。口縁部端部は丸い。つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り)天井部は，径11cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	灰原 50%
206	壺 B	B [17.2] D 12.8 E 1.3	口縁部は，短く直立するものとみられる。体部は，肩部が張り，最大径を上位に有する。底部には，やや外側へふんばる高台が付く。	巻き上げ，水挽き成形。体部下端部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 明緑灰色 良好	灰原 40%
207	甕 B	A (25.4) F 6.2	口頸部だけの破片で，口頸部は外反しながら立ち上がる。口縁部端部は，内上方と外下方に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 オリーブ灰色 (灰白色) 良好	灰原
208	甕	B [8.2] C (15.0)	体部下端部以下の破片で，底部は上げ底気味である。体部は，外上方に直線的に立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。底部は，一方面のヘラ削りで，外周部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	灰原
209	鉢 B	A (30.0) B [8.0]	体部は，外上方へ直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を減じ外反する。口縁部端部は，内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。(左回り)内・外面の水挽き痕は，弱い。体部内面は，指によるナデ。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	灰原
210	鉢 B	A (24.3) B [9.0]	体部は，外上方へ直線的に立ち上がり，口縁部付近で大きく外反する。口縁部端部は，上方に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。体部外面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	灰原

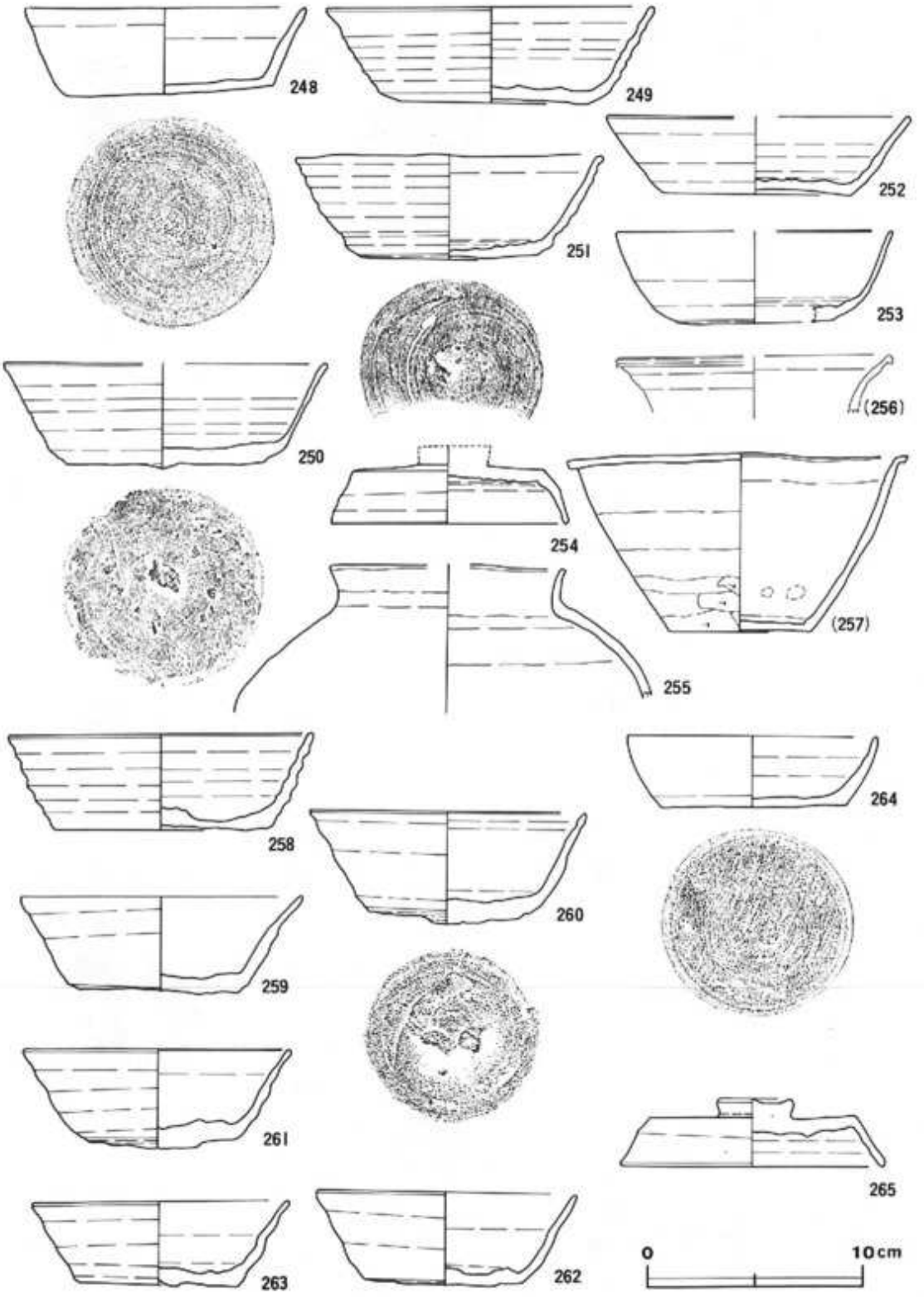
番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
709	平 瓦	全長33.6 厚さ 1.2 ～ 1.9	凹面には，糸切り痕と幅狭の小札痕が残り，布目痕（9×10条）がみられる。凸面には，糸切り痕を残すナデ調整が施されている。側面，端面ともヘラ削り。	礫・砂粒 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 焼台(2)
710	丸 瓦	全長29.0 狭端15.2 厚さ 1.2 ～ 1.5	凸面には，ナデ調整が施され，部分的に横位の平行叩きがみられる。凹面には，布目痕（8×8条）が残る。側面には，凹面側に幅広の，凸面側に幅狭の面取り，広端面の凹面側にも面取り調整が施されている。	礫・砂粒 灰色 普通(二次焼成)	Ⅴ 焼台(3)
711	平 瓦	全長31.2 広端26.0 狭端23.6	凹面には，糸切り痕と，布目痕（6×7条）がみられる。凸面には，横位の平行叩きが施されている。	礫・砂粒 黄灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台(2)
712	平 瓦	厚さ 1.5	凹面には，布目痕がわずかに残る。凸面には，横位の平行叩きが施されている。	砂粒 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台(2)
713	平 瓦	厚さ 1.4 ～ 2.2	凹面には，糸切り痕と，布目痕（7×8条）がみられる。部分的に指ナデ調整が施されている。凸面は，斜位の平行叩きが施されている。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台(2)
714	平 瓦	厚さ 1.1 ～ 1.5	凹面には，糸切り痕がみられ，布目痕（7×8条）の後から，部分的に平行叩きが施されている。凸面には，斜位の平行叩き調整が施されている。	礫・砂粒 灰色 普通(二次焼成)	Ⅵ 焼台(3)
715	丸 瓦	厚さ 1.5 ～ 1.7	凸面には，かすかに横位の平行叩きが残るが，大部分はナデ調整によって消されている。凹面には，布目痕（6×8条）が残り，布の合せ目がみられる。凸・凹両面側には，面取り調整が施されている。	砂粒 黄灰色 普通(二次焼成)	Ⅵ 焼台
716	丸 瓦	厚さ 1.8 ～ 2.2	凸面には，斜格子叩きの後，ナデ調整が施されている。凹面には，布目痕（10×9条）が残る。側面には面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黄灰色 良好(二次焼成)	灰原 焼台



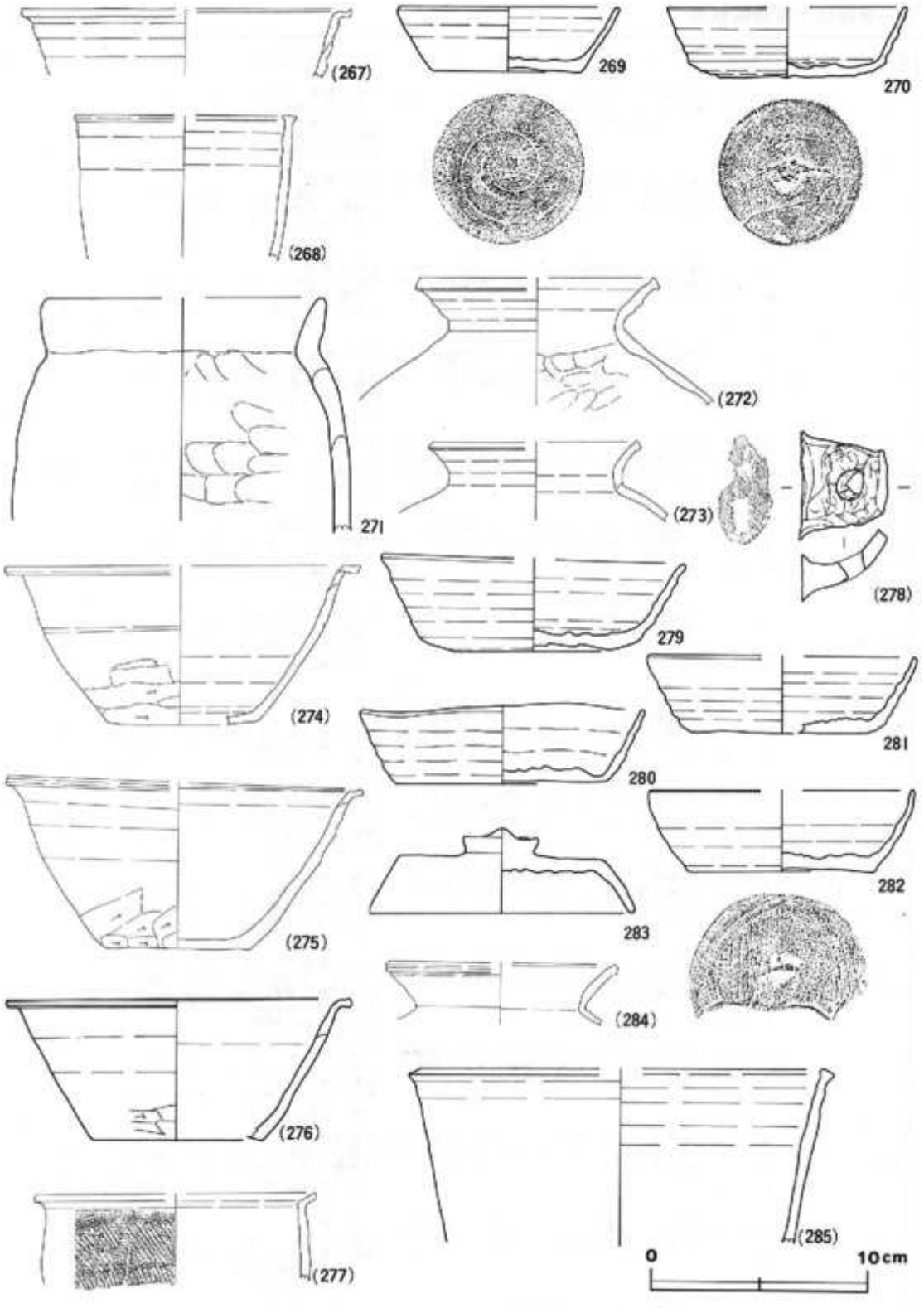
第35図　5号窯跡出土遺物実測図(1)



第36図　5号窯跡出土遺物実測図(2)



第37図　5号窯跡出土遺物実測図(3)



第38図　5号窯跡出土遺物実測図(4)

5号窯跡出土遺物観察表

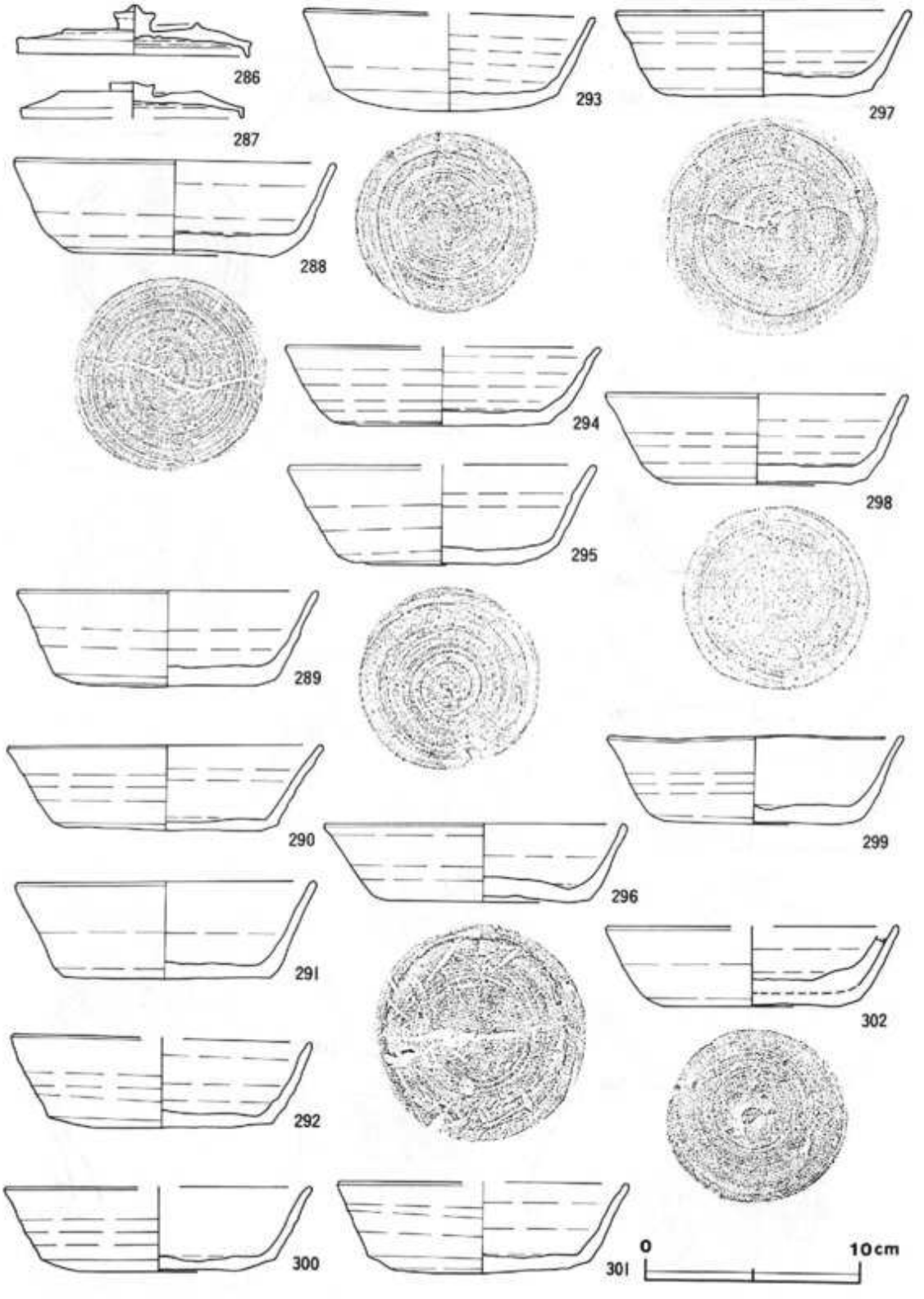
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
211	坏	蓋	A (14.8) B 2.6 G 3.6 H 0.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲するが，ほとんど垂下しない。 つまみは，扁平で中央部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I＋II 25%
212	坏	A	A 12.6 B 3.4 C 10.3	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸味を有し，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 普通	I 60%
213	坏	A	A (13.5) B 3.2 C (8.8)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	I＋II 40%
214	坏	A	A (9.2) B 3.3 C 7.4	体部は，やや器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，平底で厚く，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	砂粒・細砂 灰色 普通	I＋III 45%
215	壺	A	A (47.0) B (14.5) F 12.0	口頸部は，外反しながら立ち上がり，口縁部端部は，内上方と外下方に突出し，断面三角形状をなす。体部は，肩部が強く張るものとみられる。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，7本一条の波状文が三段施されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I＋II＋III
216	壺	A	A (45.0) B [5.6]	口頸部は，大きく外反する。口縁部は上下に突出し，端部は直立する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，7本一条の波状文と，3本一条の平行凹線が二段以上施されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I＋II
217	壺	A	A (35.6) B [7.5]	口頸部は，外反しながら立ち上がる。口頸部端部は，内上方と外下方に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，7本一条の波状文と，凹線一条が三段施されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	I
218	壺	B	A (19.4) B [9.0] F 5.0	口頸部は，外反しながら立ち上がり，口頸部端部は上下にやや突出する。体部は，やや肩部が張り，球形状を呈するものとみられる。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面共に，自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通(二次焼成)	I 焼台
219	坏	蓋	A (15.2) B 2.5 G 3.2 H 0.8	天井部は，浅く丸い。口縁部は，屈曲し，短く垂下する。断面は三角形状を呈する。 つまみは，扁平で，中央部がくぼみ，環状を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II＋III 80%
220	坏	A	A 14.0 B 3.7 C 10.0	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を回転ヘラ削り調整の後，中央部は一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	II 70%
221	坏	A	A (13.4) B 4.0 C 8.8	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を回転ヘラ削り調整の後，中央部は一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	II 30%
222	坏	A	A 13.2 B 3.2 C 9.0	体部は，わずかに器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，中央部のみ静止ヘラナデ調整。内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II 70%
223	坏	A	A 12.8 B 3.3 C 9.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II＋III 100%
224	坏	A	A 12.8 B 3.0 C 9.0	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，中央部に静止ヘラナデ調整。底部内面の水挽き痕は強い。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II＋III 70%
225	壺	B	A (21.6) H (28.4) C 14.3	口頸部は外反し，口縁部端部は，やや外下方に突出し，内傾する。体部は，最大径を中位に有し，ほぼ球形を呈する。底部は平底である。	巻き上げ，叩き成形。 体部は，縦位の平行叩き調整。体部下位は，横位のヘラ削り調整。底部は，静止ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	II＋III 40%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
226	坏 A	A (15.2) B 4.0 C (12.2)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，丸底気味で体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ 20%
227	坏 A	A (14.4) B 3.8 C (10.6)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅲ 20%
228	坏 A	A 12.4 B 2.9 C 9.0	体部は，わずかに器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，鋭い稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅲ 80%
229	坏 A	A (12.4) B 3.1 C 9.7	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。底部内面の中央部は指押え。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 50%
230	坏 A	A (12.3) B 3.0 C (9.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 40%
231	坏 A	A 12.3 B 3.5 C 9.4	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 60%
232	坏 A	A 12.6 B 3.5 C 8.4	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がり，中位で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面には，指による押えがあり，外面には木目状圧痕。	砂粒・細砂 青灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 70%
233	坏 A	A (12.2) B 3.5 C 8.7	体部は，内彎しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 50%
234	坏 A	A (11.4) B 3.3 C (8.8)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通(二次焼成)	Ⅲ 30%
235	坏 A	A (11.8) B 3.6 C (7.8)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅲ 25%
236	甕	B [13.8] C 20.0	底部は平底で，体部は，わずかに内彎しながら立ち上がる。	巻き上げ，叩き成形。底部は，不定方向のヘラ削り調整。体部は，縦位の平行叩き調整。下端部は，横位のヘラ削り。	礫・砂粒・細砂 緑灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台
237	鉢 A	A (30.0) B [9.5] F 4.0	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，内上方と外下方に突出する。体部は，肩部をほとんど有さずに内彎しながら下降する。	巻き上げ，水挽き成形。外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。体部内面は，指による押え。	砂粒・細砂 オリーブ灰色 (黒褐色) 良好	Ⅲ
238	坏 A	A (13.5) B 3.4 C (9.6)	体部は，内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 普通	Ⅴ 40%
239	坏 A	A (13.0) B 3.9 C 9.4	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 緑灰色 良好	Ⅴ 50%
240	坏 A	A (13.8) B 4.0 C (9.0)	体部は，器厚を減じながら内彎気味に立ち上がる。口縁部端部はやや鋭い。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ 50%

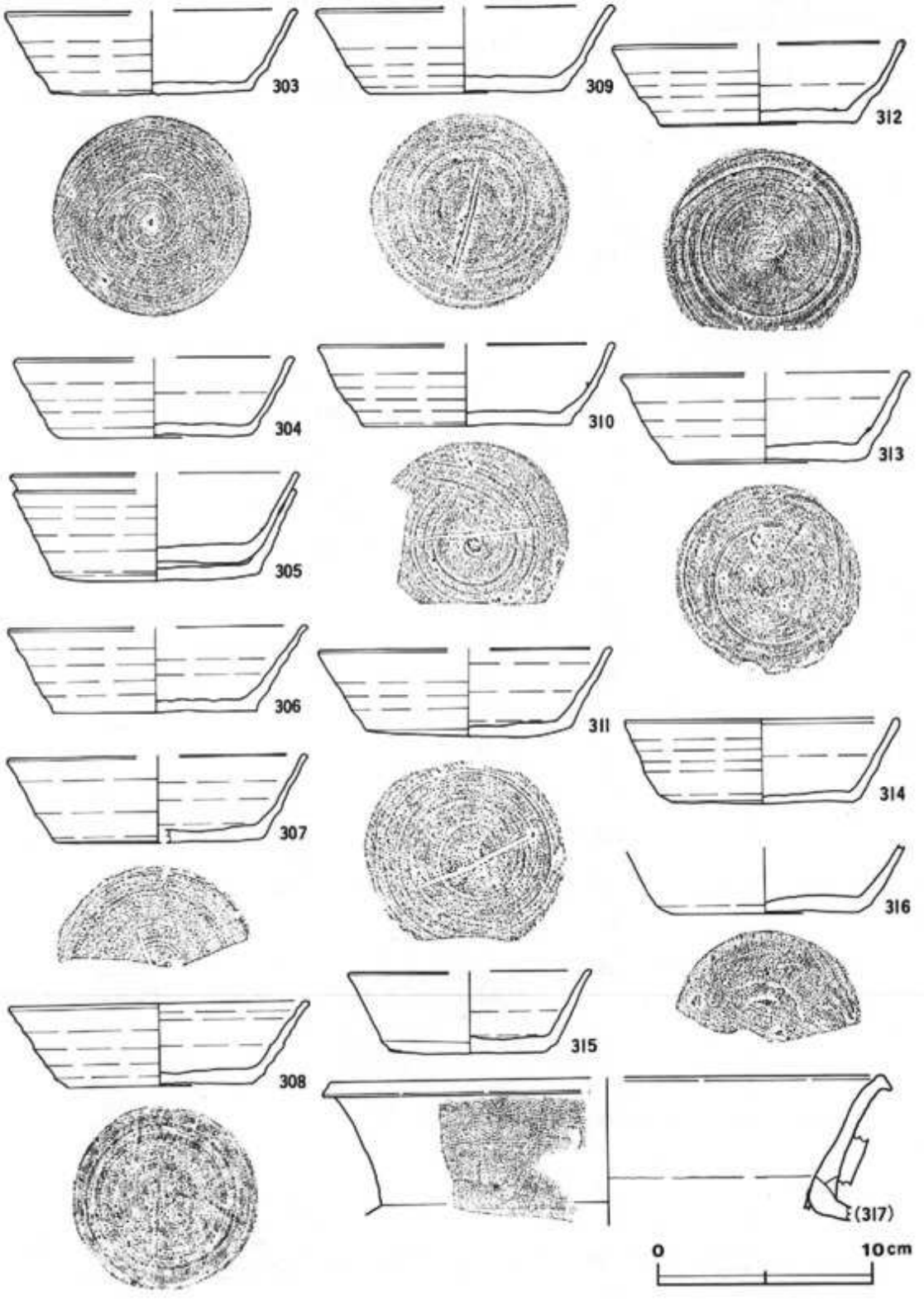
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
241	坏 A	A (13.4) B 3.8 C (9.4)	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。口縁部付近で軽く内彎する。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅵ 40%
242	坏 A	A (13.0) B 3.2 C 9.4	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内 外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅵ 40%
243	坏 A	A (11.2) B 2.8 C (9.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 青灰色 普通	Ⅵ 30%
244	坏 A	A (10.0) B 2.8 C 6.8	小形の坏で，体部は，中位で軽く内彎して立ち上がる。口縁部端部は鋭い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 普通	Ⅵ 60%
245	甕 B	A (22.6) B〔 3.7〕 F 3.3	口頸部は，大きく外反し，端部は内傾し，凹線を有する。	巻き上げ，水挽き成形。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台
246	坏 蓋	A (14.7) B 2.5 G 3.3 H 0.7	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。 つまみは，中央部を残して上部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径10.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼痕)	Ⅶ 焼台か 40%
247	坏 A	A 11.8 B 3.6 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を減じる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，左回転利用のヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ 100%
248	坏 A	A 13.0 B 4.0 C 9.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚をわずかに減じる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，やや鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅶ 90%
249	坏 A	A 15.2 B 4.5 C 10.5	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，外周部に幅狭の面を有するが，平底である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅶ 60%
250	坏 A	A (15.0) B 5.0 C 9.4	体部は薄く，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で厚く，体部との境は，不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の雑なナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅶ 60%
251	坏 A	A (14.2) B 4.2 C 9.6	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除き回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 暗青灰色 良好	Ⅶ 60%
252	坏 A	A 14.0 B 3.6 C 8.7	体部は，下位がわずかに外反しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，一方向の手持ちヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ 80%
253	坏 A	A (13.8) B 4.3 C (7.2)	体部は薄く，下位は内彎し上位は直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗青灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ 30%
254	壺 蓋	A 11.0 B〔 3.5〕	天井部は平坦で，口縁部は強く屈曲し，内彎しながら下降する。口縁部端部は丸い。	水挽き整形。 天井部は，回転ヘラ削り調整。天井部内面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ 30%
255	壺 B	A 10.9 B〔 6.2〕 F 2.0	口頸部は短く，わずかに外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。体部上半は，球形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ＋Ⅷ

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
256	甕 B	A (25.4)	口頸部は，外反しながら立ち上がる。端部は上下に突出し，浅い凹線を巡らす。	巻き上げ，水挽き成形。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ
257	鉢 B	A 31.0 B 16.5 C 13.3	口縁部は，短く水平にのび，端部は外傾する。体部は，やや内彎しながら下降する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	巻き上げ，水挽き成形。体部下半は，左回転を利用したヘラ削り調整。底部は，ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通（二次焼成）	Ⅶ＋Ⅷ＋Ⅸ 60%
258	坏 A	A (14.2) B 4.5 C 10.0	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良 （二次焼成）	Ⅷ 70%
259	坏 A	A 13.3 B 4.4 C 8.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を減じ軽く外反する。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の雑なナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅷ 100%
260	坏 A	A 13.0 B 5.2 C 8.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を減じる。口縁部端部は鋭い。底部は若干同凸があるが平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す不定方向の雑なナデ調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅷ 100%
261	坏 A	A 12.3 B 4.6 C 7.2	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，中位で軽く外反する。底部は凹凸が激しく，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す不定方向の雑なナデ調整。底部内面は，一方向のナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 95%
262	坏 A	A 12.3 B 4.3 C 7.3	体部は，内彎気味に立ち上がり，中位で軽く外反する。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す不定方向の雑なナデ調整。体部基部には，押えによる凹線が形成。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅷ 100%
263	坏 A	A 12.0 B 4.0 C 7.5	体部は，器厚を減じながら，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す不定方向のナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 褐灰色 やや不良	Ⅷ 95%
264	坏 A	A 11.7 B 3.3 C 8.8	体部は，器厚を減じながら内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，木目状圧痕の後，回転ヘラ削り調整。底部内面は，不定方向のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 100%
265	蓋	A 12.2 B 3.2 G 3.6 H 1.0	天井部は平坦で，口縁部は屈曲し，外下方へ開く。口縁部端部は丸い。 つまみは，扁平で，上部が若干くぼむ。	水挽き整形。 天井部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 普通	Ⅷ 100%
266	甕 B		口頸部は，外反して立ち上がり，端部は内傾する。体部は，最大径が上位にあり，肩部がやや張る。底部は平底である。口頸部は，焼けひずんでいる。	巻き上げ，水挽き成形。 体部下半は，横位のヘラ削り調整。底部は，不定方向のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 良好	Ⅷ 70% 写真のみ
267	鉢 B	A (30.8) B [5.2]	口頸部は，大きく外反し，端部は直立する。体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ
268	鉢 D	A (20.6) B [13.6]	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は，内外に突出し，水平な面をなす。	巻き上げ，水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好（二次焼成）	Ⅷ
269	坏 A	A 10.2 B 3.1 C 7.0	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，切り離し痕を残し，中央部だけ一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅸ 90%
270	坏 A	A (11.1) B 3.3 C 9.2	体部は，直線的に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は，中央部は平坦であるが，外周部は丸く，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 普通（二次焼成）	Ⅸ 60%

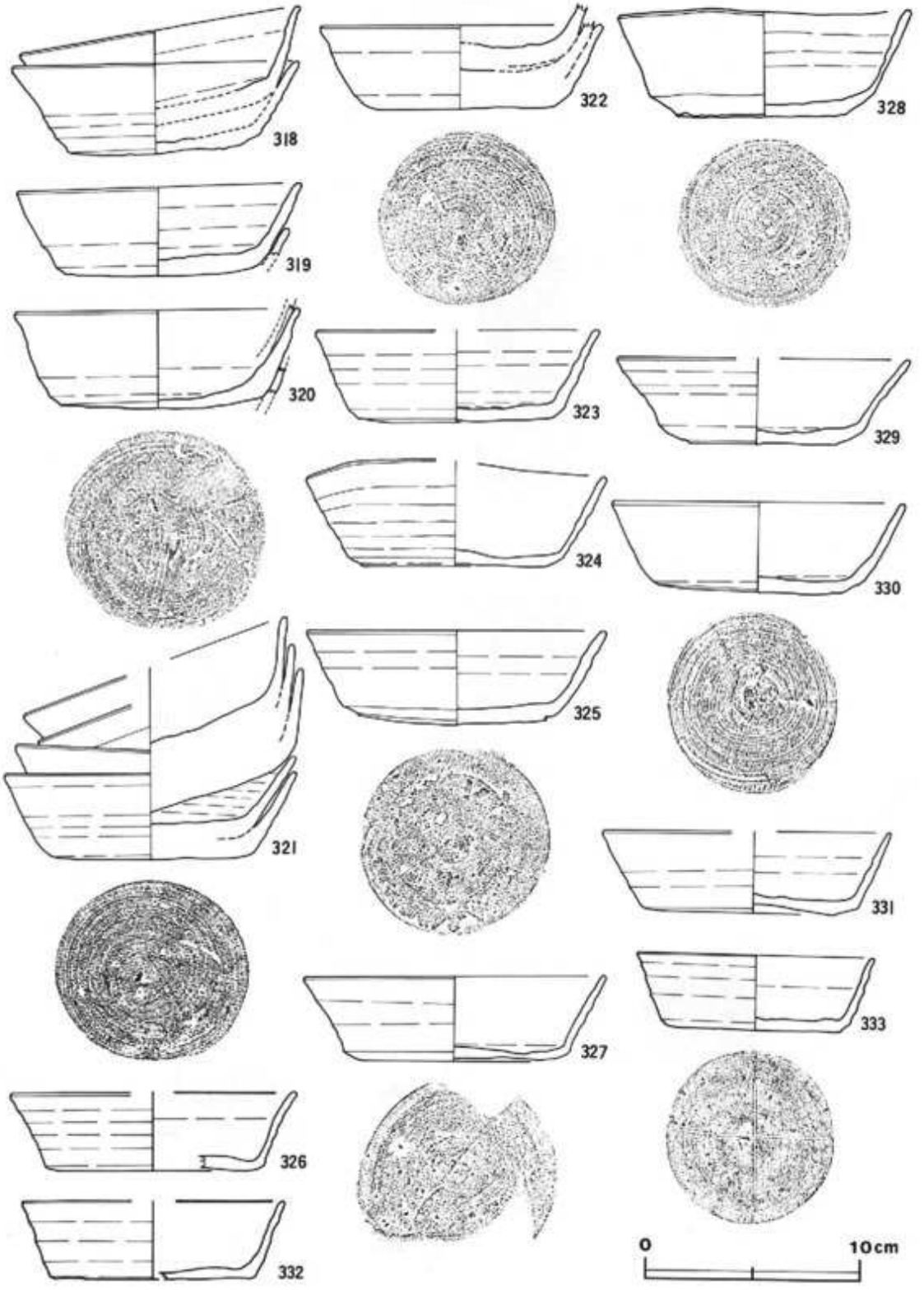
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
271	壺	D	A (13.0) B [10.8]	口頸部は，わずかに外傾し，端部は丸い。体部は，肩部を有さず，なだらかに下降する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部は横ナデ調整。体部外面は，斜位の平行叩きの後ナデ調整。体部内面は，ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅸ
272	甕	B	A (21.8) B [11.7] F 4.5	口頸部は，外反して立ち上がり，端部は上下に突出し，内傾する面をなす。体部は，なだらかな肩部を有する。	巻き上げ，水挽き成形。体部外面は，自然釉が付着し調整痕不明。内面は，ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅸ
273	甕	B	A (19.0) B [7.3] F 4.0	口頸部は，外反して立ち上がり，端部は内傾する。体部は，なだらかな肩部を有する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部内面は，ヘラ状工具による横位のナデ。他は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅸ
274	鉢	B	A (33.0) B [15.0] C (13.6)	口縁部は，短く水平にのび，端部は外傾する。体部は，わずかに内彎しながら下降する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	巻き上げ，水挽き成形。体部中位以下は，横位のヘラ削り調整。底部は，ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 普通(二次焼成)	Ⅸ 20%
275	鉢	B	A 32.6 B 15.3 C 13.4	口縁部は短く，ほぼ水平にのび，端部は上方に若干突出する。体部は，わずかに内彎しながら下降する。底部は，平底である。	巻き上げ，水挽き成形。体部下端部は，横位のヘラ削り調整。底部は，一方向のヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅸ 80%
276	鉢	B	A (32.0) B [14.9] C (16.0)	口縁部は，短く水平にのび，端部はやや内傾する。体部は，わずかに内彎気味に下降する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	巻き上げ，水挽き成形。体部下端部は，横位のヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅸ
277	鍋		A (26.0) B [8.2]	口縁部は，短く外反し，端部は若干内傾する。体部は，ほぼ垂直に下降する。	巻き上げ，水挽き成形。体部外面は，斜位の平行叩き調整。内面は，ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 普通(二次焼成)	Ⅸ
278	把手			台形状を呈し，内彎して外上方へのびる。中央部に径2.5cm程の孔がある。体部がやや丸い甕に付くものとみられる。	巻面に叩き調整後，貼り付けている。3面の端部はヘラ削り調整。孔はヘラ切り。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅸ 4点2対有り。
279	坏	A	A 14.0 B 4.3 C 10.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部がやや上げ底気味であるが，丸底風である。体部との境は，不明瞭である。	水挽き整形。(左回り)底部は，中央部に切り離し痕を残し，外周部は回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 緑灰色 普通	前道部 85%
280	坏	A	A 13.0 B 3.2 C 9.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底である。内面の体部基部には強い押えにより，回線状を形成している。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面と底部内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 普通	前道部 90%
281	坏	A	A (12.2) B 3.6 C (8.4)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く内彎する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 緑灰色 普通	前道部 40%
282	坏	A	A (12.2) B 3.7 C (8.6)	体部は，内彎しながら立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	前道部 焼台 40%
283	壺	蓋	A 12.2 B 4.0 G 3.4 H 1.2	天井部は平坦で，口縁部は緩く屈曲し，外下方へ下降する。端部は丸い。つまみは，扁平で，中央部が突出する。	水挽き整形。天井部は，回転ヘラ削り調整。天井部内面の水挽き痕は，強い。	砂粒・細砂 灰色 普通	前道部 50%
284	甕	B	A (20.8) B [5.7] F 4.5	口頸部は，外反して立ち上がり，端部は上下に若干広がり，回線を巡らす。	巻き上げ，水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	前道部
285	鉢	D	A (37.4) B [15.8]	体部は，やや外傾して直線的に立ち上がる。口縁部端部は，内外に広がり，やや内傾する面をなす。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，斜位の平行の叩き調整の後，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 黒色 (灰色) 良好(二次焼成)	前道部



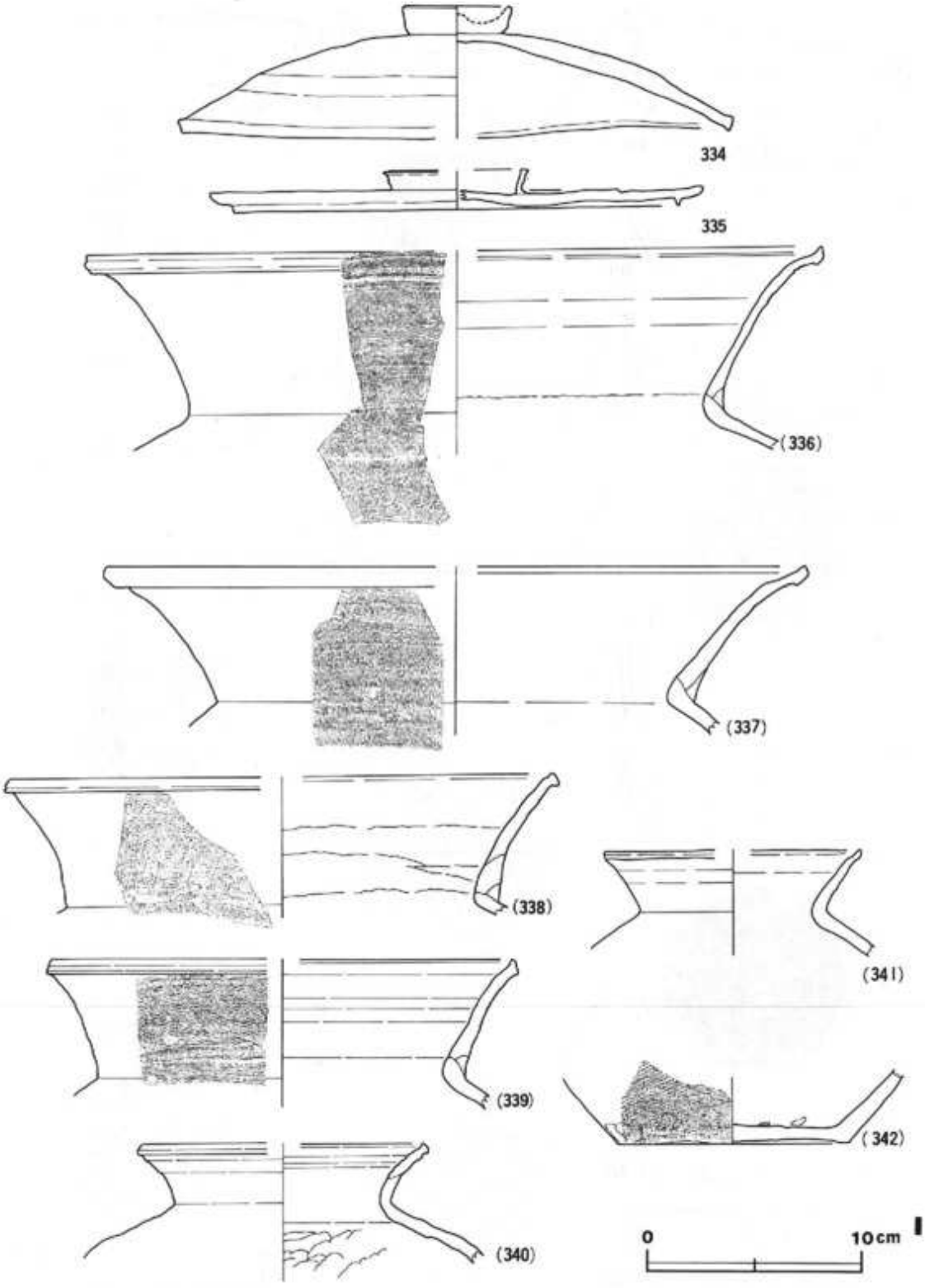
第39図　6号窯跡出土遺物実測図(1)



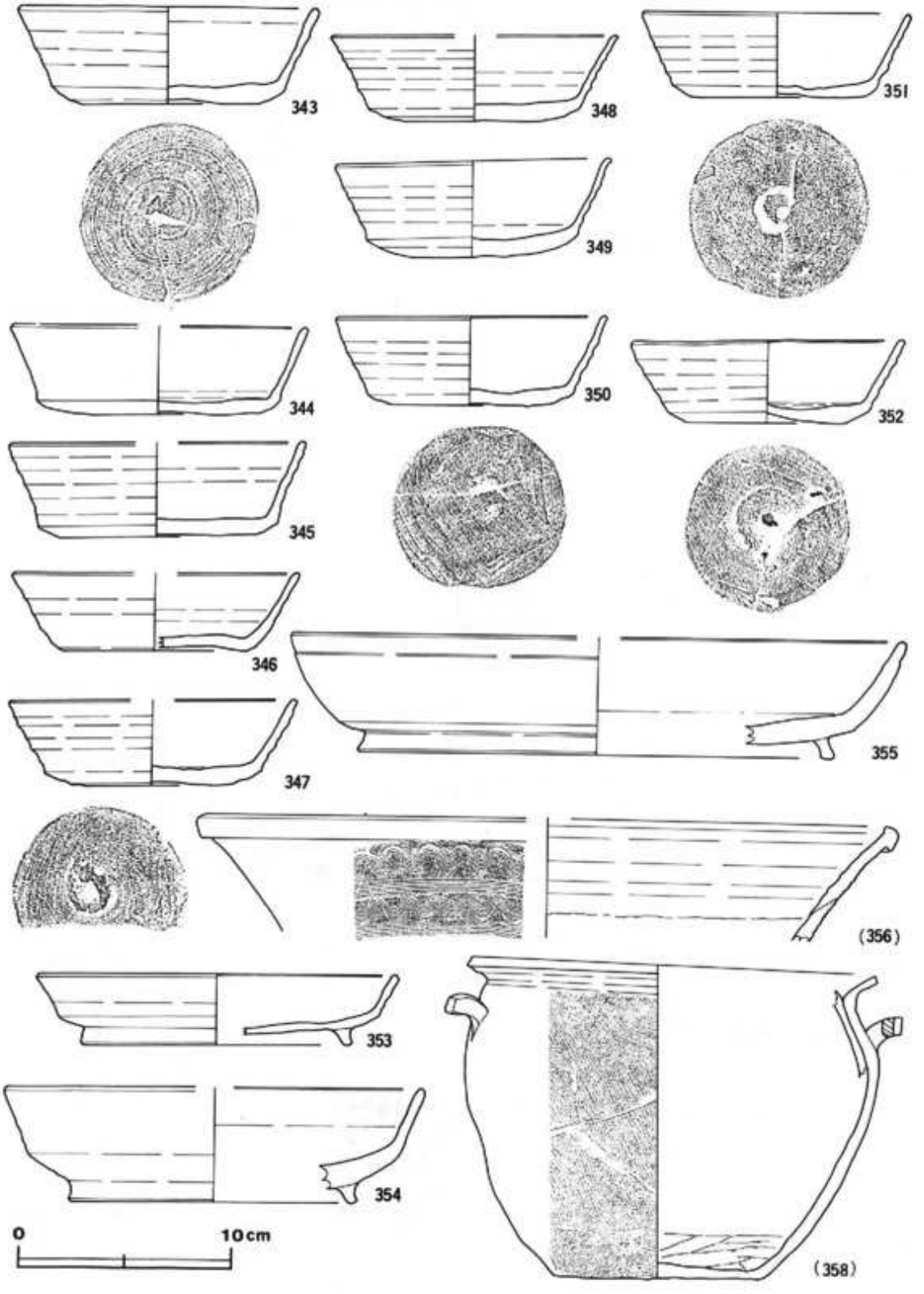
第40図　6号窯跡出土遺物実測図(2)



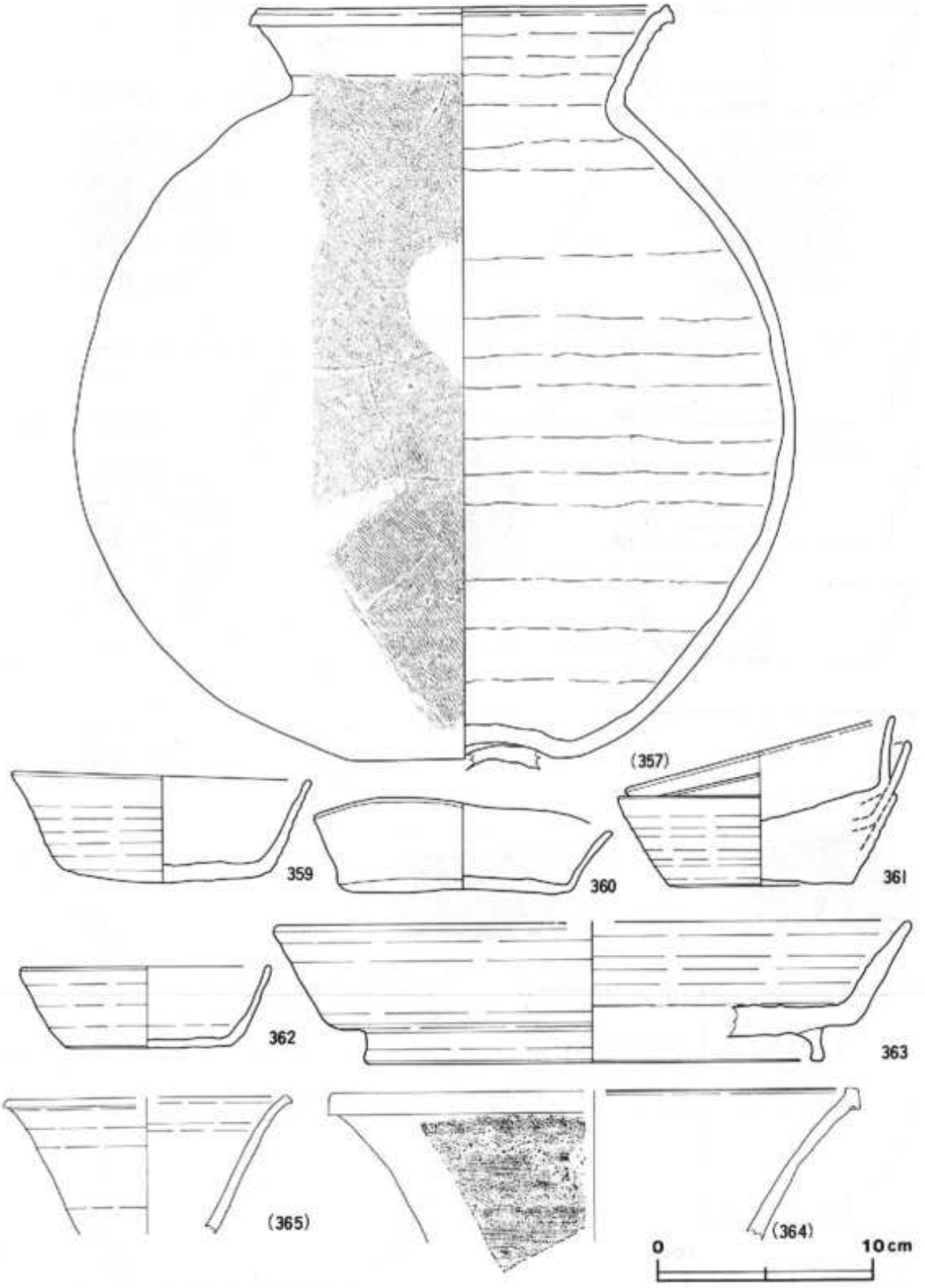
第41図　6号窯跡出土遺物実測図(3)



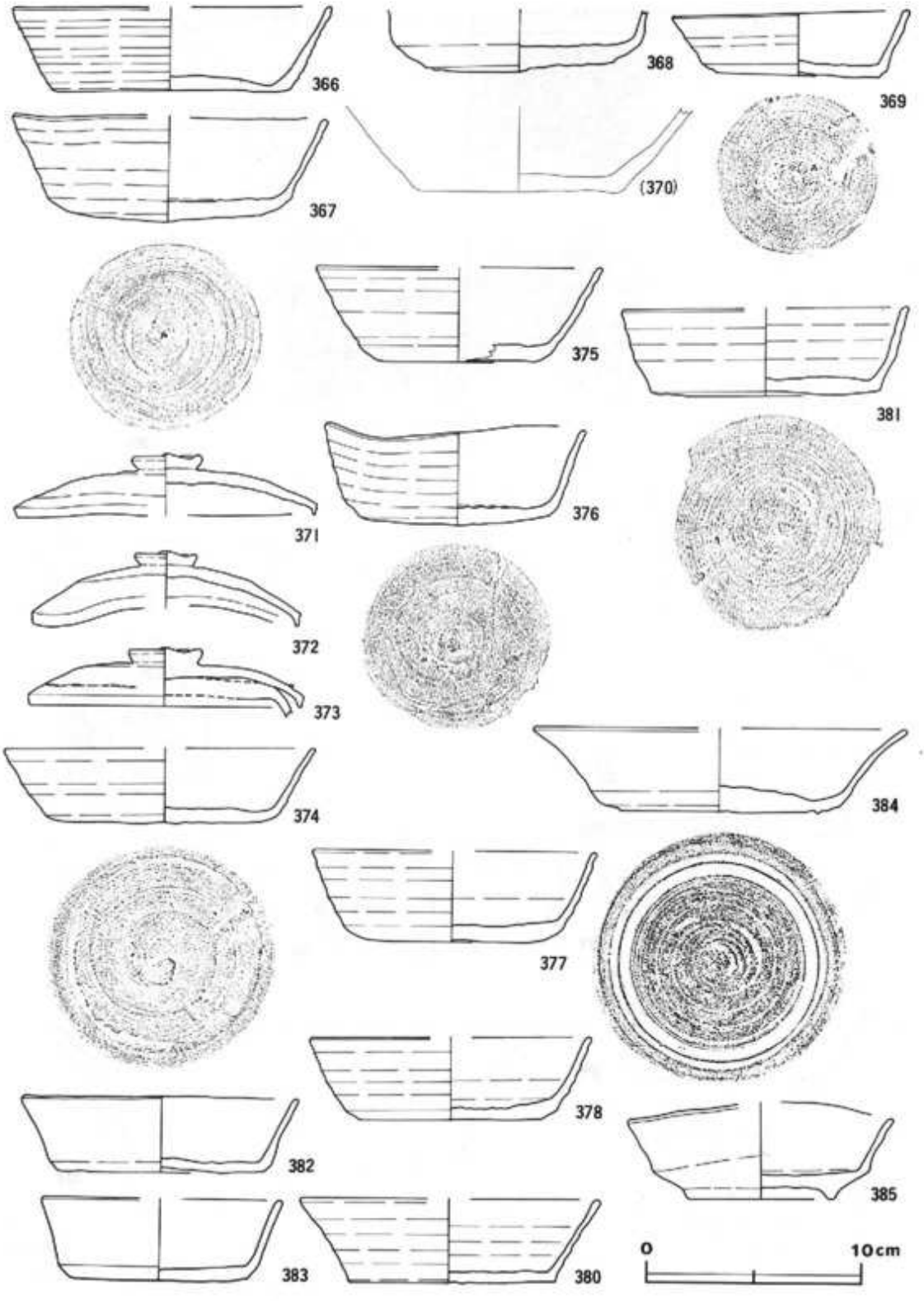
第42図　6号窯跡出土遺物実測図(4)



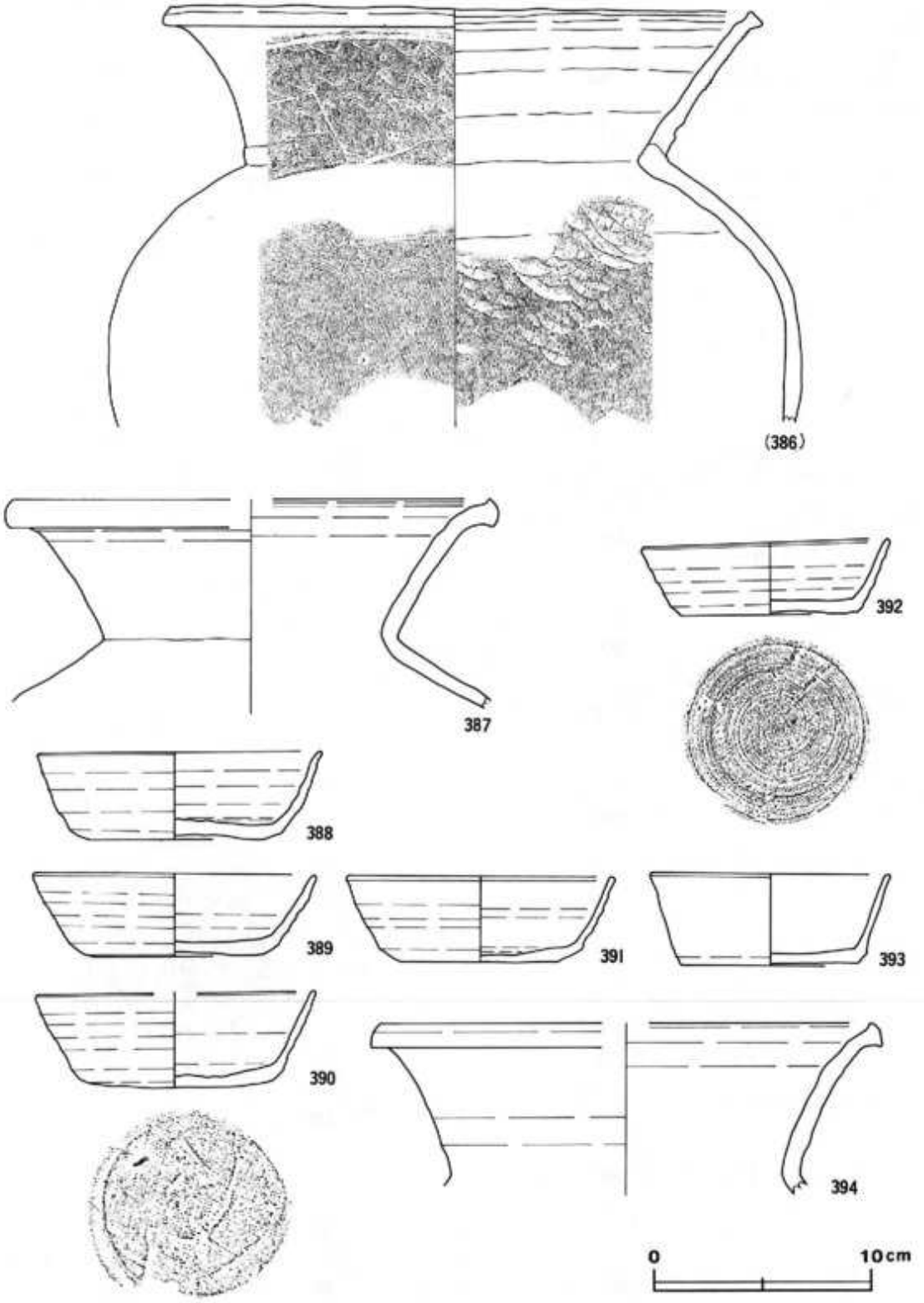
第43図　6号窯跡出土遺物実測図(5)



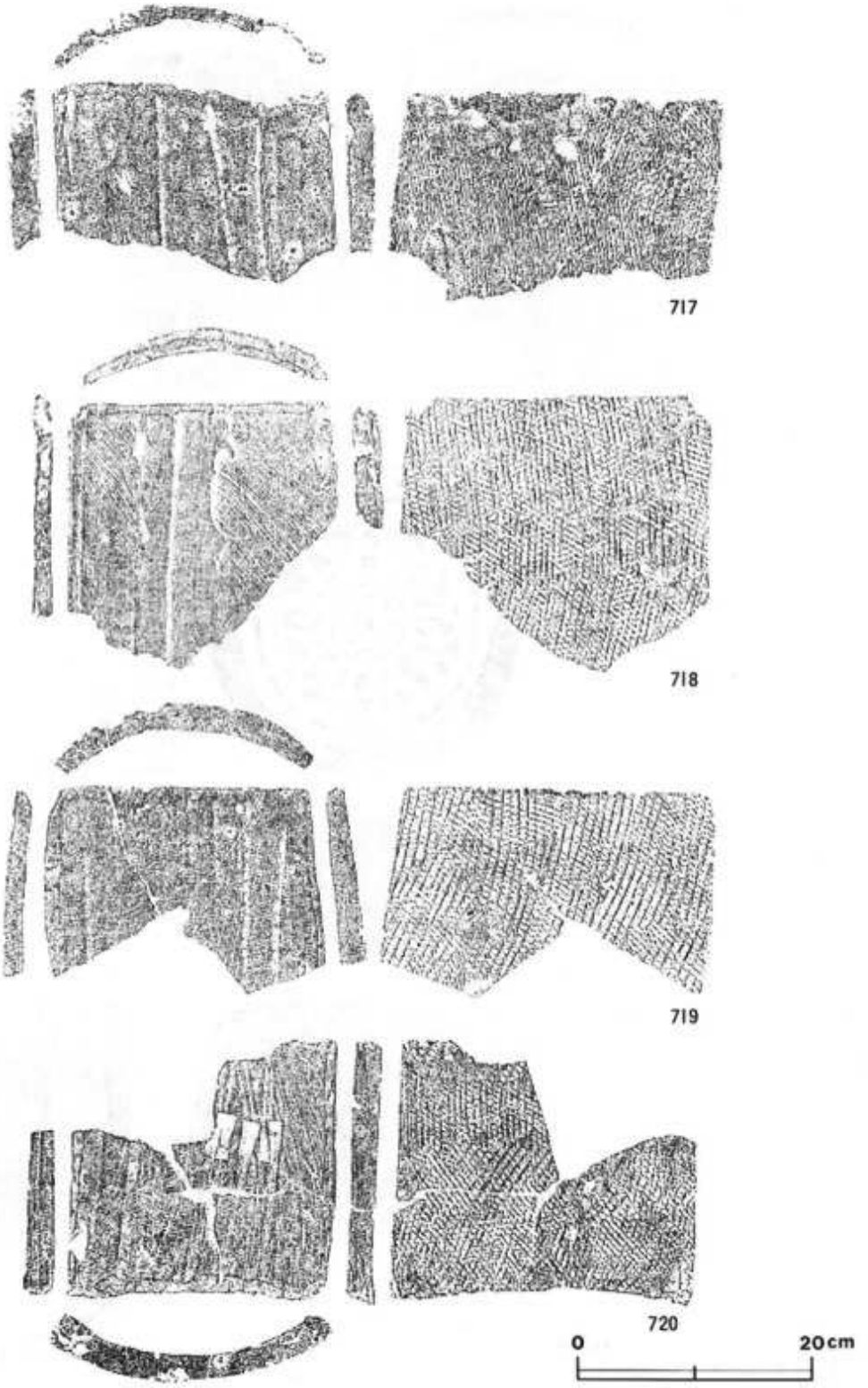
第44図　6号窯跡出土遺物実測図(6)



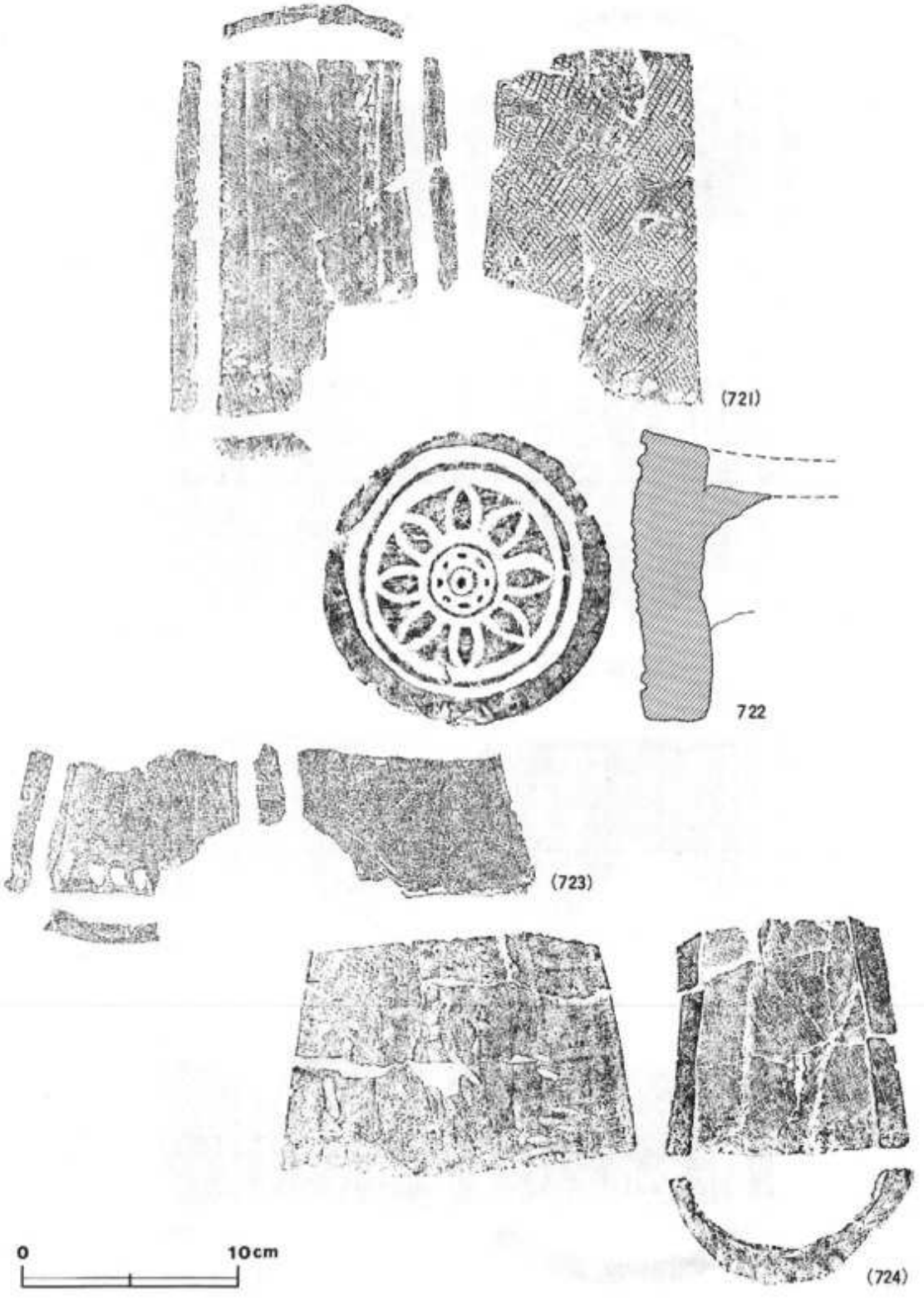
第45図　6号窯跡出土遺物実測図(7)



第46図　6号窯跡出土遺物実測図(8)



第47図　6号窯跡出土遺物実測図(9)



第48図　6号窯跡出土遺物実測図(10)

6号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
286	坏蓋	A 11.0 B 2.35 G 1.9 H 1.2	天井部は，浅く扁平で，中位に凸帯状のものが巡る。口縁部は，鋭く屈曲し，垂下する。 つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。 天井部は，頂部が横ナデ調整で，外周部が回転ヘラ削り。	砂粒・細砂 灰色 良好	I 55%
287	坏蓋	A 10.3 B 1.7 G 2.0 H 0.6	小形で扁平な蓋で，平坦な頂部から中位で段をなし下降する。口縁部は鋭く屈曲し，短く垂下する。つまみは扁平で，上部外周部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部頂部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I 70%
288	坏A	A 14.9 B 4.4 C 9.2	体部は，内彎気味に立ち上がり，上位は直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	I＋III 100%
289	坏A	A 13.3 B 4.5 C 10.3	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部はほぼ平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	I＋III 100%
290	坏A	A 14.8 B 3.9 C 10.6	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部基部には，強い押えが入り，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 浅黄色（黒色） 不良	I 70%
291	坏A	A 14.2 B 4.6 C 9.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色（黒色） 不良	I 60%
292	坏A	A (13.8) B 4.2 C 10.4	体部は，やや内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は，やや鋭い。底部は，やや丸底風で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I 70%
293	坏A	A (13.4) B 4.6 C 10.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の中央部は，指で押えている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I 70%
294	坏A	A (14.6) B 3.75 C 10.0	体部は，器厚をわずかに減じながら内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は，ほぼ平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。底部内面の中央部は，指による押え。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	I 40%
295	坏A	A (14.2) B 4.7 C 10.4	体部は，直線的に立ち上がり，中位で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好（二次焼成）	I 70%
296	坏A	A 13.8 B 3.7 C 10.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（二次焼成）	I 95%
297	坏A	A 13.8 B 4.0 C 10.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の中央部は，指で押えている。	砂粒・細砂 灰色 普通（二次焼成）	I 100%
298	坏A	A 13.8 B 4.3 C 10.0	体部は，器厚をわずかに減じながら，ほぼ直線的に立ち上がる。底部は平底で，外周部に，幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通（二次焼成）	I＋II 90%
299	坏A	A 13.6 B 4.1 C 9.7	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（二次焼成）	I＋II 95%
300	坏A	A (14.2) B 4.0 C 10.7	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，外周部に大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（二次焼成）	I 50%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
301	坏 A	A (13.4) B 4.3 C 10.3	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（二次焼成）	I 60%
302	坏 A	A (13.5) B 3.8 C 10.0	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内面に坏が融着している。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	I 70%
303	坏 A	A (13.6) B 3.9 C 9.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	砂粒・細砂 灰色 良好	I 60%
304	坏 A	A (12.8) B 3.7 C 8.9	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の中央部は，指による押え。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	I 70%
305	坏 A	A (13.0) B 4.2 C 9.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面に，同形態の坏が融着している。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通（重ね焼）	I 60%
306	坏 A	A (13.7) B 4.05 C 9.5	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好（二次焼成）	I 50%
307	坏 A	A 13.6 B 4.2 C 9.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 赤黒色 良好（重ね焼痕）	I ヘラ記号 60%
308	坏 A	A (14.0) B 3.9 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好（重ね焼痕）	I ヘラ記号 60%
309	坏 A	A (13.6) B 4.0 C 9.1	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，強い。	砂粒・細砂 赤黒色 良好（重ね焼痕）	I ヘラ記号 60%
310	坏 A	A 13.6 B 3.9 C 9.4	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	砂粒・細砂 灰色 良好（重ね焼痕 二次焼成）	I ヘラ記号 50%
311	坏 A	A (13.5) B 4.1 C 9.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通（重ね焼痕 二次焼成）	I ヘラ記号 60%
312	坏 A	A (13.4) B 3.8 C 9.1	体部は，やや外反して立ち上がり，中位で軽く内彎する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（重ね焼痕 二次焼成）	I ヘラ記号 70%
313	坏 A	A (13.3) B 4.3 C 9.0	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。310，311と同形態，同手法の坏で，他に5個体みられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（重ね焼痕）	I ヘラ記号 85%
314	坏 A	A 12.8 B 4.0 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好（二次焼成）	I 85%
315	坏 A	A (11.2) B 3.8 C 7.2	小形の坏で，体部は器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。（左回り） 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 不良（二次焼成）	I 80%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
316	坏 A	B〔3.1〕 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がるものとみられる。底部は，平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，切り離し痕を残す不定方向のヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅰ 25%
317	甕 A	A (51.2) B〔13.5〕 F 11.6	口頸部は，外傾して直線的に立ち上がり，端部は外下方に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，3本一条の波状文と，平行回線が三段施文されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ 焼台
318	坏 A	A 13.2 B 4.25 C 8.2	2個の坏が融着し，体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。この2個の坏の下に，319を重ねて焼成している。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 良好(重ね焼)	Ⅱ 95%
319	坏 A	A 13.1 B 4.2 C 8.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，中央部はナデ。体部及び底部外面に，別の坏片が融着。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼)	Ⅱ 80%
320	坏 A	A (13.1) B 4.6 C 9.5	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，中央部はナデ。体部外面に，別の坏片が融着。	礫・砂粒・細砂 黒灰色 良好(重ね焼)	Ⅱ 70%
321	坏 A	A 12.9 B 4.3 C 8.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面に，同形態の坏が2個融着。	砂粒・細砂 明褐灰色 良好(重ね焼)	Ⅱ 90%
322	坏 A	A 13.1 B 3.95 C 8.3	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部内面に，2個の坏が融着。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼)	Ⅱ 95%
323	坏 A	A (13.1) B 4.3 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 50%
324	坏 A	A (13.6) B 4.2 C 8.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残すナデ調整。体部外面の水挽き痕は，強い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(重ね焼痕 二次焼成)	Ⅱ ヘラ記号 70%
325	坏 A	A 13.2 B 4.45 C 8.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残すナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ ヘラ記号 80%
326	坏 A	A (13.2) B 3.7 C 10.0	体部は，直線的に立ち上がり，中位で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅱ ヘラ記号 50%
327	坏 A	A (13.9) B 4.0 C 9.0	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや細い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良 (二次焼成)	Ⅱ ヘラ記号 70%
328	坏 A	A 13.6 B 4.9 C 8.0	体部は，器厚を増しながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ ヘラ記号 80%
329	坏 A	A (13.6) B 4.05 C 6.8	体部は，下位が外反し，上位は直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，ナデ調整。 内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅱ 70%
330	坏 A	A 13.7 B 4.25 C 8.6	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。同形態，同手法の坏が他に1点。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼痕)	Ⅱ 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
331	坏 A	A (13.4) B 3.8 C 8.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は鋭い。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 50%
332	坏 A	A (12.1) B 3.75 C (8.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ 25%
333	坏 A	A 10.1 B 3.5 C 8.1	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅱ ヘラ記号 100%
334	蓋	A (25.6) B 5.9 G 4.8 H 1.3	天井部は丸く，口縁部は屈曲し，内傾してわずかに垂下する。つまみは，扁平で，上部がくぼみ環状を呈する。	水挽き整形。 天井部は，砂が付着し，調整痕不明。内面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台 40%
335	蓋	A (20.8) B 1.85 G (6.75) H 1.15	天井部は，やや反り気味であるが，本来の形であるのかは不明。中位に段をなす。内面のやや内側に，短いかえりが付く。つまみは環状を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径20cmにわたり回転ヘラ削り調整。内面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ 30%
336	甕 A	A (68.6) F 15.3	頸部はくの字状を呈し，口頸部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で強く外反する。口縁部端部は，上下に突出し，断面菱形を呈する。	巻き上げ，叩き成形。 口頸部には，6本一条の波状文が二段に施されている。体部外面は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好	Ⅱ
337	甕 A	A (65.0) F 12.8	頸部はくの字状を呈し，口頸部は外反しながら立ち上がる。口縁部端部は，上下に広がり，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，3本一条の波状文が二段に施されている。	礫・砂粒・細砂 黒褐色(灰色) 良好	Ⅱ
338	甕 A	A (50.8) F 11.9	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，上方と外下方に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，叩き成形。 口頸部には，縦位の平行叩き，横ナデ調整後，4本一条の波状文が三段施されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅱ
339	甕 A	A (43.2) F 11.0	口頸部は，軽く外反しながら立ち上がり，端部は上方へやや突出する。	巻き上げ，叩き成形。 口頸部には，4本一条の波状文が二段に施されている。体部外面は，縦位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ
340	甕 B	A (26.2) B 5.5	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，外下方と内上方へ突出する。体部は，ゆるやかな肩部を有する。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩き調整。内面には，叩きの際のアテ具痕を残す。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 焼台
341	甕 B	A (24.0) B 5.7	口頸部は，直線的に立ち上がり，端部は，下方にやや突出する。口頸部から体部にかけては，くの字状を呈する。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面には自然釉が付着しているが，横位の平行叩き調整とみられる。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ 焼台
342	甕	B (6.2) C (21.6)	平底の底部破片で，体部は大きく開き，ほぼ直線的に立ち上がる。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩き調整で，下端部はヘラ削り調整。底部はナデ調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台
343	坏 A	A 13.8 B 4.65 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で器厚を増す。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に，大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	Ⅲ 90%
344	坏 A	A 13.8 B 4.2 C 9.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に，大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 暗灰黄色 不良	Ⅲ 90%
345	坏 A	A (13.7) B 4.5 C 9.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 不良	Ⅲ 60%

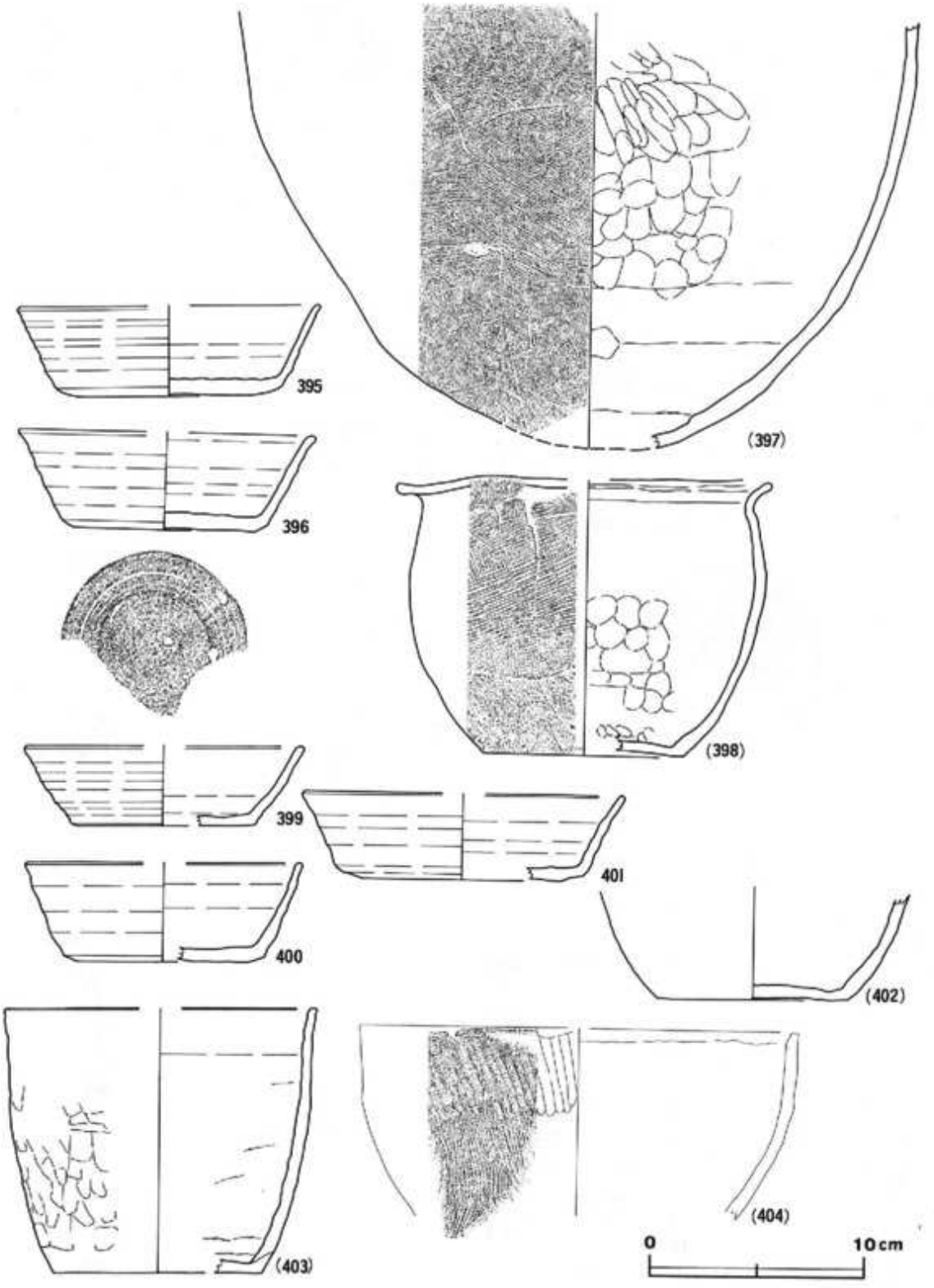
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
346	坏 A	A (13.3) B 3.7 C (8.6)	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 暗赤灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 40%
347	坏 A	A (13.3) B 4.1 C (8.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の雑な手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 にぶい橙色 不良 (酸化焔焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 40%
348	坏 A	A (13.3) B 4.1 C (8.0)	体部は，やや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は，やや丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅲ 50%
349	坏 A	A 13.0 B 4.1 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は丸底風で，体部の2倍以上の厚みをもつ。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 不良 (酸化焔焼成)	Ⅲ 80%
350	坏 A	A 12.9 B 4.2 C 7.8	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 90%
351	坏 A	A 12.7 B 4.0 C 8.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の雑な手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 普通	Ⅲ 80%
352	坏 A	A 12.5 B 3.95 C 7.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す粗いナデ調整で，木目状圧痕がみられる。他に同形態の坏2点有り。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 やや不良	Ⅲ 90%
353	盤	A 16.8 B 3.4 D 12.6 E 0.85	体部は，わずかに外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 45%
354	盤	A (19.5) B 5.5 D (13.0) E 9.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸く，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好(二次焼成)	Ⅲ 20%
355	盤	A (28.8) B 5.6 D (22.4) E 1.05	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，上位に浅い凹線が巡る。底部はやや丸く，外側へふんばる高台が付く。高台端部は，水平である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 20%
356	甕 A	A (63.8) B [11.1]	口頸部は，大きく外傾して立ち上がる。端部は，上下に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，叩き成形。 口頸部には，斜位の平行叩き，横ナデ調整の後，8本一条の波状文と平行回線が施されている。	礫・砂粒・細砂 にぶい橙色 普通	Ⅲ
357	甕 B	A 38.0 B 90.4 F 9.1	口頸部は，やや外反気味に立ち上がり，端部は，やや外下方へ突出する。体部は，ゆるやかな肩部から最大径を中位にもち，ほぼ球形を呈する。	巻き上げ，叩き成形。 体部から底部外面は，斜位の平行叩き調整。内面は，アテ具痕を指ナデで消している。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(二次焼成)	Ⅲ 80%
358	甕 C	A 38.0 B 3.0 C 20.0	口頸部は，短く強く外反し，端部は内傾する。体部は，肩部を有さず，最大径は上位にある。上位に棒状の把手が1対付く。底部は平底である。	巻き上げ，叩き成形。 体部は，斜位の平行叩き調整で，下端部及び底部は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 70%
359	坏 A	A 13.7 B 5.0 C 9.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は，やや丸底気味で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸でやや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 80%
360	坏 A	A 13.8 B 4.0 C 11.0	体部は，やや外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底とみられる。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，砂が付着し，調整痕は不明。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 80%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
361	坏 A	A 12.9 B 4.3 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，自然釉が付着し，調整痕不明。 内面に同形態の坏2個が融着している。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼)	Ⅳ 100%
362	坏 A	A 11.5 B 3.85 C 7.6	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 60%
363	盤	A (29.8) B 6.6 D (21.4) E 1.6	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，垂下する高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台 20%
364	甕 A	A (48.5) B [14.0]	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，内上方と外下方に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部は，斜位の櫛状工具ナデ，横ナデの後，9本一条の波状文と平行圏線が二段施されている。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台
365	鉢 C	A (26.0) B [12.9]	体部は，外傾して直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は，外方へやや突出し，内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 暗赤灰色(灰色) 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台
366	坏 A	A (14.8) B 3.95 C (11.0)	体部は，器厚を減じながら，やや内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，自然釉が付着し調整痕不明。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸で強い。	砂粒・細砂 黄灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 40%
367	坏 A	A (14.5) B 4.95 C 9.0	体部は薄く，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は厚く，丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。他に同形態の坏1個有り。	砂粒・細砂 灰黄色 不良	Ⅴ 60%
368	坏 A	B [2.9] C 8.8	体部は，内彎しながら立ち上がるが，上部欠損。底部は厚く平底で，やや突出気味である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す軽いナデ調整。	砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅴ 50%
369	坏 A	A 11.1 B 3.4 C 7.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，強く屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 80%
370	甕	B [8.1] C (17.9)	平底の底部から，体部は大きく外傾して立ち上がる。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，横位の平行叩き調整で，下端部はヘラ削り調整。底部はナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 焼台
371	坏 蓋	A (13.9) B 2.9 G 3.15 H 0.75	天井部は，浅く丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は鋭い。つまみは，扁平で上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好(重ね焼成)	Ⅵ 40%
372	坏 蓋	A (12.6) B 3.5 G 2.9 H 0.7	天井部は，浅く丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は，やや鋭い。つまみは扁平で，上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 40%
373	坏 蓋	A (12.6) B 2.75 G 3.3 H 0.75	天井部は，浅く丸く，口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は丸い。つまみは，扁平で，上部が若干くぼむ。他に同形態の蓋1個有り。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。内面に，坏底部が融着している。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼)	Ⅵ 80%
374	坏 A	A (14.3) B 3.55 C 10.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	Ⅵ 60%
375	坏 A	A (13.2) B 4.5 C (7.1)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，平底で厚く，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	Ⅵ 25%

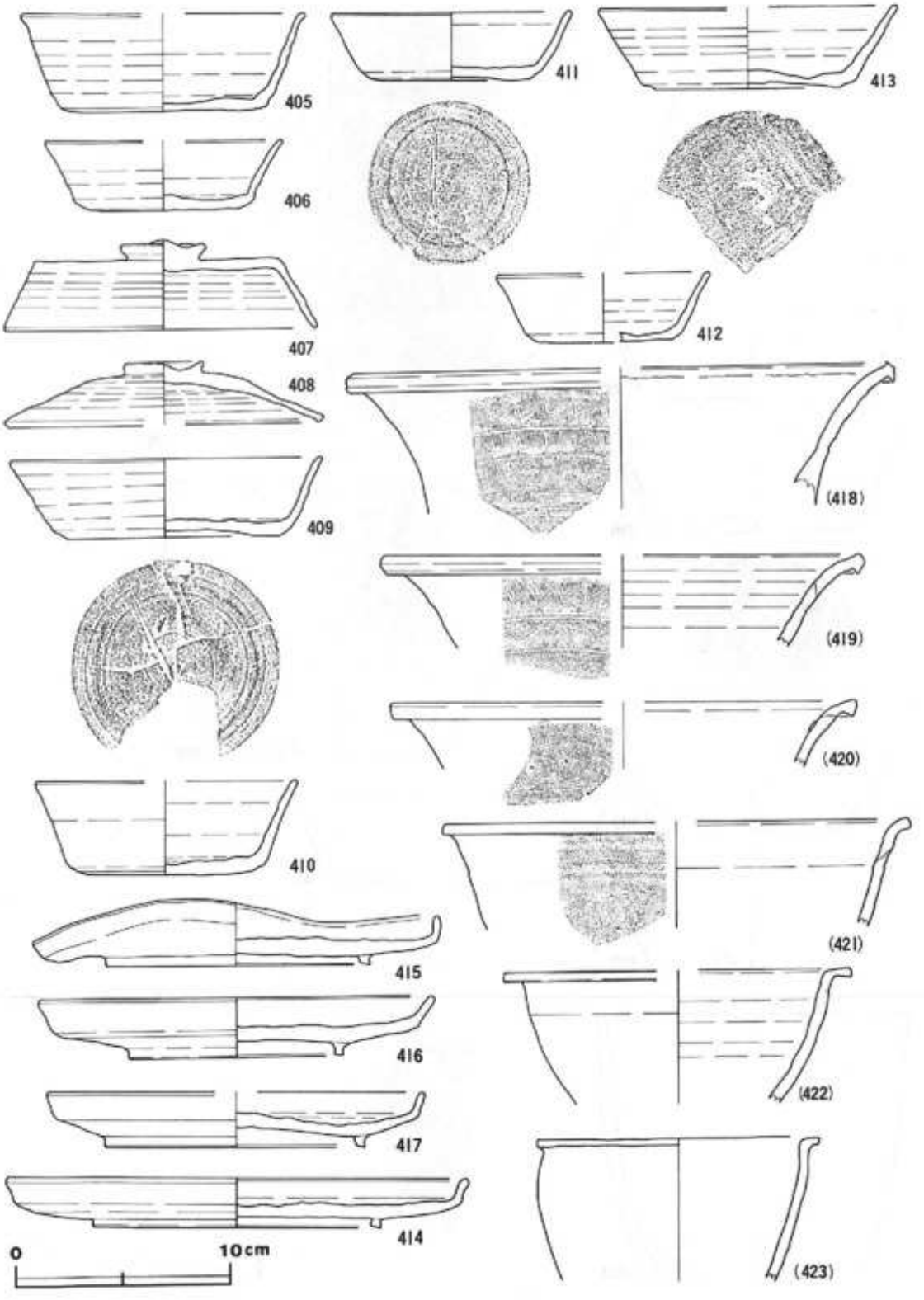
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
376	坏	A	A (12.9) B 4.35 C 8.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ 95%
377	坏	A	A (13.0) B 4.3 C (8.0)	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で厚い。体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，一方向の手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 にぶい橙色 不良	Ⅵ 30%
378	坏	A	A (13.2) B 3.9 C 8.0	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向のナデ調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(重ね焼痕)	Ⅵ 60%
379	坏	A	A (13.4) B 4.3 C 8.4	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。同形態の坏が他に3個有り。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内面に，同形態の坏3個が重ねられ癒着している。	礫・砂粒・細砂 黒灰色 普通(重ね焼)	Ⅵ 50% 写真のみ
380	坏	A	A (13.8) B 4.0 C 9.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 普通(二次焼成)	Ⅵ ヘラ記号 50%
381	坏	A	A (13.2) B 4.1 C 10.8	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は明瞭に屈曲し稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 普通(二次焼成)	Ⅵ ヘラ記号 50%
382	坏	A	A 12.8 B 3.55 C 9.5	体部は，軽く外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部及び体部外面には，自然釉が付着し調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 灰オリーブ色 良好(二次焼成)	Ⅵ 70%
383	坏	A	A (11.1) B 3.9 C 8.3	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，やや鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。底部内面の中央部は，指による押え。	砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 40%
384	椀		A (17.4) B 4.1 C 9.3	体部は，内彎しながら立ち上がり，中位から外反する。口縁部端部は丸い。底部は，厚く平底で，外周部に高台を意識したような小さな凸帯がある。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台状の凸帯を作り出している。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 60%
385	高台付坏		A (12.6) B 3.7 D 6.6 E (0.5)	体部は，やや外反気味に立ち上がる。底部は，やや丸底風で，内側寄りに短い高台が付く。	水挽き整形。 底部及び体部外面は，自然釉が付着し調整痕不明。	砂粒・細砂 灰褐色 良好(二次焼成)	Ⅵ 60%
386	甕	A	A 54.0 B [39.0] F 6.8	口頸部は，やや外反気味に立ち上がり，端部は内傾し，外下方へやや突出する。体部は，やや胴部が張り，最大径を上位にもつものとみられる。	巻き上げ，叩き成形。 口頸部には，4本一条の波状文が二段施文。体部外面は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰黄褐色 良好(二次焼成)	Ⅵ
387	甕	B	A (22.2) F 6.5	口頸部は，大きく外傾して立ち上がり，端部付近で強く外反する。端部は，上下に突出する。体部は，やや胴部が張る。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面には，自然釉が付着し調整痕不明。	砂粒・細砂 黒色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台
388	坏	A	A (13.0) B 4.1 C 9.8	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は丸底気味で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 やや不良	前道部 50%
389	坏	A	A 12.9 B 3.85 C 8.3	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残す不定方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	前道部 50%
390	坏	A	A (12.8) B 4.4 C 8.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 普通	前道部 50%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
391	坏 A	A 12.2 B 4.0 C 7.8	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り)底部は，切り離し痕を残す不定方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	前道部 60%
392	坏 A	A 11.3 B 3.4 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通	前道部 90%
393	坏 A	A (10.8) B 4.3 C 8.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	前道部 50%
394	甕 B	A (22.6) F 7.0	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，上下に突出し内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通	前道部

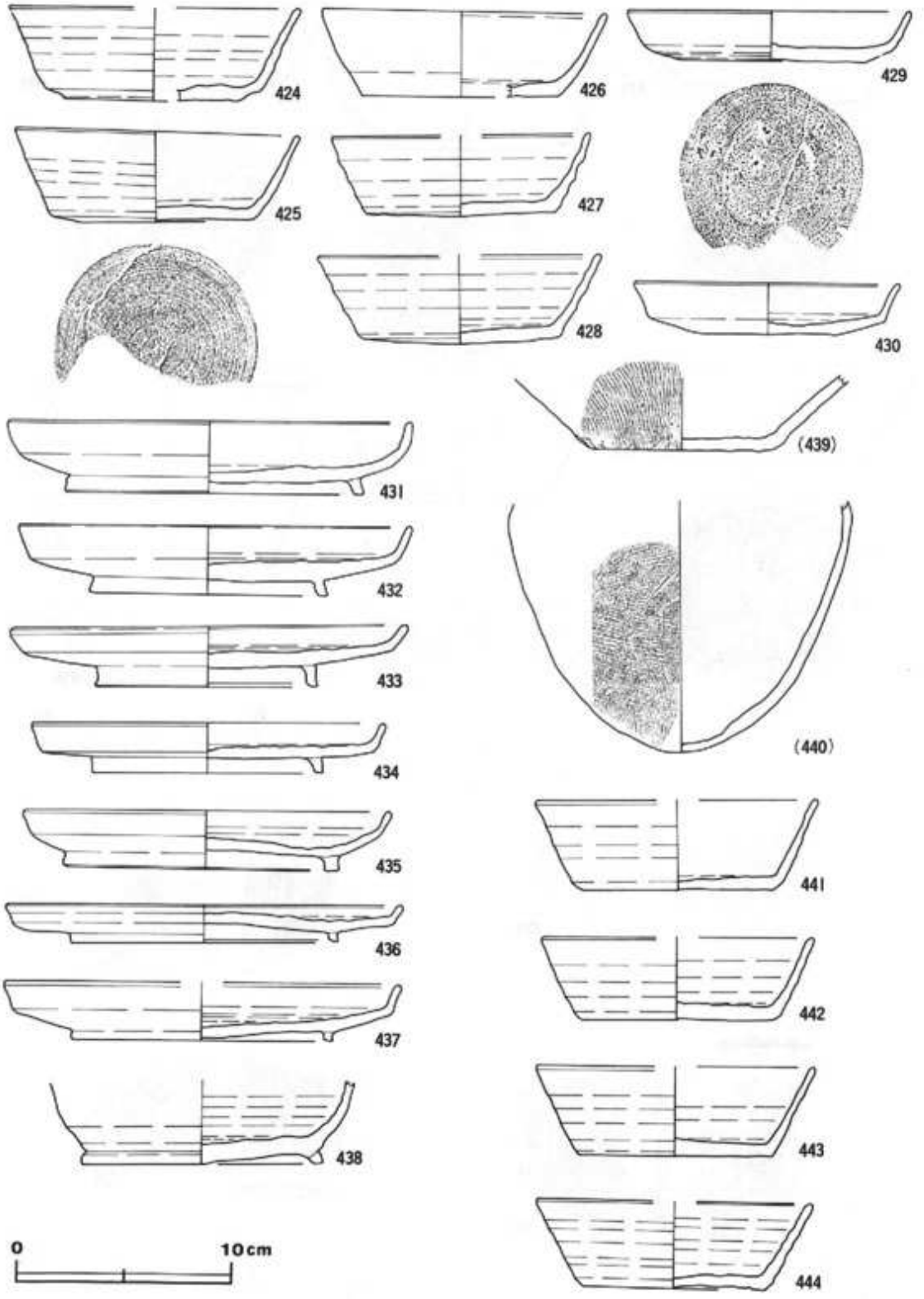
番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
717	平瓦	狭端24.0 厚さ 2.0 ～ 3.0	凹面には，小札痕が残り，布目痕（7×8条）がみられる。凸面には，縦位の縄目叩きが施されている。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 青灰色 普通(二次焼成)	I 焼台
718	平瓦	狭端24.0 厚さ 1.5 ～ 2.3	凹面には，糸切り痕と小札痕が残り，布目痕（7×9条）がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。両側面，狭端面には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 青灰色 普通(二次焼成)	I 焼台(2)
719	平瓦	狭端23.0 厚さ 2.0 ～ 2.8	凹面には，小札痕が残り，布目痕（7×8条）がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。両側面と狭端面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 青灰色 良好(二次焼成)	I 焼台(2)
720	平瓦	広端24.0 厚さ 2.4 ～ 2.9	凹面には，糸切り痕と小札痕が残り，布目痕（8×7条）がみられる。部分的にヘラ削りが施されている。凸面には，斜格子叩きが施されている。側面及び広端面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 青灰色 普通(二次焼成)	I 焼台(3)
721	熨斗瓦（のし がわら）	全長33.0 広端(20.5) 狭端15.5	凹面には，糸切り痕と小札痕が残り，布目痕（10×9条）がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。	礫・砂粒 暗灰色 良好(二次焼成)	I 焼台(3)
722	軒丸瓦	面径13.5	素縁単弁八葉花文中心周環一重式。中房には，1＋8の蓮子を配している。丸瓦は瓦当裏面にそのまま接合され，凹面側に補助粘土をあてがっている。接合面ではがれている。	砂粒 黒灰色 良好(二次焼成)	II 焼台
723	熨斗瓦	広端(19.0) 厚さ 2.7	凹面には，布目痕（7×7条）がみられる。凸面は，斜格子叩きの後，縦位のヘラ削り調整が施され，叩き目を消している。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 灰色 普通(二次焼成)	II 焼台
724	丸瓦	広端22.5 厚さ 2.5 ～ 3.0	凸面には，斜格子叩きの後，縦位のヘラ削り調整が施され，叩き目は，ほとんど消されている。凹面には，布目痕（6×6条）がみられ，布の合せ目もみられる。	礫・砂粒 青灰色 良好(二次焼成)	III 焼台



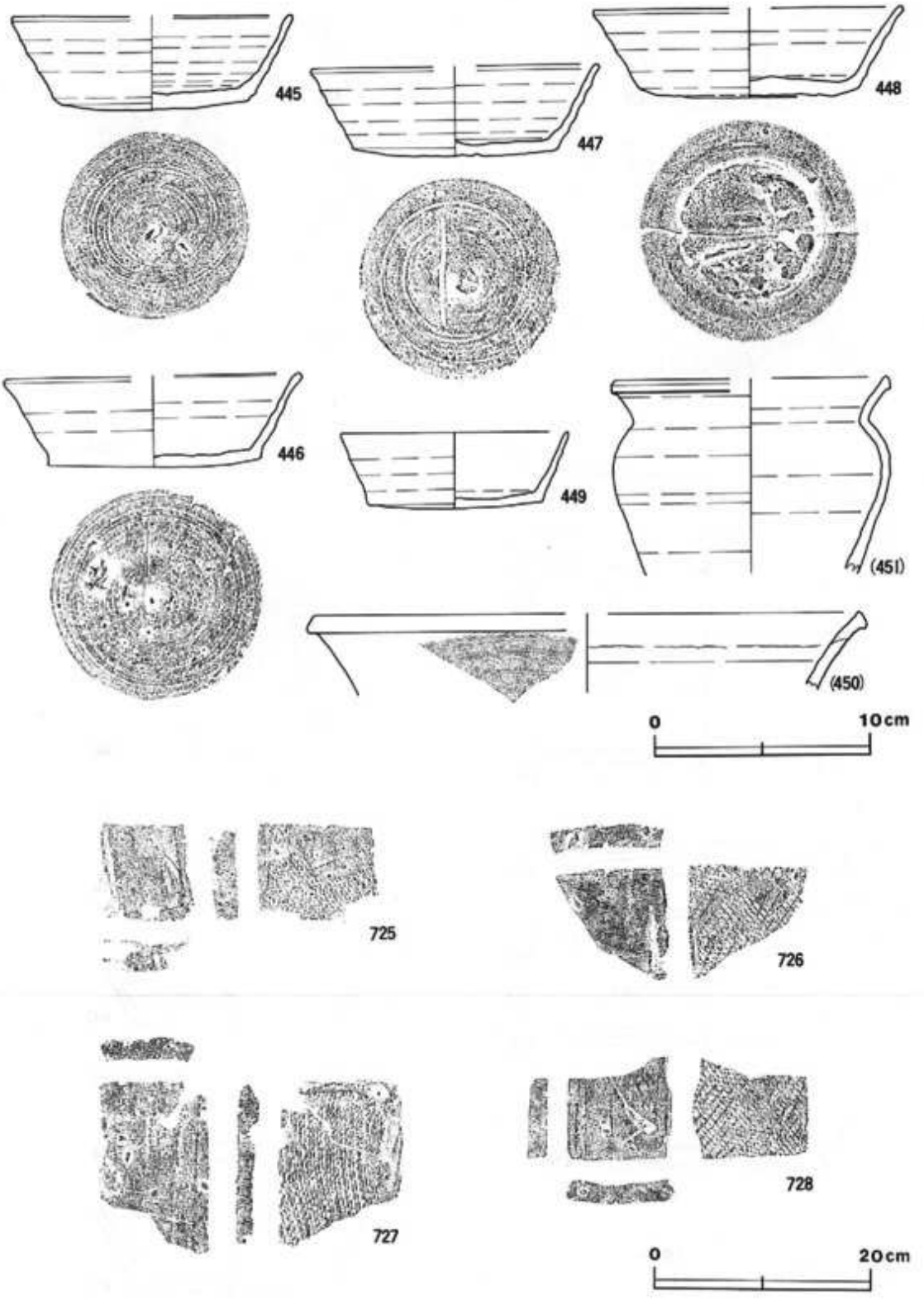
第49図　7号窯跡出土遺物実測図(1)



第50図　7号窯跡出土遺物実測図(2)



第51図　7号窯跡出土遺物実測図(3)



第52図　7号窯跡出土遺物実測図(4)

7号窯跡出土遺物観察表

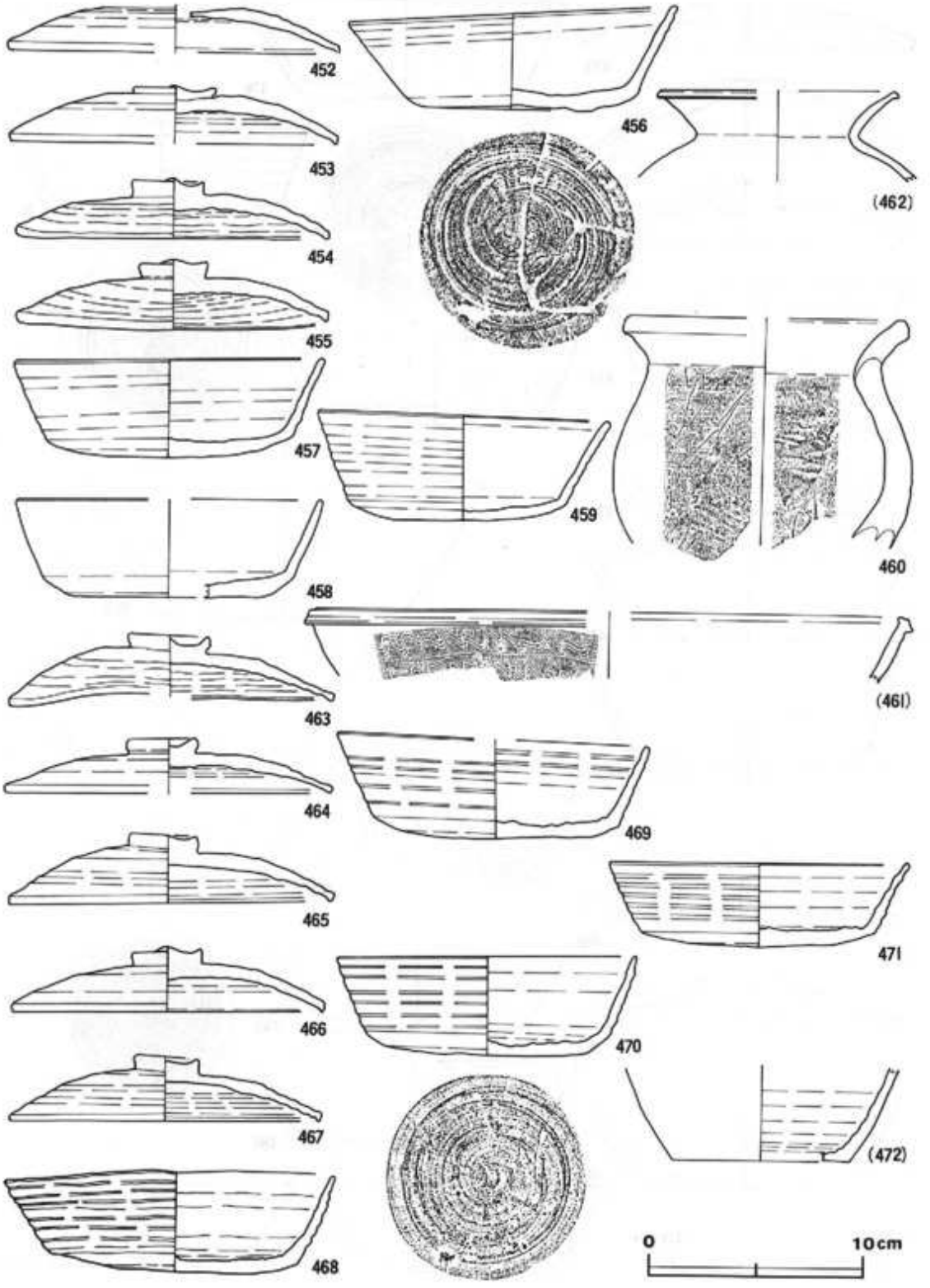
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
395	坏	A	A (13.9) B 4.3 C 10.1	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 赤灰色 やや不良 (酸化焔焼成)	Ⅱ 40%
396	坏	A	A (13.6) B 4.6 C (8.4)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 赤褐色 普通 (酸化焔焼成)	Ⅱ 40%
397	甕	A	B [40.5]	丸底の底部から，体部は内彎気味に立ち上がる。体部最大径は上位にあるものとみられる。	巻き上げ，叩き成形。 体部から底部にかけての外面は，斜位の平行叩きを交差させた調整。内面はアテ具痕。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ
398	甕	C	A 35.5 B 26.0 C (19.0)	口頸部は，短く強く外反し，端部は丸い。体部は，肩部を有さず，内彎しながらなだらかに下降する。底部は平底である。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位，縦位，横位の平行叩きを組み合せた調整。内面は，指による押え。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台 70%
399	坏	A	A (13.0) B 3.8 C (8.8)	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部内・外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 30%
400	坏	A	A (12.9) B 4.7 C (9.5)	体部は，器厚をわずかに減じながら，やや内彎気味に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅲ 30%
401	坏	A	A (15.0) B 4.1 C (9.4)	体部は，外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に面を有する。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 25%
402	甕	A	B [9.85] C (17.9)	平底の底部から，体部は内彎気味に立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ 焼台
403	鉢	D	A (28.9) B 25.0 C (19.4)	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は水平である。底部は平底である。	巻き上げ，水挽き成形。 体部外面は，縦位のナデの後，上位は横ナデ調整。下端部は不定方向のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ 焼台 30%
404	鉢	E	A (41.0) B [17.6]	内彎しながら開く体部と，直立する口縁部とからなる。口縁部端部は水平である。底部は不明。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，縦位の平行叩き調整で，口縁部付近は縦位の指ナデ。口縁部は，ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅵ
405	坏	A	A (13.0) B 4.6 C 9.7	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅳ＋Ⅴ 70%
406	坏	A	A (11.0) B 4.3 C 7.0	体部は，外反しながら立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 40%
407	蓋	蓋	A 14.6 B 4.3 G 3.4 H 0.8	天井頂部は平坦で，口縁部は屈曲して外下方へ下る。口縁部端部は丸い。つまみは，扁平で，上部が若干くぼむ。	水挽き整形。 天井頂部は，回転ヘラ削り調整。口縁部内・外面の水挽き痕は，小さな凹凸でやや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 95%
408	坏	蓋	A (14.5) B 2.95 G 3.5 H 0.6	天井部は，浅く丸く，口縁部は屈曲し，短く内傾する。端部は鋭い。つまみは，扁平で，上部がくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8cmにわたり回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 明褐灰色 やや不良	Ⅴ 80%
409	坏	A	A 14.4 B 3.7 C 9.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内　外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 やや不良 (二次焼成)	Ⅴ ヘラ記号 60%

番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
410	坏	A	A (12.0) B 4.5 C 8.95	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通 (酸化焔焼成)	V 25%
411	坏	A	A 11.1 B 3.2 C 7.5	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 にぶい橙色 不良 (酸化焔焼成)	V ヘラ記号 70%
412	坏	A	A (9.8) B 3.25 C (6.3)	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼成)	V 25%
413	坏	A	A (13.75) B 3.8 C 9.9	体部は，器厚をやや減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，井桁状の手持ちヘラ削り調整。 内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	V 40%
414	盤		A 21.8 B 2.3 D 13.6 E 0.4	口縁部は，短くやや外反し，端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する小さな高台が付く。高台端部は内傾する。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。中央部で，写に割れている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	V 焼台カ 95%
415	盤		A 18.8 B 2.2 D 12.2 E 0.5	口縁部は，短く直立し，端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する高台が付く。高台端部はやや内傾する。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。底部中央部に仕上げナデ有り。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	V 80%
416	盤		A (18.4) B 2.7 D (10.0) E 0.55	口縁部は，短く直線的に立ち上がり，端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する高台が付く。高台端部は水平である。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。中央部で写に割れている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	V 焼台カ 50%
417	盤		A 17.5 B 2.6 D 12.0 E 0.5	口縁部は，短く直線的に立ち上がり，端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する高台が付く。高台端部は内傾する。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。中央部で写に割れている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	V 焼台 60%
418	甕	A	A (50.2) B [13.2]	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は上下に突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，4本一条の波状文と一条の浅い凹線が二段施されている。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	V 焼台
419	甕	A	A (44.6) B [8.6]	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は下方に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，5本一条の波状文と一条の浅い凹線が二段施されている。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	V 焼台
420	甕	A	A (43.4) B [6.2]	体部は，外傾して直線的に立ち上がり，口縁部付近で外反する。口縁部端部は，やや内傾する。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，斜位の細い平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	V 焼台
421	鉢	B	A (44.0) B [10.0]	体部は，外傾して直線的に立ち上がり，口縁部付近で外反する。口縁部端部は，やや内傾する。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，斜位の細い平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 青黒色 良好(二次焼成)	V 焼台
422	鉢	B	A (32.3) B [13.6]	体部は，内彎しながら立ち上がり，口縁部で強く短く外反する。口縁部端部は垂直である。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，斜位の平行叩きの後，上位は横ナデ調整，下位は回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	V 焼台
423	鉢	B	A 26.4 B [13.3]	体部は，わずかに内彎気味に立ち上がり，口縁部が強く短く外反する。口縁部端部は，やや外傾する。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面ともに横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	V 焼台
424	坏	A	A (13.4) B 4.4 C (8.4)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	VI ヘラ記号 35%

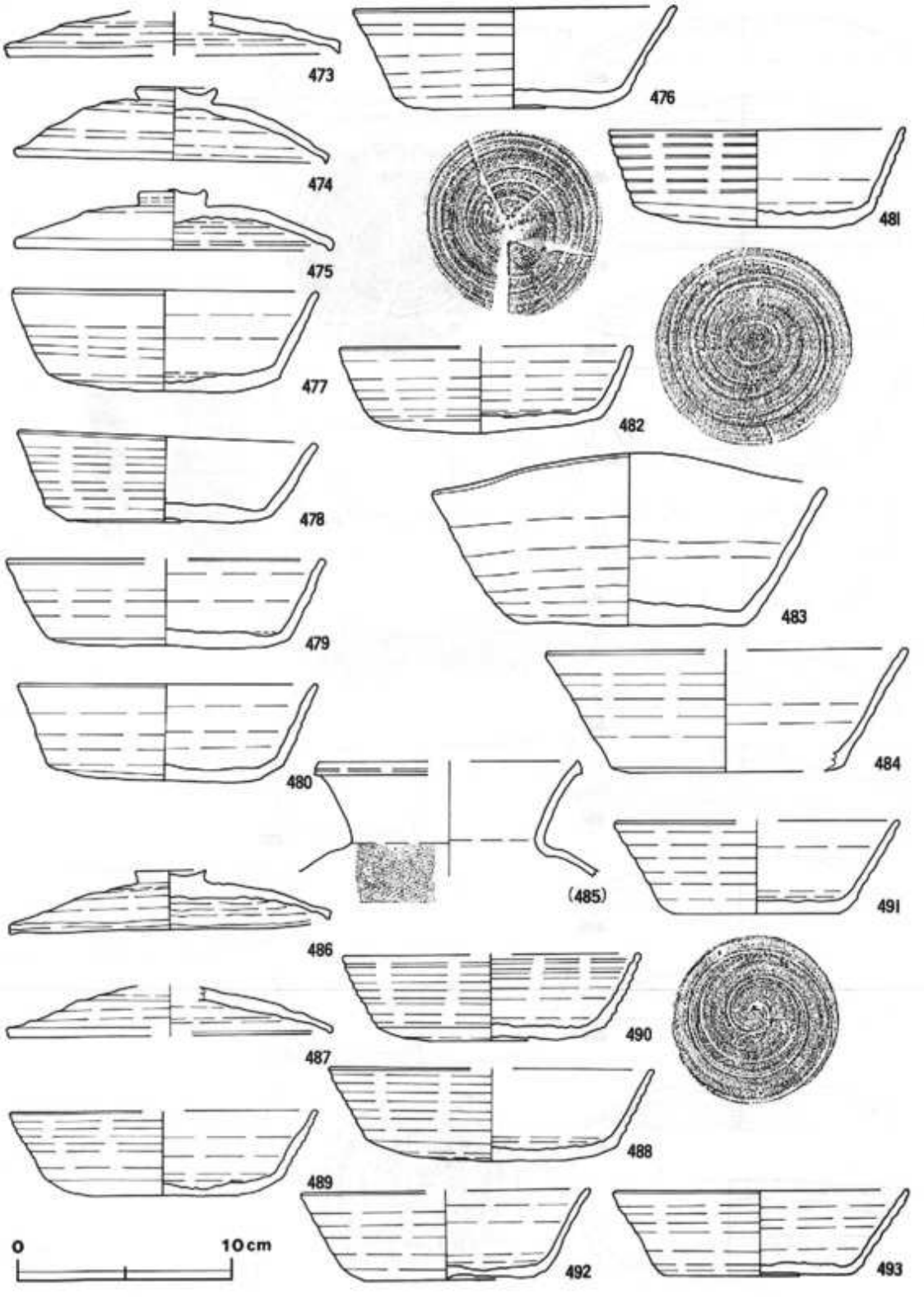
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
425	坏	A	A (13.2) B 4.1 C 9.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅵ 50%
426	坏	A	A 13.2 B 4.0 C 9.2	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅵ 80%
427	坏	A	A (13.0) B 3.8 C 9.0	体部は，器厚を減じながらほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。ほぼ半分に割れている。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅵ 50%
428	坏	A	A (13.0) B 4.2 C (9.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部との境には，明瞭な屈曲点を形成。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅵ 45%
429	坏	B	A 13.1 B 2.4 C 8.6	体部は，短く直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部が平坦で，外周部は，やや丸味を有する。	水挽き整形。(左回り)底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 80%
430	坏	B	A 12.3 B 2.4 C 6.4	体部は，短くやや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，平坦な中央部と，外傾する外周部からなり，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅵ 90%
431	盤		A 18.6 B 3.35 D 13.8 E 0.75	体部は，底部から内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。底部は，丸底風で，やや外面へふんばる短い高台が付く。半分に割れている。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅵ 80%
432	盤		A 18.1 B 3.25 D 10.9 E 0.75	体部は，底部から内彎して立ち上がり，やや外傾する。口縁部端部は丸い。底部は，丸底気味で，やや外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 95%
433	盤		A 18.2 B 2.8 D 10.2 E 1.05	体部は，やや内彎気味で，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。高台は，外側にわずかにふんばる。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ 70%
434	盤		A 16.2 B 2.35 D 10.7 E 0.75	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へわずかにふんばる高台が付く。体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ 70%
435	盤		A 17.0 B 2.75 D 12.7 E 0.75	体部は，底部から内彎して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，外周部が丸く，短く垂下する高台が付く。高台端部は水平。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 80%
436	盤		A 18.4 B 1.9 D 12.4 E 0.5	体部は，短くわずかに外反し，口縁部端部は丸い。底部は平底で，短く垂下する高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅵ 焼台 95%
437	盤		A 18.4 B 2.7 D 12.2 E 0.4	体部は，やや外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，平坦な中央部とやや丸い外周部からなり，短く垂下する高台が付く。	水挽き整形。(左回り)底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。同形態の盤が，他に1個有り。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 50%
438	壺	A	B [3.8] D (11.2) E 0.6	体部は，内彎気味に立ち上がるが，上位は不明。底部は平底で，体部との境に外側へふんばる短い高台が付く。	水挽き整形。底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ
439	壺		B [6.6] C (17.3)	底部は平底で，体部は大きく外傾して立ち上がる。上部は不明。	巻き上げ，叩き成形。体部外面は，縦位の平行叩き調整。底部に縦目状圧痕有り。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ 焼台

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
440	甕	B〔23.5〕	丸底の底部から，内彎しながら立ち上がり，体部最大径は上位にある。	巻き上げ，叩き成形。体部及び底部は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ
441	坏 A	A (13.1) B〔 4.2〕 C (8.9)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅶ 55%
442	坏 A	A (13.0) B 3.9 C 9.0	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。同形態の坏が，他に1個有り。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 普通	Ⅶ 50%
443	坏 A	A (12.9) B 4.2 C (9.0)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部に幅狭の面を有する部分もある。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅶ 40%
444	坏 A	A (12.8) B 4.1 C (8.5)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部には幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 黒褐色 良好	Ⅶ 40%
445	坏 A	A (13.0) B 4.4 C 8.9	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅶ ヘラ記号 85%
446	坏 A	A (13.6) B 4.3 C 10.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部はやや外側に突出し，鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内面の底部と体部の境には，強い屈曲点を形成。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ ヘラ記号 70%
447	坏 A	A (13.3) B 4.2 C 9.7	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部はやや外側へ突出し，鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内面の底部と体部の境には，明瞭な屈曲点を形成。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ ヘラ記号 80%
448	坏 A	A (14.4) B 4.2 C 10.4	体部は，やや外反しながら立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，切り離し痕を残す雑な手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅶ 70%
449	坏 A	A 10.9 B 3.6 C 8.1	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，やや外側へ突出気味で，鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅶ 100%
450	甕 A	A (50.8) B〔 7.3〕	口頸部は，やや外反しながら立ち上がり，端部はやや上下に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。口頸部には，4本一条の波状文と平行凹線が三段以上施されている。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好(二次焼成)	Ⅶ 焼台
451	鉢 A	A (25.2) B〔18.1〕	口頸部は，やや外傾して立ち上がり，端部は外下方へ突出する。体部は，最大径を上位に有し，なだらかな肩部から，内彎気味に下降する。	巻き上げ，水挽き成形。体部上位は，水挽き痕を残し，下位は，縦位のヘラ削り調整とみられる。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅶ 20%

番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
725	平瓦	厚さ 3.5	凹面には，布目痕（9×10条）がみられる。凸面には，縦位の縄目叩きが施されている。側面の凹面側，凸面側及び広端面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黒灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台
726	平瓦	厚さ 2.0 〜 2.6	凹面には，小札痕が残り，布目痕がみられる。凸面には斜格子叩きが施されている。	砂粒 暗緑灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 焼台
727	平瓦	厚さ 1.8	凹面には，小札痕が残り，布目痕（10×9条）がみられる。凸面には，縦位の縄目叩きが施されている。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 暗緑灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ 焼台
728	平瓦	厚さ 1.7	凹面には，糸切り痕，小札痕が残り，布目痕（10×9条）がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 暗緑灰色 良好(二次焼成)	Ⅶ 焼台



第53図　8号窯跡出土遺物実測図(1)



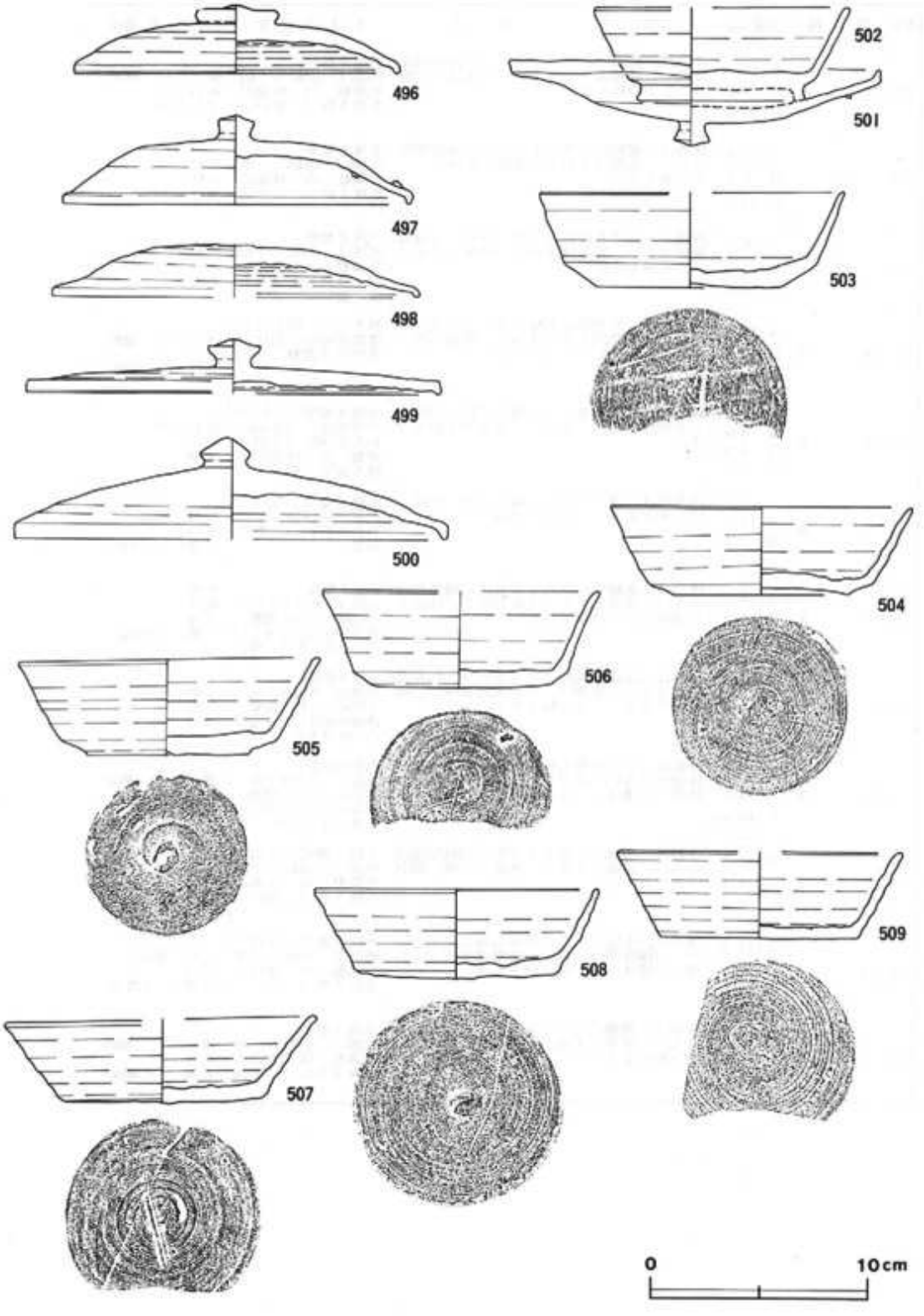
第54図　8号窯跡出土遺物実測図(2)

8号窯跡出土遺物観察表

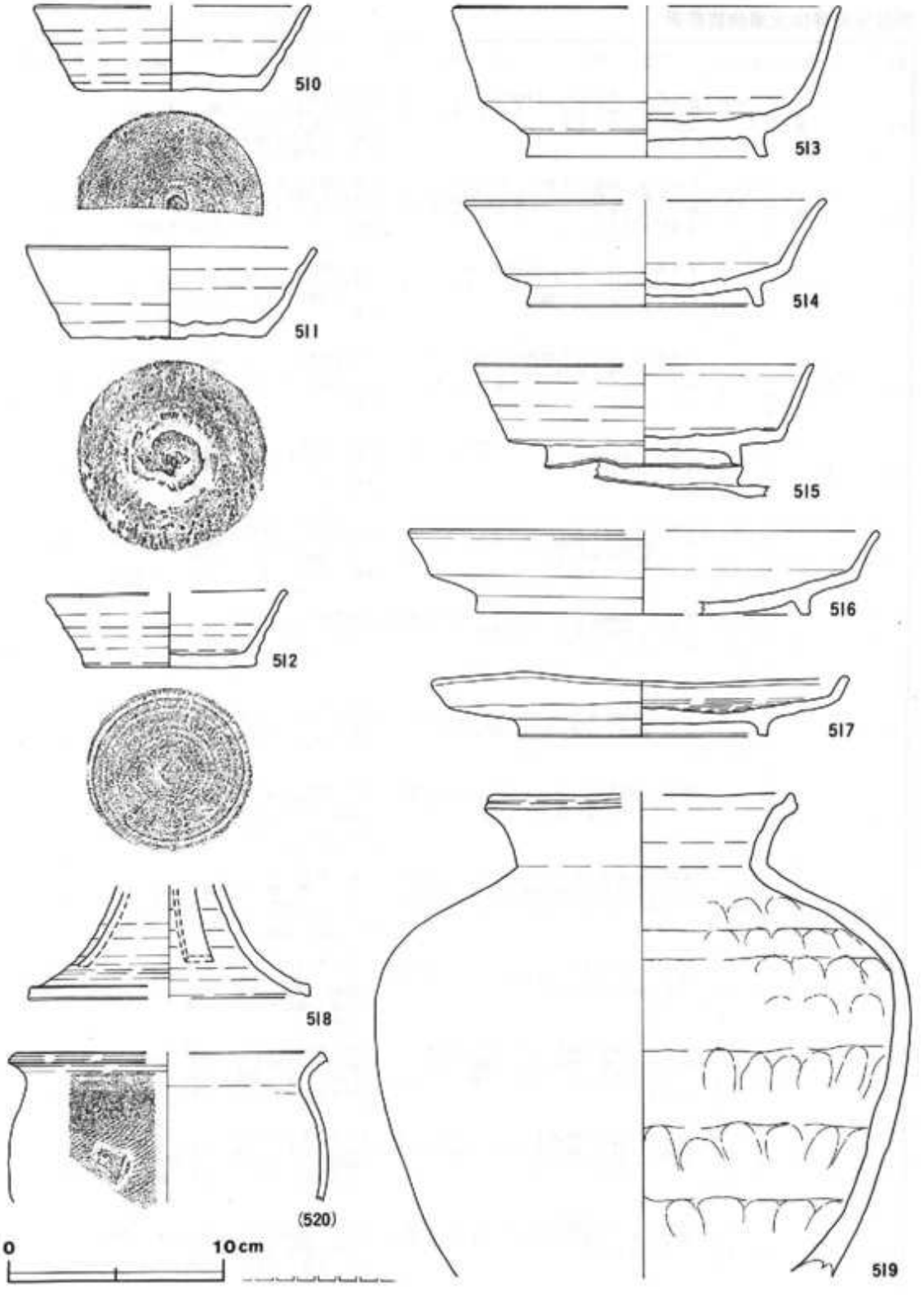
番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
452	坏	蓋	A 15.3 B〔 2.1〕	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，短く垂下する。端部は，やや鋭い。つまみは欠損。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 70%
453	坏	蓋	A (15.1) B 2.7 G 3.8 H 0.55	天井部は，浅く丸い。口縁部は屈曲し，短く垂下する。つまみは，扁平で，上部がわずかにくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰褐色 不良	Ⅰ＋Ⅲ 25%
454	坏	蓋	A 14.5 B 2.9 G 3.3 H 0.9	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，わずかに垂下する。端部は鋭い。つまみは，扁平で上部が中央部を残してわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 85%
455	坏	蓋	A 14.4 B 3.3 G 3.1 H 0.9	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，わずかに垂下する。端部は鋭い。つまみは，扁平で上部が中央部を残してわずかにくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅰ＋Ⅲ 95%
456	坏	A	A (14.9) B 4.5 C 10.9	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底風で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて雑な回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 90%
457	坏	A	A 14.1 B 4.6 C 11.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 98%
458	坏	A	A (14.1) B 4.6 C〔 9.7〕	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底風で，体部下端部に大きく外傾する面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅰ＋Ⅲ 30%
459	坏	A	A 13.7 B 4.95 C 9.0	体部は，やや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。 体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕で，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ 70%
460	壺	D	A (12.8) B〔10.7〕	口頸部は，短く外反し，端部は丸い。体部は，最大径を中位に有し，ゆるやかに内彎して下降する。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，平行叩きの後，横ナデ調整。 体部内面にはアテ具痕が残る。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅰ 25%
461	甕	A	A (54.8) B〔 6.2〕	口頸部は，やや内彎気味に立ち上がり，端部は，内上方と外下方へ突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，4本一束の波状文と1本の凹線が二段以上施されている。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅰ
462	甕	B	A (22.0) B〔 8.5〕 F 4.3	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，外端部がやや突出し内傾する。体部は，肩部がやや張る。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面共に自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 オリーブ黒色 良好(二次焼成)	Ⅰ
463	坏	蓋	A 15.2 B 3.2 G 3.8 H 0.8	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲するが，ほとんど垂下しない。つまみは，扁平で上部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。天井部内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ＋Ⅲ 80%
464	坏	蓋	A (15.0) B 2.6 G 3.4 H 0.7	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲するが，ほとんど垂下しない。つまみは，扁平で上部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ 50%
465	坏	蓋	A 15.0 B 3.2 G 3.2 H 0.7	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，短く垂下する。つまみは，扁平で上部がややくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅱ 70%
466	坏	蓋	A 14.4 B 3.05 G 3.1 H 0.8	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，短く垂下する。つまみは，扁平で中央部はやや突出するが，外周部はややくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 80%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
467	坏蓋	A 14.4 B 3.0 G 3.0 H 0.7	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，わずかに垂下する。つまみは，扁平で上部がややくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 85%
468	坏A	A 15.0 H 4.7 C 11.8	体部は，器厚を減じながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 70%
469	坏A	A 14.2 B 4.7 C 11.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ 60%
470	坏A	A 14.2 B 4.6 C 11.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ＋Ⅲ 60%
471	坏A	A (14.2) B 4.0 C 11.0	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅱ 60%
472	甕	B〔8.8〕 C (16.5)	底部は平底。体部は，やや内彎気味に外傾して立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。 体部内・外面共に横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ
473	坏蓋	A 15.5 B〔2.05〕	天井部は，浅く扁平である。口縁部は，鋭く屈曲し短く垂下する。端部はやや鋭い。つまみは欠損。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰白色 不良	Ⅲ ヘラ記号 45%
474	坏蓋	A 14.7 B 3.35 G 3.6 H 0.65	天井部は，やや深く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し短く垂下する。端部は鋭い。つまみは，扁平で上部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良 (二次焼成)	Ⅲ 90%
475	坏蓋	A 14.7 B 2.8 G 3.1 H 0.75	天井部は，浅く丸い。口縁部は，屈曲し短く垂下する。端部は，やや鋭い。つまみは，扁平で上部がややくぼむ。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 85%
476	坏A	A (15.2) B 4.75 C 11.0	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底気味で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 オリーブ灰色 やや不良	Ⅲ 80%
477	坏A	A 14.7 B 4.75 C 11.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，丸底で体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良 (二次焼成)	Ⅲ 95%
478	坏A	A 14.5 B 4.05 C 10.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 90%
479	坏A	A (14.5) B 4.25 C 11.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。底部内面中央部に仕上げナデ。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅲ 70%
480	坏A	A 14.1 B 4.6 C 11.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅲ 95%
481	坏A	A (14.0) B 4.5 C 11.4	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて左回転利用のヘラ削り調整。体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕。	礫・砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅲ 70%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
482	坏 A	A (13.5) B 4.1 C 10.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 やや不良	Ⅲ 60%
483	椀	A (16.3) B 6.4 C 10.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，やや弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅲ 100%
484	椀	A (16.7) B 5.75 C 10.9	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境はにぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整とみられる。 内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅲ 40%
485	甕 B	A (24.8) B [10.8] F 8.0	口頸部は，やや外反気味に立ち上がり，端部は上下に突出する。体部は，肩部の張った形を呈するものとみられる。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ
486	坏 蓋	A 15.0 B 2.8 G 3.3 H 0.5	天井部は，浅く丸い。口縁部は鋭く屈曲し，やや外反する。つまみは，扁平で上部がくぼむ。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅳ 80%
487	坏 蓋	A 15.2 B [2.4]	天井部は，浅く丸い。口縁部は鋭く屈曲し，短く垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰白色 不良(二次焼成)	Ⅳ 50%
488	坏 A	A (15.0) B 4.3 C 11.5	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。 体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕で，強い。	砂粒・細砂 橙色 不良 (酸化焔焼成)	Ⅳ 45%
489	坏 A	A (14.2) B 4.0 C (11.0)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。 体部外面は，小さな凹凸の水挽き痕で，強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 40%
490	坏 A	A (13.8) B 4.1 C (10.6)	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。 体部は，小さな凹凸の水挽き痕で，強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅳ 40%
491	坏 A	A (13.2) B 4.4 C 7.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅳ 40%
492	坏 A	A (13.4) B 4.2 C 8.0	体部は，中位からやや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，やや鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅳ 40%
493	坏 A	A 13.4 B 4.0 C 8.6	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅳ 90%



第55図　西区灰原等出土遺物実測図(1)

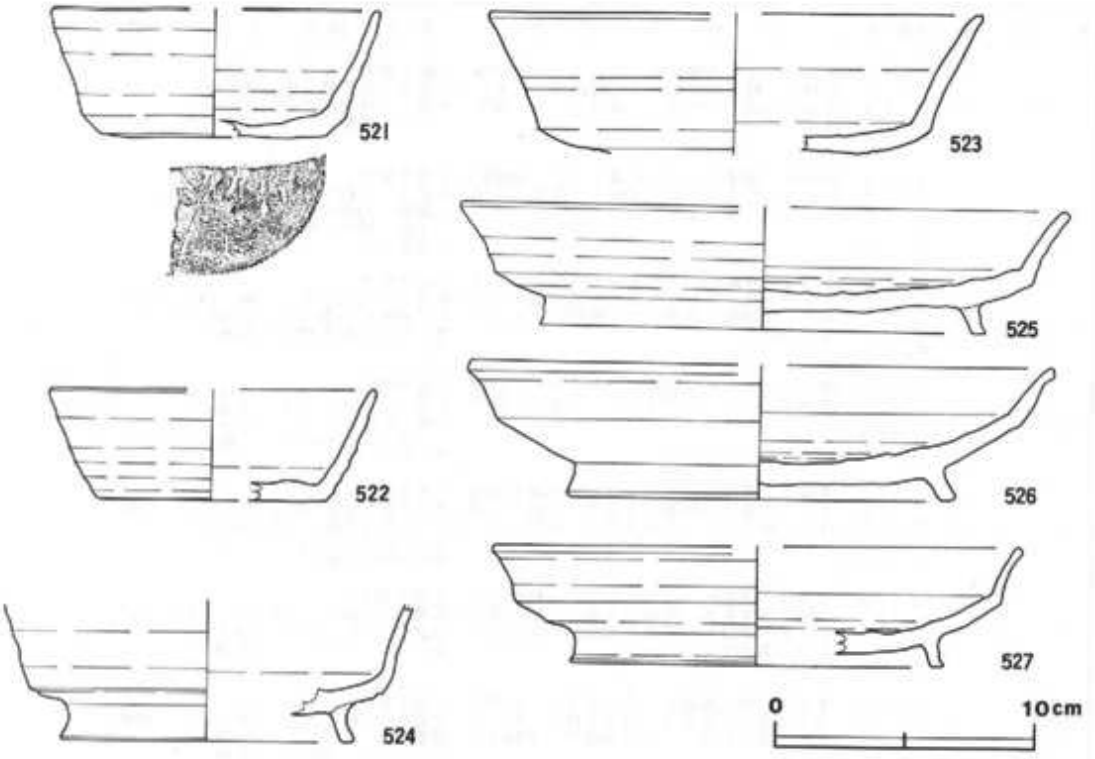


第56図　西区灰原等出土遺物実測図(2)

西区灰原等出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
496	坏 蓋	A 14.8 H 3.2 G 3.4 H 0.9	天井部は，浅く丸い。口縁部は，にぶく屈曲し，短く垂下する。つまみは，扁平で中央部がわずかに突出する。	水挽き整形。 天井部は，径8.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	95%
497	坏 蓋	A (15.6) B 4.1 G 1.6 H 1.1	天井部は，頂部が平坦で，外周部はなだらかに下降し，軽く外反する。口縁部は，屈曲して短く垂下する。つまみは，扁平な擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9.5cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼痕)	60%
498	坏 蓋	A 17.0 B(2.4)	天井部は，浅く丸く，外周部で軽く外反する。口縁部は，にぶく屈曲し，わずかに垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 赤灰色 やや不良	90%
499	蓋	A (19.0) B 2.5 G 2.4 H 1.3	天井部は，ほとんど彎曲せず扁平である。口縁部は，鋭く屈曲し短く垂下する。つまみは，上部の突出が少ない擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。 天井部は，径13cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 にぶい橙色 普通 (酸化焔焼成)	20%
500	蓋	A (20.0) B 4.7 G 2.2 H 1.4	天井部は，浅くやや丸い。口縁部は，屈曲し垂下する。端部は丸い。つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。 天井部は，径15cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 浅黄色 (明赤灰色) 普通	30%
501	坏 蓋	A 17.1 B 3.7 G 1.6 H 1.1	天井部は，浅く丸く，外周部で軽く外反する。口縁部は，屈曲し短く垂下する。つまみは，擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内面に，高台付坏502が融着。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	焼台 95%
502	高台付坏	A (11.6) B 4.3 D 7.7 E 0.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部に，やや外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。(左回り) 体部内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好	90%
503	坏 A	A (14.0) B 4.4 C 8.7	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境に幅広の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	ヘラ記号 50%
504	坏 A	A 14.0 B 4.0 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は，ややとがる。底部は，やや上げ底気味で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。粘土紐痕が残る。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	60%
505	坏 A	A 13.7 B 4.4 C 7.4	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，突出気味の平底で，体部との境に面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残すナデ調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 暗赤灰色 良好	95%
506	坏 A	A (12.6) B 4.5 C 8.5	体部は，外反気味に立ち上がり，口縁部端部は，ややとがる。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	50%
507	坏 A	A (14.2) B 3.9 C 9.1	体部は，器厚を減じながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用の回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 良好	ヘラ記号 40%
508	坏 A	A 13.2 B 4.2 C 9.6	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周部は外方へやや突出している。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 良好(重ね焼痕)	ヘラ記号 80%
509	坏 A	A (13.0) B 4.0 C (9.2)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，右回転利用のヘラ削り調整。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	40%
510	坏 A	A (12.7) B 4.0 C 8.7	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	40%

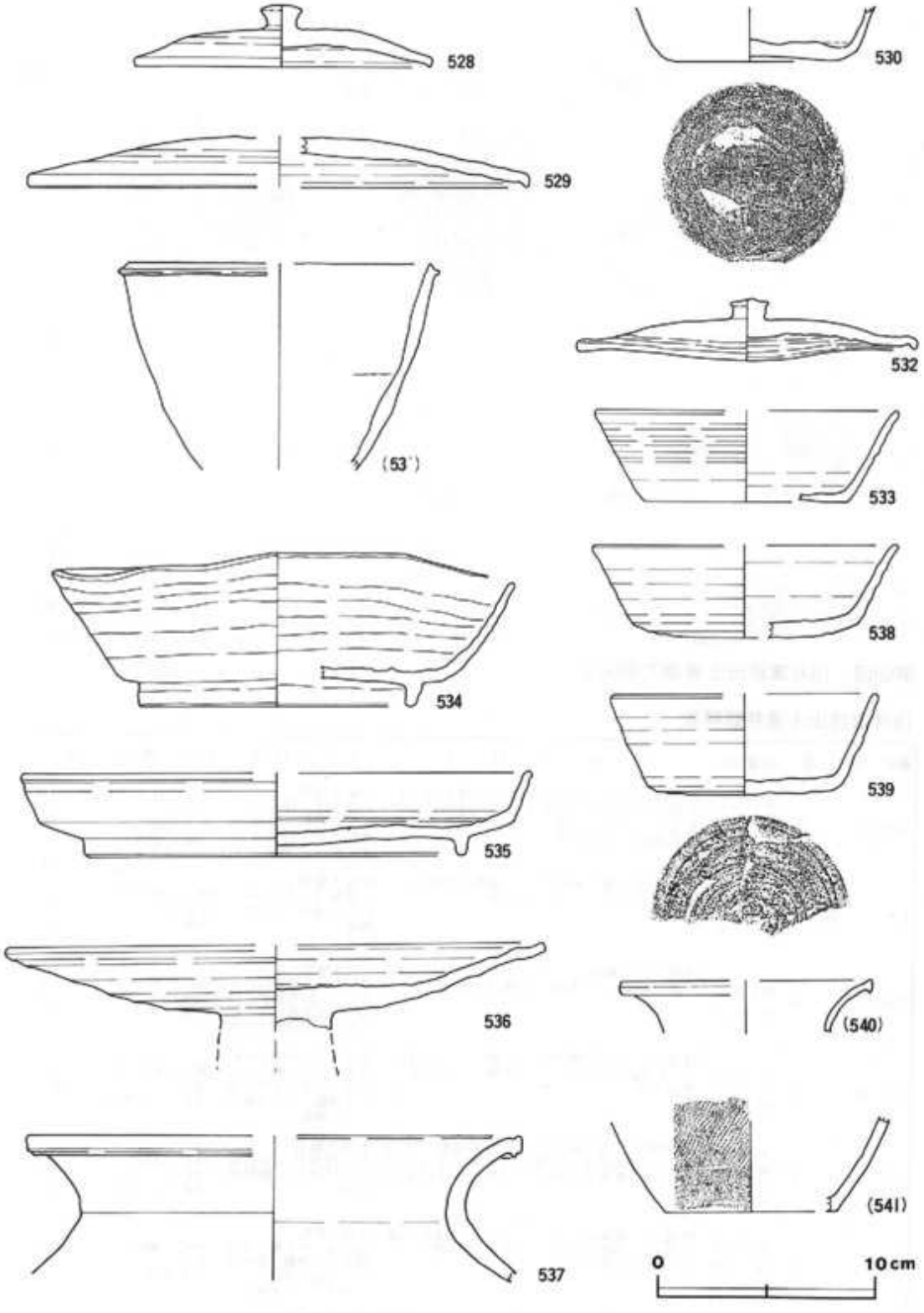
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
511	坏 A	A 13.5 B 4.4 C 9.0	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，切り離し痕を残し，外周部のみヘラナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 やや不良	80%
512	坏 A	A (11.1) B 3.5 C 7.9	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	砂粒・細砂 灰色 良好	ヘラ記号 40%
513	高台付坏	A (18.0) B 7.0 D (11.3) E 1.1	体部は，直線的に立ち上がる。底部は，平坦な中央部と大きく外傾する外周部とに分かれ，外周部との境にやや外側にふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，外周部を含めて回転ヘラ削りの後，高台を貼り付けている。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通	30%
514	高台付坏	A (17.0) B 5.0 D 11.0 E 1.0	体部は，やや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，外側へややふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台を貼り付けている。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 淡黄橙色 不良 (酸化焔焼成)	50%
515	高台付坏	A (15.8) B 4.85 D 9.3 E 1.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。高台は短く，外側へややふんばる。	水挽き整形。(左回り) 体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸で弱い。底部に，焼台とみられる高台付坏片が融着。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	50%
516	盤	A (21.8) B 4.1 D (15.5) E 0.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は丸底で，短く垂下する高台が付く。底部中央部は，高台よりもやや突出する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台を貼り付けている。	礫・砂粒・細砂 緑灰色 普通	20%
517	盤	A (19.3) B 2.7 D 11.6 E 0.8	体部は，短く直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，短く垂下する高台が付く。高台端部は，内傾する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台を貼り付けている。内面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	90%
518	高盤	B [5.3] C (13.0)	脚基部の破片で，脚は，外反しながら下降する。基部端部は，屈曲し短く垂下する。四方に長方形の透し孔を有する。	水挽き整形。 基部付近は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 黒褐色 良好	
519	壺 C	A (13.9) B [22.6]	口頸部は，短く外反する。端部は内傾し，浅い凹線が巡る。体部は，最大径が上位にあり，肩部が張る。	巻き上げ，水挽き成形。 体部外面は，横ナデ調整。体部内面は，指による押えの後，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 良好(二次焼成)	
520	甕 C	A (28.3) B [14.0]	口頸部は，短く外反し，端部は内上方と外下方に突出する。体部は，肩部を有さず，最大径は中位にある。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩き調整。	礫・砂粒・細砂 灰黄色 良好(二次焼成)	



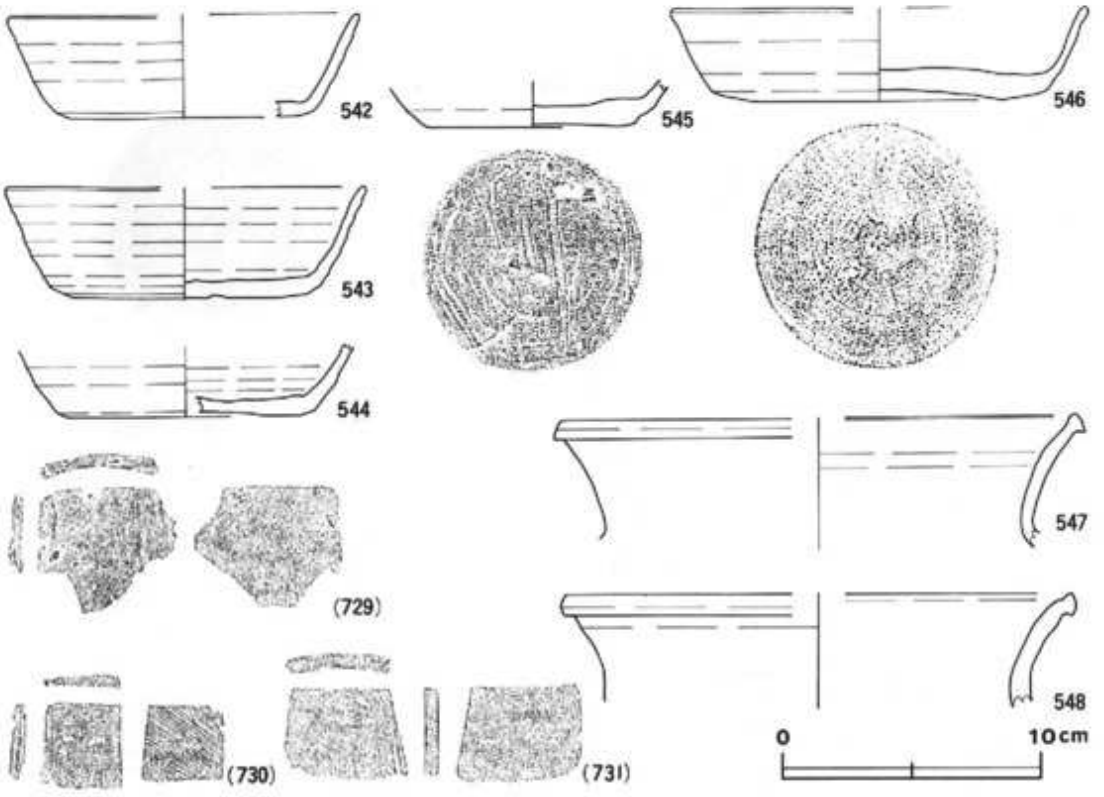
第57図　9号窯跡出土遺物実測図

9号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
521	坏 A	A (12.4) B 5.0 C (8.8)	体部は，器厚をわずかに減じながら，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部下端部に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，ナデ調整。 内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 やや不良	前道部 ヘラ記号 20%
522	坏 A	A (12.4) B 4.3 C (8.9)	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，切り離し痕を残すナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 やや不良	前道部 20%
523	高台付坏	A (19.0) B〔 5.4〕	体部は，やや外反気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は鋭い稜をなす。高台は欠損。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰黄褐色 良好(二次焼成)	前道部 20%
524	高台付坏	B〔 5.2〕 D (11.4) E 1.4	体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。底部は，やや丸底気味で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	前道部 15%
525	盤	A (23.2) B 4.8 D (17.4) E 1.1	体部は，やや外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。 内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	確認面 25%
526	盤	A (22.4) B 5.3 D (15.3) E 1.2	体部は，器厚を減じながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は丸底で，外側へ強くふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。内面の底部と体部の境に，浅い凹線が巡る。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	確認面 50%
527	盤	A (20.2) B 4.55 D (14.4) E 1.2	体部は，外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整の後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	確認面 15%



第58図　10号窯跡出土遺物実測図(1)



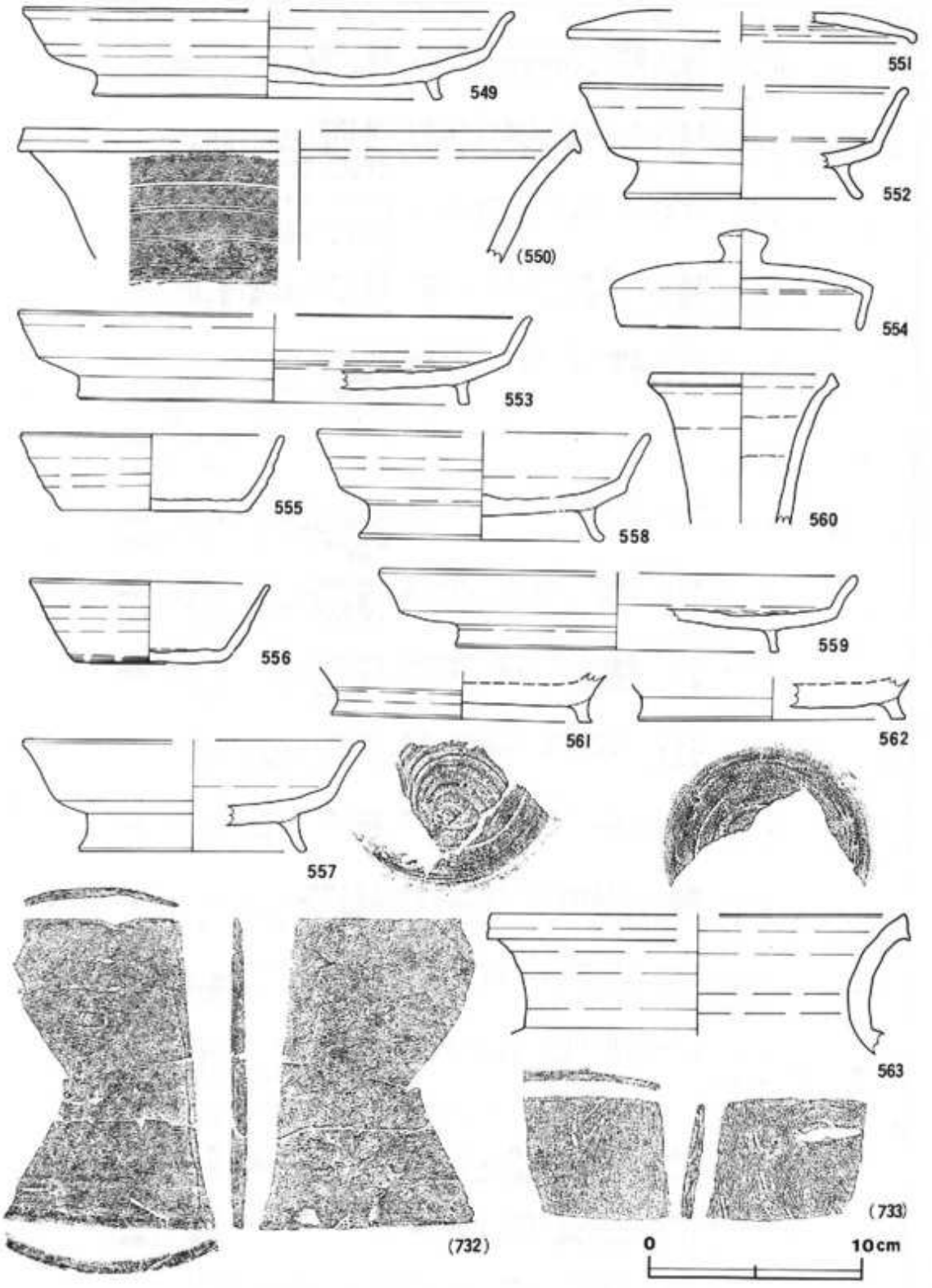
第59図　10号窯跡出土遺物実測図(2)

10号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
528	坏　蓋	A (13.5) B 2.85 G 1.85 H 0.95	天井部は浅く，頂部は平坦で，外周部はわずかに外反気味に下降する。口縁部は屈曲するが，ほとんど垂下しない。つまみは，やや緩高で上部が丸い。	水挽き整形。 天井部は，径9cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 やや不良 (酸化焔焼成)	Ⅱ 40%
529	蓋	A (22.9) B〔2.3〕	天井部は，浅く扁平で，口縁部は屈曲し，短く垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径14cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅱ 40%
530	坏　A	B〔2.5〕 C 8.2	体部は，直線的に立ち上がるが，上部欠損。底部は平底で，体部との境は不明瞭。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えが入り凹面を形成。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 普通	Ⅱ 50%
531	鉢　C	A (28.0) B 19.0	体部は，やや内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部端部は，やや内彎し，外端部は突出する。	巻き上げ，水挽き成形。 体部外面は，斜位の平行叩きの後，上位は横ナデ調整，下位は縦位のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 黒色 良好(二次焼成)	Ⅱ＋Ⅲ
532	坏　蓋	A (15.8) B 2.4 G 1.9 H 1.0	天井部は，浅く扁平で，外周部は軽く外反する。口縁部は，屈曲し短く垂下する。つまみは，緩高で上部がやや外方へ突出する。	水挽き整形。 内・外面共に自然釉，砂が付着し，調整痕不明。	砂粒・細砂 灰白色 良好(二次焼成)	Ⅲ 25%
533	坏　A	A (13.9) B 4.25 C (9.4)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，切り離し痕を残すナデ調整。体部外面の水挽き痕は，小さな凹凸で，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 やや不良	Ⅲ 20%
534	高台付椀	A (20.0) B 6.0 D 12.6 E 1.1	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外周付近にやや内傾する高台が付く。高台端部は丸い。	水挽き整形。 高台は貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰白色 普通	Ⅲ 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
535	盤	A (23.4) B 3.9 D 17.4 E 0.9	体部は、直線的に立ち上がり、口縁部付近で軽く外反する。口縁部端部は丸い。底部は平底で、短く垂下する高台が付く。高台端部は丸い。	水挽き整形。 底部は、回転ヘラ削りの後、高台貼り付け。	砂粒・細砂 橙暗赤褐色 良好	Ⅱ 40%
536	高盤	A (24.8) B〔3.9〕	坏部は、浅くやや丸い。口縁部内面に浅い凹面を有し、端部はやや内傾する。脚部は欠損しているが、二方に透し孔があるものとみられる。	水挽き整形。 坏底部は、径13cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は、弱い。	砂粒・細砂 灰白色 良好	Ⅲ 20%
537	甕 B	A (22.6) B〔6.7〕	口頸部は、短く強く外反し、端部は上下にやや突出する。体部は、やや肩部を有する。	巻き上げ、水挽き成形。 内・外面共に自然釉が付着し、調整痕不明。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ
538	坏 A	A (13.8) B 4.3 C (9.0)	体部は、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸い。底部は、やや丸底で、体部との境は、にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は、外周部を除いて回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅴ 25%
539	坏 A	A (12.0) B 4.65 C (8.0)	体部は、直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸い。底部は平底で、体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は、回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は、弱い。	礫・砂粒・細砂 にぶい赤褐色 やや不良	Ⅴ 30%
540	甕 B	A (23.2) B〔4.8〕	口頸部は、強く外反し、端部は上下に突出する。	巻き上げ、水挽き成形。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ
541	甕	B〔5.3〕 C (15.8)	体部は、やや内彎気味に立ち上がる。底部は平底である。	巻き上げ、叩き成形。 体部外面は、斜位の平行叩き調整で、下端部は横位のヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅴ
542	坏 A	A (13.4) B 4.0 C (8.7)	体部は、直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸い。底部は、やや丸底で、体部との境は、にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は、回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は、弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅷ 15%
543	坏 A	A (13.8) B 4.3 C (9.4)	体部は、直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸い。底部は平底で、体部との境に不明瞭な幅狭の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は、外周部のみ不定方向の手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好	Ⅷ 20%
544	坏 A	B〔2.6〕 C〔9.0〕	体部は、やや内彎気味に立ち上がる。底部は平底で、体部との境に不明瞭な幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は、一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 30%
545	坏 A	B〔1.8〕 C 8.0	体部は、ほとんど欠損。底部は平底で、体部との境に幅狭のやや外反する面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は、不定方向の手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 良好	Ⅷ 30%
546	坏 B	A (15.9) B 3.6 C 9.5	体部は、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸い。底部は平底で、外周部は大きく外傾する。	水挽き整形。 底部は、回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は、弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅷ 70%
547	甕 B	A (19.9) B〔5.1〕	口頸部は、軽く外反しながら立ち上がり、外端部は突出し、内傾する面をつくる。	巻き上げ、水挽き成形。 口頸部は、横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 良好	Ⅷ
548	甕 B	A (19.5) B〔4.4〕	口頸部は、軽く外反して立ち上がり、端部は上下に突出し、断面三角形状を呈する。	巻き上げ、水挽き成形。 器面には自然釉が付着し、調整痕不明。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅷ

番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
729	平瓦	厚さ 0.9～1.3	凹面は、縦方向のナデ調整によって、布目痕を消している。凸面は、斜位の平行叩きの後、丁寧なナデ調整が施されている。側面の凹面側には、面取り調整が施されている。	礫・砂粒 暗灰色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台
730	平瓦	厚さ 0.8～1.1	凹面は、縦方向のナデ調整によって、布目痕を消している。凸面は、斜位の平行叩きの後、ナデ調整が施されている。側面の凹面側には、面取り調整が施されている。	砂粒 褐灰色 普通(二次焼成)	Ⅱ 焼台
731	平瓦	厚さ 1.1～1.3	凹面は、縦方向のナデ調整によって、布目痕を消している。凸面は、横位の平行叩きの後、ナデ調整が施されている。側面の凹面側には、面取り調整が施されている。	砂粒 暗灰色 普通	Ⅲ 焼台

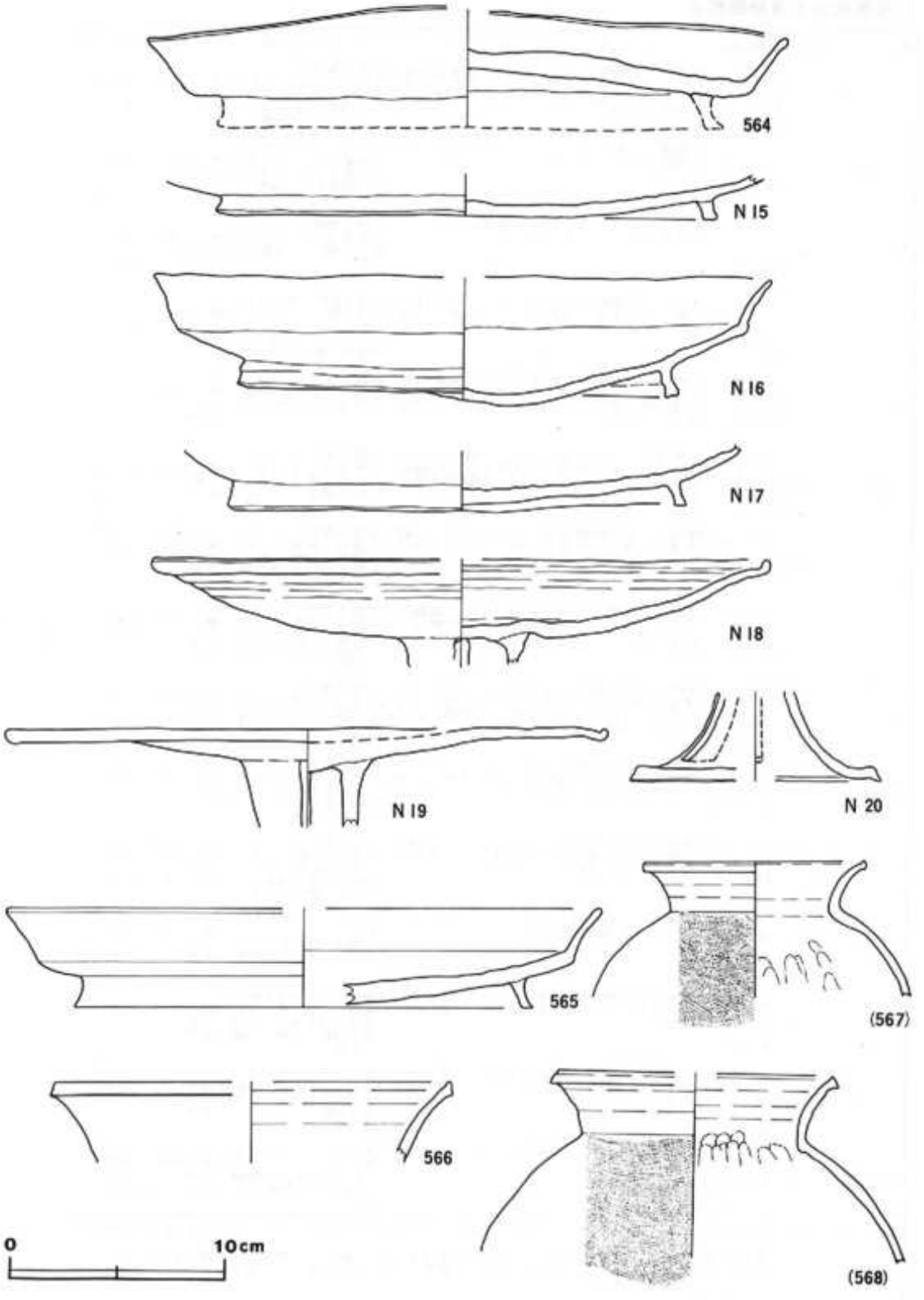


第60図　11号窯跡出土遺物実測図

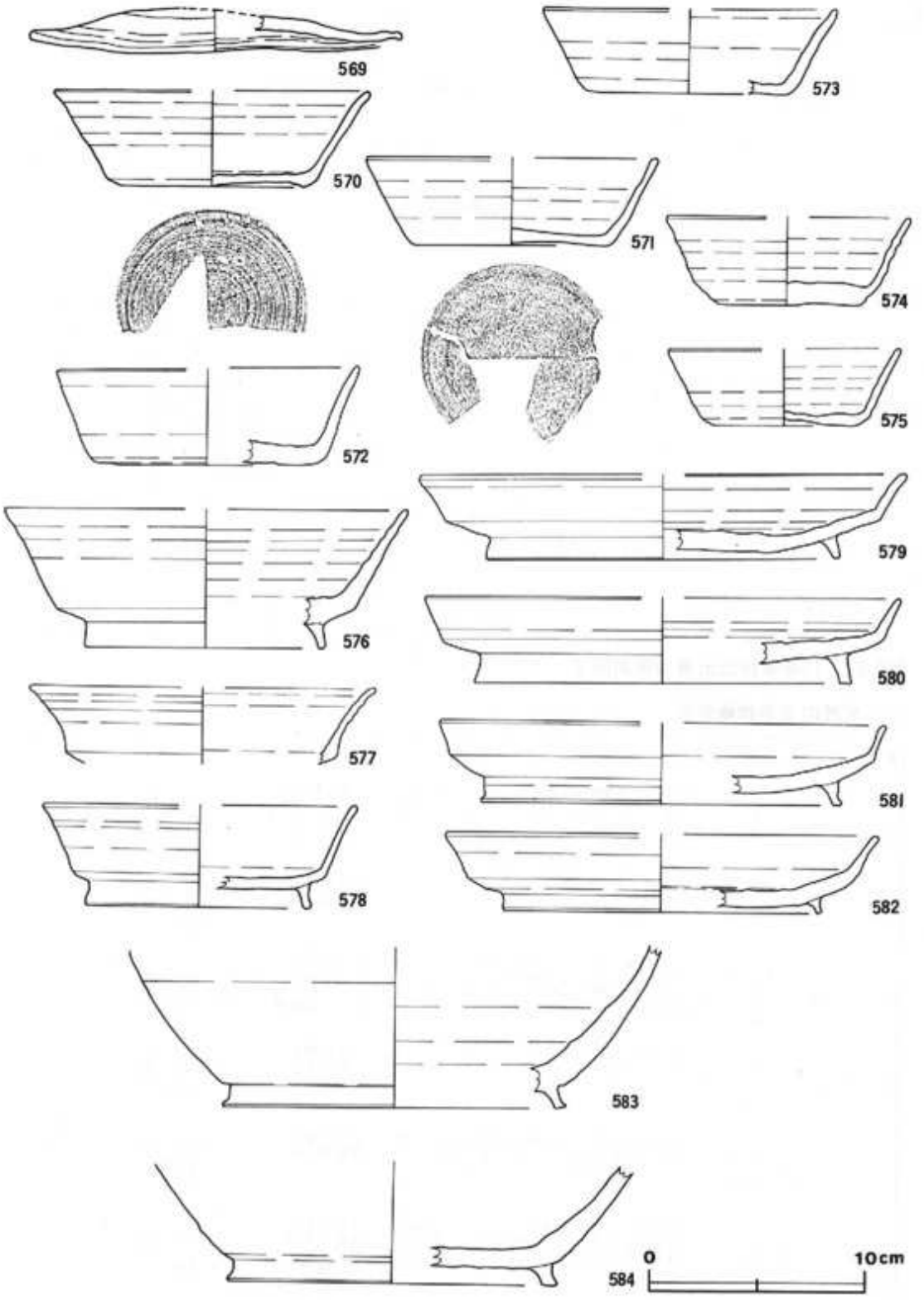
11号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
549	盤	A (23.0) B 4.1 D (16.4) E 1.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は，やや丸底で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の中央部は，一方向のナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 40%
550	壺 A	A (32.0) B [12.5]	口頸部は，軽く外反しながら立ち上がり，外湾部は下方へ突出する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部には，6本一束の波状文と1～3本の浅い凹線が，二段施されている。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 良好(二次焼成)	Ⅲ＋Ⅳ 焼台
551	坏 蓋	A (16.2) B [1.4]	天井部は，浅く扁平で，口縁部は屈曲し，短く垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部外面は，自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 明褐灰色 良好(二次焼成)	Ⅳ 20%
552	高台付坏	A 15.7 B 5.3 D 11.0 E 1.7	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は，やや丸底で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。底部中央部は欠損しているが，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の体部基部に細い凹線。	礫・砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅳ＋Ⅵ 30%
553	盤	A (24.0) B 4.1 D (18.3) E 1.1	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部が軽く外反する。底部は，やや丸底で，体部との境は鋭い稜をなす。高台は，わずかに外側にふんばる。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅳ 20%
554	壺 蓋	A 11.3 B 4.7 G 2.3 H 1.55	天井部は，やや丸味をもち，口縁部はにぶく屈曲し，やや内傾して下降する。口縁部端部は丸い。つまみは，扁平な擬宝珠形をなす。	水挽き整形。 天井部は，厚10cmにわたり丁寧な回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰黄色 良好	Ⅳ 100%
555	坏 A	A (12.8) B 3.6 C (8.8)	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ 45%
556	坏 A	A 11.1 B 3.9 C 7.1	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削り調整。内面の底部と体部の境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ 70%
557	高台付坏	A (15.8) B 5.3 D (10.6) E 1.8	体部は，軽く外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，長く外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅵ 40%
558	高台付坏	A (15.4) B 5.1 D (13.6) E 1.6	体部は，軽く外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，長く外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の体部基部には，浅く細い凹線が巡る。	礫・砂粒・細砂 灰色 不良	Ⅵ 60%
559	盤	A (22.4) B 3.7 D (15.2) E 1.1	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほぼ平底で，外側へややふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の底部と体部との境は，明瞭に屈曲する。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(重ね焼痕)	Ⅵ 40%
560	壺 A	A 8.55 B [7.1]	口頸部は，細く軽く外反しながら立ち上がり，口縁部端部は内傾する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部外面及び内面上位は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ
561	台付壺	B [2.25] D 12.2 E 1.2	底部のみの破片。底部は平底で，外周部に短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。	巻き上げ，水挽き成形。 底部は，中央部に回転糸切り痕を残し，外周部を回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ
562	台付壺	B [2.0] D 12.5 E 1.1	底部のみの破片。底部は平底で，外周部に短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。	巻き上げ，水挽き成形。 底部は，中央部に回転糸切り痕を残し，外周部を回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅵ
563	壺 B	A (19.6) B [6.6] F 5.4	口頸部は，外反し，端部は下方へやや突出する。	巻き上げ，水挽き成形。 内・外面共に自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅵ

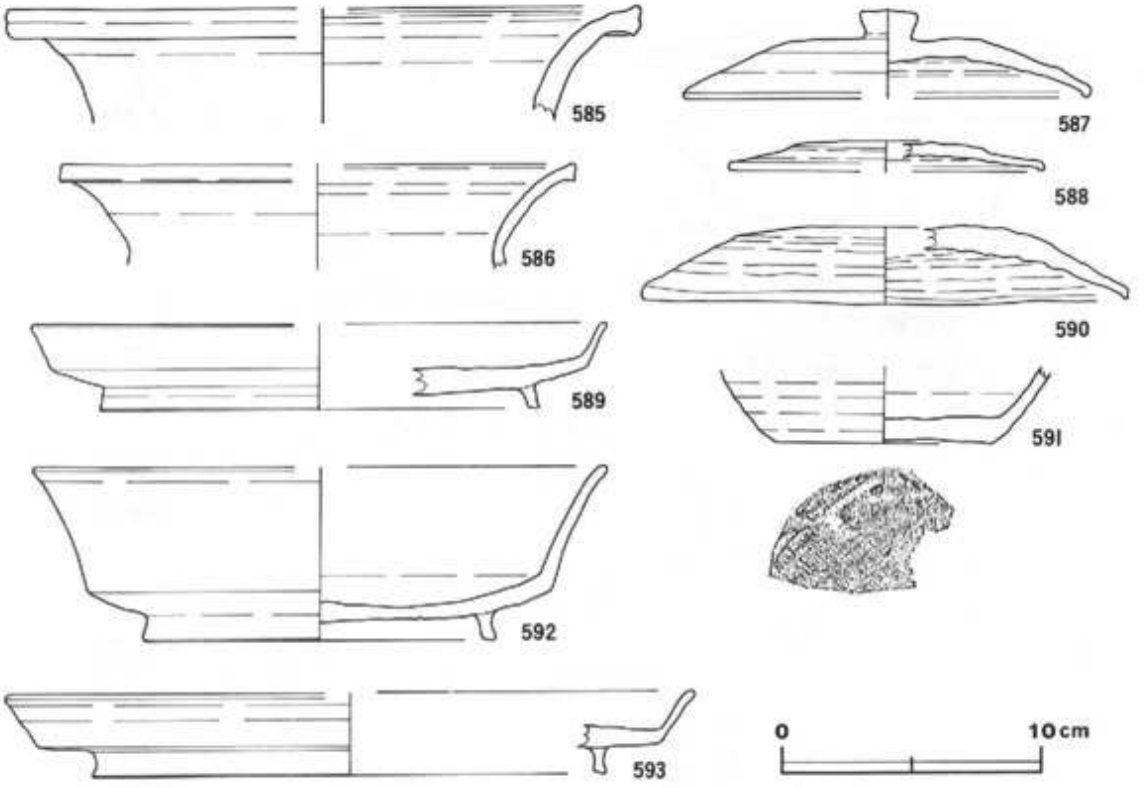
番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
732	平瓦	全長29.4 厚さ 0.9～1.5	凹面は，部分的に横位の平行叩きを残すが，丁寧なナデ調整。凸面は，斜位の平行叩きの後，ナデ調整。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 にぶい赤褐色 良好(二次焼成)	Ⅱ 焼台(2)
733	平瓦	厚さ 0.8～1.6	凹面は，丁寧なナデ調整。凸面には，横位と斜位の平行叩きが施されている。	礫・砂粒 にぶい赤褐色 良好	Ⅳ 焼台



第61図　12号窯跡出土遺物実測図(1)



第62図　12号窯跡出土遺物実測図(2)



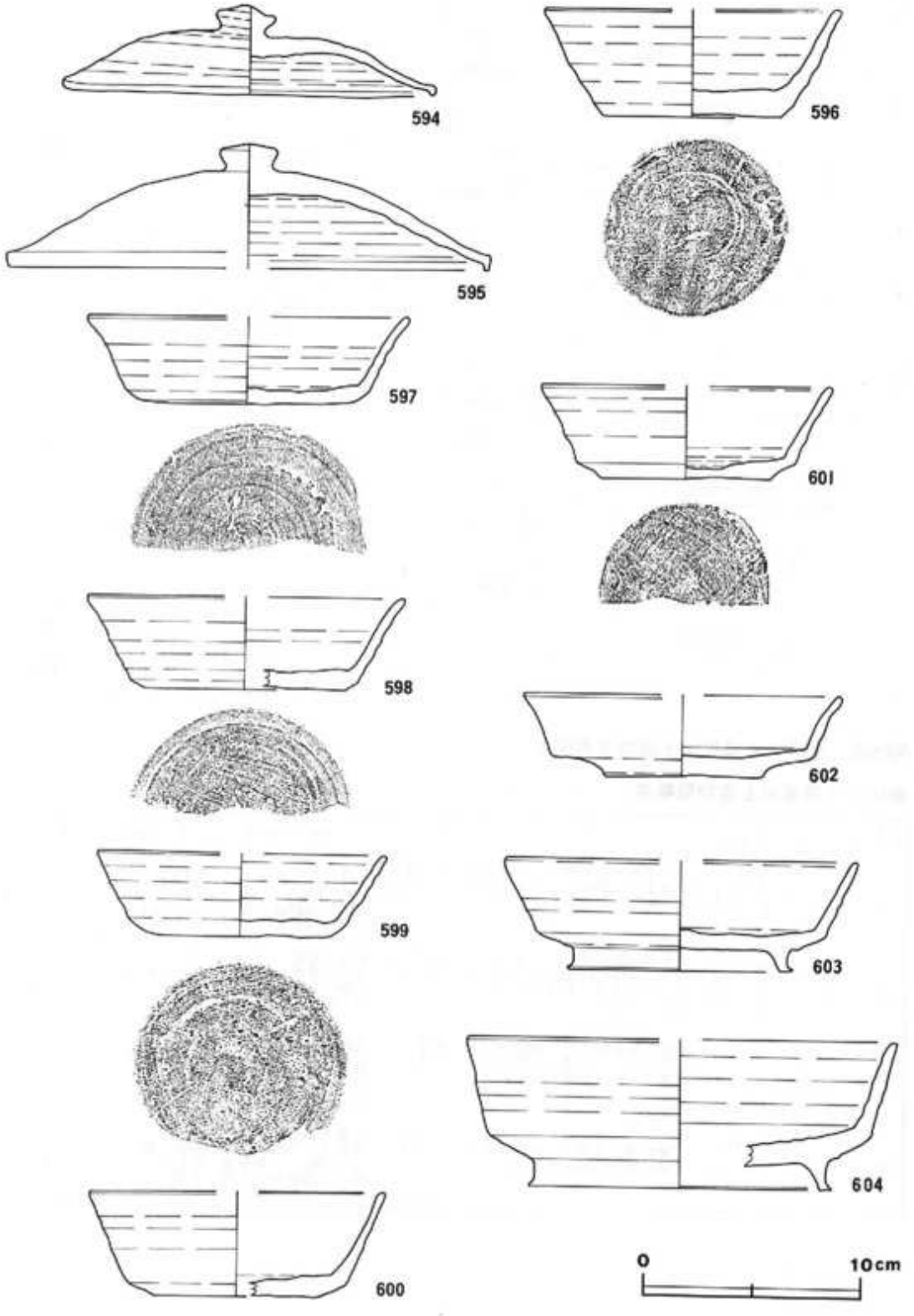
第63図　12号窯跡出土遺物実測図(3)

12号窯跡出土遺物観察表

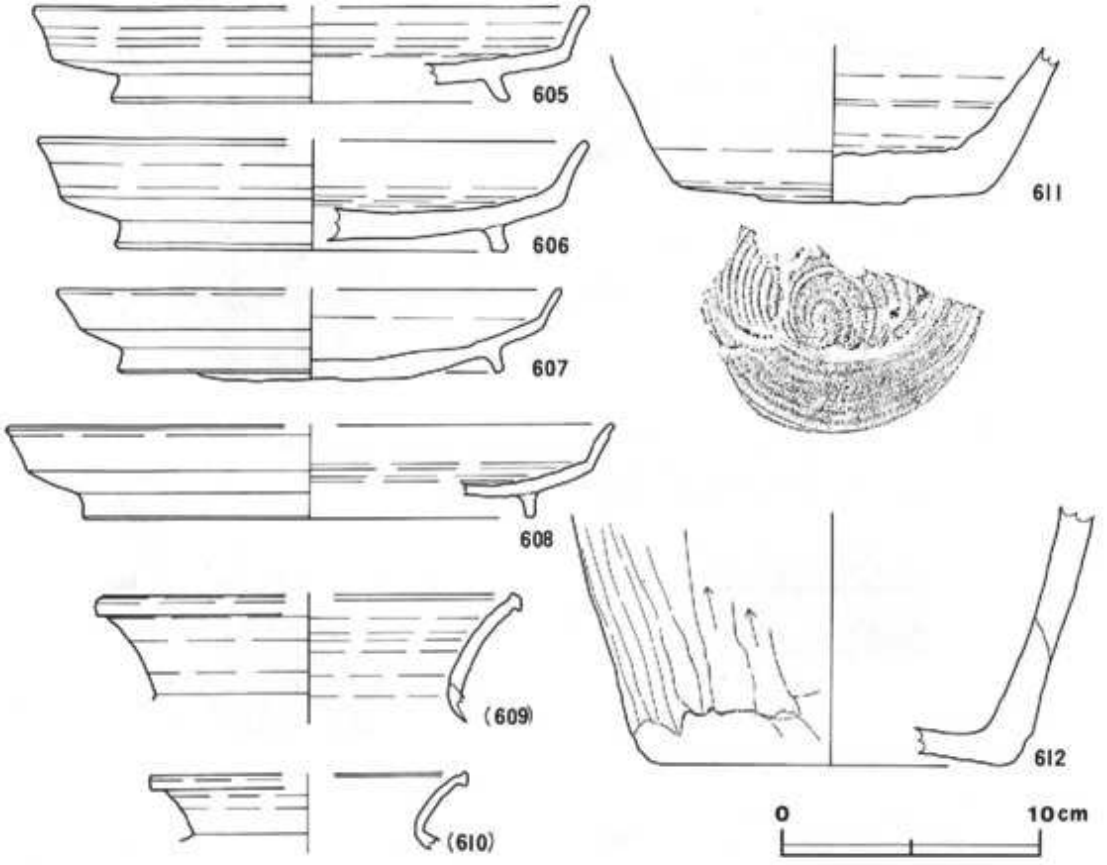
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
564	盤	A (30.0) B〔 2.2〕	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，外周部に高台が付くが欠損。体部との境は，にぶく屈曲する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	Ⅰ＋Ⅱ 焼台カ 50%
N15	盤	B〔 1.9〕 D 23.4 E 1.9	底部は丸底で，外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。	水挽き整形。 内面は，横ナデ調整。底部調整は不明。	砂粒・細砂 にぶい橙色 未焼成	Ⅱ
N16	盤	A (29.0) B 5.7 D 20.6 E 1.2	全体に薄手作りで，体部は軽く外反して立ち上がる。底部は丸底で，高台より突出するが，二次的な変形とみられる。高台は，外側へややふんばる。	水挽き整形。 体部外面から内面にかけては，横ナデ調整。底部調整は不明。	砂粒・細砂 にぶい橙色 未焼成	Ⅱ
N17	盤	B〔 2.8〕 D 21.3 E 1.1	底部は，丸底で，外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。	水挽き整形。 調整痕不明。	砂粒・細砂 にぶい橙色 未焼成	Ⅱ
N18	高盤	A (28.7) B〔 5.1〕	体部は浅く丸く，口縁部は屈曲し短く直立する。脚部は，四方に長方形の透し孔を有するが下部欠損。	水挽き整形。 調整痕不明。	砂粒・細砂 浅黄色 未焼成	Ⅱ
N19	高盤	A (27.9) B〔 4.6〕	体部は，二次的な変形によるものか扁平で，口縁部は屈曲し，短く直立する。脚部は，四方に長方形の透し孔を有するが下部欠損。	水挽き整形。 調整痕不明。 盤の上に，倒立させた状態で出土している。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 未焼成	Ⅱ
N20	高盤	B〔 4.2〕 C (11.6)	脚下部のみで，脚部はラッパ状に開き，基部は屈曲し，端部はややとがる。三方に長方形の透し孔を有する。	水挽き整形。 調整痕不明。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 未焼成	Ⅱ

番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
565	盤		A (27.6) B 4.65 D (21.4) E 1.2	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	II 焼台カ 25%
566	甕	B	A (18.4) B〔3.8〕	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は垂直な面をなす。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	II＋III 焼台
567	甕	B	A 20.4 B (12.8) F 4.7	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は上下にやや突出する。体部は，最大径が中位にあり，球形を呈するものとみられる。	巻き上げ，叩き成形。 体部外面は，斜位の平行叩きの後，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	II
568	甕	B	A (25.6) B (17.0) F 5.8	口頸部は，外反して立ち上がり，端部は内上方と外下方にやや突出し，内傾する。体部は，最大径が中位にあり，球形を呈するものとみられる。	巻き上げ，水挽き成形。 体部外面は，横位の平行叩き調整。内面はナデ調整。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好(二次焼成)	II 焼台
569	坏	蓋	A 17.3 B〔2.1〕	天井部は，浅く丸く，外周部で軽く外反する。口縁部は，にぶく屈曲し，わずかに垂下する。端部は丸い。つまみは欠損。	水挽き整形。(左回り) 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 淡黄色(暗灰色) 良好(二次焼成)	III 50%
570	坏	A	A (14.6) B 4.5 C〔8.6〕	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 良好(二次焼成)	III 40%
571	坏	A	A (13.4) B 4.1 C〔8.9〕	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	III 30%
572	坏	A	A (13.8) B 4.2 C〔9.6〕	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 青灰色 普通	III 30%
573	坏	A	A (13.5) B 4.0 C 9.2	体部は，ゆがみが多いが，ほぼ直線的に立ち上がるものとみられる。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。体部下端部は，雑な手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	III 70%
574	坏	A	A (11.2) B 4.2 C 6.65	体部は薄く，中位で軽く外反して立ち上がる。口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部の約3倍の厚みをもつ。	水挽き整形。 底部は，ナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 普通	III 70%
575	坏	A	A (10.7) B 3.6 C 6.5	体部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，ナデ調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 普通(二次焼成)	III 60%
576	高台付坏		A (18.6) B 6.5 D (11.2) E 1.2	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，外側へふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色 普通	III 15%
577	高台付坏		A (16.0) B〔3.6〕	体部は，下位から外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，ほとんど欠損しているが，高台が付くとみられる。体部との境は，やや鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 内・外面の水挽き痕は，弱い。同形態の高台付坏が，他に2個有り。	砂粒・細砂 青灰色 良好	III 25%
578	高台付坏		A (14.3) B 4.7 D (10.2) E 1.2	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，中央部が平坦で外周部はやや丸く，外周部付近にやや外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 青灰色 普通(二次焼成)	III 40%
579	盤		A (23.9) B 4.0 D (17.9) E 1.1	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部はやや丸底で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，やや鋭い稜をなす。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の体部基部には，細く浅い回線が巡る。	礫・砂粒・細砂 褐灰色 (にぶい橙色) 普通	III 45%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
580	盤	A (22.0) B 4.0 D (17.6) E 1.4	体部は，器厚をわずかに減じながら直線的に立ち上がる。底部は，ほぼ平底で，厚くやや外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰色(灰赤色) 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台 30%
581	盤	A (20.6) B 3.8 D (16.6) E 1.2	体部は薄く，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は厚く，丸底で，外側へややふんばる高台が付く。高台端部は，外端部が外方へ突出する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 褐灰色(灰赤色) 普通	Ⅲ 30%
582	盤	A (20.0) B 4.6 D (14.0) E 0.7	体部は，わずかに外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は厚く，やや丸底で，短く外側へややふんばる高台が付く。端部は鋭い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅲ 20%
583	台付壺	B〔7.5〕 D (16.0) E 1.1	底部は平底で，体部との境に，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は，外端部が外方へ突出する。体部は，内彎気味に立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。 体部下位は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台カ
584	台付壺	B〔5.5〕 D (15.2) E 1.1	底部は平底で，体部との境に，短く外側へふんばる高台が付く。高台端部は水平。体部は，内彎気味に立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。内・外面共に自然釉，砂粒が付着し，調整痕不明。高台端部に木目状圧痕。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台カ
585	甕 B	A (24.4) B〔4.4〕	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部付近で更に強く外反する。端部は，上下に広がり，ほぼ垂直な面をなす。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部は，横ナデ調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好(二次焼成)	Ⅲ 焼台カ
586	甕 A	A (19.7) B〔4.05〕	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は，上下にわずかに広がり，垂直な面をなす。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 灰赤色 良好(二次焼成)	Ⅲ
587	坏蓋	A (15.6) B 3.4 G 2.2 H 1.1	天井部は浅く，頂部が扁平で外周部へ向ってなだらかに下降する。口縁部は，にぶく屈曲し短く垂下する。つまみは，やや膨高で上部は平坦。	水挽き整形。 天井部は，径10cmにわたり回転ヘラ削り調整。回形態の蓋，他に1点有り。	礫・砂粒・細砂 暗赤褐色 (褐灰色) 普通	Ⅴ 30%
588	坏蓋	A (12.2) B〔1.1〕	天井部は扁平で，口縁部は屈曲し，わずかに垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径8cmにわたり回転ヘラ削り調整。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 暗灰色 良好	Ⅴ 50%
589	盤	A (22.2) B 3.3 D (16.8) E 0.9	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	砂粒・細砂 灰色 普通	Ⅴ 25%
590	蓋	A 18.6 B〔3.0〕	天井部はやや深く，頂部は扁平で外周部へ向かってなだらかに下降する。口縁部は屈曲し，短く垂下する。つまみは欠損。	水挽き整形。 天井部は，径12cmにわたり回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰赤色 普通	Ⅸ 60%
591	坏 A	B〔2.9〕 C〔8.4〕	体部は，やや内彎気味に立ち上がるが，上部欠損。底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅸ 20%
592	高台付椀	A (21.9) B 6.7 D (13.4) E 1.1	体部は，軽く外反しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底で，短く外側へわずかにふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の体部基部には，浅い凹線が巡る。	礫・砂粒・細砂 灰黄色 良好(二次焼成)	Ⅸ 25%
593	盤	A (26.4) B 3.2 D (19.7) E 1.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部で軽く外反する。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 灰色 良好	Ⅸ 10%



第64図　東区ステ場等出土遺物実測図(1)

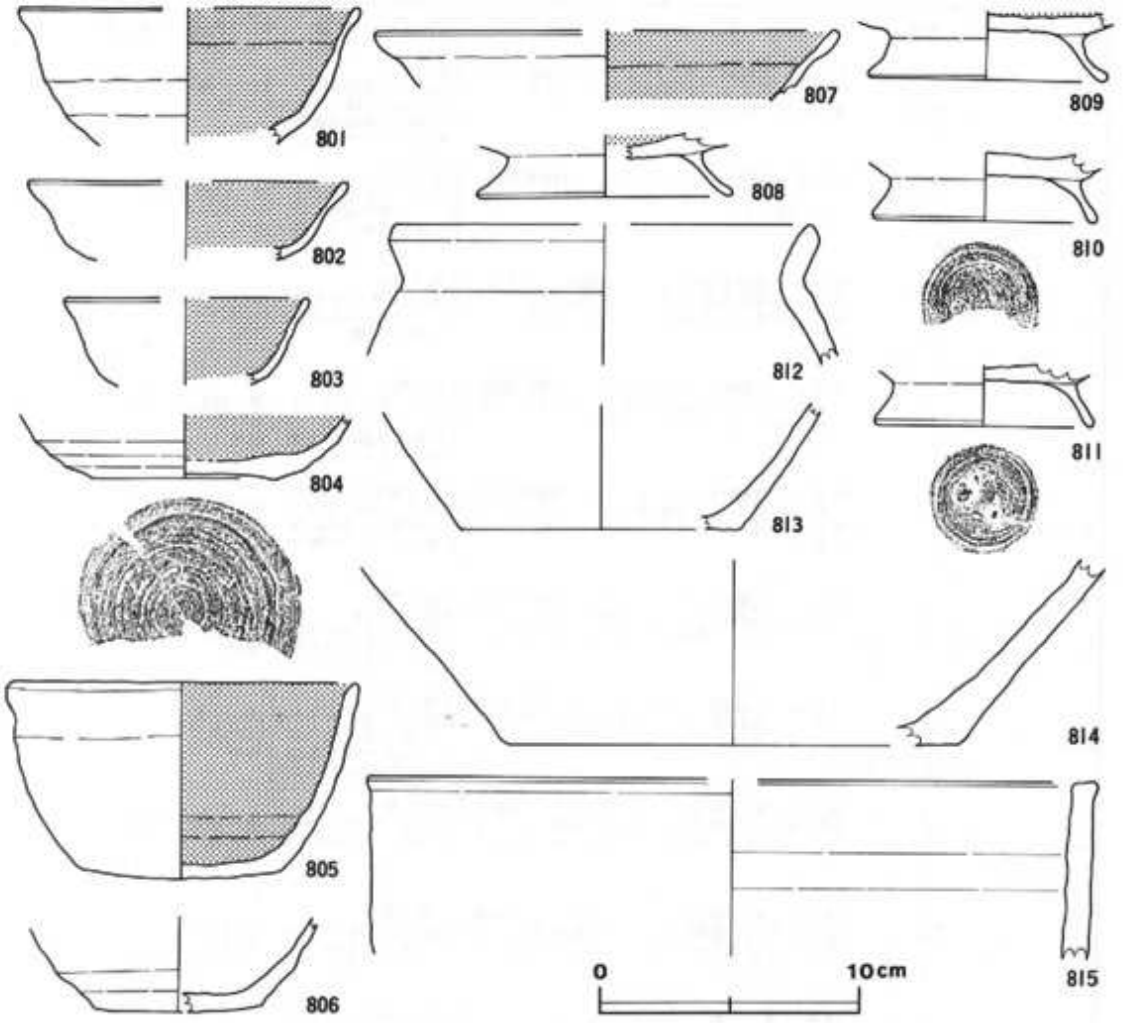


第65図　東区ステ場等出土遺物実測図(2)

東区ステ場等出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
594	坏蓋	A 17.0 B 3.1 G 2.6 H 1.1	天井部頂部は平坦で，中位で軽く外反する。口縁部は，屈曲して短く垂下する。つまみは，偏平な擬宝珠形を呈する。	水挽き整形。 天井部は，径11cmにわたり回転ヘラ削り調整。回形痕の蓋，他に1点有り。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好(重ね焼痕)	9又は10号 80%
595	蓋	A 22.3 B 5.8 G 2.65 H 1.3	天井部頂部は丸く，外周部付近で軽く外反する。口縁部は屈曲して垂下する。つまみは，やや腰高で上部は丸味をもつ。半分に割れている。	水挽き整形。 天井部外面には，自然釉が付着し，調整痕不明。	礫・砂粒・細砂 灰色 良好	50%
596	坏A	A (13.4) B 5.0 C 8.4	全体に厚手作りで，体部は，ほぼ直線的に立ち上がる。底部は，平底で厚く，体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，一方向の手持ちヘラ削り調整。 内・外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰色 普通	50%
597	坏A	A (14.7) B 4.1 C 9.9	体部は，中位で軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	40%

番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
598	坏	A	A (14.4) B 4.3 C (9.2)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて一方向の手持ちヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	砂粒・細砂 灰白色 不良	30%
599	坏	A	A (13.2) B 3.9 C (8.4)	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境は不明瞭である。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 暗灰色 良好	50%
600	坏	A	A (13.4) B 4.8 C (7.5)	体部は，器厚を減じながら直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に面を有する。半分に割れている。	水挽き整形。 底部は，外周部を除いて一方向の手持ちヘラ削り調整。	砂粒・細砂 灰褐色 普通	45%
601	坏	A	A (13.3) B 4.3 C 7.8	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は，やや鋭い。底部は平底で，体部との境に面を有する。ほぼ半分に割れている。	水挽き整形。 底部は，不定方向の手持ちヘラ削り調整。内面の体部基部には，強い押えがみられる。	礫・砂粒・細砂 黄灰色 普通	50%
602	坏	A	A (14.4) B 3.8 C 7.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は平底で，突出する。体部との境には，大きく外傾する幅広の面を有する。	水挽き整形。(左回り) 底部は，不定方向のナデ調整。内面の体部基部には，回線が巡る。	砂粒・細砂 灰色 良好	50%
603	高台付坏		A (16.0) B 5.2 D (10.4) E 1.0	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へややふんばる高台が付く。端部は，外方へ突出する。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内・外面の水挽き痕は，弱い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好	40%
604	高台付椀		A (19.6) B 6.9 D (14.0) E 1.3	体部は，直線的に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。内面の体部基部に浅い回線が巡る。	砂粒・細砂 灰白色 良好	30%
605	盤		A (21.4) B 3.7 D (15.2) E 1.1	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，鋭い稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好	30%
606	盤		A (21.0) B 4.3 D (14.9) E 1.0	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，外側へふんばる高台が付く。体部との境は，にぶい稜をなす。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。半分に割れている。	砂粒・細砂 褐灰色 やや不良	50%
607	盤		A (19.4) B 3.5 D 15.0 E 1.0	体部は薄く，軽く外反して立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は丸底で，高台より突出する。高台は，短く外側へふんばる。半分に割れている。	水挽き整形。(左回り) 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 灰白色 良好	50%
608	盤		A (23.3) B 3.6 D (17.4) E 1.0	体部は，軽く外反して立ち上がり，口縁部付近に浅い回線が巡る。底部は，やや丸底気味で，垂下する高台が付く。端部は丸い。	水挽き整形。 底部は，回転ヘラ削りの後，高台貼り付け。	砂粒・細砂 灰白色 良好	25%
609	甕	B	A (31.6) F 7.6	口頸部は，軽く外反しながら立ち上がり，端部は上下に突出する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部内・外面は，横ナデ調整。ロクロの回転方向は，左回り。	砂粒・細砂 灰色 普通	
610	甕	B	A (24.3) F 4.5	口頸部は，外反しながら立ち上がり，端部は上下にやや突出し，断面三角形状を呈する。	巻き上げ，水挽き成形。 口頸部内・外面は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 灰黄褐色 良好	
611	甕		B [6.0] C (12.0)	底部は平底で，体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。上部欠損。	巻き上げ，水挽き成形。 底部は，回転糸切りの後，外周部は回転ヘラ削り調整。体部下端部は，回転ヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好	
612	鉢	D	B [9.7] C (14.0)	底部は平底で，体部は直立に近く立ち上がる。上部欠損。	巻き上げ，水挽き成形。 底部は，ナデ調整。 体部は，縦位のヘラ削り調整。	礫・砂粒・細砂 灰黄色 良好	

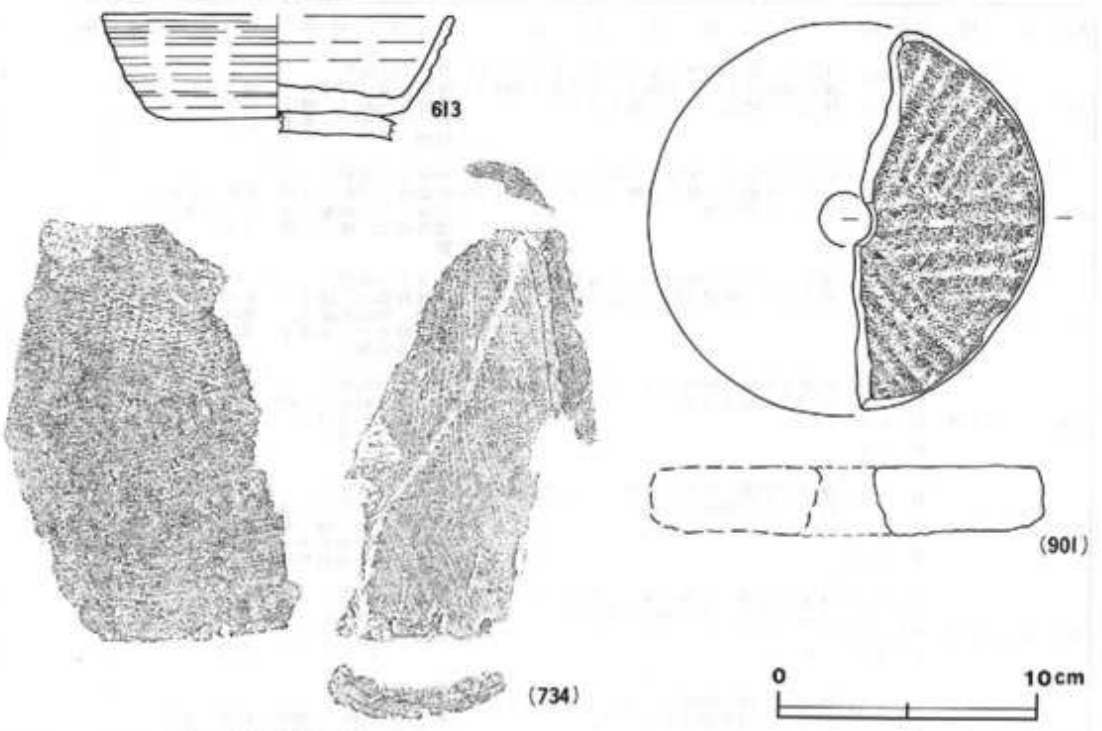


第66図　ＳＸ１出土遺物実測図

SX1出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
801	坏	A (13.0) B〔 5.3〕	体部は，内彎しながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は欠損。	巻き上げ成形。 体部外面は，横ナデ調整。体部内面は，ヘラ磨きで，黒色処理。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 普通	20%
802	坏	A (12.1) B〔 3.0〕	体部は，内彎しながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は欠損。	巻き上げ成形。 体部外面は，横ナデ調整。体部内面は，丁寧なナデ調整で，黒色処理。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 普通	15%
803	坏	A (9.2) B〔 3.4〕	体部は，内彎しながら立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。底部は欠損。	巻き上げ成形。 体部外面は，横ナデ調整。体部内面は，丁寧なナデ調整で，不完全な黒色処理。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 普通	15%
804	坏	B〔 2.5〕 C (7.0)	底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。体部は，内彎して立ち上がるが，上部欠損。	巻き上げ成形。 底部及び体部下端部は，回転ヘラ削り調整。体部内面は，ナデ調整で，黒色処理。	砂粒・細砂 浅黄橙色 普通	20%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
805	椀	A 12.9 B 7.6 C 7.8	体部は，軽く内彎しながら立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は，やや丸底気味で，体部との境は，にぶい稜をなす。	巻き上げ成形。 体部外面は，横ナデ調整。内面は，横位のヘラ磨きで，黒色処理。	礫・砂粒・細砂 橙色 普通	85%
806	椀	B〔3.7〕 C〔6.5〕	底部は平底で，体部との境は，にぶい稜をなす。体部は，軽く内彎しながら立ち上がるが，上部欠損。	巻き上げ成形。 底部は，回転ヘラ切り後，ナデ調整。体部外面は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 にぶい黄橙色 普通	30%
807	高台付坏	A (17.6) B〔2.7〕	体部は，大きく外傾し，口縁部付近で軽く外反する。体部下位以下は欠損。	巻き上げ成形。 体部外面は，横ナデ調整。体部内面は，ヘラ磨きで，不完全な黒色処理。	砂粒・細砂 褐灰色 普通	20%
808	高台付坏	B〔2.4〕 D〔9.6〕 E 1.7	体部は欠損。外側へ強くふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	巻き上げ成形。 高台は，回転ヘラ削りの後，貼り付け。内面黒色処理。	砂粒・細砂 にぶい橙色 普通	30%
809	高台付坏	B〔2.6〕 D 9.0 E 1.9	体部は欠損。外側へ，強くふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	巻き上げ成形。 高台は貼り付け。高台貼り付けの後，螺旋状のヘラ痕がみられる。内面黒色処理。	砂粒・細砂 にぶい橙色 普通	20%
810	高台付坏	B〔2.6〕 D〔8.4〕 E 1.6	体部は欠損。底部は厚く，外側へふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	巻き上げ成形。 高台は，回転ヘラ削りの後，貼り付け。	砂粒・細砂 にぶい橙色 普通	20%
811	高台付坏	B〔2.4〕 D〔8.2〕 E 1.65	体部は欠損。外側へ，強くふんばる高台が付く。高台端部は丸い。	巻き上げ成形。 高台は，回転ヘラ削りの後，貼り付け。底部中央に，ヘラ状工具による刺突痕が円形に巡る。	砂粒・細砂 にぶい橙色 普通	20%
812	壺	A (16.0) B〔5.5〕	口頸部は，短く外傾して立ち上がり，端部は内傾する。体部は，肩部を有しない。	巻き上げ成形。 口頸部は，横ナデ調整とみられるが，器面が磨滅し調整痕不明。	砂粒・細砂 にぶい赤褐色 普通	
813	甕	B〔4.8〕 C (10.9)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。中位以上欠損。	巻き上げ成形。 体部下位は，横位の回転ヘラ削り調整。	砂粒・細砂 にぶい褐色 普通	10%
814	甕	B〔7.1〕 C (17.5)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。中位以上欠損。	巻き上げ成形。 体部下位は，縦位のヘラ削り調整。下端部は横位のヘラ削り調整。内面はナデ調整。	礫・砂粒・細砂 褐灰色(黒色) 普通	
815	平鉢	A (28.0) B〔6.9〕	体部は，ほぼ直立し，端部は水平。	巻き上げ成形。 体部内・外面は，横ナデ調整。	砂粒・細砂 浅黄橙色 普通	



第67図　ＳＸ２出土遺物実測図

ＳＸ２出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
613	坏 A	A (13.4) B 4.0 C 8.4	体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁部端部は丸い。底部は平底で，体部との境に幅狭の面を有する。底部に籾片付着。	水挽き成形。(左回り)底部は，回転ヘラ削り調整。体部外面の水挽き痕は，やや強い。	礫・砂粒・細砂 灰白色 良好	覆土 70%

番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
734	丸瓦	全長32.9 厚さ 1.2	凸面は，斜格子叩き後，横位のナデ調整。凹面は，布目痕（7×8条）が残る。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	礫・砂粒 黄橙色 不良(二次焼成)	覆土
901	石臼	径 30.5 高さ 4.4 〃 7.0 孔径(4.1)	粉挽き臼の下臼で，臼面が傾斜している。芯棒孔からえぐりに6本の主溝が放射状に走り，主溝と平行に6～8本の溝が施された目のパターンをなしている。右回しの臼である。	花崗岩	(7,200g) 50%

第5章　ま　と　め

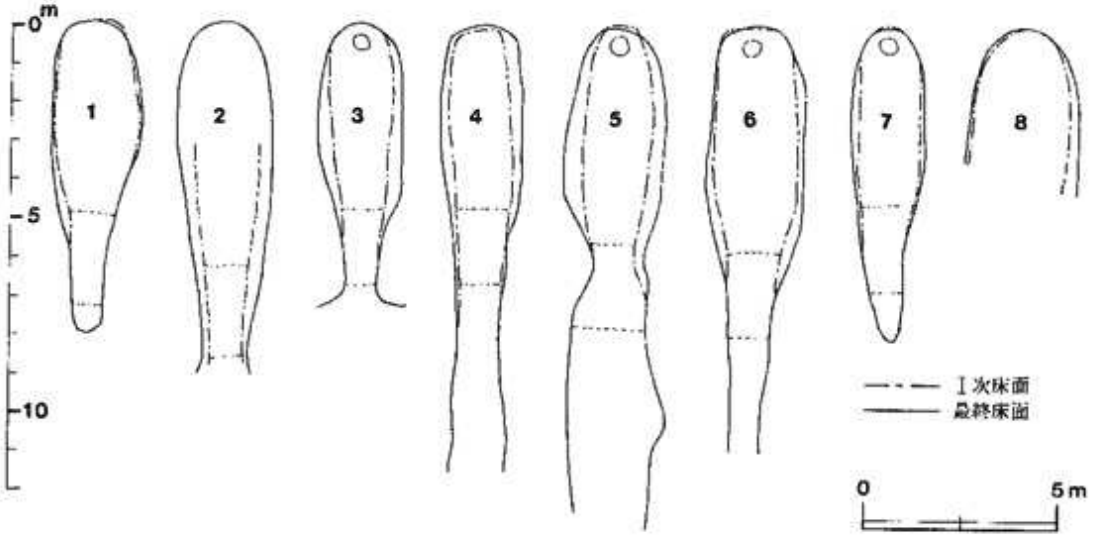
第1節　遺構について

1　須恵器窯の構造について

今回調査した12基の須恵器窯は，すべて地下式無段登窯で，昭和56年度に調査したC地点C4号窯跡に類似している。東区の窯は，窯体の一部を残存するだけで窯の形状，規模を正確に把握できなかったので，ここでは西区の窯の構造について今回の調査で判明したことを記述する。

西区で調査した8基の須恵器窯の窯体は，地山の細砂層をトンネル状に細長く掘り込んで構築されている。窯体は，前の方から前道部，燃焼部，焼成部に分けられ，燃焼部から焼成部にかけては，窯壁及び窯底が焼土化している。窯底は，前道部から燃焼部にかけてやや下り傾斜，または水平で，焼成部が上り傾斜になっている。窯体内には，燃焼部と焼成部を分ける障壁や排水溝，分焔柱などの施設はみられず，また，明確に前庭部と言えるような部分も検出できなかった。

前道部と燃焼部，焼成部を合わせた窯の全長は，第68図のように良好な状態で残っていた5号窯跡が最も長く13mほどに達する。西区北東斜面の4基は，前道部が削平されており，前道部の長さを正確に計測することができないので，焚口から奥壁までの燃焼部と焼成部を合わせた長さでみると，最も長い窯は2号窯跡の8.7m，最も短い窯は4号窯跡と7号窯跡の6.6mで，平均7.4mである。



第68図　西区窯跡一覧図

8基の窯は，規模に相違が認められるが，形状や構造的にはほぼ同様であるので，同一工人集団により同じような技法で構築されたと考えられる。また窯の構築操業時期の新旧関係が明確な

4，5，8号窯跡の窯の構造を比較しても，新しいほど最終床面時の幅が狭くなっていること以外は明確な相違点がみられず，時期による形状の変化はほとんど認められなかった。

これらの須恵器窯は，最初の床面（Ⅰ次床面）の構築時に，ある程度の設計図が描かれていたようで，地下式無段登窯であるほかに次のような特徴が認められた。

○　窯の平面形は，焚口から奥壁にいたるまで窯底幅に変化の少ない細長い形である。

○　焼成部床面の傾斜変換点と奥壁を結んだ直線の傾斜角（窯跡一覧表で焼成部比高角と記載した。以下焼成部比高角と称す。）が，18～20°である。

○　燃焼部と焼成部の長さの比が，1：2.4前後である。

○　奥壁付近の焼成部の平面形は，台形あるいは方形状に構築されている。

○　半数以上の窯跡には，焼成部の側壁に円弧形又は筋状の工具痕が残されていた。

次に各部ごとに特徴を述べてみたい。

① 前道部

前道部がよく残っていたのは，4，5，6号窯跡で，この内で前道部の最も長い窯は5号窯跡の5.3m，短い窯は6号窯跡の3.3mであった。窯幅の狭い窯は，6号窯跡の1.2～1.7m，広い窯は，5号窯跡の2.0～2.4mである。床面は焚口に向かって下り傾斜または水平で，断面形状はゆるいU字状を呈している。地表からの深さは，斜面部から焚口へ向かうほど深く掘られている。覆土中には須恵器片，炭化物，灰など窯体内からかき出された排土が含まれており，5号窯跡では排土が1mほど堆積していた。6号窯跡の底部から，窯詰め時の坏や甕の破損品と思われる未焼成土器の破片が出土した。

焚口の前に前道部が設けられたのは，燃焼部から奥が熱に強い均一な細砂層であることが要求されるので，斜面部から細砂層の堆積している層まで掘り込むことが必要であったためと考えられる。また，未焼成の土器や燃料の搬入，製品や崩落土の搬出の通路としても使用されていた。

② 燃焼部

燃焼部は，壁面が焼成され始めた地点から床面の傾斜変換点までで，床面は一般的にほぼ水平に掘り込まれている。床面には修復ごとに燃え残った炭化物や，焼成部からかき出した排土が敷かれて高くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり，焚口付近が赤色に焼成されている以外は，青灰色に還元焼成されている。焚口部は，奥へ斜めに赤色に焼けており，炎が奥へ吸い込まれた状況を示している。

燃焼部の壁が，ほぼ垂直に立ち上がっていること，また壁が青灰色に厚く焼成されていること，焼成部に比べ窯壁の剥落や崩落が少なく高い位置まで残存していること等から判断すると，燃焼部は，竪穴状に掘り込み，その上に天井を構築した半地下式と考えられる。しかし，覆土から天井を架構したと思われる材料や，天井に使用されたと思われるスサなどが出土していないので，

燃焼部が地下式であったとも考えられる。

燃焼部の壁は，青灰色に強く還元焼成の痕が残っているので，焚口は還元焼成時に閉鎖されたものと考えられる。1，2，3，7，10，12号窯跡の焚口付近の壁に，直径10cm，深さ30cmほどのピットが1～3か所検出された。これらのピットは，還元焼成のための焚口閉鎖に使用したものと考えられるが，このほかに焚口閉鎖の痕跡は認められなかった。

2，5号窯跡の焚口から焼成部付近までの床面に，直径10cmほどのクヌギかナラと思われる炭化物が出土した。出土の状況からみて，焼成に使用された薪の一部と考えられる。

③ 焼成部

焼成部底面は，傾斜変換点から奥壁にかけ，弧を描くように上り傾斜になっており，奥へいくほど急傾斜に掘り込まれている。最大傾斜角は窯により異なるが，22～30°である。天井の一部が残存していた5号窯跡の断面形は，床面が緩やかな凹状を呈し，側壁は内彎して立ち上がり，天井は緩やかなカーブを描いたアーチ形を呈していた。幅は約2.6mで，天井部までの高さは約0.9mであった。他の窯の天井部も，窯壁の彎曲の様子から5号窯跡とほぼ同様と考えられる。

煙道は，奥壁付近の天井部に内径50cmほどの円筒形に掘り抜かれていた。煙道と奥壁とのつながりをみると，奥壁から焚口方向へ彎曲して少し戻った位置に掘り抜かれた窯と，奥壁から直立状に掘り抜かれた窯とがある。煙道の内壁は，数センチの厚さで層状に青灰色に還元焼成され，この外側も数センチの厚さで赤色に焼成されている。

2　須恵器窯の修復と廃棄について

当遺跡の須恵器窯の底面には，須恵器を焼成した面が床面として層状に残っている。床面の数は，少ない窯で3枚，多い窯で9枚，平均6枚ほどである。I次床面は構築されたままの床面なので，修復回数は床面の枚数よりも1回少ない数である。したがって，床面が6枚あるということは，修復が5回行われたということになる。

窯の修復では，基本的に修復のたびに，床面は高くなり窯幅が広がっていく。修復は，製品の窯出し後，未焼成土器が窯詰めされる間に行われ，床の厚さはまちまちであるが，床の厚さから修復の大きさを推測することができる。修復は，元の床を削平することは少なく，窯壁の剥落土などを敷いて整形されるので，新しい床は，元の床の上に積み重なり，順次高くなっていく。各床の厚さを計測し表にまとめたものが表13である。厚く修復された床は，38cmもの厚さがあり，覆土中には，窯壁ブロックなどが多量に敷き詰められている。床のなかには，部分的にしか検出されない床もあり，このような場合は，表中の床の厚さは0cmと記載した。床面が部分的にしか検出されないのは，床を修復する時に元の床を削平したか，または，小規模な修復であったためと考えられる。床は表13に示したように，厚いものから薄いものまでが混在しているが，これは

表13　修復床の厚さ（cm）

窯跡 / 床	1号窯跡		2号窯跡		3号窯跡		4号窯跡		5号窯跡		6号窯跡		7号窯跡		8号窯跡
	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	燃焼部	焼成部	焼成部
Ⅱ	9～15	20～32	21～26	1～22	10～14	7～15	4～6	0～7	4～16	0～10	30～38	10～33	0～7	0	14～28
Ⅲ	7～18	11～29	13～18	13～22	6～10	0～7	4～11	17～30	6～16	0～12	6～9	0～20	4～6	2～15	0～10
Ⅳ			15～23	6～30	15～20	12～22	16～20	15～22	10～16	15～24	20～24	10～14	4	8～23	8～26
Ⅴ					0～15	0～17	6～10	4～9	5～10	0～6	9～28	12～22	10～22	0～17	
Ⅵ					0～6	12～26	4～8	0～15	15～18	0～4	2～10	0～4	1～4	0～26	
Ⅶ					10～22	7～18			3～4	12～17			0	0～22	
Ⅷ									2～3	5～10					
Ⅸ									33～38	23～38					

表14　須恵器窯跡一覧表

窯跡番号	位置	主軸方向	長さ（m）全長	前道部	燃焼部	焼成部	幅（m）焚口	傾斜変点	焼成最大部幅	床面枚数	壁の段数	焼成部傾斜角（度）	焼成部比高角（度）	床面の標高（m）焚口	傾斜変点	奥壁	床の厚さ（cm）燃焼部	焼成部
1	西区北東斜面	N-135°-W	7.9	0.6	2.4	4.9	0.75 0.75	1.28 1.3	2.2 2.3	3	1 2	13～28 13～30	18 19	87.12 87.30	86.97 87.32	88.56 89.0	25～33	38～55
2	西区北東斜面	N-150°-W	8.7		2.6	6.1	0.75 1.0	1.15 1.6	1.6 2.4	4	1 4	22 21	18 16	85.78 86.21	85.60 86.25	87.61 88.0	55～63	45～57
3	西区北東斜面	N-144°-W	6.8		2.0	4.8	0.8 0.8	1.0 1.5	1.45 2.35	7	1 5	7～27 5～27.5	18 17	85.06	84.90 85.56	86.46 87.05	36～66	60～74
4	西区東斜面	N-112°-W	11.6	5.0	1.9	4.7	0.95 1.25	1.4 1.7	1.6 2.0	6	4	16～25.5 6～18	19	89.30 89.76	89.37 89.9	91.03	42～48	46～56
5	西区東斜面	N-113°-W	13.0	5.3	2.1	5.6	2.0 1.45	1.1 1.5	1.75 2.6	9	6	10～27 10～20	20 14	86.10 87.2	86.01 88.7	88.0 88.44	93～100	50～118
6	西区東斜面	N-113°-W	11.3	3.3	2.2	5.8	1.0 1.1	1.4 1.85	2.15 2.5	7	5	10～30 10～23	19 15	85.23 86.4	85.11 85.92	87.12 87.42	80～110	30～92
7	西区北東斜面	N-145°-W	7.7	1.1	2.3	4.3	0.65 0.9	1.1 1.6	1.55 2.0	7	4	10～22 19～26	16 23	85.05 85.18	84.9 85.2	86.16 87.06	16～34	27～76
8	西区東斜面	N-116°-W				(4.2)			2.5 2.8	4	3	10～20 13～20				85.48		42～48
9	東区北西斜面			(1.80)			前道 0.8											
10	東区北西斜面	N-107°-E	(5.65)	1.45	2.2	(2.0)	0.85 1.1	1.65 1.65		8	2	10～		84.8	84.95		30～46	46～
11	東区北西斜面	N-117°-E	(3.8)		1.4	(2.4)	0.6 0.75	0.8 0.9		6	1	10～		84.98	84.96		22～30	32～
12	東区北西斜面	N-123°-E	(6.0)	1.4	1.7	(2.9)	0.7 0.7	0.95 1.1		9	2	13～		84.72	84.73		42～60	59～

熱による窯壁の損傷の大きさに関係しているものと考えられる。

窯底の焼成部比高角は，表14のように，Ⅰ次床面ではいずれも18～20°である。焼成部比高角にわずかな違いがみられるが，これは斜面の勾配や細砂層の厚さなどの制約によるものと考えられる。ここで注意したいのは，各窯とも平均5回ほどの修復がなされ，その修復時の床の厚さは，前述の通りであるが，Ⅰ次床面と最終床面で，比高角はそれほど変化していないということであ

る。このことは，木葉下遺跡の地下式無段登窯において，その形状にあった適当な傾斜角であったものと考えられる。

窯は，操業の時1,100℃以上の温度で長時間酸化焼成されその後還元焼成される。この時，窯壁を構築している細砂は，3cmほどの厚さに青灰色に堅く焼成され，その外側も熱により5cmほどの厚さで赤色に焼成される。この青灰色に堅く焼けた層と外側の赤く焼けた層との間では，剝離がしやすい状態になっているので，そのまま次の焼成をすると，焼成中に剝落するような状態の時は，窯詰め前にもろくなった窯壁を落とし天井部や側壁を整形した。したがって，窯跡の修復が行われるたびに，天井部，側壁とも外側に広がっていくことになる。しかし，天井部と窯底の間が広がりすぎると，窯底部の温度を1,100℃以上に上げにくくなる。そこで天井部が高くなった分，窯底を高くしなければならなかったものと考えられる。したがって，窯の修復は，窯底と天井部の空間を一定（天井部の残っていた5号窯跡の例では0.9m）に保ちながら，傾斜角も18～20°に考慮されていたものと考えられる。

最終床面での覆土の堆積状況を観察してみると，最初に天井部の崩落がみられるし，窯跡の構造からみても，天井部が最も熱を受け易く，操業時に最も剝落が起こりやすかったと考えられる。天井部が，操業のたびに，損傷を受け徐々に薄くなっていき，天井が支えられなくなった時点で窯は廃棄されたものと考えられる。

表15　現地表からの深さ（m）

窯跡名	床面	焚口	傾斜変換点	奥壁
1号窯跡	Ⅰ	1.8	2.9	3.5
	最終	1.6	2.5	3.0
2号窯跡	Ⅰ	1.4	3.0	4.0
	最終		2.4	3.6
3号窯跡	Ⅰ	1.7	2.8	4.0
	最終		2.1	3.5
4号窯跡	Ⅰ	2.8	3.2	2.7
	最終	2.3	2.7	(2.3)
5号窯跡	Ⅰ	2.0	2.9	3.7
	最終		1.8	3.2
6号窯跡	Ⅰ	2.1	3.0	3.4
	最終	1.0	2.2	3.1
7号窯跡	Ⅰ	1.9	2.5	3.1
	最終	1.7	2.3	2.3

現地表から最終床面及びⅠ次床面までの深さを表示したものが，表15である。深さは，1.8～2.7mと窯により多少差があるが，平均2.3mほどである。焼成部の天井と窯底の空間を仮に0.9mとすると，天井部の厚さは，1.4m前後であり，この厚さが天井部を支えることのできる限界かと考えられる。また，窯の天井が支えられなくなる原因は，天井部が剝落によって薄くなるばかりでなく，次に述べる窯幅も考慮しなければならない。

窯跡の平面形状は，Ⅰ次床面では焚口から奥壁まで窯幅に変化の少ない細長い形であるが，床の修復時に床面が高くなると同時に，燃焼部中央から焼成部にかけて窯幅が広くなり，最大幅を焼成部中央付近にもつ長楕円形状を呈してくる。Ⅰ次床面の最大幅は窯により異なるが，1.45～2.2mで，平均1.9mほどである。最終床面の最大幅は同様に，2～2.8mで，平均2.4mほどである。最終床面の窯幅は，Ⅰ次床面に比べ燃焼部中央から焼成部の奥にかけ，平均1.3倍ほどに広がっている。窯幅の広がった割合が大きいのは，3，5号窯跡で，傾斜変換点から焼成部中央にいたる中ほどの最終床面の幅は1.7倍となっている。

窯体内のⅠ次床面の上に構築された床を取り除くと，表14窯跡一覧表壁の段数の欄のように焼

成部の側壁に蛇腹状の段がみられる。この段は細砂の地山で，青灰色に堅く焼成されており，修復の時などに側壁の途中から上の窯壁が削平されてできたものと考えられる。この段は床面にほぼ対応しており，修復時に幅を広げた痕跡である。

1号窯跡は，2回の修復で幅がほとんど変らないのに，床面は38～55cmほど高くなっており，この床面の高さは，5回修復して幅も1.3倍ほどに広がった4号窯跡に匹敵する。1号窯跡の床は，崩落土を厚く敷きつめて修復されており，このことは窯壁の崩落が，側壁に比べ天井部の方が大きかったことを示している。1号窯跡の平面形状は，最初に掘り込まれた時から焼成部中央付近に最大幅をもつ長楕円形状をしており，4号窯跡のように幅の狭い細長い形でなかった。1号窯跡は，最初から幅を広く長楕円形状に掘り込んだことが，天井崩落を大きくした要因と考えられる。1号窯跡以外の窯でも，焼成部の最大幅が表14のように，2mを越えると廃棄されており，8号窯跡の最大幅2.8mは窯幅の限度であったと考えられる。以上のことから，窯の長楕円形状は，理想的な形状でなく，窯の修復の結果として長楕円形を呈することになったと考えられる。

窯は操業時に窯壁に損傷を受けるため，もろくなった天井部や側壁の窯壁が削り落とされ窯の修復が行われる。窯の天井は，修復のため薄くなって支えられなくなり，陥没のおそれが考えられる状態になると窯は廃棄される。また，窯幅の広くなることも，天井部の崩落を早めたものと考えられる。これは，当遺跡のように細砂層をくり抜いて構築された地下式登窯の特徴といえよう。

3　須恵器窯の構築場所について

茨城県教育財団は，高取山に所在する須恵器窯の調査を，昭和56，58年度の2回にわたり実施した。ここでは，須恵器窯が高取山に構築された理由について考えてみたい。

当財団の調査では，須恵器窯をA地点で4基，B地点で2基，C地点で5基，E地点で12基[1]を検出してきたが，D地点の調査では，須恵器窯は1基も検出できなかった。D地点は高取山の南東部に位置し，A・B・C・E地点は高取山の北部に位置しており，須恵器窯は，高取山の北部に偏在しているといえる。ボーリング調査の結果[2]によると，高取山の中央から南部にかけては細砂層の堆積が薄く，マサ土や花崗岩の厚い層がみられ，北部は，細砂層が7mほどの厚さで堆積している所もみられる。このことから判断して，細砂層の厚く堆積している高取山の北部が，窯の構築場所として選ばれたと考えられる。E地点北東斜面の4基の窯は，東から西へ順次高所に構築されているが，これは細砂の厚く堆積している所を求めて，窯を構築した結果である。また，各窯ともI次床面は，細砂層で，しかも下層の砂礫層との境近くに構築されているが，これは，細砂層を十分に活かそうとした工人の努力の跡とみられる。

窯体が細砂層に掘り込まれたのは，細砂層の耐火度が高いためと考えられる。茨城県窯業指導所による当遺跡出土の須恵器の分析結果では，須恵器の焼成温度は1,100～1,170℃と推定された。

高取山の細砂層は，1,100～1,170℃という高温に耐えられるものであったのである。4号窯跡は，当遺跡で一番高所の標高90～94mの地に構築されているが，この窯のⅥ次床面焼成部の一部が溶けて固まっており，また，焼成部の右側壁が，焼成によって亀裂が入りずれてしまうという現象も起きている。これらのことは，窯を構築していた細砂層中に含まれていた砂鉄の量が，他所より多く，このことが上記の現象に関係していたと考えられる。細砂層の組成が窯の構築に大切な要因であることを知り得る資料であった。

また，窯の1次床面の側壁に残っていた工具痕の多くは，幅20cmほどの円弧形のもので，鋭利な切っ先を付けたスコップ状の工具で細砂層を削ったものと考えられる。細砂層は，やや水分を含むと，スコップ状工具で思うように掘れ，乾くと崩れにくい性質をもっているので，トンネル状に窯を掘るのに適していたということも考えられる。

A地点の南側の削平された山の断面の一部に，粘土層が露出していた。昭和56年度調査時に，この粘土を採取して器の形を作り，笠間市の窯元で焼成を試みたところ，この粘土は十分に使用に耐えるものであることが判明した。また，当地に住む農家の人の話では，高取山の周りの水田に，方形状の足をとられるような深い落ち込みが存在するということなので，これも原料の粘土採掘坑とも思われる。以上のことから須恵器の原料となる粘土がこの近くに比較的豊富に存在していたと推測され，このことも窯がこの地に構築された理由と考えられる。

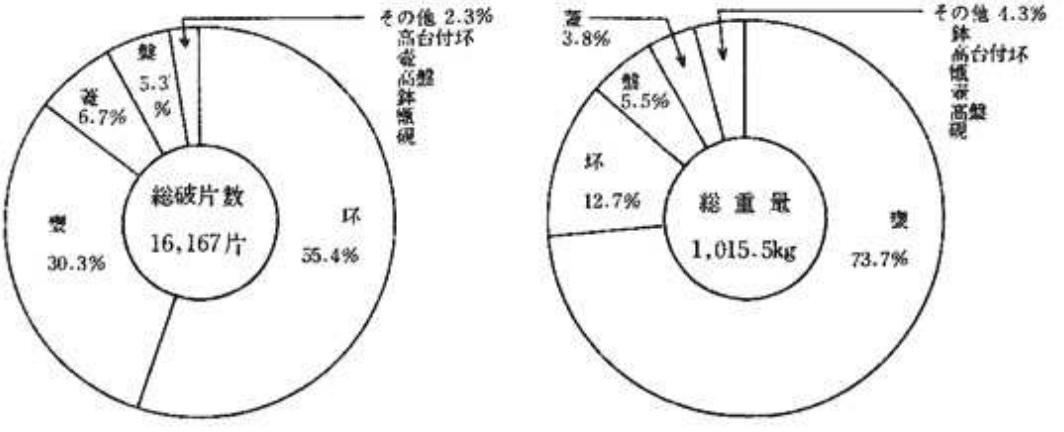
須恵器窯は，焼成時に大量の燃料を必要とするので，燃料となる雑木が大量に確保できることも重要な条件である。窯は高取山の外縁部に構築されており，この付近は，低い山が連なる丘陵地で，松や雑木の山林地帯となっている。また最近まで炭焼きが行われていた地であり，当時も燃料が豊富に得られたことと思われる。

製品の供給先としては，久慈川以南で主に当時の那賀郡内及びその周辺とされているが[3]，輸送方法としては，近くを流れる那珂川支流の藤井川，又は桜川を経由する舟での輸送も考えられる。また，当時の那賀郡の中心地である那賀郡衙があったと推定される台渡（だいわたり）までの距離は，6.5kmほどで比較的近距離であった。

以上のように，木葉下遺跡に須恵器窯が構築されたのは，当地が窯を構築するのに適した細砂の丘陵地であり，近くから須恵器の原料となる粘土および燃料が大量に得られたこと，製品を搬出するのに交通の便が比較的よかったことなどによるものと考えられる。　（小河邦男）

第2節　遺物について

今回の調査で，12基の窯跡及び灰原などから出土した須恵器には，蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕，鉢などがみられる。遺構別出土量は，第4章で掲載したとおりで，それらと灰原などの遺物を合計すると，破片総数は16,167点に達する。[4] これを重量でみると1,015.5kgである。窯跡間でみると，破片数で最も多いものは4号窯跡で，次いで3号窯跡，6号窯跡の順であるが，重量で最も重いものは6号窯跡，次いで3号窯跡，7号窯跡の順である。次に器種別の出土量をみると，破片数では坏が55.4%と最も多く，次いで甕の30.3%，蓋の6.7%であるのに対して，重量では甕が73.7%，次いで坏の12.7%，盤の5.5%である。いずれにしても坏と甕で大部分を占めていることには変りない。しかし，甕は，器面の面積，1個体あたりの重量共に坏のそれより何倍か多いことによるもので，実個体数は，坏よりはるかに少ないものであったとみられる。上記の数値が，生産の実態を正確に反映したものとは思われないが，一応の目安として提示しておきたい。



第69図　出土須恵器器種別割合

以下，出土遺物について若干の考察を加えていくにあたり，12基（16基）の窯跡は，小支谷を挟んで2群に分けることができ，西区の1～8号窯跡をa単位群，東区の9～12号窯跡（16号窯跡）をb単位群と呼称する。

掲載不可

掲載不可

(3) 未焼成土器の表面観察

未焼成土器の基本的な事項については，遺物観察表に示したとおりである。

胎土をみると，坏，甕を含め全体的に砂粒が少なくきめが細かく，粒度分布の結果と一致するが，製品であるところの焼成された須恵器は，砂粒が目立ち，未焼成のものとの差が感じられる。この点については，調査中に検討し，土中に埋没している間に自然的に水簸を受けたのではないかとの意見も出されたが，結論は得られなかった。

坏の成形については，粘土紐積み上げ（巻き上げ）か，水挽きか，いずれの説もまだ決定的根拠を見い出していないのが現状であろう。今回の調査においてもこれについて明確な示唆を得ることができなかったが，観察表で述べたように，未焼成の坏の体部に断層状の亀裂が確認されている。この要因としては，土圧によるものとみられ，軽い波状をなすが，底面とほぼ平行に走り，成形時のロクロ回転方向が右回りのものは，亀裂が左上がりで，左回りのものは右上がりであることが確認できた。数少ない個体数の中での現象であり，外側へずれているものと内側へずれているものとがみられるが，この亀裂が土圧により粘土紐に沿って生じた可能性も考えられよう。

これだけで，粘土紐積み上げ成形であるとするには早計であり，ここでは事例紹介にとどめたい。

なお，そのほか内面の体部基部付近に1cm前後の粘土粒の付着が認められたが，人為的なものか偶然的なものか明らかにできなかった。

2　ロクロの回転方向

須恵器成形におけるある段階で，回転台いわゆる一般的にいわれているロクロが使用されていることは明らかであろう。それがどのような構造のものであったかは明らかでないが，坏などに残る水挽き痕や横ナデ痕および底部の回転ヘラ削りからロクロの回転方向を観察したところ，表17に示したような結果を得た。

表17　ロクロ回転方向

（　）内は調整時の回転方向が成形時のそれと異なるもので，成形時の回転方向が同一のものの中における百分率

窯跡＼回転方向	右回り（%）	左回り（%）	個体数（個）
1号窯	86.7	13.3	15
2号窯	80.0	20.0 (60.0)	25
3号窯	51.0 (8.0)	49.0 (4.2)	49
4号窯	45.3	54.7	106
5号窯	56.7 (2.9)	43.3 (11.5)	60
6号窯	68.9	31.1 (9.4)	103
7号窯	61.4	38.6 (11.8)	44
8号窯	57.6 (36.8)	42.4	33
9号窯	88.9	11.1	9
10号窯	85.7	14.3	14
11号窯	100.0		10
12号窯	80.0	20.0	30

これを時期的にみると，a単位群で最も古い8号窯跡，次いで古い5号窯跡では右回りがやや多く，5号窯跡のある段階と並行して操業されていたと考えられる1～3，6，7号窯跡では，圧倒的に右回りが多い1，2号窯跡，同数の3号窯跡，右回りがやや多い6，7号窯跡とに分かれる。最も新しい4号窯跡では，左回りがやや多くみられる。また，a単位群とほぼ並行して操業されたとみられるb単位群においては，個体数が少ないが，9～12号窯跡共に右回りが圧倒的に多い。大阪府陶邑古窯址群の調査成果にみられるように「はじめロクロを逆回りに回転させ，やがて次第に順まわりに固定した」[6]というような傾向はみられない。さらに，成形時と調整時の回転方向が異なるものが，2，3，5～8号窯跡において22例ほどみられる。[7]このことも陶邑の報

告でいわれているような「ヘラ削りの方向と横ナデの方向とほとんど一致する」[8]と異なる点である。

今回の観察結果からいえば，ほぼ同時期に操業されたものとみられる数基の窯の中で，ほぼ同レベルで近接して営まれた1，2号窯跡では圧倒的に右回りが多く，また，3，5，6，7号窯跡では右回りが若干多いというグルーピングができ，それは工人による違いとよみとることも可能であろう。これは，a単位群とb単位群との間での差においてもいえることであろう。しかし，総体的には地域性や時代的な差も考慮しなければならないことと思われ，今後木葉ド古窯跡群の中における変化を詳細に検討する必要性があろう。[9]

3　ヘラ記号について

坏Aには，ヘラ描きによる各種記号いわゆるヘラ記号がみられる。形態は5種類を確認することができ，窯跡と操業面ごとに分類したのが表18である。

表18　ヘラ記号の窯跡操業面別分類表

窯跡 / 記号	3号窯		4号窯				6号窯					7号窯		8号窯	1~8 灰原	9号窯	10号窯	9~12 灰原	計
	Ⅱ	Ⅷ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅵ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅵ	Ⅴ	Ⅷ	Ⅱ					
｜	1	3					5	4	1	10	2	2	2	1	5	2	1	6	45
×							6	1		3			1		2			3	16
V			1	2	1	1												1	6
乂															1				1
T																		1	1
計	1	3	1	2	1	1	11	5	1	13	2	2	3	1	8	2	1	11	69

総数69点を確認し，最も多いものは「｜」の45点，次いで「×」16点，「V」6点で，ほとんどが直線または直線の組み合わせである。窯跡別にみると，6号窯跡の32点，次いで4，7号窯跡の5点，3号窯跡の4点であり，a単位群とb単位群の間に共通性もみられる。

ヘラ記号については，大阪府陶邑古窯址群の調査成果から，「それらの記号は，窯内での「窯詰め」「窯出し」の段階に，他の工人との混乱をさけるために用いられた記号」であり，それは，「同一窯を複数の，対等の工人が，共同利用する場合において，はじめて必要なものである」[10]とされている。

本窯跡群の3号窯跡から，未焼成土器が出土したことは前述したが，そこにおいて，「｜」印のヘラ記号を有する坏9点は，奥壁に向かって右側にまとまってみられ，「×」印のヘラ記号を有する坏3点のうち2点は，左側にみられ，作りそのものは，両者の間に差異を見い出しがたい。6号窯跡Ⅰ次床面出土の「｜」印のヘラ記号を有する坏5点は，同一工人が製作したものとみら

れ，また「×」印のヘラ記号を有する坏6点も，他の同一工人によるものとみられる。さらに，Ⅱ次床面出土の「｜」印のヘラ記号を有する坏5点は，底部の調整に回転ヘラ削りと，ナデとの差はあるが，いずれもロクロ回転方向が左回りで，細部を観察すれば同一工人の手による可能性がある。これらのことも，陶邑古窯址群でいわれたように，工人側の必要性から施されたものと考えることができよう。ただ，前述した3号窯跡の Ⅲ次床面からは，50点の未焼成の坏を取り上げたが，ヘラ記号を確認できるものは11点で，ヘラ記号の存在確認が困難な10点を差し引いても，30点程にはヘラ記号がみられない。これが，窯詰め時の状況を正確に反映していないにしても，ヘラ記号を施さないものが3分の2程あり，それぞれのヘラ記号をもつものと，ヘラ記号をもたない3群に分ければ，ヘラ記号をもたないものの比率は，さらに大きくなる。このように，ヘラ記号をもたないものが多いことは，集落出土の須恵器についても同様で，一部の須恵器にヘラ記号を施さなければならない理由が明確でなく，今後，須恵工人の組織，体制等と関連させて検討しなければならないであろう。

なお，1981年調査のB，C地点のヘラ記号は，「｜」「×」のほかに1種類で，[11] 今回確認したものと同じ傾向を示しているが，器種別にみると，坏A以外に高台付坏，盤にもみられることが異なっている。さらに，三ケ野支群で確認されているヘラ記号は，器種は明確にされていないが，大別して今回確認した2倍の10種類程みられる。[12]

4　焼成形態

須恵器は，そのすべてが窯詰めされた位置から移動した状態で出土しているが，遺物の観察及び，3号窯跡Ⅲ次床面の状況などから，窯詰め，焼成の状況について若干の知見を得ることができたので，簡単に述べてゆきたい。

3号窯跡Ⅲ次床面から未焼成のものが約300点程確認されたことは前述したとおりである。その配置をみると，陶邑TK321号窯の状況[13]とほぼ類似し，大形の甕類を10～12個ほぼ左右対称に配し，その間に小形の坏を置いたものである。窯詰めされた範囲は，奥壁寄りは不明確であるが，傾斜変換点から上部，すなわち焼成部の全域にわたっている。個々の状況をみると，大形の甕類は，須恵器甕片を数枚重ね，その下を砂あるいは窯壁ブロックで支え，甕の底部傾斜に合わせたものを四方に配した，いわゆる焼台の上に正位で置かれている。小形の壺類についても，これとほぼ同じである。坏は，確認し得たものはすべて同形態のもので，三枚重ねのものが1例認められるほかは，いずれも二枚重ねで，口縁部を下にして置かれている。傾斜の比較的ゆるやかな燃焼部寄りにおいては，焼台が認められないが，傾斜の急な奥壁寄りにおいては，須恵器坏の半分程に割れたものを伏せて，その上に置かれている。なお他に瓦や窯壁ブロックを単体で用いたものもみられる。ここで確認できた焼台は，蓋，坏，高台付坏，壺，甕，瓦など391片の須恵器片

で坏の破片が最も多い。

次に，個々の器種の焼成形態をみると，次の二形態が認められる。

(1) 同じ器種のものを，幾重にも重ねたもの。

(2) 異なった器種を重ねたもの。

(1)の形態のものには，坏がある。坏の重ねは，3号窯跡Ⅶ次床面のものは2～3枚であるが，6号窯跡Ⅱ次床面出土の坏は，5～7枚重ねたものがみられ，枚数に差が認められる。さらに異なる点は，6号窯Ⅱ次床面出土のものは，最上段の坏の内面には厚く自然釉がかかり，正位で重ねられたとみられるのに対して，3号窯Ⅶ次床面のものは，口縁部を下にして重ねられている。

このような形態の差が，どのような要因によるものかは明らかでないが，坏だけを重ねた場合は，6号窯跡のように正位で置かれたものが多いようである。重ねの枚数については，2枚程度の例も他に有るが，少ない感は否めない。2枚と5枚では，操業1回あたりの製品数が著しく異なり，焼成効率的にも適当でないものと思われるが，今後検討を要する課題である。

(2)の形態のものには，高台付坏と蓋，盤と高盤がある。前者は，高台付坏の上部につまみを下にして蓋を重ね，さらに蓋の内面に高台付坏を載せるもので，基本的にはセット関係をなすものであろう。後者は，盤の内面に脚部を上にして高盤を載せるもので，12号窯跡Ⅱ次床面出土の未焼成土器にみられる。これは，高盤が正位では不安定であることと，盤及び高盤の内面に自然釉などが付着するのを防ぐことも一つの目的ではないかと思われる。

一回の操業における焼成個数については，明確でないものの，3号窯跡Ⅶ次操業面の未焼成土器の出土状況が一つの参考になるであろう。即ち，前述したように確認できた甕類12個，坏285個という数から，窯詰め時の個体数を推定すれば，甕類は12個と動かず，坏は500個程であろう。ただし，この推定は，坏の重ねがすべて2枚であるという前提に立っているので，6号窯跡においてみられたように，坏が5～7枚重ねられた場合は，前記数の3倍程になる。また，床面積や窯詰めの器種などによっても一回あたりの焼成個数は異なるはずである。

表19　床面積比較指数

窯跡＼操業次	Ⅰ次床面積（㎡）	中間次	最終次
1号窯	9.0		103
2号窯	9.1	127（Ⅱ次）	140
3号窯	5.8	128（Ⅳ次）	167
4号窯	7.0	120（Ⅲ次）	126
5号窯	8.8	106（Ⅴ次）	143
6号窯	11.0		120
7号窯	6.8	116（Ⅳ次）	123

今回調査した窯跡の床面積は，窯によって若干異なるが，Ⅰ次床面から最終次床面にかけて，床面積が拡大していることは，各窯跡において共通にみられる。焼成部におけるⅠ次床面積を100

とした場合の他床面積の拡大状況を示したものが表19である。

これによれば，3号窯跡においては，最終次床面積がⅠ次床面積の1.7倍程であり，窯詰め個体数にも大きな差が現れたものとみられる。

5　器種構成

各窯跡における器種構成については，表20に示したとおりである。これによれば，各窯跡に共通してみられる器種は，坏蓋，坏A，甕A，甕Bである。それ以外のものをみると，蓋は3，4，6号窯跡，坏Bは3，7，10号窯跡，高台付坏は3～6，9，11，12号窯跡，盤は2～3，6～12号窯跡，高盤は4，10～12号窯跡においてそれぞれみられ，これは時期的なものによると思われる。即ち，操業開始時期が早い段階の8，5号窯跡においては，これらの器種はみられず，蓋，盤が，5号窯跡より後出の3，7号窯跡の操業の中途からみられることは，E地点における蓋，盤の初現が3，7号窯跡に求められよう。壺は，6，9，10号窯跡を除いてみられるが，全体的に出土量が少なく，また，壺A，壺Dは極めて少ない。甕は，甕A，甕B以外に，甕C，甕Dが3，6，7号窯跡においてみられるが，甕A，甕Bと比べて極めて少ない。鉢は，a単位群においては各窯跡でみられるが，b単位群においては10号窯跡から若干みられるだけである。鉢のなかでは，鉢Bが比較的多くみられるが，鉢A，鉢C，鉢D，鉢E，鉢Fは少ない。甑は，1，4，5号窯跡からみられるだけで，極めて少ないものである。硯は，3号窯跡からのみ出土している。

以上のような状況からして，E地点の窯跡における器種特質として，器種的には極めて豊富であるが，坏蓋，坏，盤，甕A，甕Bが生産の主体で，他の器種は前者に比して少なかったこと，坏Bは限られた短期間内で生産されたこと，高台付坏は，5号窯跡以降，盤は，3，7号窯跡の後半の操業からそれぞれ出現していることなどが指摘できよう。

6　須恵器の分類と窯の変遷

今回調査した12基の窯跡は，2単位群に分けられ，a単位群は8基，b単位群は4基[40]から構成されている。a，b両単位群内における窯跡は，それぞれが前後関係をもって営まれているものとみられ，得られた資料をもとに各窯跡の前後関係を明らかにしてみたい。ただし，b単位群の9～12号窯跡については，前述したように焼成部の大半が削平され，遺物の出土量も少ないことから，十分な検討が不可能であるので，a単位群を中心にみていきたい。

a単位群の中で，窯跡間に明らかに前後関係をもつ，4，5，8号窯跡の遺物を検討すれば，遺物間の前後関係について次のことがいえる。最も形態変化のとらえやすいのは坏Aである。すなわち，最も古い8号窯跡の坏はⅠ類で，次に構築された5号窯跡の坏はⅣ類を主体とし，最も

表20　窯跡，操業面別器種構成一覧

器種＼窯跡	1			2				3							4							5									6							7							8				9	10							11					12						
	I	II	III	I	II	III	IV	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	灰	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	前	I	II	III	IV	V	VI	前	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	前	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
坏　蓋	○			○		○	○						○	○		○		○	○	○		○	○	○				○	○		○	○						○		○			○		○	○	○	○		○	○							○				○					
蓋													○		○	○	○		○												○																				○				○	○							○			○	○
坏　A	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○			○		○	○	○	○
B										○	○		○	○																										○															○												
高台付坏													○	○	○	○		○											○							○														○								○		○			○				○
盤					○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○													○	○						○	○								○	○		○				○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
高　盤															○																																				○						○	○			○	○				
壺　A																																									○																									
B	○		○															○		○					○	○														○					○														○				○		○			○
C		○		○	○									○				○																																																
D																													○															○																							
甕　A		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○		○	○	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○			○	○		○				○			○			○			○	
B	○		○		○		○		○	○	○		○	○	○	○		○				○	○	○	○		○	○	○	○		○	○						○	○	○	○	○		○				○	○			○	○	○					○	○			○
C																																○							○																												
D														○																																																				
鉢　A														○				○	○			○										○										○																										
B	○		○							○			○			○		○	○	○	○				○	○	○	○	○										○	○																												
C																																○																																			
D												○		○															○		○									○																												
E														○																																																				
F																	○			○																																															
甑	○															○	○												○																																						
硯									○																																																								
軒丸瓦																															○																																			
平　瓦								○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○											○	○	○	○		○			○	○	○	○	○							○	○				○		○									
丸　瓦								○	○				○						○	○											○	○	○	○																																	
熨斗瓦													○					○													○	○																																			

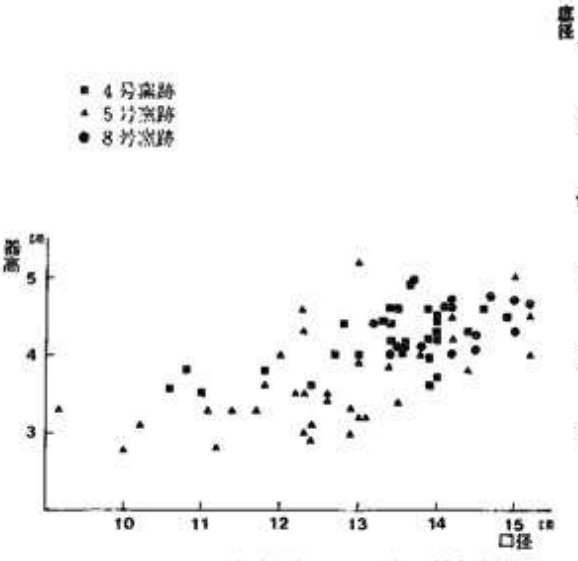
◎は同器種のなかで主体を占めるもの

新しい4号窯跡の坏はⅡ類を主体とし，Ⅰ類→Ⅳ類→Ⅱ類の変容がたどれる。3窯跡の器種構成は，8号窯跡においては，蓋，坏，壺，甕の4器種，5号窯跡においては，蓋，坏，高台付坏，壺，甕，鉢，甑の7器種，4号窯跡においては蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕，鉢，甑の9器種と焼台の瓦がみられる。高台付坏，鉢，甑は5号窯跡から出現し，盤，高盤は4号窯跡から出現している。このことは5号窯が8号窯の崩落廃棄直後，4号窯は5号窯の崩落廃棄後に構築されていることからもほぼ妥当であろう。

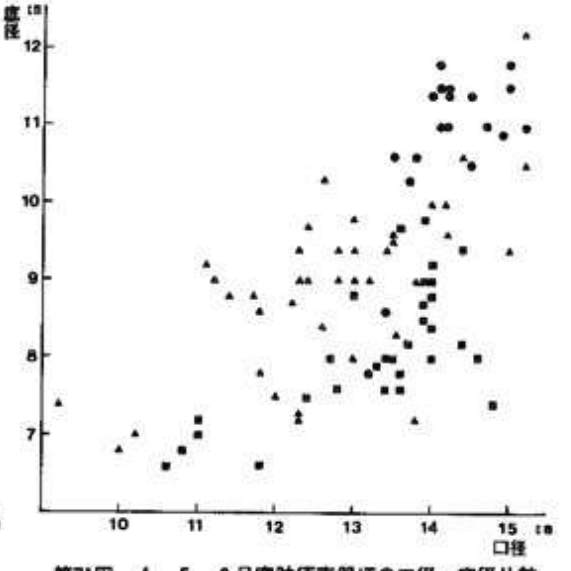
次に，3窯跡における主な器種の消長を簡単にふれてみたい。

蓋　蓋は，8，5号窯跡のものは，口径14.4～15.5cm，器高2.3～3.5cmで，浅く丸く，扁平で上部がくぼむつまみが付くもので，法量，形態ともに大きな変化はみられない。4号窯跡のものは，大形で口径が20.0cm前後のもの，17.5cm前後のもの，小形で口径が12.5cm前後のものとの3グループに分かれ，腰高で径の小さい擬宝珠形を呈するつまみが付くものである。すなわち口径15.0cm前後で扁平なつまみが付くものから，大形のものと小形のものに分かれ擬宝珠形のつまみが付くものに変容することが明らかである。ただ，大形のものは，坏類の蓋とは考えられず，後述する大形の高台付椀あるいは盤の出現との関連性でとらえる必要があろう。

坏A　坏Ⅰ類の法量は，口径13.2～15.2cm（平均14.5cm），器高4.0～4.9cm（平均4.5cm），底径9.8～11.8cm（平均10.9cm）と比較的まとまりをみせている。坏Ⅳ類は，口径10.0～15.2cm（平均12.8cm），器高2.8～5.2cm（平均3.7cm），底径7.0～10.2cm（平均8.7cm）とばらつきがみられ，Ⅰ類の坏と比較して全体的に小形化している。坏Ⅱ類は，口径12.2～14.9cm（平均13.7cm），器高3.6～4.9cm（平均4.3cm），底径7.2～9.8cm（平均8.2cm）のものと，口径11.0～11.8cm，器高3.5～3.6cm，



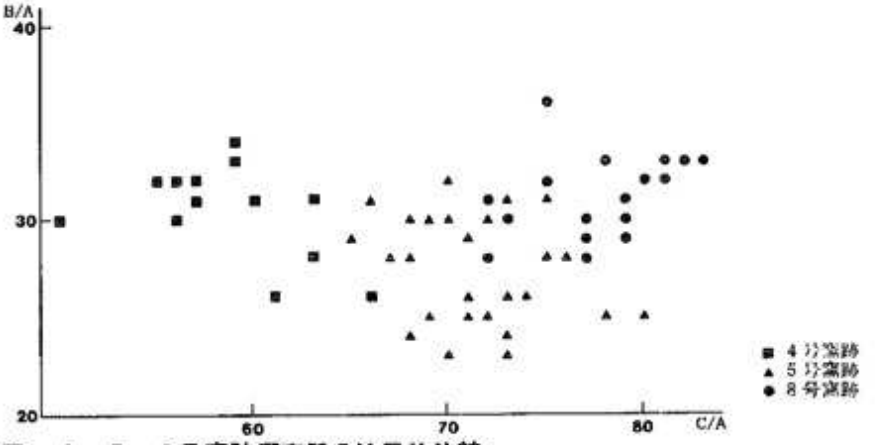
第70図　4，5，8号窯跡須恵器坏の口径・器高比較



第71図　4，5，8号窯跡須恵器坏の口径・底径比較

底径6.6～7.2cmの2グループに分かれ，大形のものはⅣ類の坏と比較して口径，器高は大きい数値を示すが，底径はやや小さくなる。この法量からみた底径指数(b)，器高指数(h)は，Ⅰ類がb＝75，h＝31，Ⅳ類がb＝68，h＝29，Ⅱ類がb＝60，h＝31である。底部の調整は，Ⅰ類がすべて回転ヘラ削りで，Ⅳ類は，26点のうち回転ヘラ削りが17例，不定方向の手持ちヘラ削り7例，一方向の手持ちヘラ削り2例で，Ⅱ類は，17点のうち回転ヘラ削りが12例，不定方向の手持ちヘラ削り2例，雑なナデ及び無調整2例である。回転ヘラ削り→不定方向のヘラ削り→無調整と，その出現の過程が明らかである。

なお，5号窯跡には，Ⅰ類の坏が若干含まれ，4号窯跡にはⅣ類，Ⅲ類の坏が含まれている。



第72図　4，5，8号窯跡須恵器の法量比比較

高台付坏　高台付坏は，8号窯跡においては全く認められず，5号窯跡においては前道部から高台部片が2点みられるだけで詳細は明らかでないが，5号窯においては生産された可能性が考えられる。

4号窯跡のものは，大形で口径17.5cm前後，器高7.0cmのもの，口径15.0cm前後，器高4.7cmのもの，小形で口径12.0cm前後，器高4.2cm前後の3グループに分けられる。前二者は，底部と体部との境に明瞭な稜をなし，体部は軽く外反するものが多く，外側へふんばる高台が付くものである。口径12.0cmのものは，底部の外周部に断面が逆三角形状を呈する高台が付くものである。なお，口径17.5cm前後のものは，前述した口径17.5cm前後の蓋，口径12.0cm前後のものは，口径12.5cm前後の蓋がそれぞれ対応し，セット関係をなすことが考えられる。

盤・高盤　盤・高盤は，8，5号窯跡において認められず，盤の初現が4号窯跡であるとは即断できないが，3基の中では4号窯跡から認められる。4号窯跡の盤は，口径23.5cm前後のものと，やや小形で18.0cm前後のものとに分けられる。体部は，直線的に立ち上がるものと外反するものがみられるが，短く垂下する1例を除いては外側へふんばる高台が付く。

高盤は，1点だけの出土で詳細は明らかでない。

鉢　鉢は，5号窯跡に鉢A，鉢B，鉢Dがみられ，4号窯跡には鉢A，鉢B，鉢Fがみられる。

鉢D，鉢Fは，全体的に出土量が少なく，必ずしも時期差としてはとらえられない可能性がある。鉢の中で，最も多い鉢Bについてみると，5号窯跡のものは口径32.0cm前後であるのに対して，4号窯跡のものは口径24.0～30.0cm前後と，小形化する傾向がうかがえる。

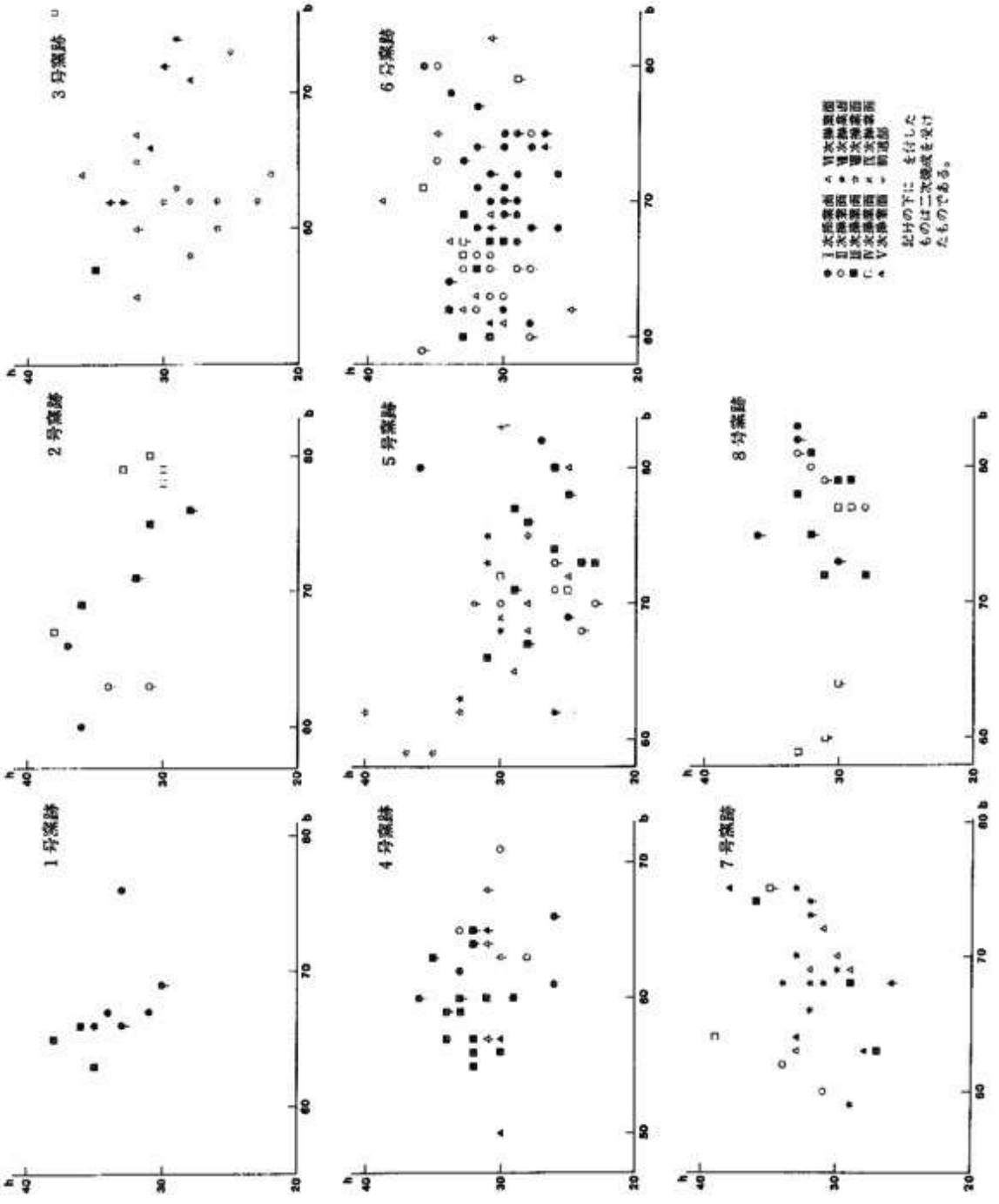
以上のことから，総体的に坏Aは，丸底から平底へ変容し，Ⅰ類，Ⅳ類，Ⅱ類の順で底径が小さくなり，底部調整は，すべて回転ヘラ削りであったものから手持ちヘラ削り，軽いナデ及び無調整のものが順次現れてくることが明らかになった。なお，各窯跡内においても，Ⅰ次から最終次床面にかけて底径が小さくなり，底部の調整もやや雑になっている傾向はみられる。

蓋は扁平なつまみから擬宝珠形のつまみへと変化し，それに伴って法量的に大形のものと小形のものに分かれてくることが明らかになった。

これらの変化をもとに，他の窯跡の前後関係について考えてみたい。ただし，同一窯跡内や各窯跡間において，工人の違いによるものとみられる微細な差が認められるが，これについては，今回は考えず総体的にとらえてみたい。先ず2号窯跡[15]は，蓋，坏，盤，壺，甕の5器種が認められる。坏は，総体的に少ないがⅠ類，Ⅱ類，Ⅴ類の3類が存在し，古い要素と新しい要素を含んでいる。出土状況からみれば，坏Ⅰ類は焼台として使用された可能性が強く，主体的にはⅡ類の坏が考えられる。法量は，口径が10.8～13.6cm，器高4.0cm前後，底径8.0cm前後で，底部の調整はすべて回転ヘラ削りである。法量比をみると，底径指数67，器高指数35前後と4号窯跡出土の坏Ⅱ類と比べて，器高はやや高いが，底径はやや大きく，4号窯跡のものより先行するものとみられる。蓋は，口径14.5cm前後で扁平なつまみが付き，5号窯跡の蓋に類似している。盤は，Ⅲ次床面からみられる。これらのことからみて2号窯は，5号窯より後出で，4号窯より先行する段階が考えられる。

3号窯跡は，蓋，坏，高台付坏，盤，壺，甕，鉢，円面硯の8器種と，焼台の瓦が認められる。坏は，坏Aと坏Bがある。坏Aは，Ⅱ類，Ⅳ類のほかにⅠ類が若干認められるが，Ⅰ類はいずれも焼台である。また坏Aは各床面によって若干の変化が認められるものの，口径12.4～14.6cm，器高3.1～5.0cm，底径8.0～9.0cmのものと，口径11.0cm前後，器高3.5cm前後，底径7.0cm前後の2グループに分けられる。底部の調整は，Ⅱ類，Ⅳ類共に回転ヘラ削りを主体とするが，一部手持ちヘラ削りのものがみられる。法量比は，Ⅳ類が底径指数71.5，器高指数31.5，Ⅱ類が底径指数61，器高指数30である。蓋は，数少ないが，扁平なつまみが付くものである。盤はⅥ次床面以降みられ，高台が短く垂下するものである。なお，瓦はⅡ次床面からみられる。以上のことからみて，3号窯も2号窯と同様に5号窯より後出で，4号窯に先行して操業が開始されたものとみられる。

6，7号窯跡は，蓋，坏，盤，甕，鉢などと，焼台の瓦が認められる。坏は，Ⅳ類とⅡ類が主体で，底部調整は，回転ヘラ削りを主体とし，一部手持ちヘラ削りのものが含まれている。法量



第73図　須恵器坏法量比分布図

比は，いずれも器高指数30～31前後で，底径指数はⅣA類が70前後，Ⅱ類が70前後と63前後に分かれる。盤は，6号窯跡がⅢ次床面から，7号窯跡がⅤ次床面から，また瓦は，6号窯跡がⅠ次床面から，7号窯跡がⅢ次床面からみられる。これらのことから6，7号窯は，7号窯がやや先行する可能性があるものの，5号窯より後出で，4号窯より先行し，2，3号窯とほぼ並行して操業されたものとみられる。

1号窯跡は，蓋，坏，壺，甕，鉢，甑の6器種がみられる。坏は，Ⅱ類とⅣ類がみられるが，Ⅱ類は最終のⅢ次床面からだけみられる。坏Ⅳ類は，口径13.5cm，器高4.5cm，底径9.0cm前後のもので，底部調整は，回転ヘラ削りのものを主体とし，手持ちヘラ削り及び無調整のものが若干含まれている。坏Ⅱ類は，口径13.0cm，器高4.6cm，底径8.3cm前後のもので，底部調整は回転ヘラ削りである。法量比は，Ⅳ類，Ⅱ類ともに底径指数64前後，器高指数34～36である。これらのことから，盤，瓦は伴っていないものの，2号窯と相前後して操業が開始されたものとみられる。

以上のことを整理すれば，a単位群においては，8号窯が先行して営まれ，次に5号窯が営まれ，5号窯が操業されている段階で1，2，3，6，7号窯が相前後して営まれ，5号窯が廃棄された後に4号窯が営まれ，4号窯は他の窯の操業が停止した後も操業が続けられていたものとみられる。

b単位群の9～12号窯跡については，不明確な部分が多いが，a単位群と対比して考えてみたい。

9号窯跡は，床面の枚数も明確でなく，遺物も極少量であるが，坏，高台付坏，盤がみられる。坏は，Ⅱ類とⅣ類がみられ，口径12.4cm，器高4.3～5.0cm，底径8.8cm前後のもので，底部はナデ調整である。法量比は，底径指数71.5，器高指数37.5である。なお，盤は確認面からの出土なので確実に伴うものかは明らかでないが，外側へふんばる高台が付くものである。これらのことからa単位群の5号窯よりは後出のものとみられる。

10号窯跡からは，蓋，坏，盤，高盤，甕，鉢の6器種と焼台の瓦がみられる。坏は，坏Aと，坏Bがみられ，坏Aは，Ⅰ類，Ⅱ類，Ⅳ類，Ⅴ類と多様な類形をみせるが，全体的に出土量は少ない。法量は，口径13.8cm，器高4.3cm，底径9.0cm前後のもので，底部調整は，回転ヘラ削りのものと手持ちヘラ削りのものが半々である。法量比は，各類共に底径指数66.5，器高指数30.5前後とまとまりをみせている。盤は，1次床面からみられ，3号窯跡出土の盤と同様に短く垂下する高台が付くものである。瓦はⅡ次床面からみられる。これらのことから，当窯は，3号窯と相前後して営まれたものとみられる。

11号窯跡からは，蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕の7器種と焼台の瓦がみられ，10号窯跡とほぼ同じ器種構成である。坏はⅣ類が2点みられるだけで，法量比は底径指数66.5，器高指数31前後である。盤は，Ⅲ次床面からみられ，外側へややふんばる高台が付くものである。瓦は，Ⅱ次床面からみられる。これらのことから当窯は，10号窯とほぼ並行して操業されたものとみら

れる。

12号窯跡からは，蓋，坏，高台付坏，盤，高盤，壺，甕の７器種がみられる。坏は，すべてⅣ類で，口径14.0cm，器高4.0cm，底径9.0cm前後のものと，口径11.0cm，器高4.0cm，底径6.5cm前後の２グループに分けられる。底部調整は，回転ヘラ削り，手持ちヘラ削り及びナデのものがほぼ同量みられる。法量比は，底径指数60～68，器高指数32前後である。蓋は，やや腰高で上部が平坦なつまみが付くものである。盤は，Ⅰ次床面からみられ，外側へふんばる高台が付くものである。これらのことから当窯は，10，11号窯よりやや後出のもので，４号窯と相前後する時期に操業が開始されたものとみられる。

7　操業年代の検討

実年代の考定にあたっては，その定点となりうるものが今回の調査においては明確にすることができなかったので，「木葉下遺跡Ⅰ」として報告されているA，B，C地点の窯との対比において考えてみたい。

先ず，今回調査した中で最も古い８号窯跡は，高台付坏，盤を伴わない器種構成，蓋，坏Aの形態からみてC３，C４号窯跡との類似性がある。しかし，C３，C４号窯跡の坏は，平底に近いものが多く，法量比も底径指数70前後と８号窯のものよりやや小さく，C３，C４号窯跡とB１，B２号窯跡の中間に位置づけられ，８号窯の操業開始の時期は，８世紀中頃と考えられる。

５号窯跡は，盤を伴わない器種構成，蓋，坏Aのおおまかな形態からはC１号窯跡と類似点がみられるが，坏の法量は，C１号窯跡出土のものより口径が小さく，器高が低い点が異なる。これを法量比でみると，底径指数はほぼ等しいが，器高指数は29でC１号窯跡より低い。このような器形の坏を出土する窯跡は，木葉下窯跡群内においては現在のところ確認されていない。同様な器形を他に求めると，底部の切り離しは異なるが，千葉県永田窯跡群[16]の一部にみいだすことができる。永田窯跡群は，須田勉氏によれば成立の時期の上限を741年と考えており[17]，また国平健三氏は，埼玉県前内出２号窯跡の須恵器と比較検討して，その操業期間を８世紀中葉を中心として，８世紀第２・四半期後半から第３・四半期前半の期間内に位置づけている[18]。このことから，５号窯は，８世紀第３・四半期には操業が開始されたものとみられる。

４号窯跡は，高台付坏，高台付椀を，当初から伴う器種構成である。蓋は，擬宝珠形のつまみである。この様な器種構成をなす窯は，C２，C５号窯跡が該当するが，坏の形態，法量比などからC５号窯跡が最も類似していることがわかる。C５号窯跡は，８世紀末～９世紀初頭に位置づけられており，４号窯跡もほぼ同時期とみられ，８世紀第４・四半期の後半には操業が開始されたものと考えられる。

以上のことから，前述した窯跡変遷を当てはめると，a単位群は，3，7号窯が８世紀第3・四半

期後半頃[19]に，1，2，6号窯が8世紀第4・四半期頃[20]に，またb単位群は，10，11号窯が8世紀第4・四半期頃に，12号窯が8世紀第4・四半期後半頃にそれぞれ操業が開始されたものと考えられる。すなわち，今回調査した12基の窯は，8世紀中葉から9世紀初頭頃にかけて順次操業されたものとみられる。なお，現状保存を図った13～16号窯跡も，ほぼ並行して操業が行われたものとみられる。

（川井正一）

注

(1) E地点東区の調査区域外から4基の地下式無段須恵器窯が検出されており，これらを含めるとE地点からは16基の窯が検出された。

(2) 『機械ボーリング調査報告書』（常磐自動車道土取場土質調査）建設企画コンサルタント 1977

(3) 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6（木葉下遺跡Ⅰ） 『茨城県教育財団文化財調査報告』第21集 茨城県教育財団 1983

(4) この数値は，たん念な接合作業を経た後の，総破片数である。

(5) ただし，同一の窯内においても，場所による火のまわりの良し悪しや，操業時により焼成温度に若干の差があると考えられ，十分に焼成されたものと，そうでないものがあると思われる。従って1,100～1,170℃位という数値は，一つの目安である。

(6) 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ 1966

(7) 今回調査の出土遺物からみた限りでは，成形時と調整時のロクロ回転方向が異なるものは，比較的古い段階でみられ，新しい段階では両者の回転方向が一致してくる。

(8) (5)に同じ。

(9) 昭和56年度に調査したA，B，C地点の窯跡から出土した蓋，坏，高台付坏，盤のロクロ回転方向は，下表のとおりである。(表の見方は表17と同じである。)

窯跡	右回り(%)	左回り(%)	個体数(個)
A 1号窯	92.0	8.0	25
A 2号窯	100.0	0	1
A 3号窯	66.7	33.3	3
A 4号窯	66.7	33.3	21
B 1号窯	100.0	0	27
B 2号窯	93.3 (1.0)	6.7 (57.1)	99
C 1号窯	46.5 (6.1)	53.5 (10.5)	33
C 2号窯	70.0	30.0	14
C 3号窯	46.2	53.8	12
C 4号窯	31.8 (3.0)	68.2 (1.4)	33
C 5号窯	52.5 (6.3)	47.5 (3.5)	63

この表からもうかがえるように，例えばA地点の1，2号窯では右回りが圧倒的に多く，3，4号窯では左回りが3割程占め，時期的なことよりも工人の違いが指摘できよう。

(10) 中村浩編『陶邑』 堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要 大阪府教育委員会 大阪府企業局 1970

中村浩『須恵器』 考古学ライブラリー 5 ニューサイエンス社 1980

(11) (3)に同じ。

(12) 大川清・大森信英『水戸市木葉下町三ケ野第2号窯址発掘結果報告書』 水戸市史編さん室 1962

飯田瑞穂「律令制下の水戸地方」 『水戸市史』上巻 水戸市史編さん委員会 1963

(13) (10)に同じ。

(14) b単位群は8基としたが，9号窯跡の南側の谷奥にも窯跡が存在した可能性がある。

(15) 『陶邑』では，「窯式」から「床式」へ，編年の基準を厳密化することが提唱されている。木葉下E地点においても同一窯内で操業面の違いにより遺物に差が認められ，さらに同じ操業面の中でも遺物に微妙な差が認められる。前者は焼成時期の差，後者は工人差という方向で検討することが可能であるが，本稿では一括して取り扱うこととした。

(16) 大川清『千葉県市原市永田・不入須恵窯跡』 考古学研究室報告 乙種第4冊 国士館大学文学部考古学研究室 1978

(17) 須田勉「坊作遺跡の調査」 『上総国分寺台発掘調査概要』Ⅳ 上総国分寺台遺跡調査団 千葉県市原市教育委員会 1977

(18) 国平健三「相模国の奈良・平安時代の集落構造（上）」 『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会 1981

(19) 3，7号窯跡出土の盤は，永田14号窯出土の盤と形態が類似している。永田窯の盤は，上総国における初現で，時期的に8世紀中葉と推定されていることから，3，7号窯跡を永田窯と同時期に比定することも可能であろうが，坏Aの形態などから8世紀第3・四半期後半とした。なお，3，7号窯跡の盤は，木葉下窯跡群内における初現とみられる。

(20) 6号窯跡Ⅱ次操業面から出土している素縁単弁八葉花文中心周環一重式軒丸瓦は，高井悌三郎氏による台渡廃寺出土瓦の分析から，勝田市原の寺瓦窯跡出土の軒丸瓦と同時期であることが明らかである。原の寺瓦窯跡は，出土須恵器などから8世紀後半から9世紀初頭と推定され，6号窯の操業開始時期を8世紀第4・四半期とすることに矛盾しない。

終　章　結　び

前章までに，木葉下遺跡（窯跡群）E地点の調査における事実関係の報告と，遺構・遺物について若干の考察を行ってきた。その結果，E地点から検出された窯跡群は，坏，甕などの須恵器を生産の主体とする地下式無階無段登窯16基からなり，それらは窯構造や須恵器の様相などからa，b両単位群に分けられるものの，8世紀中葉から9世紀初頭にかけて順次操業が行われてきたことが明らかになった。また，立地条件，窯の基本構造，須恵器の形態・製作手法，操業時期などは，若干の違いを認め得るとしても，総体的にはC地点のものとほぼ類似したものであることも判明した。

ここで注目されることは，前章までにおいて詳しく触れることができなかったが，3，4，6，7，10，11号窯跡の6基から瓦が出土していることである。瓦は，いずれも焼台として使用されているが，瓦の出土は木葉下窯跡群の性格や，工人体制について考える上において，重要なことと思われる。すなわち，調査対象となった12基の窯跡のうち，6基の窯体内及び灰原などから軒丸瓦，平瓦，丸瓦，熨斗瓦が出土していることは，須恵器工人と瓦工人が密接な関係にあったか，須恵器と瓦が同一の工人集団によって生産されたことが考えられる。4号窯跡から出土した平瓦の凸面にみられる平行叩き目は，須恵器甕類にみられるものと同じであり，また，木葉下窯跡群における須恵器底部の切り離し技法は，確認でき得る限り回転ヘラ切りによるが，11号窯跡から出土した壺の底部に残る回転糸切り痕などは，須恵器工人と瓦工人との関連性において理解でき得ることである。

ところで，木葉下窯跡群の瓶焼土2号窯跡，落合支群，堂の前支群などから，台渡廃寺の寺名とみられる「徳輪□」「□輪寺」とヘラ描きされた文字瓦や，同寺にみられる軒丸瓦などが出土していることから台渡廃寺へ瓦を供給した官窯といわれている。[1] しかし，現在までのところ，木葉下窯跡群内において瓦を生産した窯は明確でなく，今回の調査地点の北方約300mにある落合支群付近から発見された，瓦が出土した焼土遺構が考えられるだけである。調査者の伊東重敏氏は，台渡廃寺軒平瓦第Ⅲ型式に分類されている菱文式軒平瓦，文字瓦，平瓦，丸瓦の出土から，台渡廃寺に瓦を供給した瓦窯跡であろうとしている。さらに，それらの瓦は第2次的瓦群であり，台渡廃寺が創建期を上回る大規模な瓦の供給を必要としたことにより築窯されたものとし，その時期を8世紀後半に比定している。[2] そのような大規模な瓦の供給を必要としたとすれば，瓦窯の新たな築窯もあろうが，武蔵国における虫草山窯，[3] 新久窯[4]などにみられるように，本来須恵器を生産する窯において，臨時的，特需的に瓦を伴焼した可能性が考えられる。[5] 現在までに瓦窯跡の検出例がほとんど無く，瓶焼土2号窯などの須恵器窯跡から瓦の出土がみられることは，木葉下窯の各支群の須恵器窯において，臨時的，特需的に瓦が生産されたとすれば納得できることであ

る。今回調査したE地点において，並行して操業したとみられる窯跡のなかで，瓦を伴うものと，そうでないものが存在することも，臨時的，特需的な瓦の生産に起因する可能性が考えられる。

今回の調査で，6号窯跡Ⅱ次操業面から出土した素縁単弁八葉花文中心周環一重式軒丸瓦は，前述した落合出土の菱文式軒平瓦とセットをなす瓦で，6号窯跡と落合の焼土遺構は，ほぼ同時期と考えられる。同時期であるとすれば，距離的に近いことから当地点から出土した瓦が，落合からの搬入品とも考えられるが，平瓦をみると，落合出土のものは凸面縄目叩きが多く，斜格子叩きは皆無であるのに対して，6号窯跡及び6号窯とほぼ並行して操業された3，7号窯跡の平瓦は凸面斜格子叩きが多く様相を異にし，搬入品の可能性は薄い。

また，8世紀中葉と考えられるA地点1号窯跡の窯体内及び灰原から，凸面格子叩きの平瓦，8世紀第4・四半期後半と考えられるC地点5号窯跡及び今回調査の4号窯跡から，凸面平行叩きの平瓦がそれぞれ出土している。このことは，平瓦において格子叩きが最も古く，斜格子叩き・縄目叩き，平行叩きの順に新しくなるという技法上の変遷と，伴出する窯跡の時期的変遷が一致することも，須恵器窯において瓦を伴焼したことの傍証となるであろう。

これらのことから，今回出土の瓦は，他地点からの搬入品ではなく，それぞれの窯で臨時的，特需的に須恵器と併焼されたものとみられる。さらに，瓶焼土2号窯跡などにおいても，瓦が伴焼されたものとみられ，木葉下窯跡群において比較的多量[(6)]にかつ断続的ではあろうが長期間にわたり瓦が須恵器と共に生産されていたものと思われる。このことは，木葉下窯跡群が台渡廃寺や那賀郡家とかかわりのある官窯としての性格を有していたことに外ならないであろう。

以上，瓦から木葉下窯跡群の性格について簡単に触れてきた。ほかにも工人体制，須恵器の供給範囲など多くの問題が残されているが，紙数もつきたのでそれらは今後の課題としたい。

（小河邦男・川井正一）

注

(1) 高井悌三郎『常陸台渡廃寺・下総結城八幡瓦窯跡』　茨城県教育委員会　1961

(2) 伊藤重敏　『水戸地方における古代窯業の研究（その1－序論－）水戸市木葉下町落合発見の遺構』　常陸考古学研究所学報第15集　常陸考古学研究所　1973

(3) 坂詰秀一　「武蔵・虫草山窯跡」『立正大学考古学研究室彙報』第18号 立正大学考古学研究室 1978

(4) 坂詰秀一編 『武蔵・新久窯跡』　雄山閣出版　1971

(5) 造寺活動が最盛期を迎える8世紀後半から9世紀前半にかけては，各地で瓦陶兼業窯の存在が報告され，本来的な瓦窯を補完する役割を果していたとみられている。

坂詰秀一　「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」『人文科学研究所年報』第17号　立正大学　1980

(6) ただし，一基の窯における瓦の生産は，少なかったものとみられる。

写　真　図　版

E地点調査前遠景
(東方向から撮影)

西区調査前遠景
(北方向から撮影)

東区調査後全景
(北西方向から撮影)

PL 2

西区全景

西区全景

（東方向から撮影）

西区全景

（北東方向から撮影）

4号窯跡遺構確認風景

1号窯跡

Ⅰ次床面

Ⅰ次床面遺物出土状況

Ⅱ次床面遺物出土状況

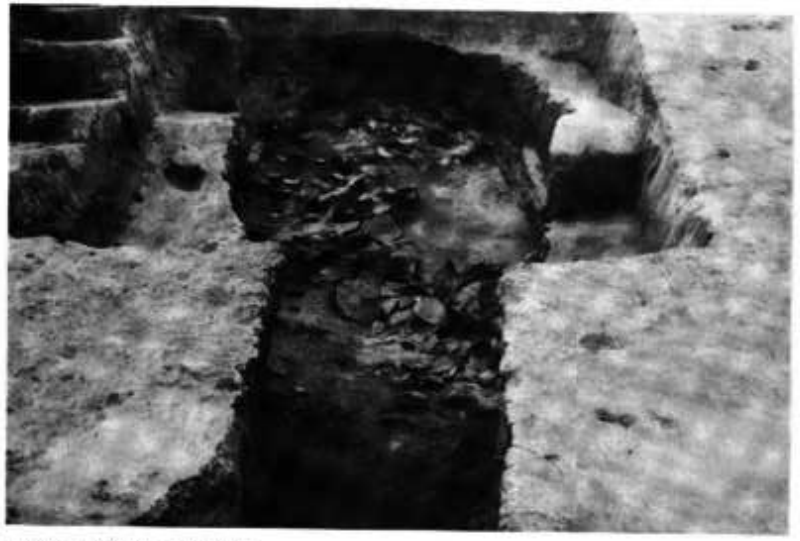
PL 4

2号窯跡

Ⅰ次床面

Ⅲ次床面遺物出土状況

Ⅰ次床面



最終床面遺物出土状況

最終床面遺物出土状況

I 次床面

PL 5
3 号窯跡

PL 6

3 号窑跡未烧成土器出土状況

坏

壶・坏

坏

Ⅰ次床面

Ⅲ次床面遺物出土状況

Ⅵ次床面遺物出土状況

PL 8

5 号窯跡

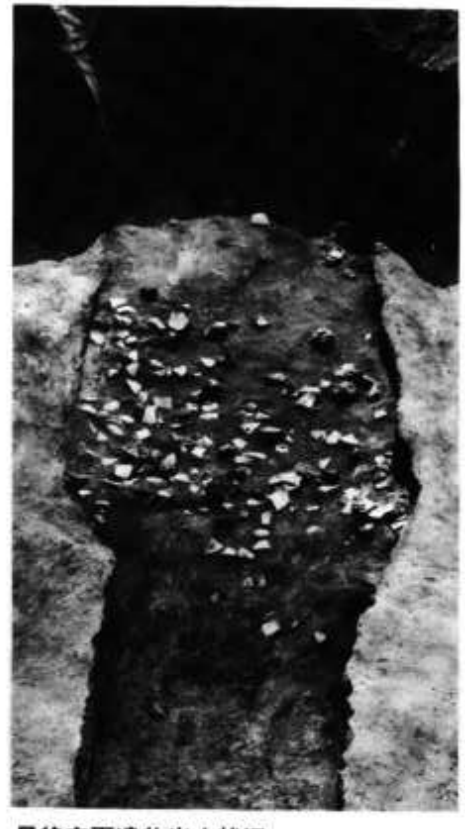
Ⅱ次床面

焼成部天井残存部

Ⅲ次床面遺物出土状況

Ⅲ次床面遺物出土状況

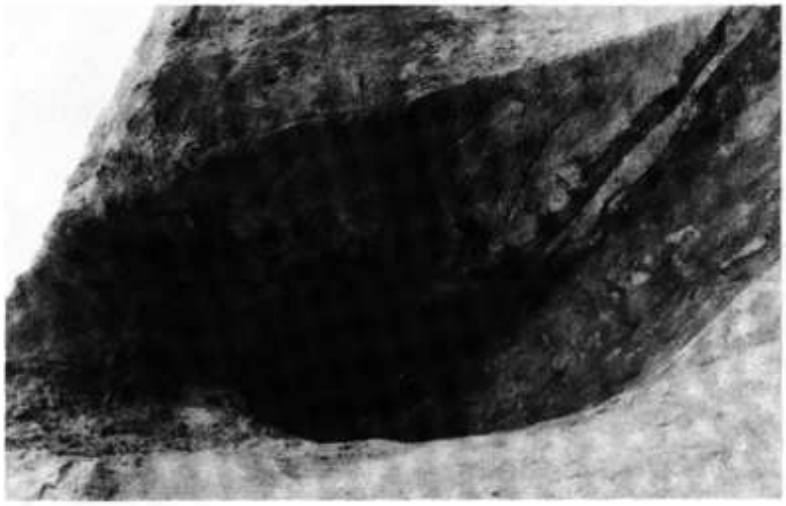
Ⅳ次床面



最終床面遺物出土状況

PL10

7号窯跡



煙道部土層

V次床面

I次床面遺物出土状況

8号窯跡Ⅳ次床面遺物出土状況

5号窯跡前道部（上），8号窯跡焼成部土層

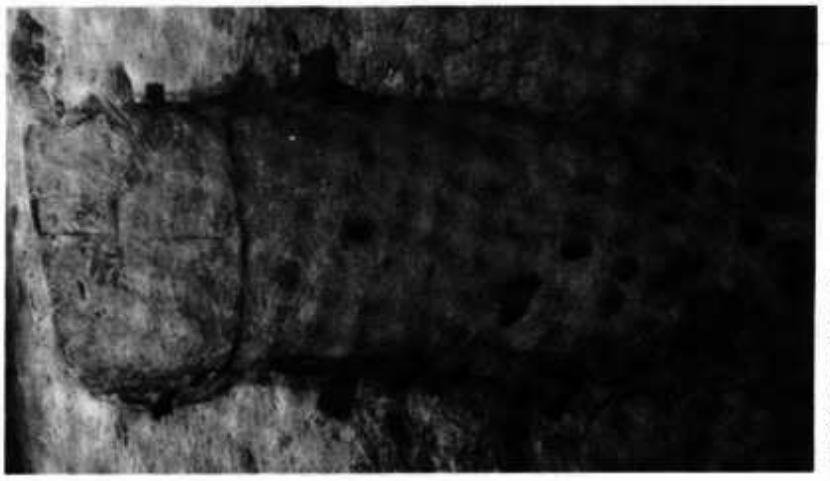
4号窯跡（上），5号窯跡（中），8号窯跡（下）

PL12

10，11号窯跡

11号窯跡最終床面遺物出土状況

11号窯跡Ⅱ次床面



10号窯跡Ⅰ次床面

Ⅰ次床面

Ⅱ次床面遺物出土状況

Ⅲ次床面

PL13
12号窯跡

PL14

工具痕，側壁

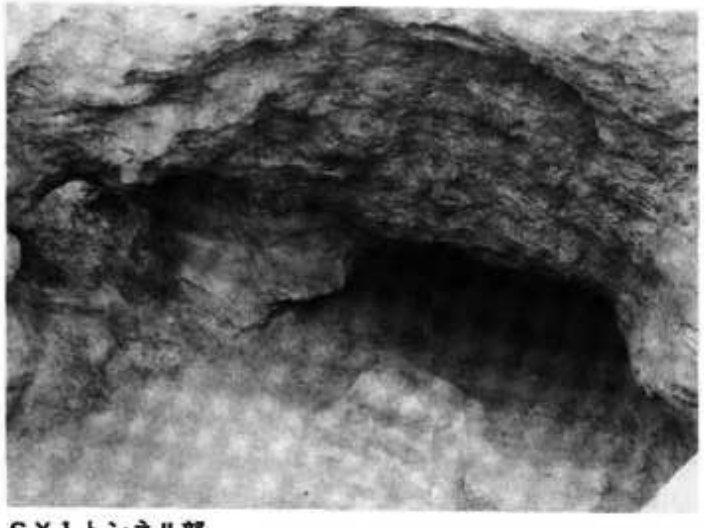
6号窯跡工具痕

4号窯跡右側壁

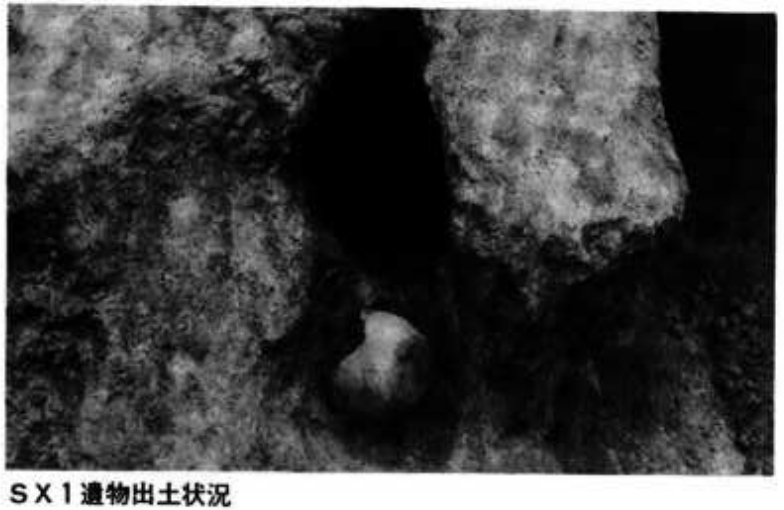
5号窯跡工具痕

2号窯跡工具痕

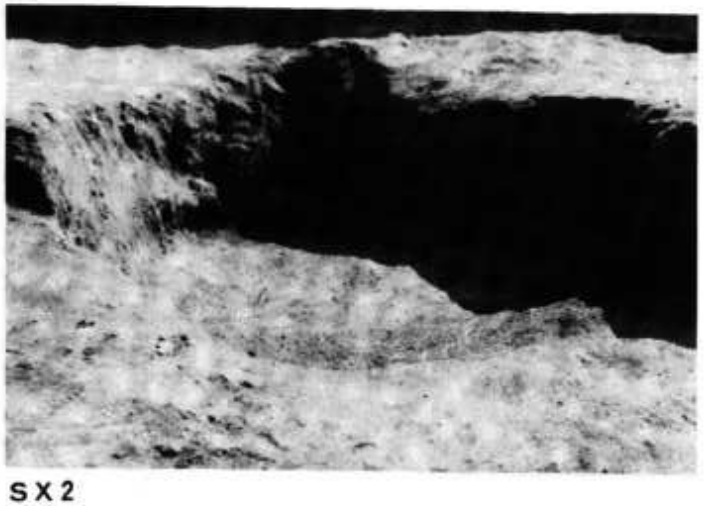
SX1



SX1トンネル部



SX1遺物出土状況

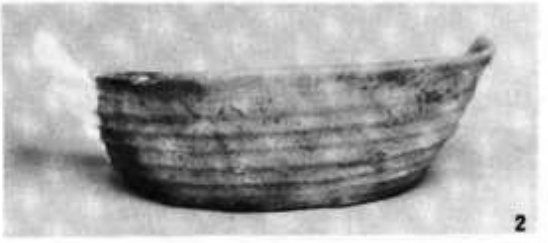


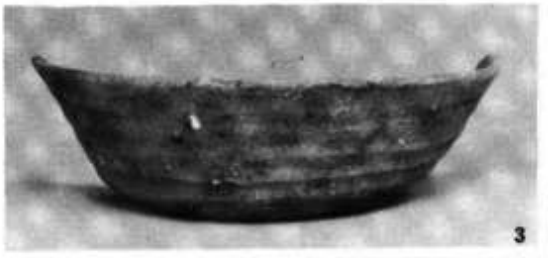
SX2

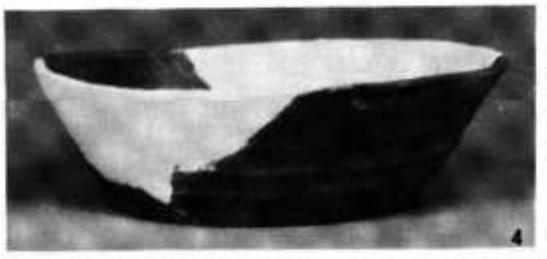
PL16

1号窯跡出土遺物

1


2


3

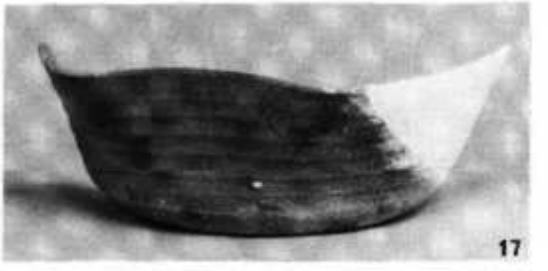

4

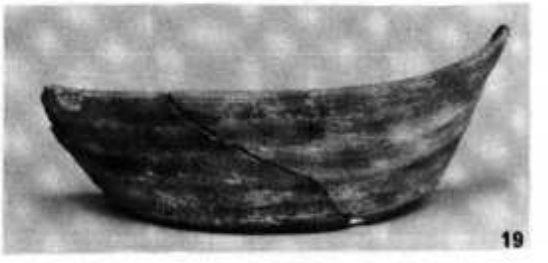
5

6

8

16


17

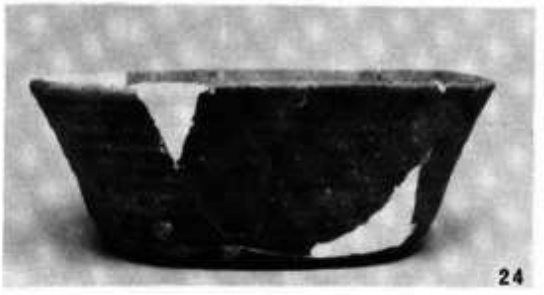

19

21

2号窯跡出土遺物

23

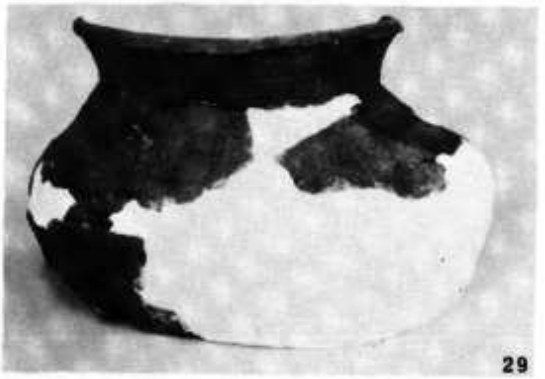
31

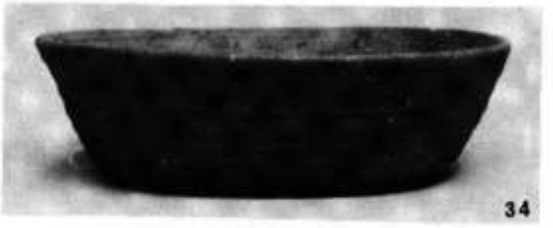

24

32

25

33


29

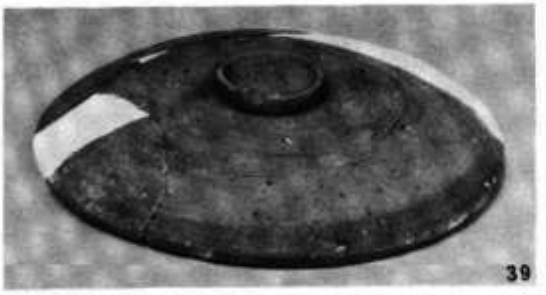

34

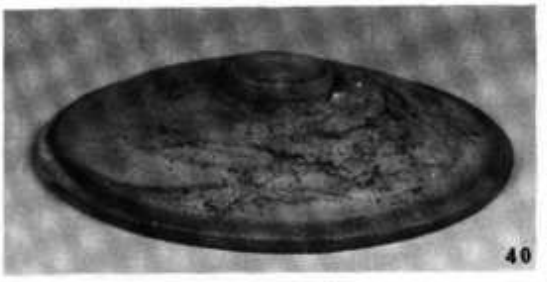
30

35

PL18

2号窯跡出土遺物


39


40

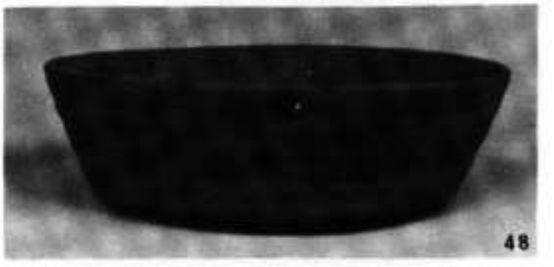
41

42

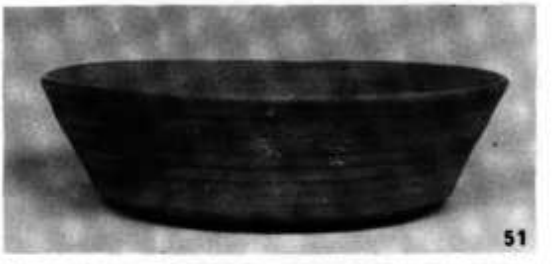
44

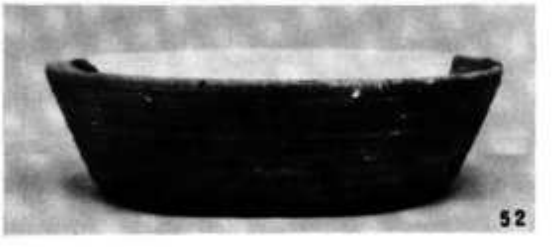
46

47

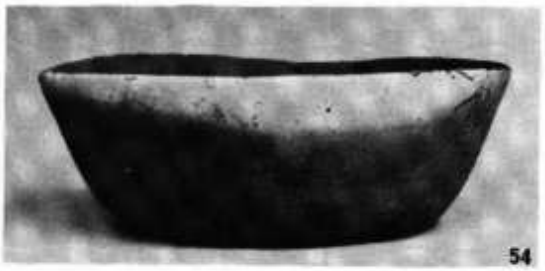

48

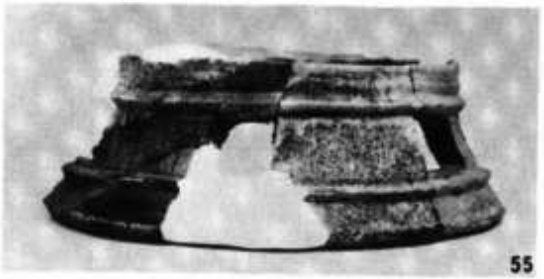
50

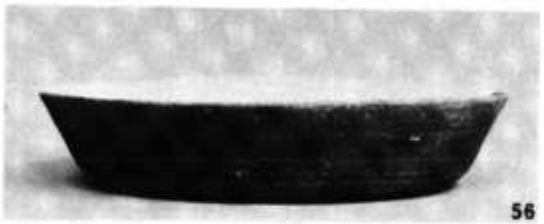

51

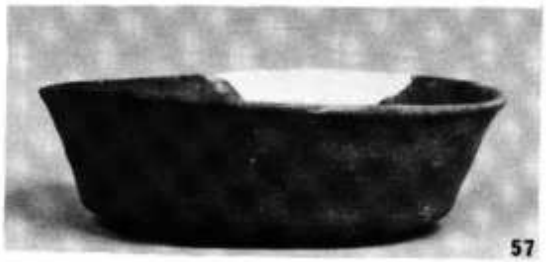

52

3号窯跡出土遺物


54


55


56


57

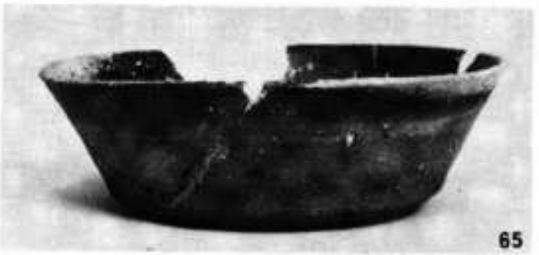
58

59

60

61

64


65

66

67

PL20

3 号窯跡出土遺物

70

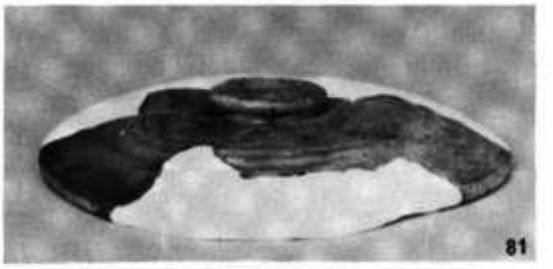
71

72

73

78

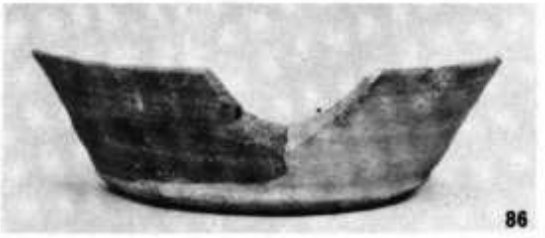
80

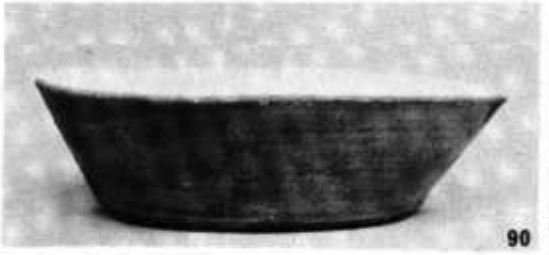

81

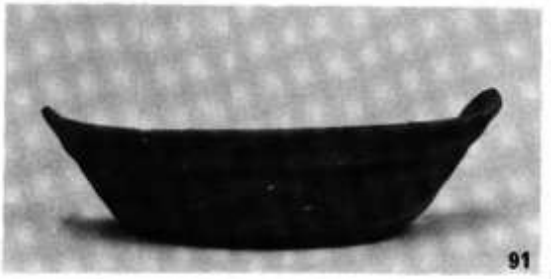
82

83

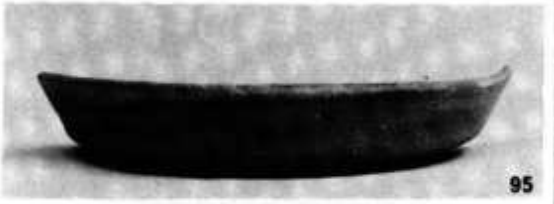
3号窯跡出土遺物

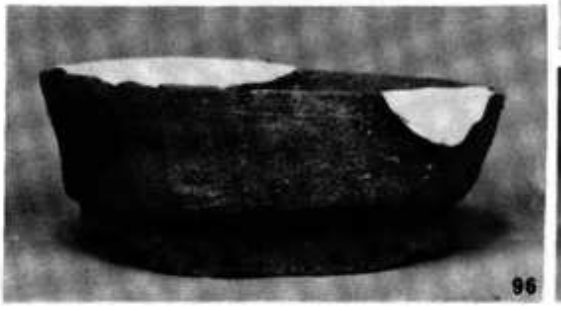

86


90

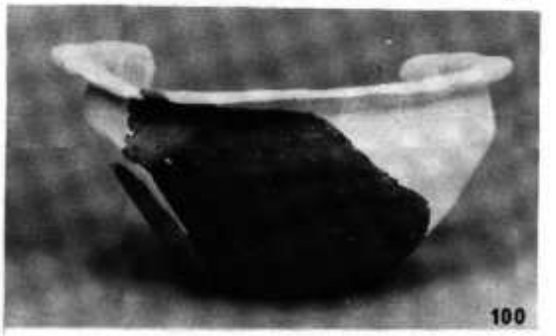

91

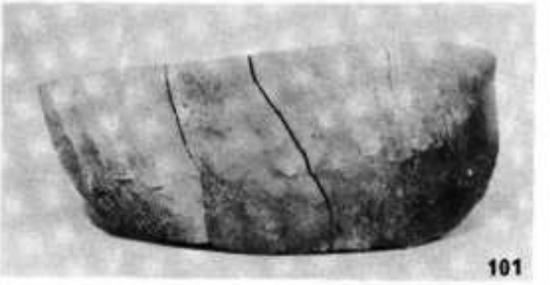
92

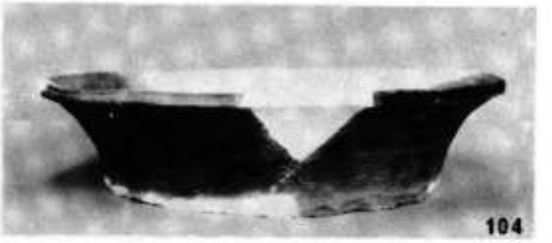

95


96

97


100


101

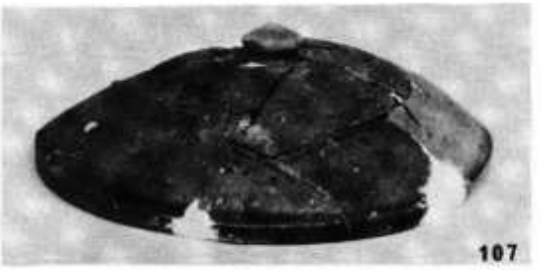

104

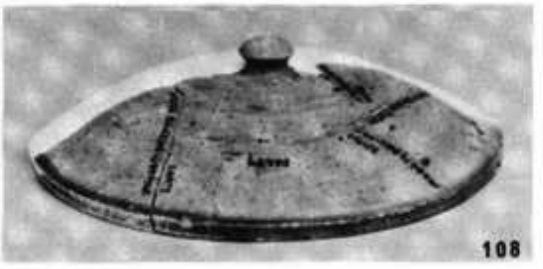
N1

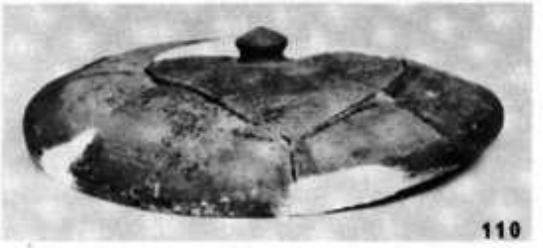
N7

PL22

4号窯跡出土遺物

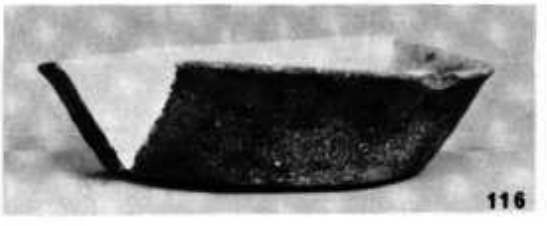

107

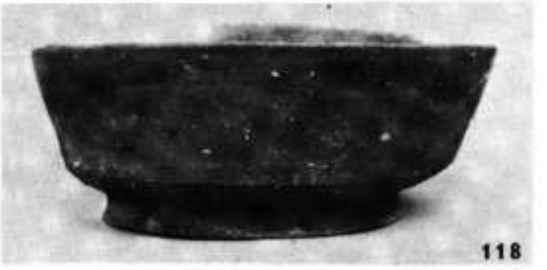

108

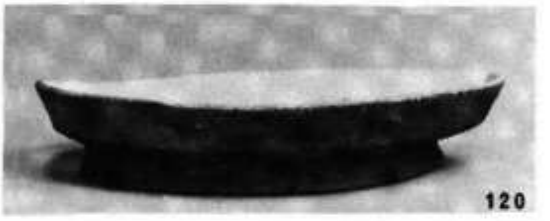

110

113

115

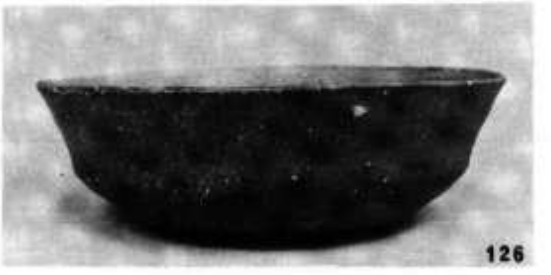

116


118


120

123

125


126

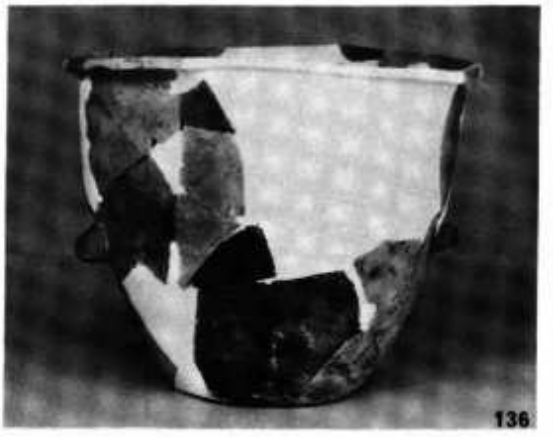
127

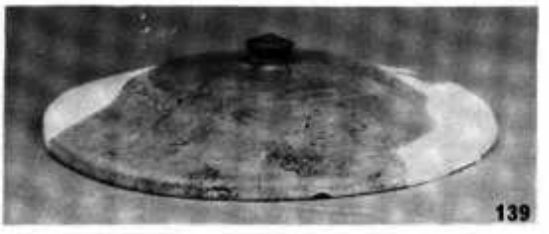
4号窯跡出土遺物

129

132

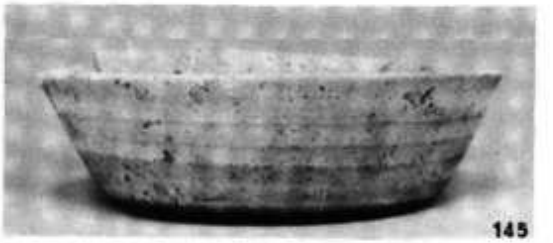
134


136

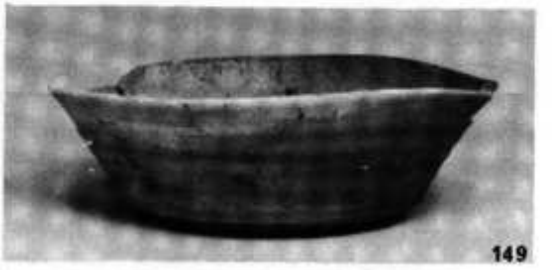

139

140

144


145

147


149

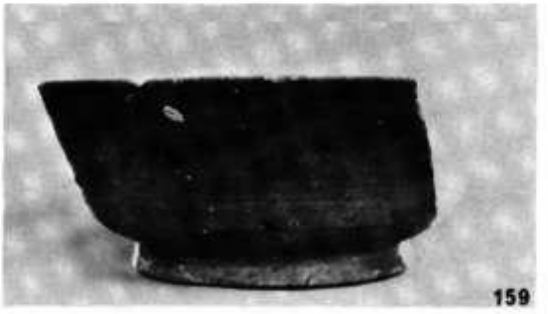
150

152

PL24

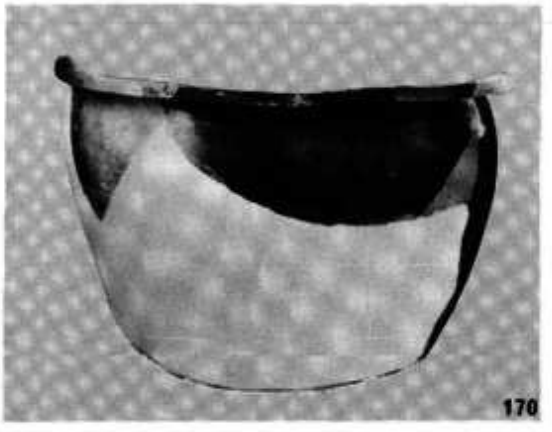
4号窯跡出土遺物

155

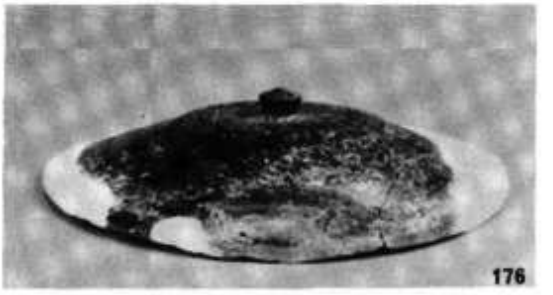

159

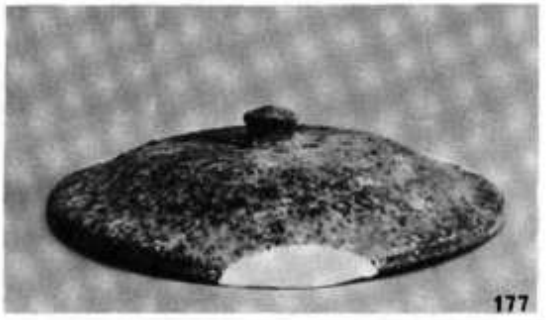
162

165


170

171

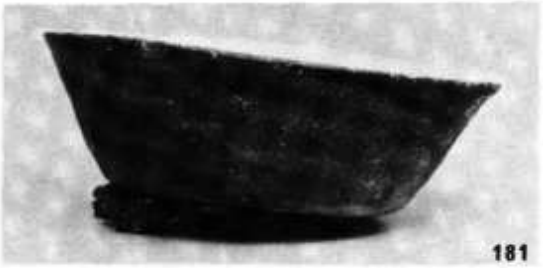

176


177

178
179

180

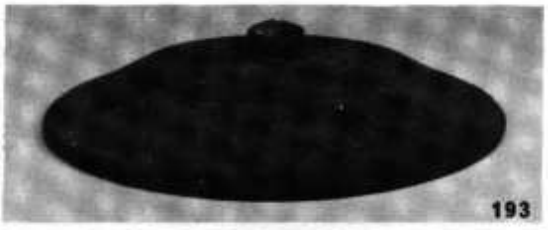
4号窯跡出土遺物


181

183

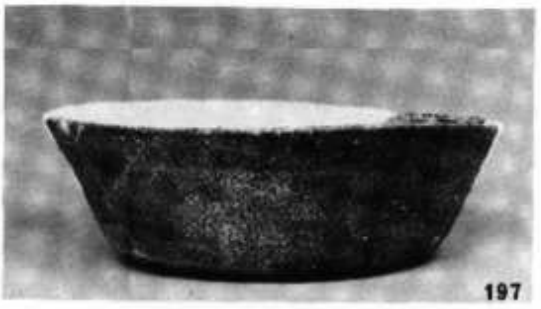
184

186


193

194

196


197

201

205

206

PL26

5号窯跡出土遺物

211

222

212

223

216

224

218

225

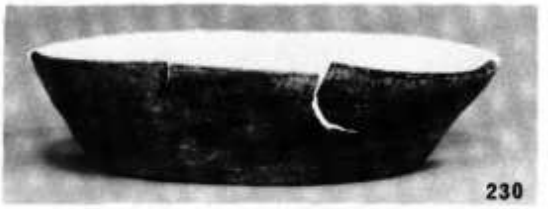
219

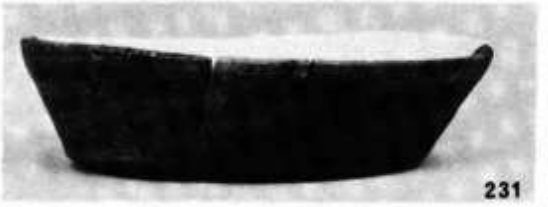
226

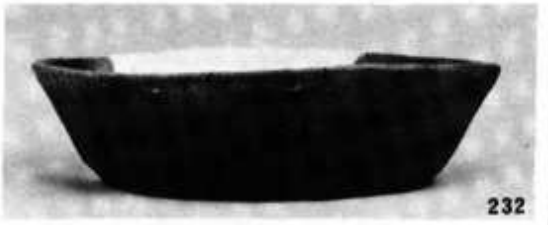
220

228

5号窯跡出土遺物

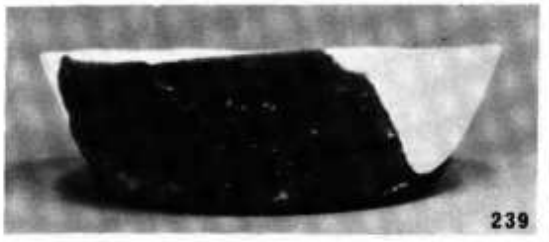

230

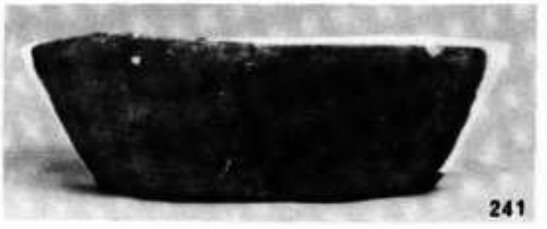

231


232

233

234


239

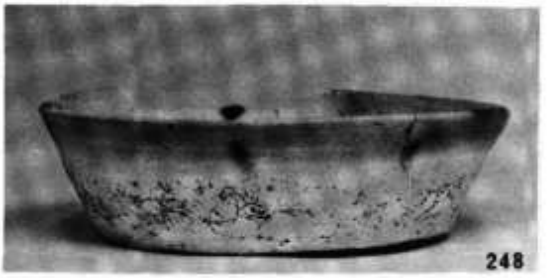

241

242

244

246

247

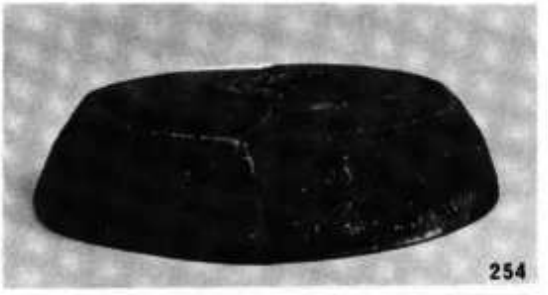

248

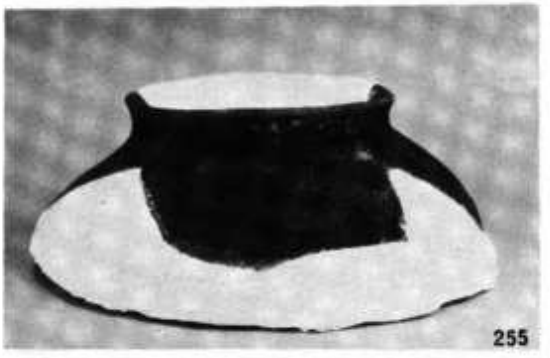
251

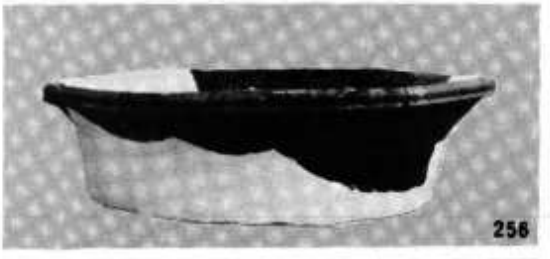
PL28

5号窯跡出土遺物

252


254


255


256

257

258

259

260

261

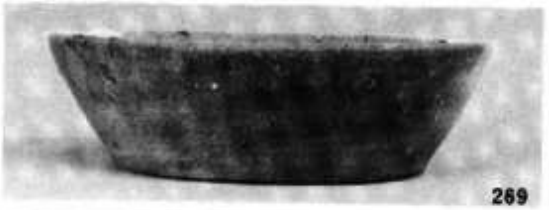
262

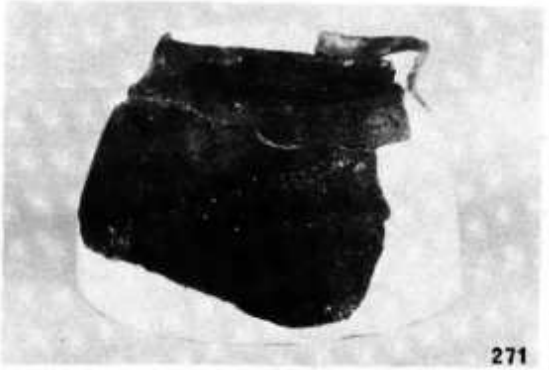
264

5号窯跡出土遺物

265

266

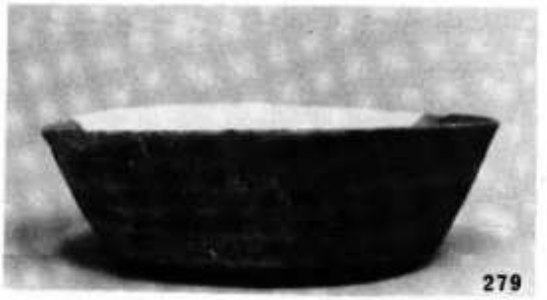

269

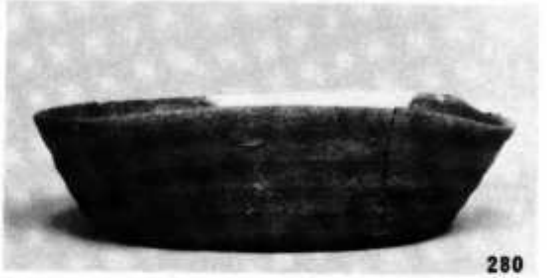

271

272

275

276


279


280

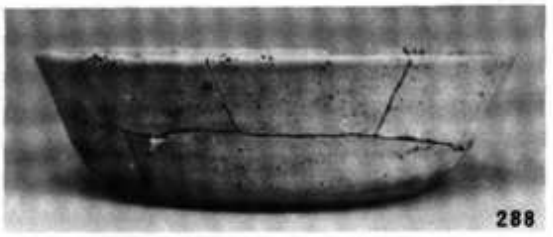
283

PL30

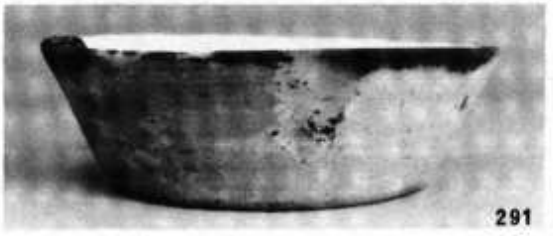
6号窯跡出土遺物

286

287


288

289


291

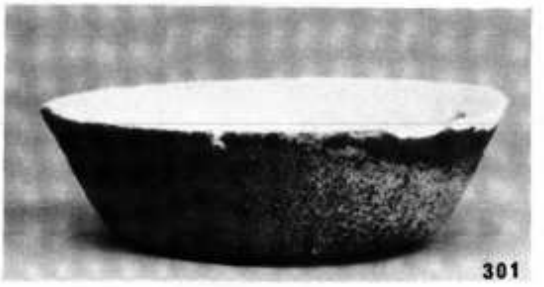
292

296

297

298

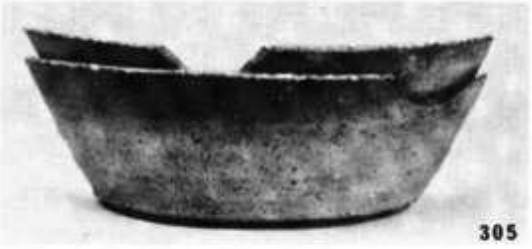
299


301

302

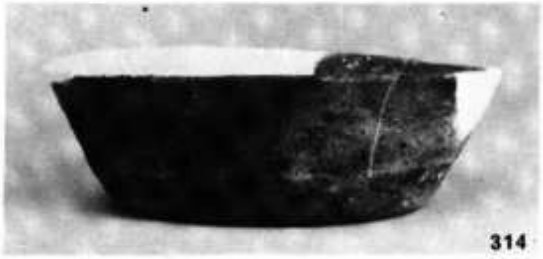
6号窯跡出土遺物

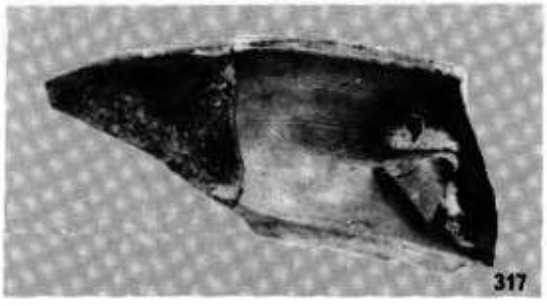
303


305

307

313


314


317

318
319
320

321

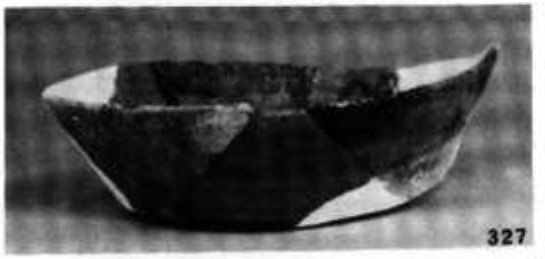
322

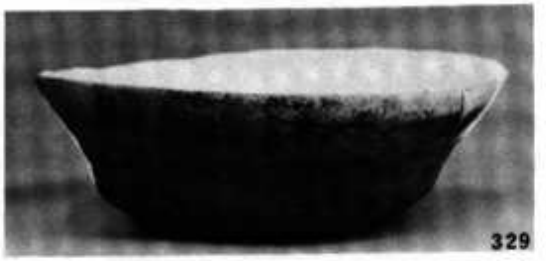
324

PL32

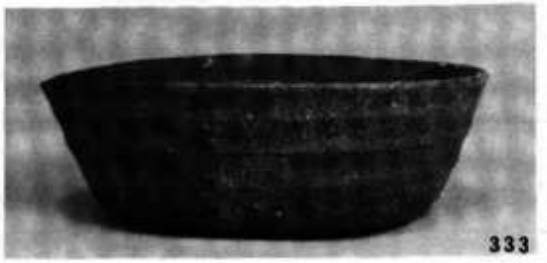
6号窯跡出土遺物

325


327

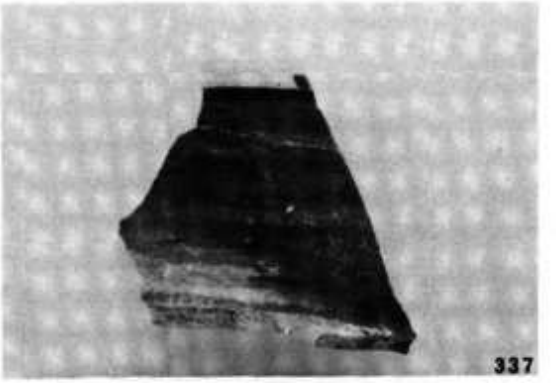

329

330

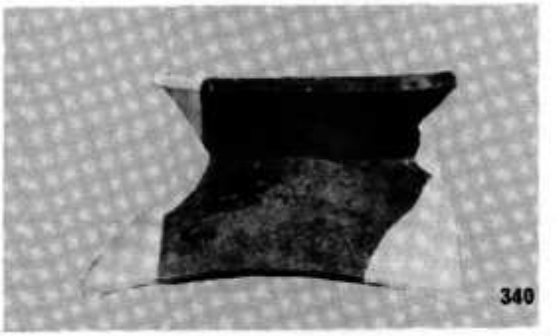

333

334

335


337

338

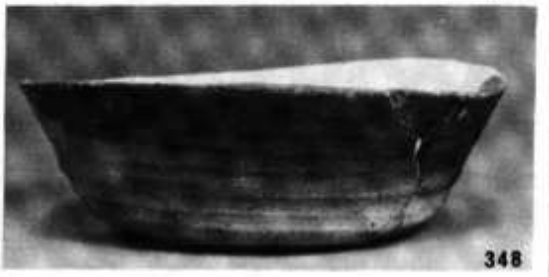

340

343

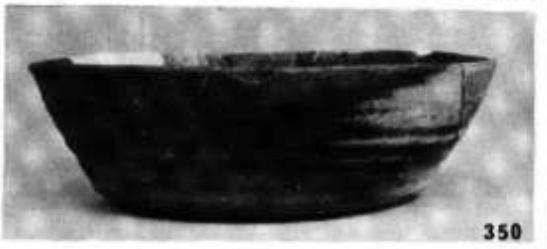
6号窯跡出土遺物

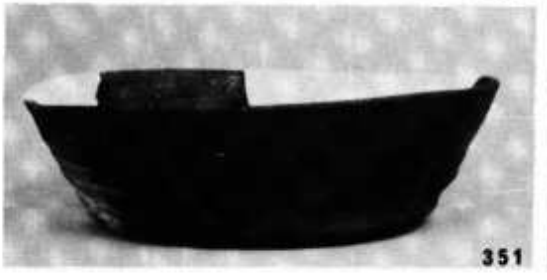
344

345


348

349


350


351

352

353

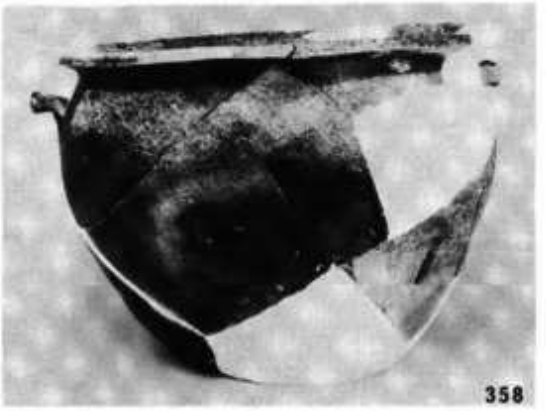
355

356

357

PL34

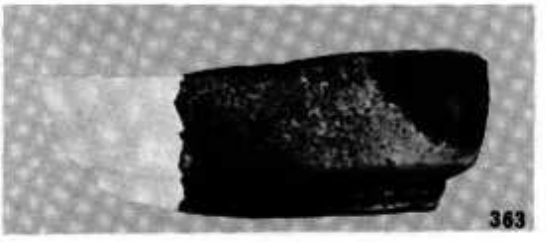
6号窯跡出土遺物

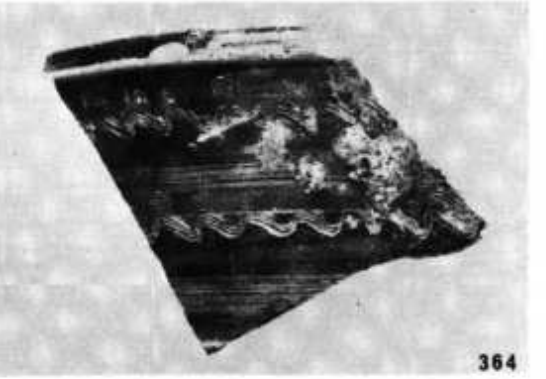

358

359

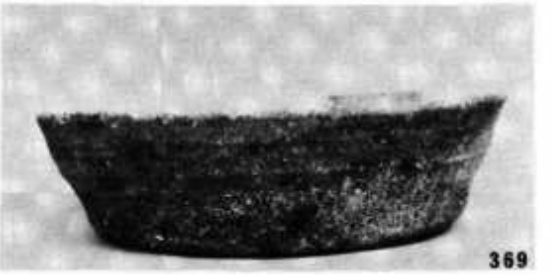
361

362


363


364

366

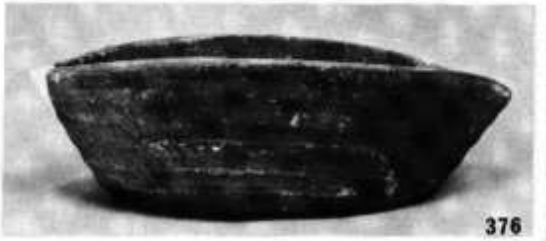

369

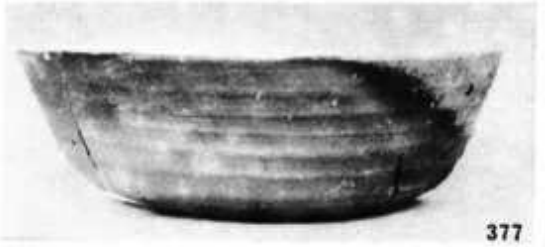
371

372

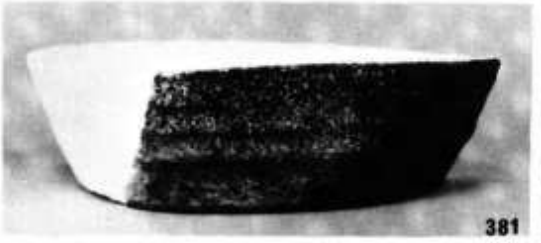
6号窯跡出土遺物

374

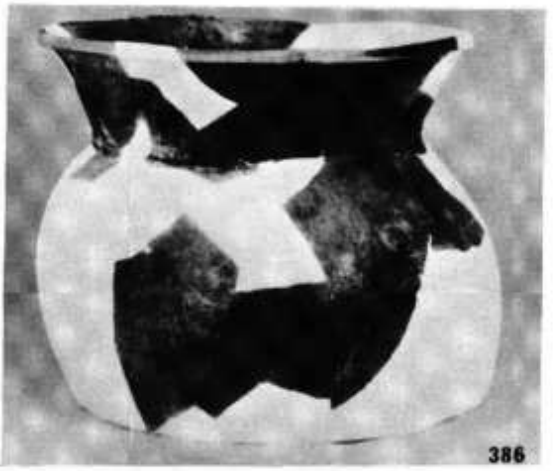

376

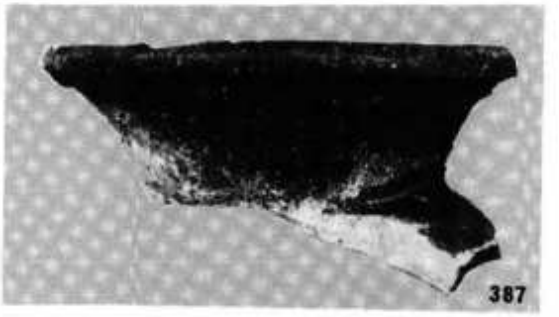

377

379

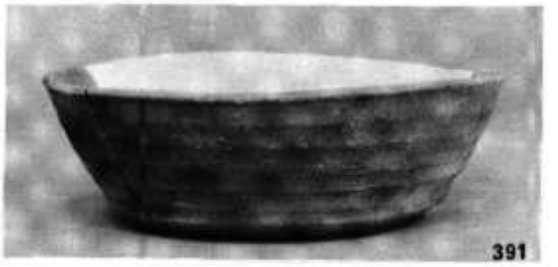

381

385


386


387

389

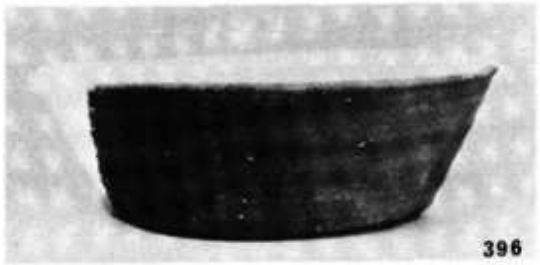

391

392

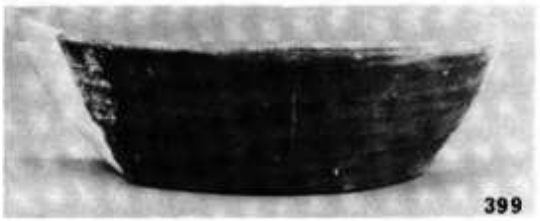
PL36

7号窯跡出土遺物

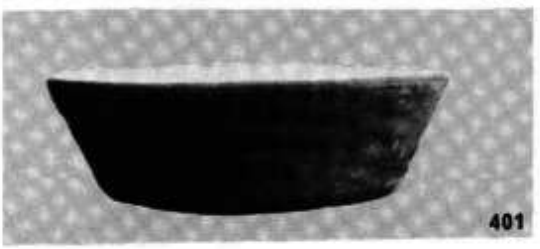
395

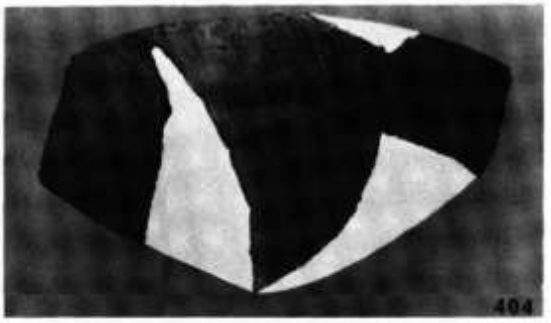

396

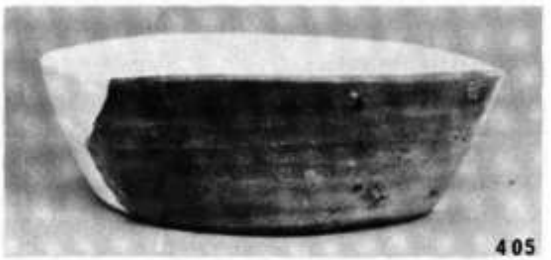
398

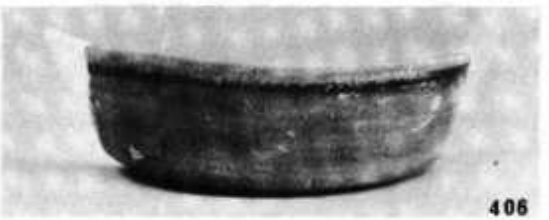

399

400


401

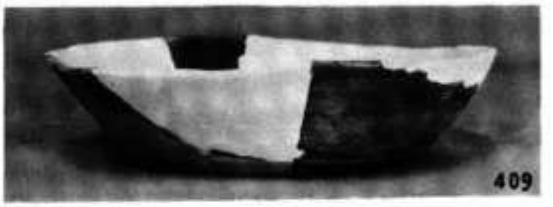

404


405


406

407

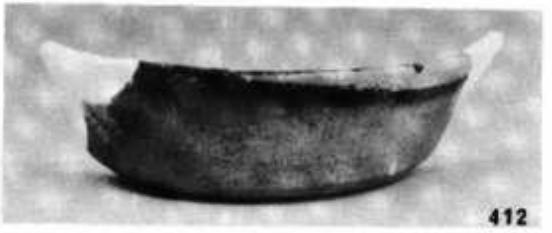
408


409

7号窯跡出土遺物

410

411

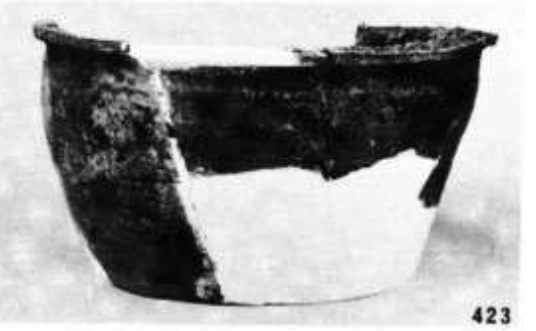

412

414

416

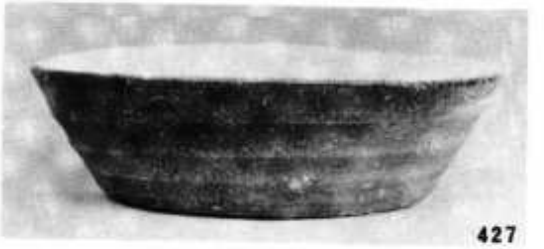
417

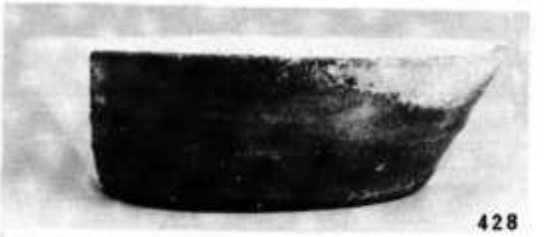
419


423

425

426

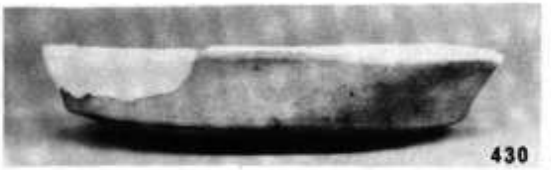

427

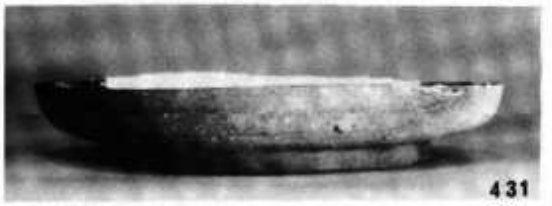

428

429

PL38

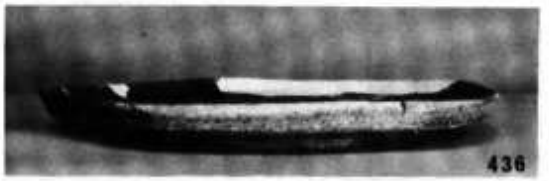
7号窯跡出土遺物

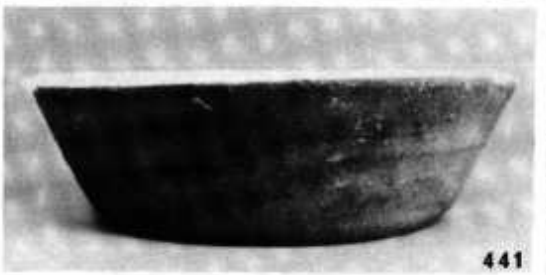

430

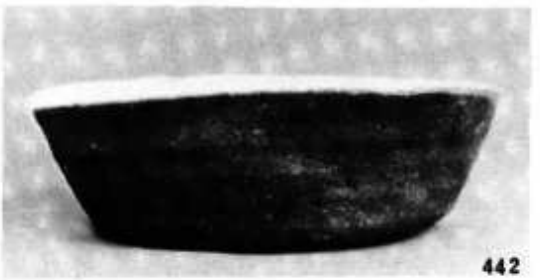

431

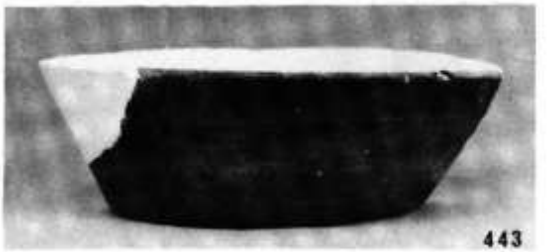
433

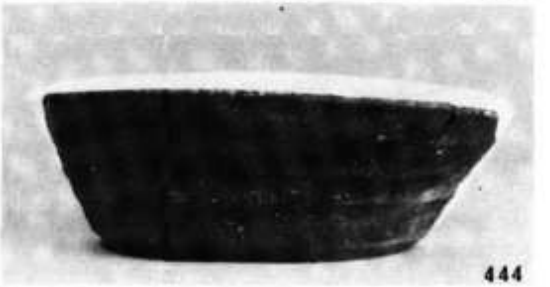
435

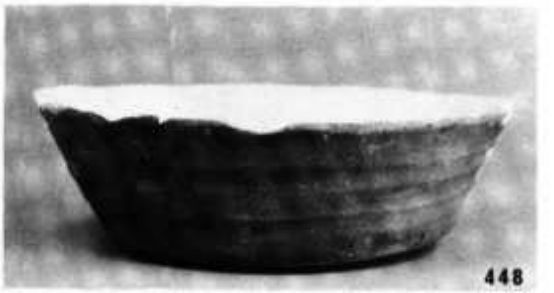

436

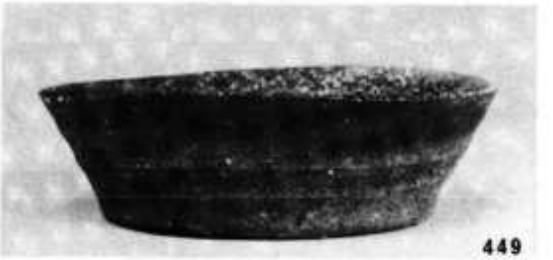

441

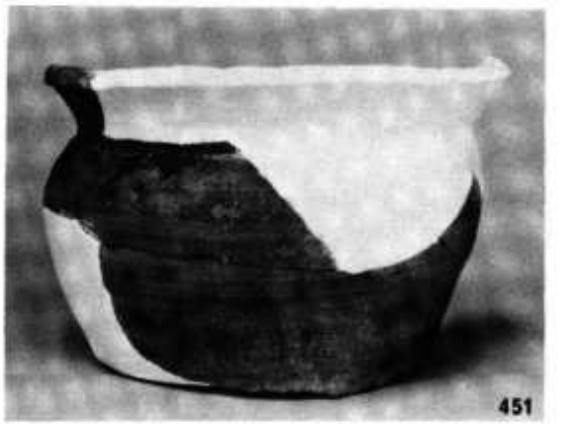

442


443

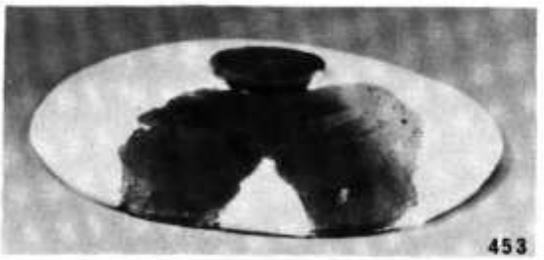

444

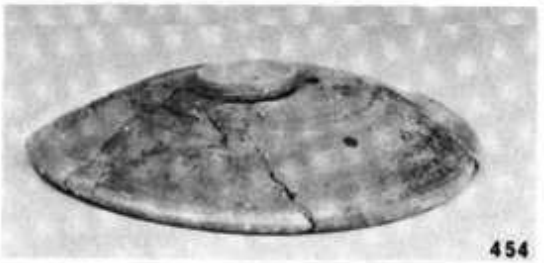

448


449


451

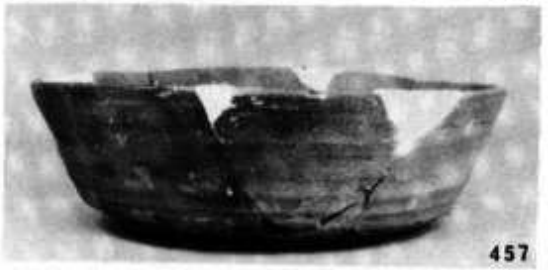
8 号窯跡出土遺物


453


454

455

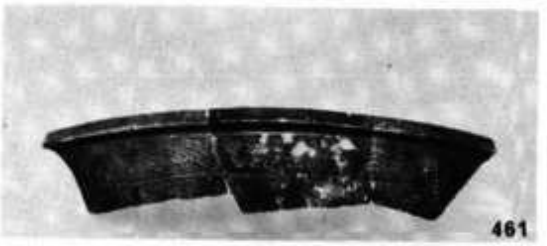
456

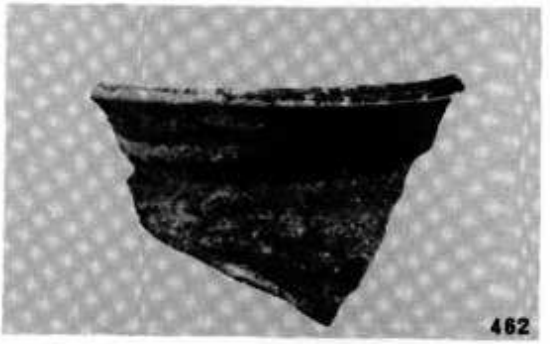

457

458

459

460


461


462

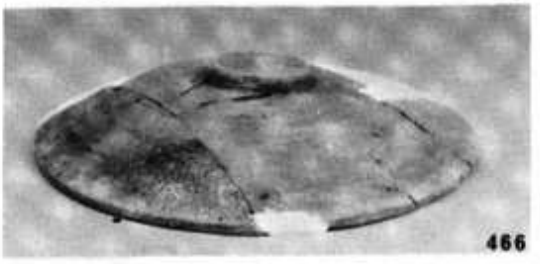
463

PL40

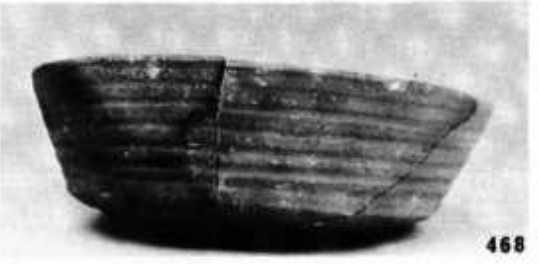
8号窯跡出土遺物

464

465


466

467


468

469

470

471

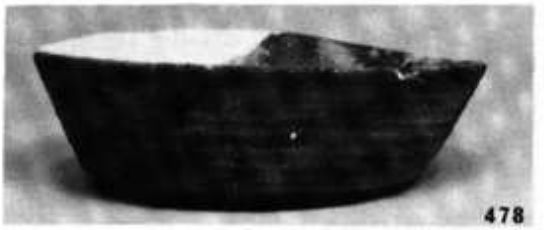
474

475

476

477

8 号窯跡出土遺物

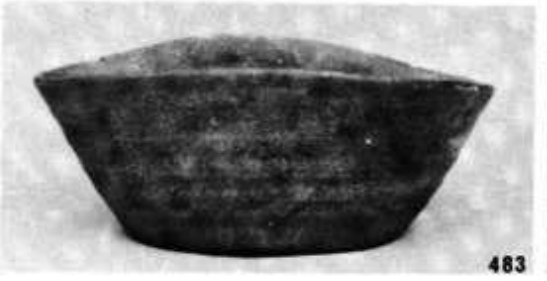

478

479

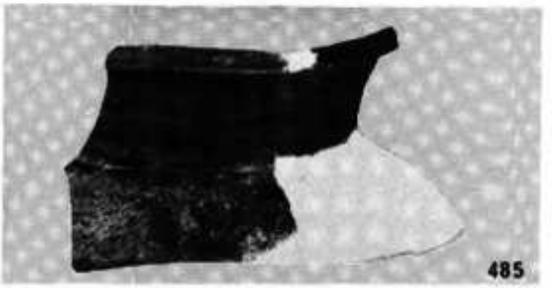
480

481

482


483

484


485

486

488

490

493

PL42

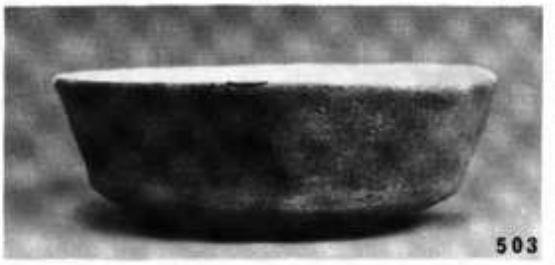
西区灰原等出土遺物

497

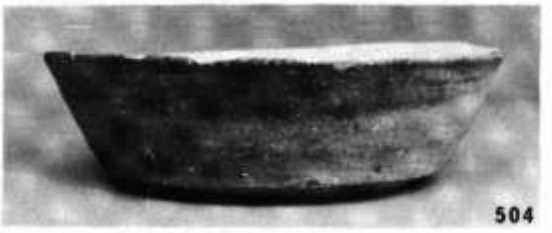
511

502

514

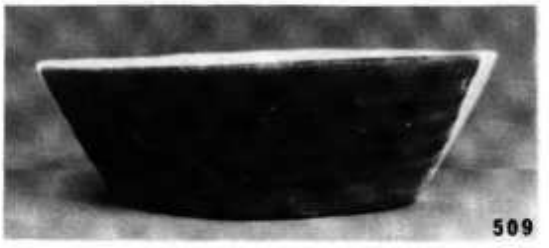

503

515


504

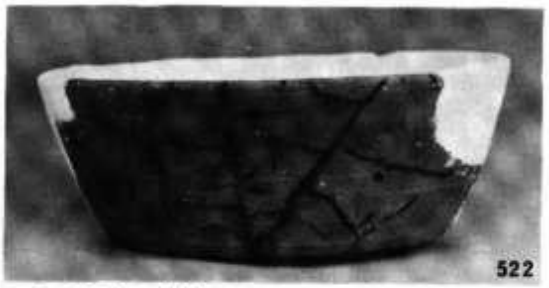
517

505


509

519

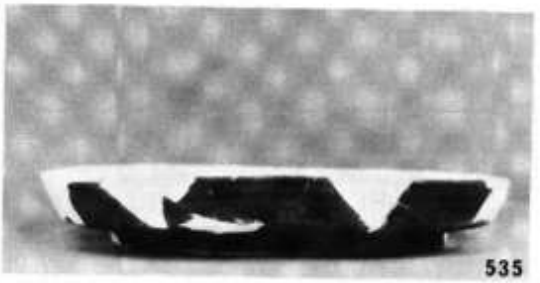
9，10，11号窯跡出土遺物


522

526

9号窯跡出土遺物

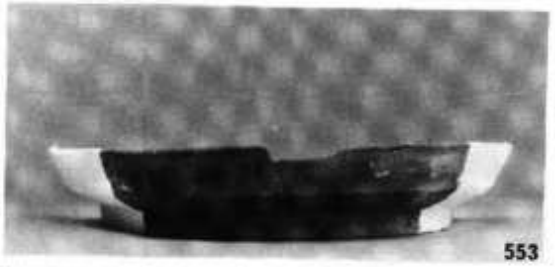
528


535

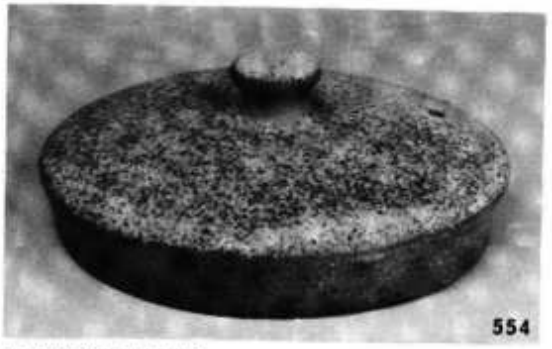
534

539

10号窯跡出土遺物


553

556


554

558

11号窯跡出土遺物

PL44

12号窯跡出土遺物

567

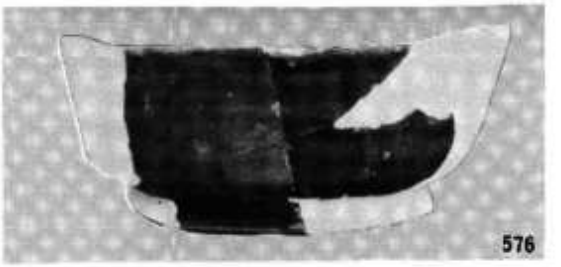
568

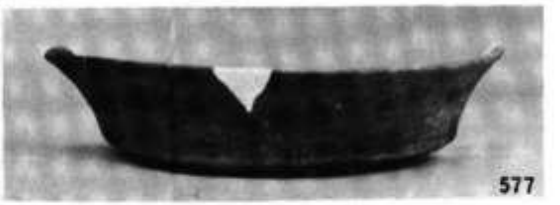
570

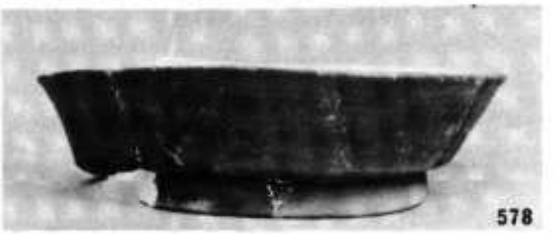
572

574

575


576


577

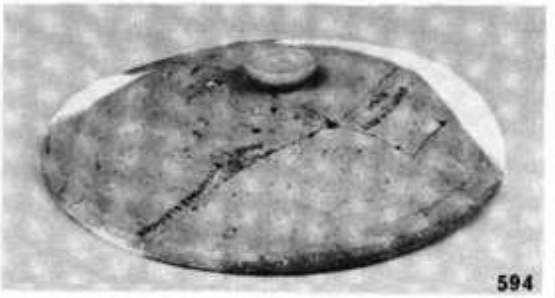

578

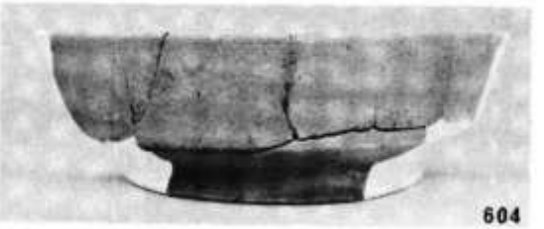
579

580

587

東区ステ場，SX1，SX2出土遺物


594


604

595

606

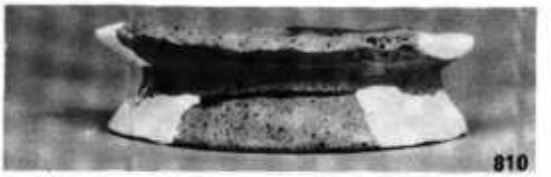
601

611

東区ステ場出土遺物

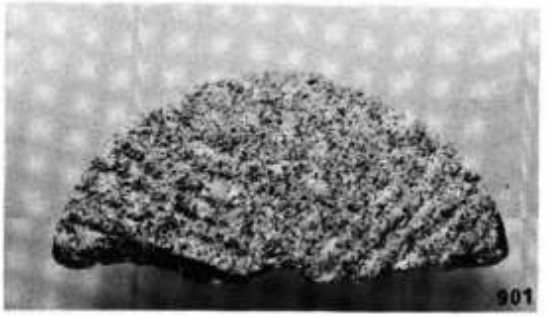
805

809


810

SX1出土遺物

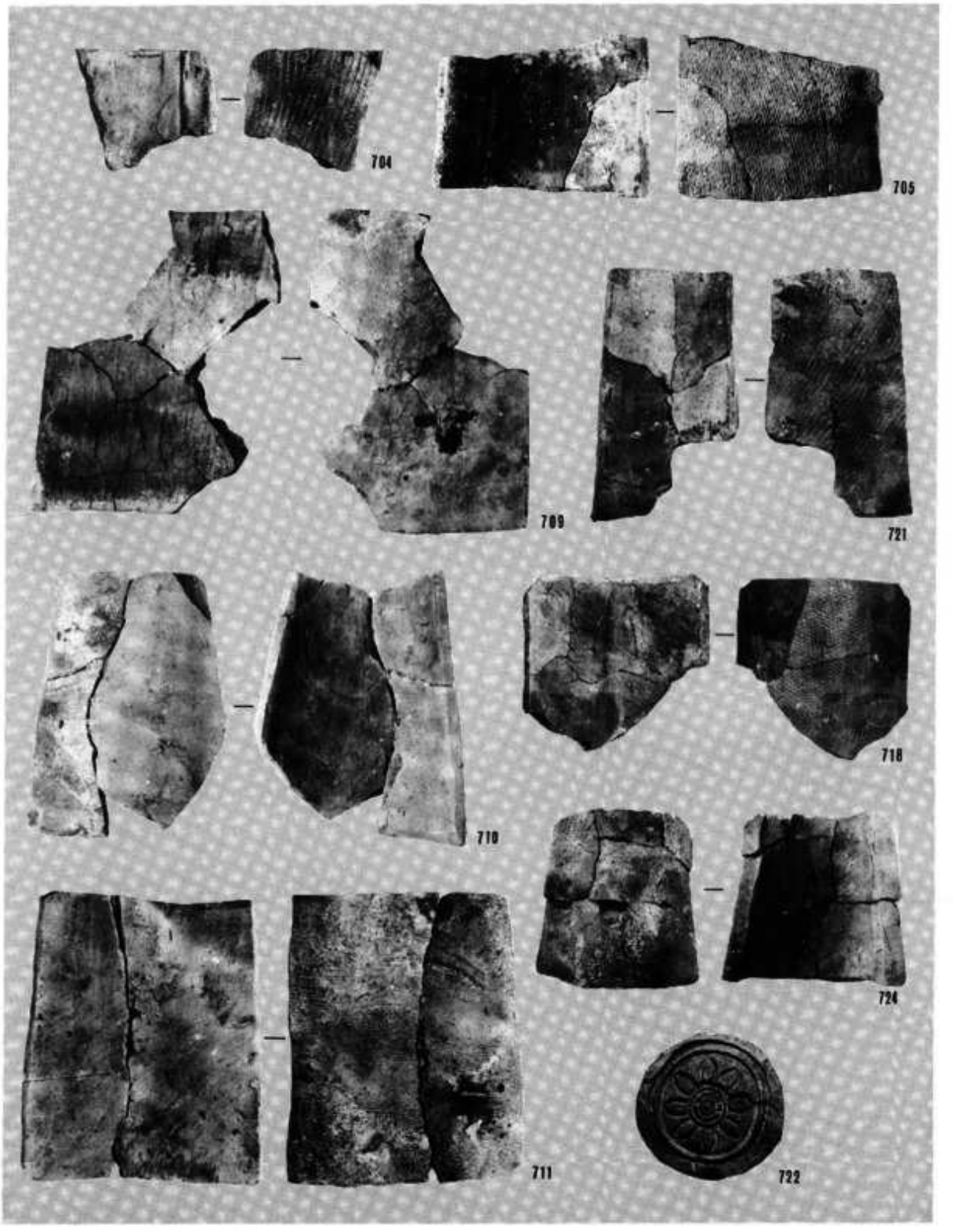
613


901

SX2出土遺物

PL46

各窯跡出土瓦



ヘラ記号一覧

3号窯　　4号窯

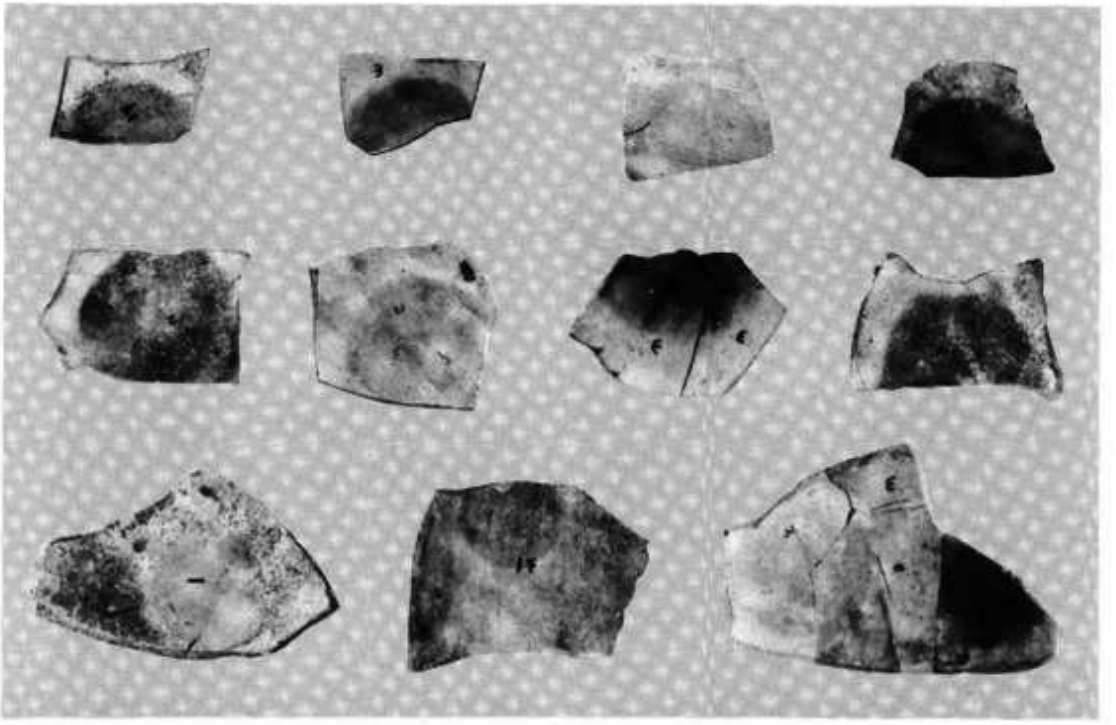
6号窯

7号窯　　西区灰原

西区灰原　　東区ステ場　　表　採

PL48

各窯跡出土焼台等



各窯跡出土焼台

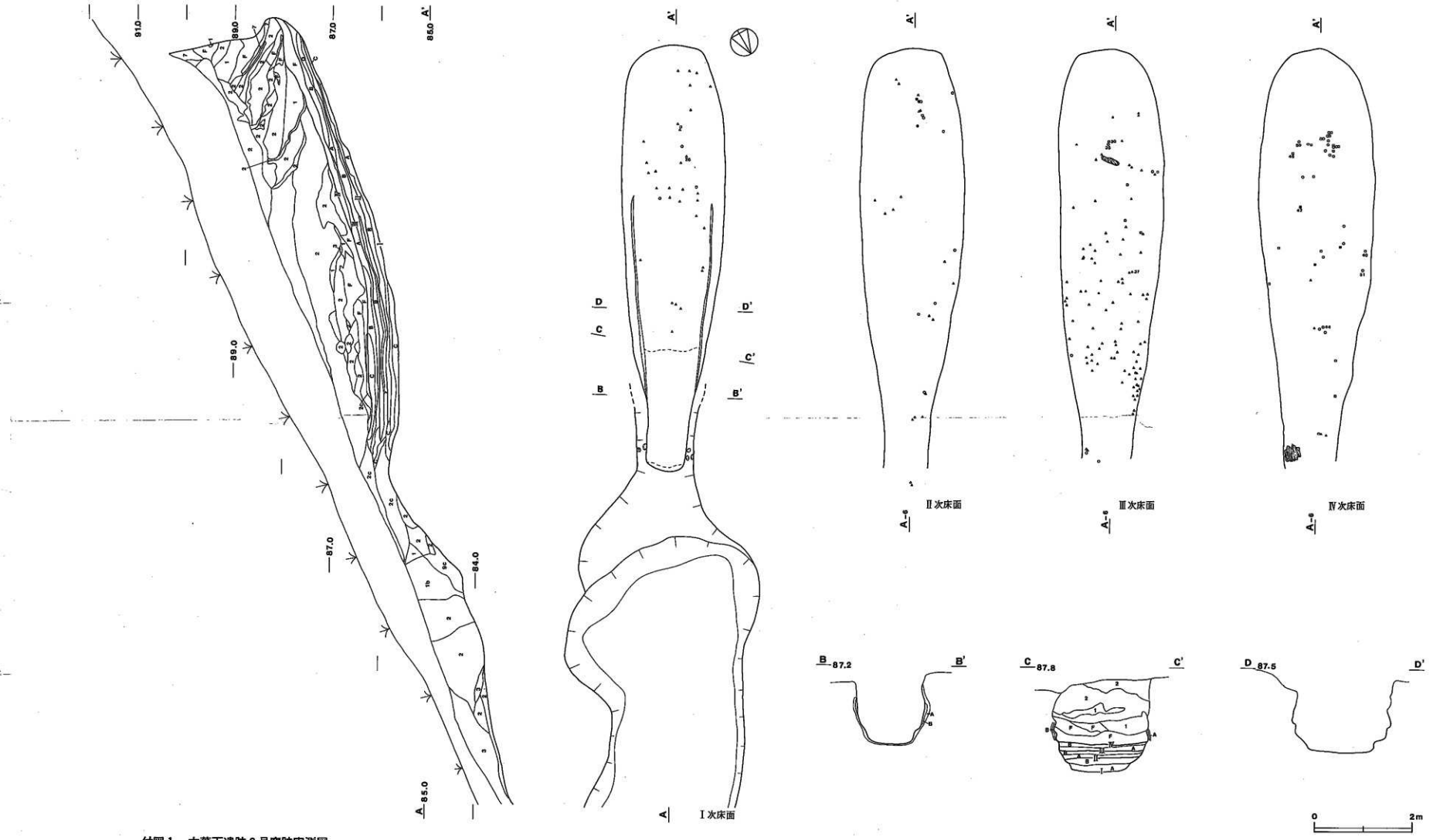
6号窯跡出土藁灰付着須恵器　　(拡　大)

茨城県教育財団文化財調査報告第26集

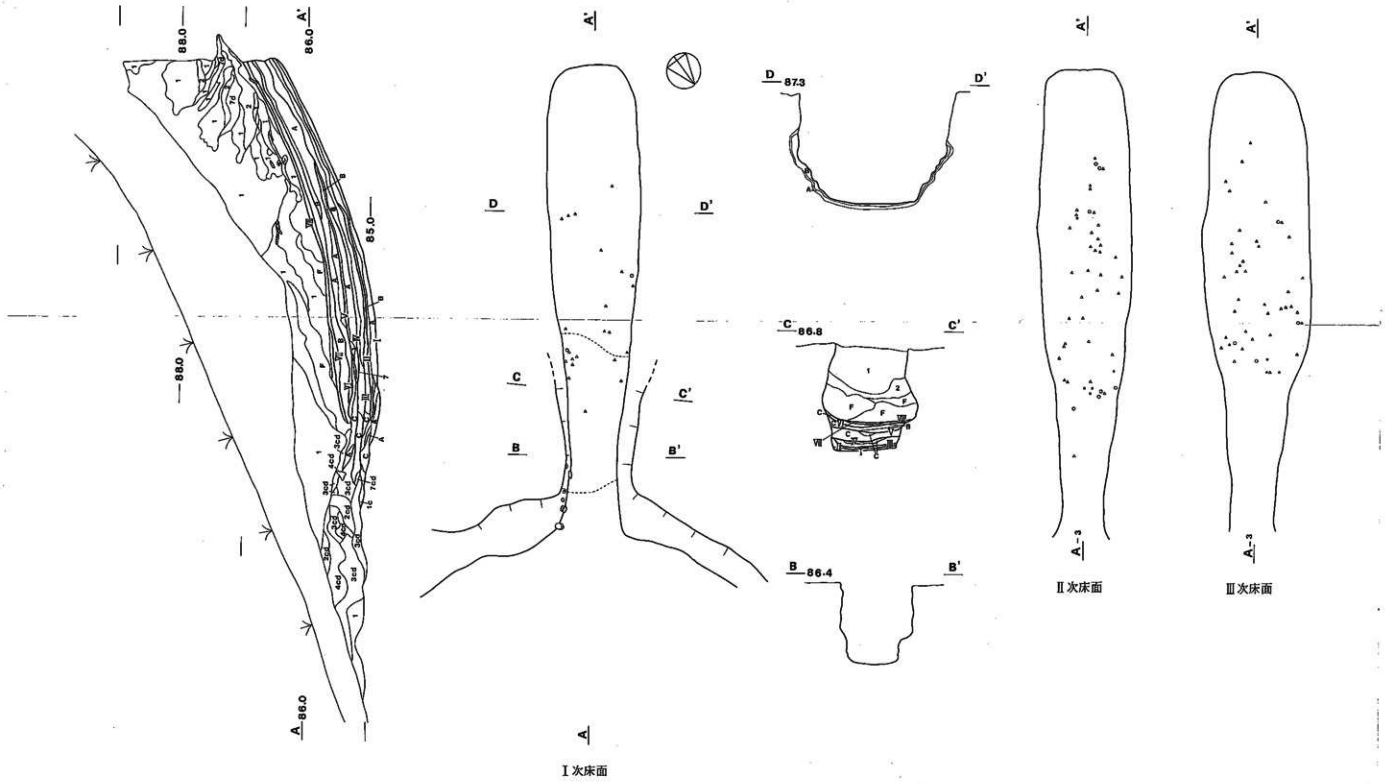
常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書8

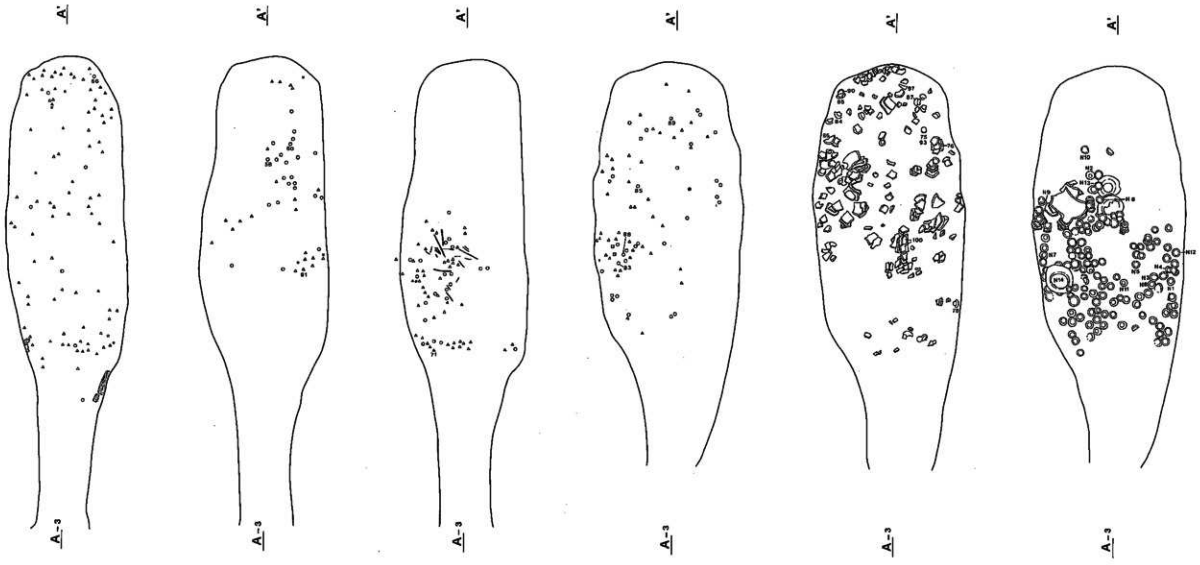
木葉下(あぼっけ)遺跡Ⅱ(窯跡)

昭和59年3月24日印刷
昭和59年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東1－5－21



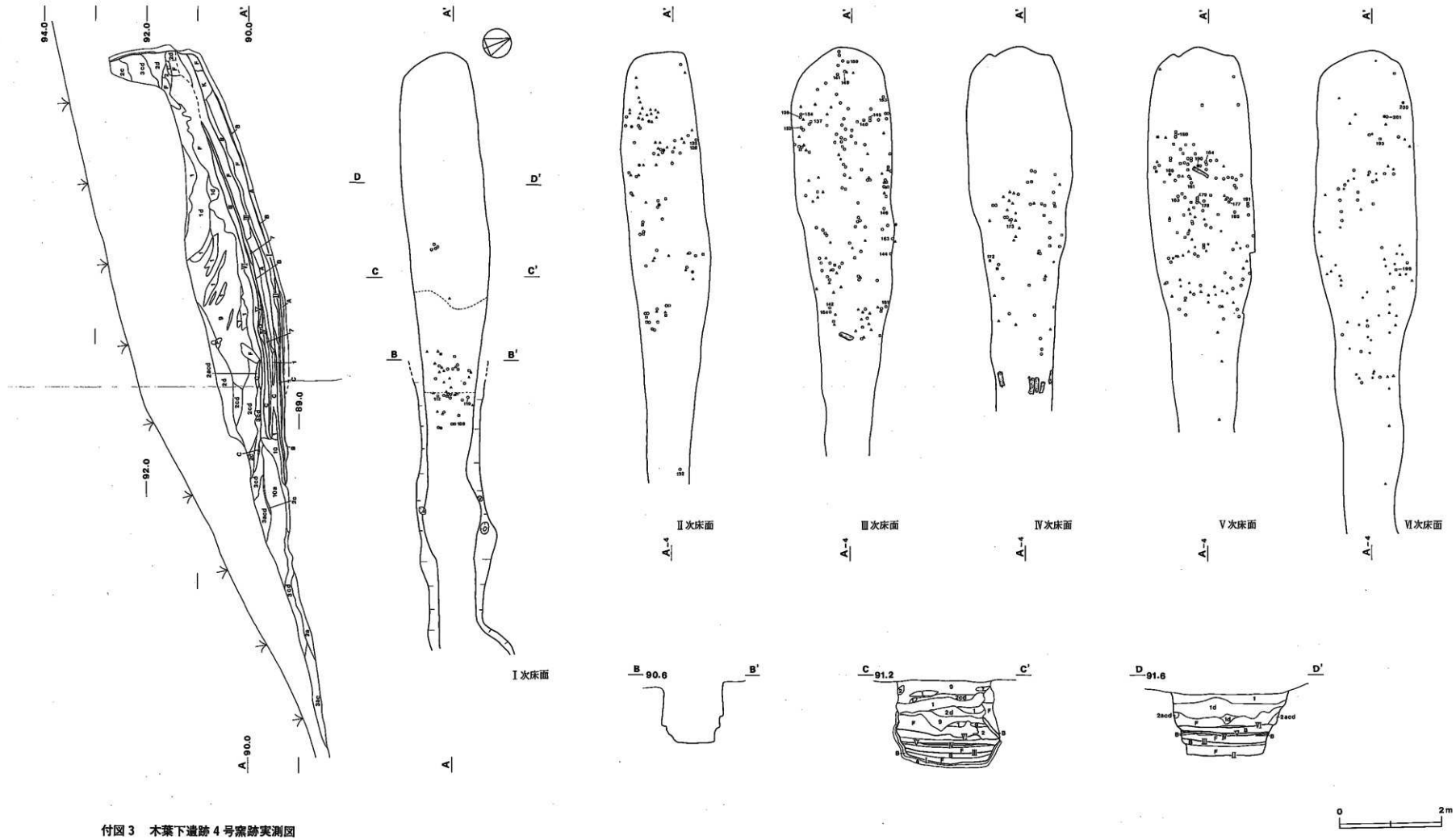
付図１　木葉下遺跡２号窯跡実測図



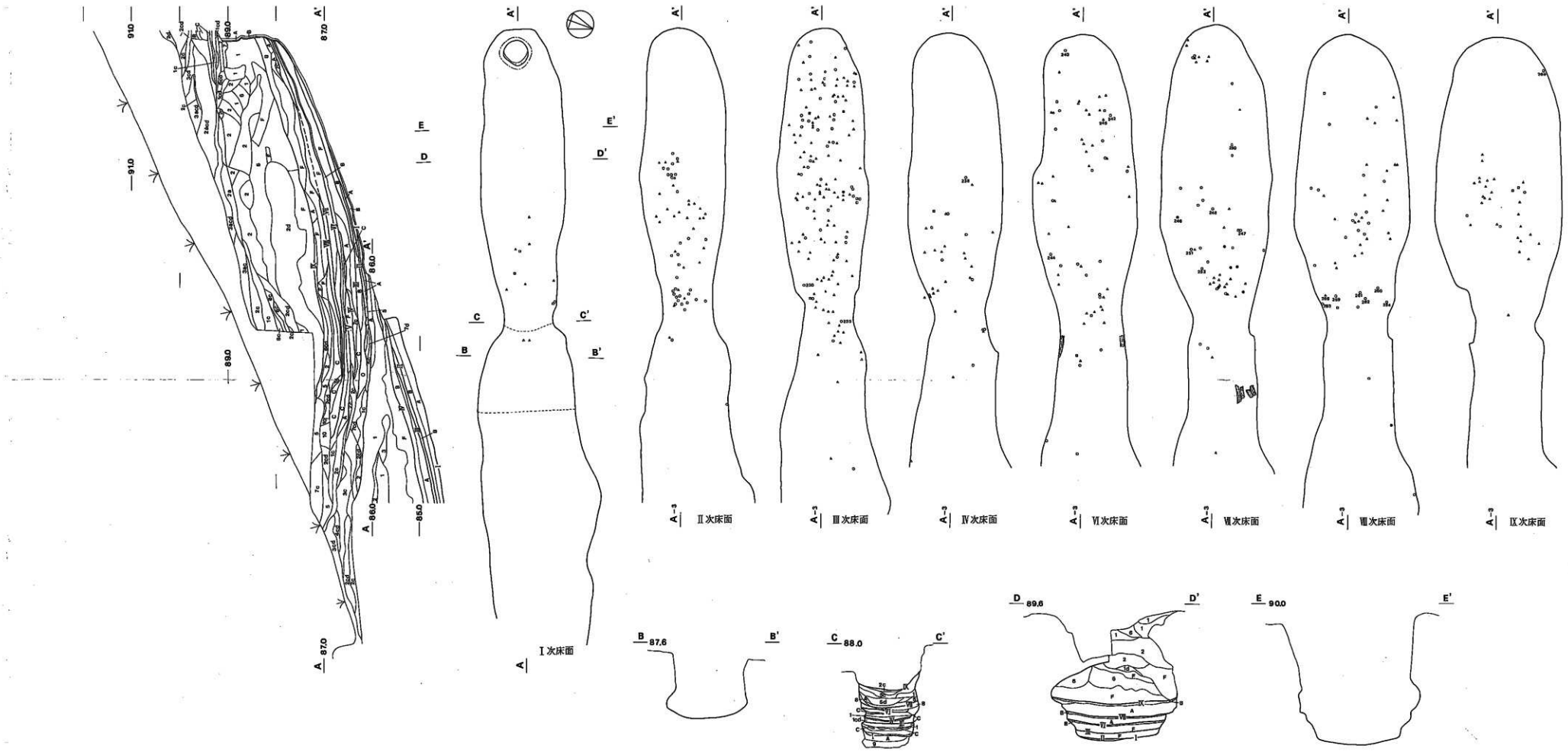


付図２　木葉下遺跡３号窯跡実測図

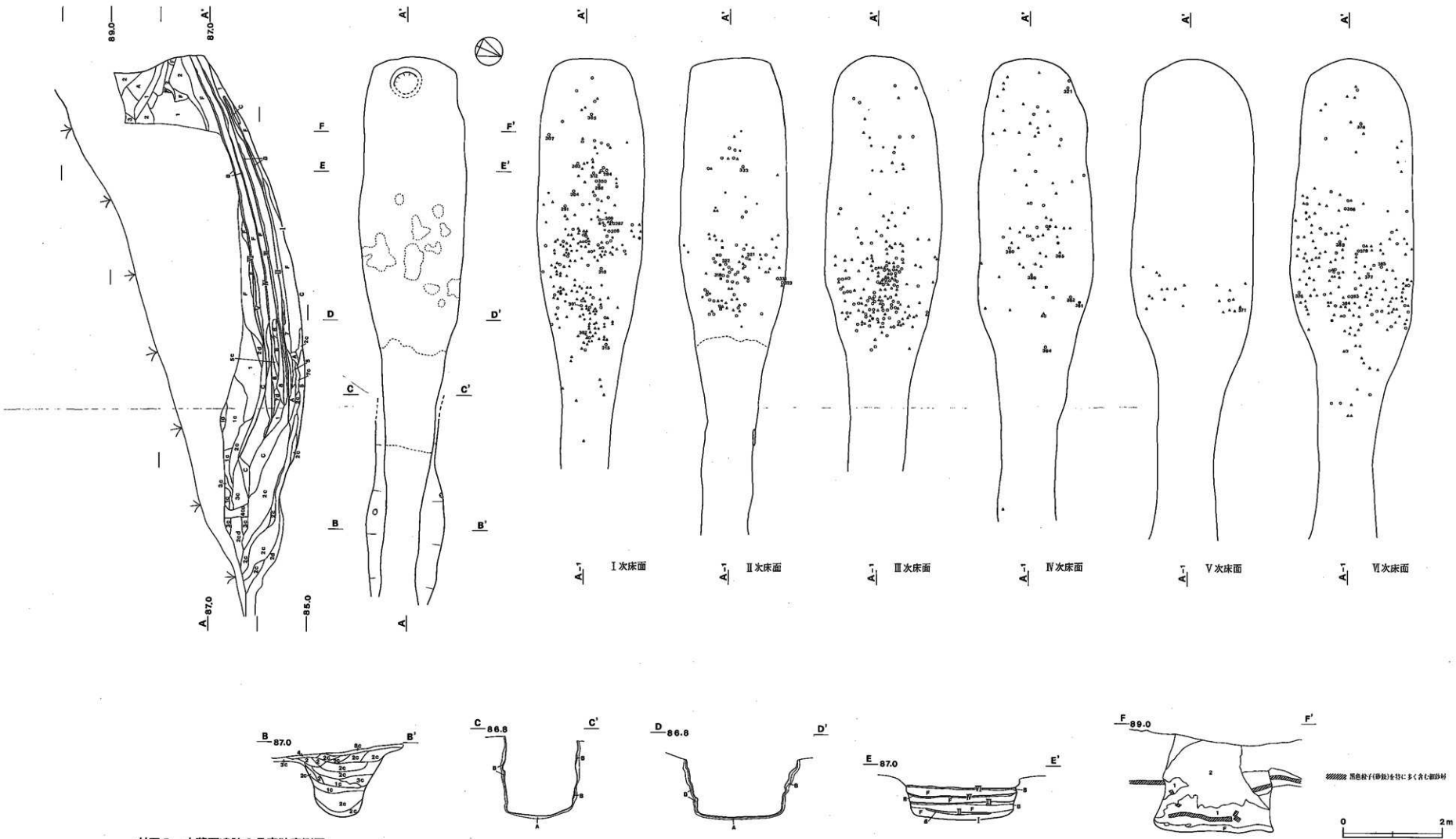
0　2m



付図3　木葉下遺跡4号窯跡実測図



付図4　木葉下遺跡5号窯跡実測図



付図5　木葉下遺跡6号窯跡実測図